OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	初期仏典における涅槃の基礎的研究 ー『スッタニパータ』を基本資料としてー
Author(s)	富田, 真理子
Citation	大阪大学, 2018, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/69680
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

初期仏典における涅槃の基礎的研究

―『スッタニパータ』を基本資料として―

平成 29 年度博士学位申請論文

2017 年 12 月 15 日

富田真理子

目次

Abbreviation		v
凡例		vii
はじめに		1
序論		2
	本研究の方法論	2
	本研究の対象範囲	3
	主要経典とその成立・時代層の問題	3
	問題の所在	7
	本研究の概要	8
本論		
1.	涅槃の語彙の語源と原意に関する分析	10
1. 1.	語源(動詞語根)と語形	10
1. 1. 1.	語根	10
1. 1. 2.	定動詞	11
1. 1. 3.	nibbāna	12
1. 1. 4.	nibbuta	13
1. 1. 5.	nibbuti	15
1. 1. 6.	涅槃の語源に関する他の説	15
1. 1. 7.	語源小結	17
1. 2.	火以外のモノが nir-√vā する場合	17
1. 3.	人や生き物が nir-√vā する場合	19
1. 4.	涅槃の研究史(初期仏典に関して)	21
2.	初期仏典中の涅槃の語彙の分析	30
2. 1.	最古層	30
2. 1. 1.	nibbāna	30
2. 1. 1. 1.	nibbāna の用例	30
	nibbāna attano「自らの涅槃」	36
2. 1. 1. 2.	nibbāna を伴う複合語	38
	nibbānapada	38

	nibbānasantike	40
	nibbānamanasa	40
2. 1. 2.	nibbuta	41
	-attan に関するこれまでの見解	42
2. 1. 3.	nibbuti	44
2. 1. 4.	最古層小結	48
2. 2.	古層	51
2. 2. 1.	nibbāna	51
	nibbāna の原意「火が消えること」	51
2. 2. 2.	nibbāna を伴う複合語	55
2. 2. 2. 1.	parinibbānagata	56
2. 2. 2. 2.	nibbānābhirata	58
	Sn の用例	58
	Sn 以外の用例	60
2. 2. 2. 3.	nibbānapada	61
	Sn の用例	61
	Sn 以外の用例	63
2. 2. 3.	nibbuta の諸用例	65
2. 2. 3. 1.	nibbuta	65
	Sn の用例	66
	Sn 以外の用例	70
2. 2. 3. 2.	abhinibbuta	71
	Sn の用例(abhinibbuta と parinibbuta)	71
	upādi と upadhi について	79
	Sn 以外の全用例	82
	abhinibbuta の考察結果	87
2. 2. 3. 3.	parinibbuta	89
	Sn の用例	89
	Sn 以外の用例	93
	pari 付きの語彙の考察結果	96
	涅槃と理解力・理解すること	97
2. 2. 4.	nibbuti	98
	Sn の用例	98
	Sn 以外の用例	101
	nibbuti の考察結果	103
2. 2. 5.	古層小結	104

2. 3.	散文	107
2. 3. 1.	nibbāna	107
	nibbāna および nibbuta	108
	parinibbāna	112
	-pada の用例	113
2. 3. 2.	nibbāyati	114
	parinibbāyati	118
2. 3. 3.	nibbuta の諸用例	120
	parinibbuta	121
	parinibbāna	122
	pari の有無	122
2. 3. 4.	定型句	123
	anupādisesāya nibbāna-dhātuyā parinibbāyati/parinibbuto	
2. 3. 5.	nibbuti	125
	nibbuti の考察結果	129
2. 3. 6.	涅槃の教義の多様化	129
2. 3. 7.	散文小結および 2.のまとめ	131
3.	生前・命終の問題	135
3. 1.	質問者の意図と世尊の答えの真意について	135
3. 2.	人々の関心は死後	140
4.	註釈における涅槃観のまとめ	141
4. 1.	Sn の註釈 Pj について	141
4. 1. 1.	涅槃の語彙の解釈	141
4. 1. 1. 1.	生前の涅槃	141
4. 1. 1. 2.	命終の涅槃	146
4. 1. 1. 3.	二種涅槃界	150
4. 1. 2.	nibbāna と定義づけされる語	150
4. 2.	Pj 以外の註釈と比べて	155
4. 2. 1.	Pj との類似点	156
4. 2. 1. 1.	ブッダゴーサ	156
4. 2. 1. 2.	ダンマパーラ	158
4. 2. 2.	註釈間の相違点	164
4. 3.	註釈小結	167

結論 169

付録 1 Sn の用例リスト 174
付録 2 Sn の用例 177
付録 3 Sn 以外の用例リスト 228
付録 4 「大般涅槃経」用例リスト 230
付録 5 「大般涅槃経」用例検討 235

Bibliography 255

Abbreviation

<文献類>

AB	:	Aitareya Brāhmaṇa
AN	:	Aṅguttara-nikāya
Be	:	Burmese edition
Ce	:	Singhalese edition
Dhp	:	Dhammapada
Dhp-a	:	Dhammapada-aṭṭhakathā
DN	:	Dīgha-nikāya
Ee	:	European edition (Pali Text Society edition)
G	:	gāthā 偈文
It	:	Itivuttaka
It-a	:	Itivuttaka-aṭṭhakathā (Paramatthadīpanī)
Ja/Ja-a	:	Jātaka/Jātaka-aṭṭhakathā
Khp	:	Khuddaka-pāṭha
Mbh	:	Mahābhārata
MN	:	Majjhima-nikāya
Mp	:	Manoratha-pūraṇī (Aṅguttara-nikāya-aṭṭhakathā)
Mv	:	Mahāvastu
Pj I	:	Paramatthajotikā I (Khuddakapāṭhā-aṭṭhakathā)
Pj II	:	Paramatthajotikā II (Suttanipāta-aṭṭhakathā)
Ps	:	Papañcasūdanī (Majjhima-nikāya-aṭṭhakathā)
SN	:	Saṃyutta-Nikāya
Sn	:	Suttanipāta
Spk	:	Sārattha-pakāsinī (Saṃyutta-nikāya-aṭṭhakathā)
Sv	:	Sumaṅgalavilāsinī (Dīgha-nikāya-aṭṭhakathā)
T.	:	大正新脩大蔵経
Th	:	Theragāthā
Th-a	:	Theragāthā-aṭṭhakathā (Paramatthadīpanī)
Thī	:	Therīgathā
Thī-a	:	Therīgāthā-aṭṭhakathā
Ud	:	Udāna
Ud-a	:	Paramattha-Dīpanī Udānaṭṭhakathā
Ud-v	:	Udānavarga
Vism	:	Visuddhimagga

<文法書・文法用語・記号等>

abl. : ablative 奪格
acc. : accusative 対格
AiG : Altindische Grammatik
aor. : aorist
BHSD : *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammer and Dictionary* Vol. II
Bv. : bahuvrīhi compounds
caus. : causative
Ch. : Chapter 章
Childers : Dictionary of the Pali Language
Comm. : Commentary
Cone : *A Dictionary of Pāli*
Concordance : Pāli Tipitakaṁ Concordance
CPD : *A Critical Pāli Dictionary*
EWA : *Etymologisches Wörterbuch des Altindiarischen*
f. : feminine 女性形
fut. : future 未来形
inf. : infinitive 不定詞
imp. : imperative 命令形
inst. : instrumental 具格
loc. : locative 所格
m. : masculine 男性
med. : medium
MW : *A Sanskrit English Dictionary: Etymologically and Philologically Arranged with Special Reference to Cognate Indo-European Languages*
nom. : nominative 主格
nt. : neuter 中性
opt. : optative
part. : participle
PED : *Pali-English Dictionary*
pl. : plural 複数
PP : past participle
ppr. : present participle 現在分詞
pres. ind. : present indicative
pret. : preterit 過去形

PTS : Pali Text Society
PW : *Sanskrit-Wörterbuch*
sg. : singular 単数
Skt. : Sanskrit
sv. : sub voce[verbo] 辞書の見出し語
√ : 動詞語根

凡例

・本論文は 4 部構成をとっており, それぞれの部の下に, 章・節・項の項目を設けている.
・本論中, 下線, 太字は強調, 丸括弧 ( ) は言い換えや説明, 角括弧 [ ] は補いの目的で使用する. また, かぎ括弧「 」『 』は引用の和訳および経典名・文献名を示し, 註釈の和訳で山括弧〈 〉は経典引用部分を示す.

はじめに

仏教は時代の変遷の中，各地で様々な変容を遂げつつも，約2,500年前にブッダ世尊が説いた教えを源流として，日本を含む世界各地へと広がりを見せた世界宗教である．どの時期のどの地域での仏教を語る場合においても，その源流の基本概念を知っておくことは必要不可欠である．

涅槃は仏教の目的と位置づけられる重要な概念であり，涅槃を表す語彙は古来より様々に研究や解釈され，数多くの研究者により論じられ解明されてきたが，難解な概念であることから，いまだ「肝心な点に曖昧さが残っている語」である(榎本 2012 p. 149).

従って筆者はこの重要概念のさらなる解明を目指し，初期仏典における涅槃観を再検討する．涅槃を表す nibbāna (動詞 nir-√vā から)および nibbuta 諸関連語[これらを便宜上「涅槃の語彙」と称す[1]]の原意は，それぞれ「[火が]消えること」「[火が]消えた・消えている」等であり，当初は先行研究と同様，これらの語は仏教術語でいうところの「涅槃」を等しく示す，そして涅槃には生前の涅槃と命終(いわゆる死)を伴う涅槃の二種があり，そのため，どの用例もいずれかを示すものと想定して分析を進めてきた．しかしながら，文献からはっきり言えることに主眼に置いて考察を重ねると，生前・命終の判別がつかない用例が多くあること，さらに「[火が]消える」が原意であるとしても，それが人に使われる場合に「涅槃している」と解していいのかすら不明な用例があることが判明した(富田 2016, 2014, 2012, 2008).

そこで本研究においては，涅槃の語彙を含む用例を根本的に見直して，各語の正確な意味の把握および従来の説の再検証を行う．それにより，涅槃という概念が初期仏典においてどのようなものとして捉えられていたのかを重層的に解明することを試みる．

[1] 本研究において「涅槃の語彙」とは，漢訳仏典の「涅槃」に相当する中期インド語に属するパーリ語名詞形 nibbāna (nirvāṇa [Skt]), nibbuti (nirvṛti [Skt]), 動詞形 nibbāti, nibbāyati, 過去分詞形(PP) nibbuta およびそれらに接頭辞 pari, abhi のついた形やそれらの複合語を対象とする．これらの語源や原意については後述する(1. 1.参照).

序論

本論への導入として，ここでは次の 5 点に関する情報を提示し，本研究をより詳しく説明する．

本研究の方法論
本研究の対象範囲
主要経典とその成立・時代層の問題
問題の所在
本研究の概要

本研究[2]の方法論

仏教はゴータマ・ブッダの時代から久しく口頭伝承であったことから，ブッダ世尊が実際に何を語ったかの証拠となるものは残されていない．こうした学究の限界を謙虚に受けとめつつも,[3] 文献に残された世尊の言葉を手掛かりにしてそれを追求することが大切であると考える．

仏教が究極の目的とする「涅槃」という概念を，世尊自身が，そして初期の仏教教団がどのように考えていたかを解明するには，涅槃に関する文献学上の問題点抽出と整理を行い，パーリ文献をできる限り原語に忠実に精読し考察することしかない．なぜなら，一語の理解の相違が用語や節の解釈を左右し，ひいてはそこから構築される初期仏教像も違ってくる可能性があるからである．それだけにほんのわずかな理解の進展であっても，仏教の全体の解明につながる足掛かりとなり得るであろう．

本研究は，以上の方法論によって，涅槃に関する議論を一歩前に進め，初期仏典の教説のさらなる解明に一定の寄与を為すことを目指す．

---

[2] 本論中のパーリ語文献の底本は全て Ee (PTS 版). 略号については CPD の Epilegomena に従う．異読は, Be (ビルマ版), Se (タイ版)を参照し，必要に応じ Ce (スリランカ版)を参照した．他版との比較により必要に応じて底本を訂正し，その旨明記した．漢訳は大正新脩大蔵経を使用し，その都度箇所を明記した．なお参考文献においては本論および末尾とも，基本的に同一研究者による複数文献は最新の研究を反映している最近のものから順に列挙する．

[3] 榎本 2007 p. 6「そもそもブッダが本当は何を語ったのかという問いは，仏教学の根幹に位置する最も重要な問題であるが，おそらく永遠に解決できない課題であろう．しかし，解決には至らなくても，それに接近することは可能であるし，同時に研究者の責務であると私は考える」．

本研究の対象範囲

本研究の範囲としては, 南方上座部パーリ聖典の中でも初期に位置づけられる仏典(経蔵五部, いわゆるニカーヤ中, 後代とされるものを除く)に範囲を絞り考察する.[4] 諸部派のうち, パーリ聖典のみが完全な形で現存しており, 初期仏典は, 特にブッダ世尊の教えを知るための第一義的資料とみなされているからである (榎本 1998 p. 65 参照).

具体的には, ブッダ世尊の直説が含まれ, 最も成立が古い部分を含むとして重要視されている[5]『スッタニパータ』(Sn)を基本資料として, 経中の涅槃観を明らかにする. Sn への関心は現代においても高く, 近年, 研究者による翻訳本(再版を含む)および研究書や論文が相次いで出版されていることからも, その重要性は明らかである.[6] このことは同時に, 様々な見解が提示され続けていて, 理解の統一に至っているとはいえない現実を示しており, それだけまだ考究の余地を残しているともいえる.

主要経典とその成立・時代層の問題

一般に, 経典の成立史や最古層・古層の分類については様々な議論がある. 涅槃の概念の歴史的変遷を意識する立場から, 本研究においては, 韻文経典が散文より古く成立したとして古層とし, その中でも Sn 第 4 章および第 5 章(Ch. 4, 5)が最も古く最古層とする説(Bodhi 2017 pp. 29 – 30, 並川 2005 pp. 8 - 10, 荒牧 1985; 1984, 南 1984, 中村 1971 p. 397 等を参照)[7]の分類を作業仮説として設定し, 最古層, 古

[4] 厳密には, ニカーヤ中, Bv『ブッダヴァンサ』, Cp『チャリヤーピタカ』, Dhs『ダンマサンガニ』, Khp『クッダカパータ』, Kv『カターヴァットゥ』, Paṭis『パティサンビダーマッガ』, Pv『ペータヴァットゥ』Vibh『ヴィバンガ』Vv『ヴィマーナヴァットゥ』Yam『ヤマカ』など明らかに後代のもの, また Nidd『ニッデーサ』などの註釈的聖典を除外した sutta「経典」部分を研究対象とする.

なお, 初期仏教・原始仏教・根本仏教・最初期の仏教・原初の仏教等, 様々な名称が学界において使用されるが, 内容的には同じものを指す場合が多い. この問題に関しては, 藤田 1987 に詳しい.

[5] 中村 1984 pp. 433 - 443. 荒牧 1985.

[6] Bodhi 2017, 荒牧・本庄・榎本 2015 (初版 1986 の文庫化), 榎本 2012, 服部 2011, 並川 2008, 村上・及川 1990 (新装版 2009)等.

[7] 榎本 2007 p. 8 は特に Sn Ch. 4 が現存する仏典の中では「最も古い特徴を備えている」とする. Sn Ch. 4, 5 を最古層とする説には従来より反論が見られる. 例えば, 村上 2010 および村上・及川 1990 pp. 275 – 283, 松尾 2008 pp. 72f., de Jong 2000, 宮元 2005 p. viii を参照のこと. 近年においてもこの説に懐疑的な研究者は少なからずいるようである. 名和 2016 p. 4 は「韻文資料で使用される言語や韻律に一定の古さは認めるが, 教理内容の新古がどの

層, 新層である散文の各層間に相違が見られるかどうかについて検証する.

Sn は前述した通り, パーリ聖典中, 唯一最古層を含む経典であり, その Ch. 4, 5 が最古層とされる.[8] さらに古層といわれる偈文部分, そしてその後成立したといわれる散文が織り交ざる, 非常にユニークかつ重要な経典である. 従って, 本研究において, 各層の分類を考慮しながら, Sn 中の涅槃を網羅的に考察することは, これまで欠けていた各層間の問題に関する考察をさらに深め, 拡充することにつながる.

その過程において, 適宜他の経典も利用し, 相互補完的に涅槃の各語義を明らかにすることを心掛ける. さらに, 該当用例ごとに後代(紀元後 5 世紀頃とされる)に成立した註釈『パラマッタ・ジョーティカー』(Pj)の理解と比較し, 涅槃に関して, 最古層・古層・散文・註釈の間に語義と用法の相違が見られるのかどうかについても明らかにする.

本研究が基本資料とする Sn について, そしてその註釈 Pj について, 以下に概要を記す.

『スッタニパータ』

Sn: *Suttanipāta*, D. Andersen and H. Smith (ed.), 1913, London, Pali Text Society (PTS)

Suttanipāta の sutta「スッタ」は経であり, nipāta「ニパータ」は「集」「集成」を意味する. その名が示す通り, Sn 全体の構成としては, パーリ聖典の様々な部分部分を収集して収録していると推測される点において Khp に類似しており, ハンドブック的目的で編集されたとされる(von Hinüber 1996 pp. 48 – 50, esp. p. 50).[9]

Sn は, 南方上座部が伝承するパーリ語の三蔵(Tipitaka)のうち経蔵(Suttapitaka)五部の小部(Khuddakanikāya)に所蔵され, 全 5 章 72 経が収録されている. 主に韻文で構成されるが, 中には散文を含むものもある. 経中に韻文に加えて, 散文があるのは, 古層とされる Ch. 1 全 12 経のうち 4 経, Ch. 2 全 14 経のうち 5 経, Ch. 3 全

程度認められるかという点については疑問を持っている」として, その理由を, 韻文は「使用可能な語彙や語数, 語順に制約を受ける」ことや「当該文脈が何を主題とするかによっても, その教理がどの程度, 或いはどの様に述べられるかが左右されると考えられる」ためとする.

[8] 但し例外があり, 後代の付加と言われている Ch. 5 序文(Sn 976 - 1031)と結語部分(散文＋Sn 1124 – 1149)を除く(本件については本項後述参照). 従って, 本研究においても最古層には含まない.

[9] なお, Sn パラレルは矢島 1997 を参照のこと. 各偈に至るまで綿密な一覧記録あり. パラレル内容まで記述した最新の研究成果は, Sn 註釈を全訳した村上・及川 1989; 1988; 1986; 1985 を参照されたし.

12 経のうち 8 経である. 最古層とされる Ch. 4, 5 の中で, 後代の付加とされているのは, Ch. 5 の最初と最後の経であり, 最後の経の冒頭に散文がある.

Ch. 4, 5 が最古層とされる根拠は, 仏教の根本思想を示していて, しばしば他経に引用されること, さらに, Ch. 4 のみを註釈する Nidd I (Mahā-niddesa)が, また Ch. 5 は Nidd II (Culla-niddesa)が, 聖典として存在することが挙げられる.[10] また, 漢訳『義足経』として Ch. 4 に相当する単独文献が存在することも然りである. 従って, Ch. 4, 5 は, Sn に収録されるまで, それぞれ独立した経典として存在していたと推測されている.

Ch. 4, 5 の成立の前後関係に関しては諸説あり確定はしていない. Aramaki 1993 p. 49, 荒牧 1988 p. 67; 1985 p. 3 は Ch. 4 中 Attadaṇḍasutta「取られた棒経」(Sn 935 – 954)[11]が釈尊の言葉, 即ち「金言」が含まれるとの考察結果を示す. その上で, Ch. 5 が同じ根本思想を説くために成立するとする. しかし, 村上・及川 1989 p. 38 は, 荒牧氏の説の逆の可能性を提示し,「新古の問題は簡単ではない」として, Ch. 5 に関して詳細に論じる(pp. 34 – 57). 中村 1971 p. 397 は両章とも釈尊に近い時代の思想と解釈する.

なお, 本研究において筆者が参照した近年の現代語訳は以下の通りである:

- 荒牧典俊・本庄良文・榎本文雄 [2015]『スッタニパータ[釈尊の言葉]全現代語訳』講談社学術文庫.
- K. R. Norman [2006] *The Group of Discourses (Sutta-nipāta)*, Second edition, Lancaster, Pali Text Society (PTS).
- 村上・及川 [1989; 1988; 1986; 1985] (下記註釈の項目参照).
- 中村元 [1984]『ブッダのことば—スッタニパーター—』岩波書店.

註釈『パラマッタ・ジョーティカー』

Sn 註釈 Pj II: *Paramatthajotikā* II, Helmer Smith (ed), vol. 1: 1916; vol. 2: 1917, London, PTS.

「パラマッタ」は「第一義」「最高の意義(⇐目的=利益)」すなわち覚りの境地た

[10] Ch. 5 序文は Nidd II では註釈がされておらず, 序文部分が後代の成立である根拠となる. 対して, 結語部分は Nidd II では註釈されており, この部分は序文より以前に存在していたことがわかるが, 註釈家は結集の編纂者達(saṅgītikārā)が述べたとする(Sn 註釈 Pj II p. 603).

[11] atta-は「自分に取り込まれた」[ā√dā の PP]とも「自己」とも理解可能. 中村 1984 p. 203「武器を執ること」, 村上・及川 1988 p. 808「自杖(自罪)経」と経名を挙げる.

る涅槃を意味し,「ジョーティカー」はそれを「照らすもの」「解明するもの」の意味である(村上・及川 1985 p. vii).

Pj の発祥地は西南インドにあることが諸伝承から示唆されるとの研究成果がある(村上・及川 1990 pp. 175 – 191).[12] Pj の成立はだいたい 5 世紀頃とされている. 著者は, 四部経典を註釈したブッダゴーサ(Buddhaghosa)に帰されるが(Pj II p. 608), それを疑問視する研究成果も見られる.[13]

Khp にも収録されている下記 3 経については, Pj II では解説がほぼ省略されているため, Pj I: *Paramatthajotikā* I, Helmer Smith (ed), 1915, London, PTS を参照した (Mettasutta: Pj II p. 193; Pj I pp. 232 - 252, Ratanasutta: Pj II p. 278; Pj I pp. 158 – 201, Mahāmaṅgalasutta Pj II p. 300; Pj I pp. 88 – 157 [Maṅgalasutta と記載]).

Sn 註釈(Pj II および Pj I の一部)は Sn 各経の因縁譚を示し, 経典の各語の解説を行う.[14]

なお, 先に触れたが, Sn 註釈(Pj II および Pj I の一部)には全訳があり, 詳細にわたる研究成果が記されている:

・村上・及川 1985 = 村上真完・及川真介[1985]『仏のことば註(一)—パラマッタ・ジョーティカー—』春秋社.

・村上・及川 1986 = 村上真完・及川真介[1986]『仏のことば註(二)—パラマッタ・ジョーティカー—』春秋社.

・村上・及川 1988 = 村上真完・及川真介[1988]『仏のことば註(三)—パラマッタ・ジョーティカー—』春秋社.

・村上・及川 1989 = 村上真完・及川真介[1989]『仏のことば註(四)—パラマッタ・ジョーティカー—』春秋社.

---

[12] しかし, 村上・及川 1990 は, 現形のような集成がどこで出来たのかは決定できないとする(p. 212). また Pj は, 前 1 世紀以前にインドからスリランカ島にもたらされ,「スリランカで改変」されたため(p. 437), Pj の内容の多くはインドに由来するが,「スリランカの伝承に基づいて, スリランカにおいてパーリ語に翻訳されまとめられたものである」(pp. 497 – 498)と説明する.

[13] von Hinüber 1996 pp. 128, 130 参照. 森 1984 p. 101, p. 470; 1979 p. 21 は註釈文献を渉猟した研究により, ブッダゴーサの真作ではないと結論づける. 諸異論を踏まえた上で, 村上・及川 1990 p. 205 は「五世紀前葉にスリランカにおいてブッダゴーサ(仏音, 覚音)によって書かれた」と見てよいとする. この件については, 筆者が参照した註釈文献の範囲において後述本論 4.にて若干の考察を行う.

[14] パーリ聖典三蔵(Tipiṭaka)の註釈文献(Aṭṭhakathā アッタカター)は, スリランカの古都アヌラーダプラに所在した大寺(Mahāvihāra)に伝承したシーハラ・アッタカター(シンハラ古註; 現存しない)を主たる源泉資料として, パーリ語に翻訳しつつ再構成されたものと言われている(森 1979 p. 3). 南方上座部の伝統的解釈が表されており, それはブッダゴーサ(Buddhaghosa)の Visuddhimagga (Vism)『清浄道論』(AD 5 世紀前半)において確立したとされる(馬場 2008 p. 7, von Hinüber 1996 p. 100).

問題の所在

最初期の文献を基点とする場合，先学の成果が孕む問題がいくつか挙げられる．

・文献学的問題

涅槃は[時に般涅槃(parinibbāna)とも言われるが]，解脱者・阿羅漢，特にブッダ世尊の命終(いわゆる「死」)を表すことで一般的に知られている．しかし，初期仏典においてはそれだけでなく，生前に得られる境地も表すことがあることは先学の間で周知のことである.[15] 生前の涅槃は「欲情などの煩悩の火が消えること」(榎本 2012 p. 150 他)であり，世尊の覚りと同じとされる．但し，個々の用例がいずれを表すかについては疑問を覚えることも多い．

Sn に特化した近年の研究成果である並川 2008 p. 137 は，Sn 中に「死を意味する涅槃の用例」は見られないと結論づけるが，これには議論の余地があるように思われる．生前か命終か，涅槃の時点やその内容が明確ではない用例が，Sn はじめ初期仏典には多数存在する.[16] なお，命終を示唆する[般]涅槃については，藤田氏，並川氏のみならず，これまでの諸研究において，解脱者・阿羅漢の「死」を表すと解釈されてきた．しかし，経典では，目の前にいる世尊に対して「不死」(Sn 225: amata)に到達されたお方，さらに「生死を超え渡った[お方]」(Sn 355: atāri jātimaraṇaṃ asesaṃ)と呼びかける．これら文献的事実から，本論においては，「不死」へと至った解脱者・阿羅漢に「死」という表現をあてることを意図的に避け「命終」と表記することとする.[17]

---

[15] 榎本 2012 p. 150，宮下 1989 p. 24，藤田 1988a p. 272; 1988b p. 4 他．この点を含む初期仏典の涅槃に関する従来の諸見解については，研究史として後述 1. 4.にて論じる．

[16] 具体的には本論で論じる．付録 1 に用例リストと筆者の見解を端的に示してあるので参照のこと．関連する教説に，初期仏教の終盤に成立したとされる「二種涅槃界」があり，パーリ聖典においては唯一 It pp. 38 – 39 [44 経]に説かれたとされる(藤田 1988b p. 7，宮下 1989 p. 27 他)．その説は，有余依涅槃界(saupādisesā nibbānadhātu)・無余依涅槃界(anupādisesā nibbānadhātu)を設定し，それぞれ涅槃を得た阿羅漢の生前と死後の境涯を表し，違いは「五蘊(心身の構成要素)」つまり身体の物理的有無に集約される(It-a p. 165: upādi khandha-pañcakaṃ)．筆者が持つ「生前・命終」という視座は，この二種涅槃界の教説につながるものではあるが，同じではないと考える．Sn に nibbānadhātu「涅槃界」という複合語は現れず，1 例づつ現れる saupādisesa「燃料の残余のある」，anupādisesa「燃料の残余のない」とも単独の使用であり，dhātu「界」が付されない形である．さらに，二種涅槃界にはパーリと漢文とでは異なる解釈も存在する(後述 2. 2. 3. 2.参照)．そのため，二種涅槃界を想起させる「有余[依]・無余[依]」はその原語が現れる場合にのみ使用することとする．

[17] 初期仏典の涅槃に関し，先学も不死の境地であることをもちろん指摘した上で，便宜上「解脱者・阿羅漢の死」と説明しているのであろうが，涅槃についての誤解を避ける意味

問題点としては，生前・命終の二種涅槃[界]の思想が背景にあるとしつつも，しばしば両者の区別が曖昧なまま論じられる場合があること，あるいは，筆者の考察からは生前・命終の判断がつけられない用例に関しても，いずれかに断定した議論がよく見られることが挙げられる[この問題は原文に複数の解釈の余地があることと関係することでもある].

・経典の時代層(新旧)の問題

以上のような文献学的問題に加えて，前述した通り，経典の時代層の問題がある．先学の成果では，時代層によらず初期仏典を一纏めとした用例検討から判断して，涅槃観を示していることが多い．経典の層分けの手法によって，筆者は最古層文献の考察から始め，用例の意味内容を積み上げていく手法をとる．そうすることによって，時代層の間で涅槃の語彙に微妙な相違が存在する可能性が検討できるようになる．これまでの諸研究は，原文の裏付けがありつつも，初期仏典を総合的に解釈する傾向から，文献の微細な内容の違いが未解決のまま残されているところがあり，涅槃にまつわる曖昧さが解消されていない一因と言えるのではないかと筆者は考える．

・語彙の問題

さらに加えて語彙の問題も見られる．涅槃の語彙を全てほぼ同義として，ひとくくりにして涅槃の解釈がなされることが見受けられる．例えば，nibbāna は nibbuti, nibbuta とほぼ同義であるとされる(藤田 1988a p. 265, [藤田氏を受けた]榎本 2005 p. 560)．また，abhinibbuta は parinibbuta とほぼ同義で同じ用法であるとされる(藤田 1988a p. 266, 1988b p. 2).

これらの問題点を検証するにあたり，本研究は，註釈の理解を一旦措いて，ニカーヤ自体の用例を収集し，最古層・古層とされる韻文，そして散文と区別して考察する手法をとる．加えて，後代 5 世紀ごろの成立とされる註釈 Pj の解釈とも比較する．

本研究の概要

本論は 4 部構成である．1.では，涅槃の語彙の原意に関して分析し，研究史をま

で「死」を使わず説明できるならそのようがよいと筆者は考える(先行研究の中で，片山 2001 p. 462，宮下 1989 p. 34 n. 13 は同様の解釈を示す)．なお註釈は明確に amata = nibbāna と定義づける(例: Sn 228 註釈 Pj I p. 185, Sn 635 註釈 Pj II p. 469).

とめ整理する. 2.では, 実例検討により, 初期仏典中の涅槃の語彙を分析する. 3.では, その涅槃が生前で得られるものか, それとも解脱者・阿羅漢のいわゆる死を表すのかという, 生前・命終の問題について再考する. 4.では, Sn の註釈である Pj を中心に, 註釈文献における涅槃観をまとめる.

各層間および語彙間にどのような涅槃観や教理の異同や展開が見られるのかを精査することにより, 本論は, 従来の初期仏典を一纏めにするアプローチでは得られなかった, 涅槃観の多様性・多層性を浮き彫りにする.

なお, 涅槃の語彙の語義・意味の相違を探ることを目的の一つと定めているため, 該当用例の涅槃の語彙は和訳せず, 原語をあてることとする. 但し, 註釈 Pj については, 涅槃の語彙を全て「涅槃」と理解して説明しているため(後述 4.および付録 2 参照), 和訳を入れる.

基本資料 Sn 中の全 51 用例の一覧と筆者の解釈を付録 1 に端的に示した. Sn および註釈の原語と和訳および経の概要とパラレルについては付録 2 を参照のこと. Sn 以外に考察した用例一覧は付録 3 を, 世尊の命終を高揚した DN II pp. 72 – 168 [16 経]: Mahāparinibbānasuttanta「大般涅槃経」に関しては付録 4 のリストおよび付録 5 の用例検討を参考までに添付する.

1. 涅槃の語彙の語源と原意に関する分析

1.1. 語源(動詞語根)と語形

1.1.1. 語根

nibbāna は nir＋√vā からなる. 接頭辞 nir- [nis-]には「外に, ～から離れて」の意味があり, そして√vā には 2 種類あり, √vā[1]「[風が]吹く」および √vā[2]「[火が]消える」がある.[18]

ところが, 先行研究においては, nirvāṇa「涅槃」の語根として√vā[1] の「[風が]吹く」のみが認識され, そのため「吹き消すこと」または「吹き消されている状態」であると説明されてきた.[19] しかし, 単に「火が消える」意味で使用されていることが従来の成果においても示されており, EWA Bd. II, pp. 537 – 538 にある通り, 全て√vā[2]「[火が]消える」に帰せられる.[20] 従って, 涅槃の原意である「[火が]消える」は, nir＋√vā[2] の形であり, 動詞形は nibbāyati である.[21] また, caus.として nibbāpeti「[火などを] 消す」が用いられる.

但し, EWA には, √vā[1] と√vā[2] は明確に区別できず, 語形の混同も存在するとの注記がある.[22] この件については下記で論じる.

---

[18] EWA Bd. II, pp. 537 – 538 には語根√vā として 2 種類示される: 1. √vā[1]: wehen (風が)吹く [Skt. vāti], 2. √vā[2]: dahin/schwinden「消え去る・なくなる」, ermatten「衰える」, verlöschen/erloschen「(火や明かりなどが)消える／消えている」[Skt. vāyati]; caus. (nir) vāpayati「消す」. そして涅槃(Skt: nirvāṇa)の語源として, √vā[2] を挙げる.

[19] 例えば, 水野 1972 pp. 153 – 154. これについて藤田 1988a pp. 264 - 265 は「原始経典ではこうした語源的意味を積極的に示す用例は見当たらない. むしろ語源の√vā (吹く)という意味を表出しないで, 単に『消えること』『消滅』の意味で用い, 特に火または火に譬えられるものの消滅をさすことが多い」と述べるにとどまっており, √vā[2]「[火が]消える」については言及していない. 同様の考察結果が服部 2011 pp. 143 – 179; 中村 1993 p. 873; 宮下 1989 p. 18; 藤田 1988b p. 2 においても示される. また, Ñāṇamoli 1975 p. 790 n. 72 は, 語根は否定辞+ √vā[1]「吹き消す」とされるが, 元来の意味は「鍛冶屋が息を吹くのを止めたら火は自然に消える」という自動詞の extinction「鎮火」であるとし, Hwang 2006 p. 9 もこの見解に同意する.

[20] 榎本 2012 pp. 149, 157 n. 1 および Sakamoto-Goto 1993 p. 300, n. 15, 榎本 2005 p. 555 n. 2, 2002 p. 149, n. 22 において指摘済みである.

[21] PED p. 362 sv. nibbāna では語根として√vā「吹く」と√vṛ「覆う」を挙げ,「火を吹き消す」は古いテキストに用例があるだけで, むしろ「覆うことによって火が消える」「燃料の供給がなくなり火が消える」が原意であろうと説明しており, 語根√vā[2]「火が消える」は挙げていない. そのせいか, p. 365 sv. nibbāyati には, passive of ni(r)varati とあるがこれは間違いである. Cone には語根の言及はない.

[22] EWA Bd. II, p. 537: In älterer Fachlit. nicht deutlich von VĀ[2] getrennt.「古い文献では, [VA[1] は] VĀ[2] との区別が明確でない」; p. 538: Von VĀ[1] zu trennen; doch gibt es formale Überschneidungen (auch mit volksetymologischen Umdeutungen) zwischen den beiden Wortsippen

上記に示した通り, Sakamoto-Goto 氏や榎本氏も指摘済みである涅槃の語彙の原意が nir + √vā[2]「[火が]消える」であることを, 以下に用例を示して再確認しつつ, この問題についてさらに論じたい. なお, 語源を巡る過去の議論は下記 1. 4.も参照のこと.

1.1.2. 定動詞

本研究において調査した Sn の涅槃の語彙の用例全 51 例中, 動詞形は 5 例で, 最古層は√vā[1] の活用形 nibbāti [3rd sg. pres. ind.]のみである(Sn 915). 古層は√vā[1] および√vā[2] の活用形がそれぞれ 2 例ずつであり, うち 1 例づつが接頭辞 pari「ぐるりと回って；完全に」をも伴う(Sn 235: nibbanti [3rd pl. pres. ind.], Sn 765: parinibbanti [3rd pl. pres. ind.]; Sn 354: nibbāyi [3rd sg. aor.], Sn 591: parinibbaye[23] [3rd sg. opt.]. 各用例は後述する).

この中で Sn 591: yathā saraṇam āditta̱m vārinā parinibbaye「火が付いた家が, 水で pari-nir-√vā (nibbā)するように」(本偈は下記 1. 2.で論じる)は, 火が消えることを直接表す. 他の 4 例は, 人が主語である. 最古層 Sn 915: kathaṃ disvā nibbāti bhikkhu「どのように見て托鉢修行者は nibbā するのか」(後述 2. 1. 3.参照)および古層 Sn 235: nibbanti dhīrā yathāyam padīpo「賢者達は, この灯火のように nibbā する」(後述 2. 2. 1.参照),[24] それから Sn 354: nibbāyi so「彼は nibbā した[のか]」(後述 2. 2. 3. 2.参照); Sn 765: parinibbanti anāsavā「無漏者達は parinibbā する]」(後述 2. 2. 3. 3.参照)とも, √vā[1]「吹く」の意味ではなく,「涅槃する」ことを示唆する.

このことから, Sn においても動詞語形は, √vā[1] であっても√vā[2] の語義として使用されていたことが確認できる. その理由として韻律上の都合が作用している可能性も考えられるが, Sn 以外の古層においても nibbāti の形は限定的であるが見出せる.[25] 但し, 逆は見出せず, つまり, 語形√vā[2] で語義√vā[1] の用例はない.

Hoffmann 1975 pp. 466 – 467 が, Veda 文献中の ud-√vā を挙げ, √vā[1] の分詞形 udvānt が「火が消えつつある」の意味で使用される例(AB VIII 28, 10)等を指摘する

「[VA[2] は] VĀ[1] と区別すべき. だが, 二つの語の派生語の中には, (通俗語源解釈も伴って)語形の重複がある」.

[23] 本来は parinibbāye であるが, Śloka 第 2 句の 7 音節目で短が必要であるため, parinibbaye となっていると考えられる. 3rd sg. opt.は nibbāyeyya の形が大半である(例: MN I p. 487; DN II p. 340, SN II pp. 86 -87, III p. 126, IV p. 213, V p. 319. AN IV pp. 70 – 73).

[24] 定動詞 nibbanti は, 灯火が消えることに喩えて, 賢者達が涅槃することを示す. 従って「賢者達はこの灯火のように消える」との理解も可能であるが, この場合は, 人が物理的に消えることを表すのではなく, 主語である人の火的要素が消えることを意味する. これについては後述 1. 3.にて論じる.

[25] parinibbāti: Th 364, AN III pp. 41G, 43G; p. 347G. nibbāti: Ja II p. 235G. 散文には見出せない.

ように, vāti を vāyati の意味で用いるという混同は Veda から見られるが，上記の検証は，これがパーリ文献の特に古いテキストにも残っていることを裏付けよう.

従って, Veda 以来の混同がパーリ文献に受け継がれた可能性が高いことが導かれる. そして, 初期仏典中の新しい層である散文おいては, nibbāti の使用は認められないことから, 次第に nibbāyati に統一されるようになったと考えられる.

1.1.3. nibbāna

Skt. nirvāṇa は, そもそもは接尾辞 ta-に代わる na-が付された過去分詞形(PP)であり(AiG III pp. 556, 726), または中性名詞として,「[火が]消えた／消えること」, そして「生命の火が消えた／消えること」;「命の束縛から解放された」;「永遠の幸福」を意味する(PW IV p. 208 参照).

nibbāna が「[火が]消えること」を直接表す用例は, Sn には見出せないが, 他の古層文献には見られる. 古層の一例を挙げる:

Th 906: pajjotasseva nibbānaṃ vimokkho cetaso āhū.
灯火の消火／消失のごとき心の解放が生じた.[26]

Sn 中に現れる名詞形 nibbāna は, 最古層において定義づけがなされるが, 特に具体的説明がされずに現れる用例が大半であり, 修行者の究極の目標である「涅槃」を意味する(後述 2.にて論じる).

先行研究によると, 仏教以前のウパニシャッドには nirvāṇa「涅槃」が解脱を表す術語として成立していた形跡はなく, 大叙事詩『マハーバーラタ』になってから, 特に, その第 6 巻の一部分をなし, ヒンドゥー教の代表的聖典となった『バガヴァッド・ギーター』にその使用が 5 回認められると報告する.[27] 藤田氏は『マハーバーラタ』には, このほか parinirvāṇa が解脱の境地を表すものとして用いられてはいるが, 仏教ほど涅槃という用語を重用した文献は他にないとの見解を示す.[28] 辻氏および上村氏は『バガヴァッド・ギーター』が nirvāṇa「涅槃」の語を仏教から借用した可能性を示唆する.

---

[26] 同表現は DN II pp. 72 – 168 [16 経] Mahāparinibbānasuttanta「大般涅槃経」偈頌部分 p. 157, SN I p. 159, Thī 116 に見出せる. 灯火の消火, つまり心の解放が生じた時点(生前か命終か)に関して, 経典によって解釈が分かれる. Th 906, DN II p. 157 および SN I p. 159 は仏伝パラレルであり, 世尊の命終(般涅槃)時のアヌルッダ尊者の偈頌部分であるが, Thī 116 は文脈から Paṭācārā 尼の生前を表す. 本件については, 後述 2. 2. 1.にて論じる.

[27] 例えば, 藤田 1988a pp. 266 – 267 や辻 1980 pp. 333, 409 – 411 および上村 1992 pp. 60, 153 n. 72 を参照のこと.

[28] 藤田氏は, nirvṛta, nirvṛti の使用にも同じことが認められるとする.

1. 1. 4. **nibbuta**

語源の問題を複雑化させるのは，先行研究において同じく涅槃と解される PP nibbuta およびその名詞形 nibbuti の存在である．これらの語は，従来より√vṛ (cover, 覆う)の派生語である Skt. nirvṛta, nirvṛti のパーリ語形であるとされてきた. nirvṛti は女性名詞で，意味として,「内面の充足」「安楽」「至福」(= sukha);「解放」(= nirvāṇa, mokṣa); 鎮まること; [太陽・月などの]入り，滅などがある(PW IV p. 213 参照).[29]

榎本 2005 pp. 560 - 559 は，文献を仏教以前に遡って, Skt. nirvṛta は古ウパニシャッド文献やそれ以前のヴェーダ文献には見出せず, nirvṛta の用例で，パーリ語の nibbuta やジャイナ教アルダマーガディー語の nivvuḍa より「時代的に先行する確証のあるものは存在しない」と記す.[30]

次に，パーリ語とアルダマーガディー語の借用関係に関して，中村 1993 pp. 873, 893 は nibbuta を「ときほごされた」と解釈し,「この語はジャイナ教などで『諸々の悪業や束縛から解脱すること』を意味していたが仏教はそれを取り入れた」と説明する．藤田 1988a p. 265 は，同様に語根を√vṛ「覆う」と認めつつ，原始経典にはこのような語源的意味で使われる用例は見出されず,「消滅」「涅槃」を意味するとの考察結果を示す.[31]

榎本 2005 は, nirvṛta が「覆う」の意味の語根√vṛに由来するという上記の説に疑問を呈し，ジャイナ文献における nivvuḍa の用例を検討している．その結果 nivvuḍa 自体に「ときほごされた」「覆いをとり去られた」「離脱した」という意味を積極的に認める根拠は見出されず,「仏教のパーリ文献においても nibbuta が nibbāyati の過去分詞の役割を果たして『火の消えた』意味で用いられる場合がしばしばあるのと相応する(p. 557)」結果が，ジャイナ文献における nivvuḍa についても導かれたことを提示する．

Sn においても, Sn 19-c 句に nibbuto gini「火が消えた状態である」という nibbuta の用例があり，これは前偈の āhito gini「火は灯されている」に対比する内容として現れることから，まさしく「[火が]消える」を意味すると確認できる.[32] 以下に

---

[29] PW に nirvṛta の記載なし.

[30] なお nir-√vṛが,「選びだす」の意味で『リグヴェーダ・サンヒター』に確認されると注記あり(榎本 2005 p. 554 n. 12).

[31] 中村氏も同様に, nibbāna と nibbuta は語源が違う「別のもの」とするが(1993 p. 897 n. 11), Sn 和訳(1984)において両語に「安らぎ」「安らぎに帰する」と同じ意味をあてており,「ときほごされた」とは捉えていないようであり，矛盾するように思われる.

[32] 服部 2011 p. 182 n. 8 は, nir-√vṛ (覆う)を表出する nibbuta の例があるとして Th 1268 を挙げるが，以下に示した通り異読に nivuto があり，服部氏の見解は正しくないといえる.

no ce hi jātu puriso kilese vāto yathā abbhaghanaṃ vihāne,
tamo v' assa nibbuto sabbaloko, jotimanto pi na narā tapeyyuṃ.

その Sn 18; 19 を挙げる.[33]

Sn 18 “pakkodano duddhakhīro ’ham asmi
iti Dhaniyo gopo
anutīre Mahiyā samānavāso,
channā kuṭi, āhito gini, —
atha ce patthayasī, pavassa deva.”
牛飼いダニヤが言った,「私はもう飯を炊き, 乳を搾った.
マヒー河のほとりで, [私は家族と]共に住んでいる.
小屋は覆われ, 火は灯されている.
そこで, 神よ, もしも望むなら, 雨を降らせよ」

Sn 19 “akkodhano vigatakhīlo[34] ’ham asmi
iti Bhagavā
anutīre Mahiy’ ekarattivāso,
vivaṭā kuṭi, nibbuto gini, —
atha ce patthayasī, pavassa deva.”
世尊は[答える],「私は怒ることなく, 心の頑迷さを離れている.
マヒー河のほとりで一夜を過ごしている.
小屋はあばかれ, 火は消えた状態である.
そこで, 神よ, もし望むなら, 雨を降らせよ」

従って, この Sn の用例からも, nibbuta が nir-√vā「[火が]消える」の PP として使われていることが確認される.

以上の例を始め以下本論で吟味する全ての用例も, nibbuta が最古層から「火が

風が厚い雲を払いのけるように, ひとりの人が煩悩を払いのけないなら,
全世界は覆われ, まっ暗闇であろう. 光輝を備える人々ですら, 燃え輝かないかもしれない(Th 1268).

本偈は Sn 348 [Ch. 3: Vaṅgīsasutta]に nivuto [ni-√vṛ(覆う), pres. ind.: nivarati]としてパラレルがあり, この Sn の Ee 同様, Th Ee: nibbuto の異読である Be, Se とも nivuto とある. 従って, 本偈 Th 1268 についても nivuta 採用で考えて差し支えない. Sn 348-cd 句は d 句の na の位置が異なる: tamo v’ assa nivuto sabbaloko, na jotimanto pi narā tapeyyuṃ.

なお, 本偈に出てくる√vā 派生語の vāta は, 名詞形で「風」を意味する語である(EWA Bd. II, p. 542). √vā[1] の PP としても可能な語形であるが(EWA Bd. II, p. 537), Sn index (Pj II 3 p. 760)に記載される全 6 例とも「風」の意味での使用である.

[33] 古層とされる Ch. 1「ダニヤ経」Sn 18 - 34 中の 1 偈. 牛飼いダニヤ(名前の意味は「財産のある」)が肯定的に自分の状況を語り,「神よ,もし望むなら, 雨を降らせよ」(ce patthayasī, pavassa deva)と繰り返す. それらの言葉を受けて世尊が自分自身の境地について答える形で進み, 最後にダニヤが世尊に帰依するという内容である.

[34] Se: -khilo.

消える」意味の nibbāyati または nibbāti の PP として使用されており,「覆いをとる」等の原意も存在しないことを示している.

1.1.5. nibbuti

nibbuta と同じ語根に接尾辞-ti が付された抽象名詞である.[35] 前記した Skt.対応語 nirvṛti の意味においては, nirvāṇa にあるように「火が消えること」は挙げられていないが,「解放」という点から nibbāna とほぼ同義であるとされる(PW IV p. 213). 他の辞書(例: Cone II p. 587)および先行研究(例: 藤田 1988a p. 265)においても nibbāna とほぼ同義とされ, 詳細検討は為されていない.

初期仏典においては, nibbuta が nir-√vā「[火が]消える」の PP として多用されることから, nibbuti も「火が消えること」や「鎮火」が原意であると推測され得るが, Skt. nirvṛti にはそのような意味での使用はなく, また PP nirvṛta の使用も認められず, これらの語彙の関係性において, Skt.文献とパーリ文献に相違が見出せるのである.

nibbuti の用例は最古層の同じ経中に 2 例のみあり(Sn917; 933), 人に関して使われ, 世尊によって santi「鎮まり」であると定義され, 直接的に = 涅槃とは語られないが, 間接的に = 涅槃といえる(後述 1.1.5.の考察結果参照). 古層 Th 32 において,「鎮火」を示す用例が見出せる:

> tappamānena nibbutiṃ nimmissaṃ
> 焼かれつつあるものを nibbuti に[私は]取り換えよう

nibbuti は焼かれることの反対概念であるため, 鎮火を表すといえる(本偈は後述 2.2.4.にて考察する). nibbuti については初期仏典の全用例を考察し, 後述にて論じる.

1.1.6. 涅槃の語源に関する他の説

nibbāna と nibbuti はいずれも同じく nir-√vṛ「覆いをとりのぞく」とする説の問題点

先行研究の中には, 上記とは異なる説も見出せるため, ここで簡単に説明する.

そのひとつに, 松本 1989 による nibbāna および nibbuta は同じく nir-√vṛ「覆い

[35] AiG には nirvṛti または nibbuti の記載なし. なお, 接尾辞-ti は, 動詞形から抽象名詞を作る際に使用される(AiG III p. 622).

をとりのぞく」であるという考えがある(p. 198). その論拠の中心に, 前述の Sn 19-c 句: vivaṭā kuṭi, nibbuto gini「小屋はあばかれ, 火は消えた状態である」を据え, ここに「“vivata”と“nibbuta”の同義性(p. 216)」[36]が顕示されるとするが, Sn 19 が Sn 18 と意味的に対応関係にあることを無視した主張であるといえる. また, kuṭi「小屋」は「アートマン[37]を意味する(p. 213)」もので, gini「火」を「アートマンの光」[38]と説明する. このように, 註釈文献にさえ見出せない独自の説を展開し, nir-√vṛ に語根を帰するこの説であるが, nir-√vṛ 派生の Skt. nirvṛnoti, nirvarati からどのように nibbāna (Skt. nirvāṇa)が導かれるかも明確ではなく, この説は成り立たない.

nir-√vṛ「しっかり覆う」とする説の問題点

さらに, 上記の説に反論する形で, 接頭辞 nir-を強調ととり nir-√vṛ を「しっかり覆う」という説も見られる. 理論上可能であるこの説は, 並川 2005 pp. 73 - 90 によって提唱される.[39] この説も論拠として前述の Sn 19 のみを挙げる.

この「しっかり覆う」説は, 火の消え方を問題とし, Sn19 は「譬喩的表現によって雨で火が消えるもの, ということを言い表している(p. 74)」ため, nibbuto gini の解釈を「雨にしっかりと覆われ(p. 74)」火が消えたと考え得るとする. また, nibbuta が原義として「覆いをとりのぞく」という意味を有しているならば, 小屋は vivaṭa「あばかれ」のところで用いられているはずだが, そうではないことを自説の根拠に挙げる. 先に引用した松本氏もそうであるが, この解釈にも経典理解において誤認があるように思われる.

そう考える理由に 1 つに, 本偈の「もし望むなら, 雨を降らせよ」という言葉は, Sn「ダニヤ経」の中で, 牛飼いダニヤが俗世の幸せを詠い, ブッダ世尊が, 反対の描写によって覚った者の境地を示す Sn 18 から 29 に一貫して使われている表現であり, Sn 19 に特有のものではないことが挙げられる. また 2 つめとして, 本偈は, 牛飼いの言葉である Sn 18-c 句 channā kuṭi, āhito gini「小屋は覆われ, 火は灯され

---

[36] 松本 1989 p. 216 によるとこの根拠は,「Sn 763 の satañ ca vivaṭaṃ hoti”『善き人々に vivaṭa が生じる』」について, 註釈「Pj (p. 510, l. 5)は“nibbāna”と解しているから」ということである. そして, この註釈の内容のみから,「『涅槃』すなわち“nibbāna”が,“消滅”ではなく“離脱”つまり, “覆いがとりのぞかれること”(nibbuti)を意味すること」が論証されるとする.

[37] 松本 1989 p. 201 は, 註釈 Pj II p. 31 が kuṭi を attabhava「我, 自身」と説明するため, kuṭi をアートマンと解釈する. atta [Skt. ātman]については, 本研究の該当用例 abhinibbutatta の項目で, 松本氏のアートマン観を含め, さらに論ずることとする(2. 1. 2.参照)

[38] 松本氏は, Sn 19 の gini [=aggi, Skt.: agni]「火」を joti, pajjota, āloka「光」と同一視する. kuṭi = attabhava (Pj II p. 31)という註釈の説明は採用するが, aggi = rāga「熱望」, kilesa-vassaṃ「雨という煩悩」, *nibbuto* ti upasanto「nibbuto〈消えた状態である〉とは鎮まっている」(Pj II p. 32)との説明は無視して独自の論を展開する.

[39] 並川 2008 ではこの説の記載はなく, nibbāna の語源ははっきりしないとだけ記すが, 2010 p. 115 では再びこの自説に触れる. PED p. 362 は本説の可能性を提示する.

ている」を受け，その反対を述べていることからも，nibbuto gini は，雨とは関係なく，単に火が消えているとするのが最も自然な解釈であることである．さらに，註釈家も≪小屋があばかれた→雨が降った→火が消えた≫を支持する説明はしていない.[40] 従って，上記並川説は成立し得ない．

1.1.7. 語源小結

語源についてまとめると，以下の通りである．

・nibbāna「涅槃」の語源は，語根√vā[2]「[火が]消える」から，nir-＋√vā[2](動詞形 pres. ind.: nibbāyati)である．時に同義として√vā[1] の nibbāti の形も代用される．これは古く Veda から見られる語根の混同がパーリ文献にも残っていることを表す．Sn 中，該当用例の動詞形 5 例のうち，3 例が nir-√vā[1] (pres. ind.: nibbāti)であることが確認された．
・nibbuta は nibbāyati および nibbāti の PP の役割を果たし，原意は「[火あるいは火的要素が]消えている／消えた」ことを示し，その他の意味は有しない．これについては，Sn 19: nibbuto gini「火が消えた状態である」との用例によって本研究においても確認された．
・先学の成果から，仏教以外の nibbāna および nibbuta に関して，仏教および同時代とされるジャイナ教の興起以降に使用されるようになったことが窺える．

1.2. 火以外のモノが nir-√vā する場合

前節において，原意は「[火が]消える」であることを明らかにした．その原意を直接表す用例も見出せるが，大半の用例は「火」や「灯り」が現れず，直接的ではないことを意味する．その場合，「[火が]消える」の原意は具体的には何を表すのであろうか．前項で引用した藤田 1988a p. 265 は「消えること」に加えて「消滅」という言葉も使用する．しかし「消えてなくなる」という意味は注意を要する．この問題は涅槃を意味する nir-√vā の含意に大きく関わるため，以下 1. 2.および 1. 3.では，関係する先行研究の議論も示しつつ，「消えること」の意味を掘り下げる．その上で残る問題点を抽出する．

[40] 註釈 Pj II p. 31 は「覆いがあばかれていたら過度に降雨しない」との Vinaya II p.240 = Th 447 を引用し逆の理解を提示し，雨は「煩悩」であると説明する．

先行研究の成果

該当用例が火以外のものに対して使われる場合，必ずしもそのモノ自体が消えてなくなってしまうわけではないことは，涅槃の最新の研究である榎本2012によって指摘済みである．それによれば，火の場合は火全体が消えるが(例: MN II p. 487),「火以外ではその一部の火が消える(p. 150)」こと(例: MN I p. 446, AN I p. 257)を意味する．この補足として，いくつか他の用例を提示して具体的に示す．

火が付いた家が水で消火する[火が消える](Sn 591)

Sn 591　yathā saraṇam āditta̱m vārinā parinibbaye,
evam pi dhīro sappañño paṇḍito kusalo naro
khippam uppatitaṃ sokaṃ vāto tūlaṃ va dhaṃsaye
火が付いた家が，水で parinibbā する(すっかり消火する)ように，
このようにまた賢者であり，理解力を備え，聡明で，達人である人は，
風が綿の房を吹き払うように，生じた悲しみをすぐに[払う].[41]

本用例からも，火が消えることであり，家自体がなくなるわけでないことは明白である．

同じことは acc.として燃えるものが明確に現れる acc.＋nippāpeti[42][caus]でもあてはまる.[43] 例えば, DN II pp. 72 – 168 [16 経]: Mahāparinibbāna-sutta 中，世尊の火葬の場面で使用される．

世尊の火葬薪は燃えたが消えてはいない

daḍḍhe kho[44] pana Bhagavato sarīre antalikkhā udakadhārā pātu bhavitvā

[41] Ch. 3: Sallasutta「矢尻経」は 20 偈からなる説法であり，近親者を亡くして，嘆き悲しむことの無益さを語り，自分の心に突き刺さっている矢尻を抜けば(Sn 592), nibbuta になると経を締めくくる(Sn 593). この nibbuta については後述 2. 2. 3. 1.で取り上げる．

[42] PED p. 365 sv. nibbāpeti に caus. of ni(r)varati とあるのは間違いである．

[43] 初期仏典中 acc.＋nibbāpeti「消す」の用例の acc.に関しては他に以下が見出せる: mahājanaṃ「大衆」(古層 Ja III p. 443 [No. 420]), tiṇukkaṃ「松明」(散文 SN II pp. 152; 153), jātarūpaṃ「金であるそれ[の火]」(AN I p. 257). 本研究の範囲外である後代に成立した Ap に多くこの用例が見られ, Bv にも見出せる(例: rāgaggiṃ「激情の火」; daraṃ「恐れ」; cittaṃ, hadayaṃ「心」; janataṃ「人々」; sadevakaṃ「神々を伴う世界」). いずれにせよ, acc.が火そのものでない場合は，そのモノ自体が物理的に消えるのではなく，そのモノの火的要素が消えることを意味する．

[44] Be: ca kho.

Bhagavato citakaṃ nibbāpesi, udaka-sālato pi abbhunnamitvā Bhagavato citakaṃ nibbāpesi. kosinārakā pi Mallā sabba-gandhodakena Bhagavato citakaṃ nibbāpesuṃ.

ところで世尊の遺体が焼かれた時，中空から水の流れが現れて，世尊の薪の堆積[の火]を消した，水がサラノキの木からも噴き出し，世尊の薪の堆積[の火]を消した．クシナーラーのマッラ族も，あらゆる香水によって，世尊の薪の堆積[の火]を消した(DN II p. 164).

先行研究における過去の翻訳を見ると，該当用例箇所(Bhagavato citakaṃ nibbāpesi [aor. 3rd. sg]/ nibbāpesuṃ [aor. 3rd. pl])を，入澤 2001 p. 27 は「火葬薪を消した」，片山 2004 p. 327 は「火葬薪が消えた」と和訳している．入澤氏は，この現象を「火の燃料である薪を消滅させるという奇跡が起きている(p. 27)」と説明する．

確かに水の現れ方は奇跡的であるが，水によって薪の火が消えたと理解するほうが自然であり，文脈からしても，火葬薪自体が消えたとの解釈は正しくない．さらに，DN II pp. 164, 166 に，遺骨分配が終わった後，遅れてやってきたピッパリヴァナのモーリア族が，炭(aṅgāra)を持って帰った(世尊の遺体については chārikā「灰」も masi「煤」もなく遺骨だけが残った)との内容に照らして，薪の炭を持ち帰ったことからも火葬薪の火が消えたことは明白である．

「火が消える」を意味する場合，確かに誤解を生みがちである．日本語でも「ろうそくが消える」「ランプを消す」と一般的に表現する．それは「ろうそくの火が消える」「ランプの火を消す」意味であり，決してろうそくやランプが消滅するということではないことを表す．

1.3. 人や生き物が nir-√vā する場合

人の場合は仏教術語の「[般]涅槃」と訳されることが多いが，モノで確認したのと同様「その人自体が消えてなくなる」ことを意味しているわけではなく，その人自身の火的要素が消えることであると理解すべきである.[45] しかも，それが例えば「意気消沈する，活力が無くなる，生命力が低下する」といった意味では決してなく，外面的にも内面的にも「鎮まる」とか「落ち着く」ことを表していることが諸々の用例から分かる．例えば，古層 Ja III p. 443: nibbāpaye saṃkhubhitaṃ mahājanaṃ「動揺している大衆[の中の火的要素]を消すべきである」等があり，また，散文 MN I p. 446 では，馬に対して用いられる．世尊が馬の喩えを述べる場面

[45] 榎本 2012 pp. 150 - 151 参照.

で, assadamako「馬の調教師」によって順次為される処置によって, ājānīyo「駿馬」にその都度生じる visūkāyitāni visevitāni vipphanditāni「落ち着きなく曲げたり, 跳ねたり, 動くこと」が「鎮まる」という意味で parinibbāyati および parinibbuto hoti が複数回現れる.[46] そして, その喩えのように, 托鉢修行者が 10 のダルマ(教え)[47]を備えたなら, asekha「無学」の āhuneyyo「供養にふさわしい者」等になると説き経が終わるが, 人については涅槃の語彙は現れない. さらに, 同じ動物の例として鳥の用例が古層 Ja II p. 383 [no. 277]にあり, aṇḍajā pure「かつて卵生のもの(鳥)たちは」asaṃkamānā「疑うことなく」abhinibbutattā でありと, 複数の鳥の状態を表す語として使用されている(後述 2. 2. 3. 2.参照). 前者に照らし合わせて同様に理解可能であり, 穏やかで安らかな状態であるという意味といえる. なお後述 2.の考察結果から, 人の用例においても涅槃を意味するかどうか明らかではない用例が見出せる(例: 最古層 Sn 783, 古層 Sn 343 = Th 1263, Sn 707, Ja III p. 14, 散文 MN I p. 323. これらは abhinibbutatta か nibbuti の用例).

消える要素

さてでは, 人が nir-√vā するとは一体そのいかなる火的要素が消えることと考えられていたのか. それについて注釈の答えは明快である. 即ち注釈書では, 消える要素は煩悩等として明示されているのである(具体的には後述 4.参照).

しかしながら, これとは対照的に, 消える要素は経典では明示されてはいない. 実際 Sn 中の定動詞および PP の用例において, 人にかかる場合が 28 例あるが, これらは, 誰それが nir-√vā する, 誰それは nibbuta[48]した[状態である](nibbuta した[状態である]誰それ)という意味で, 消える要素には言及されない.

消える要素に関して, 先行研究において明らかにされている部分もあるが, あいまいなところも残っている. この点を考えるにあたって, 生前か命終か, いずれとも判別つかないのか(そもそも時点を問題にしていないのか), という筆者が関心を寄せる問題が関わってくるのである. 従来より涅槃についての議論はもっぱら修行完成者が得る涅槃および般涅槃とは何かという基本的なことをはじめとして, 様々な角度から学際的に考究されてきた. 初期仏典の実例検討に入る前に,

[46] 藤田 1988b p. 5 は, T. W. Rhys Davids 1910 によって parinibbāyati, parinibbuta が「生きている馬が完全に静まる(≒よく調教されること)」意味で使われる本用例(MN I p. 446)が指摘されていることを根拠に, 存命中における涅槃の境地を表す語としても使用されることを示す. 榎本 2012 p. 150 は, 本用例を「馬全体が消えるものではない」として, 涅槃の語彙の意味が「火以外ではその一部の火が消える」ことである 1 例として挙げる.

[47] 八聖道の正見, 正思, 正語, 正業, 正命, 正精進, 正念, 正定に加え, 正智と正解脱.

[48] Sn に現れる PP は, nibbuta, parinibbuta, abhinibbutatta, diṭṭhadhammābhinibbuta である. 本論では総称して「nibbuta」あるいは「nibbuta の諸用例」と記載する.

これらの深く関わり合った諸問題，つまり，人が nir-√vā することの意味，消える火的要素とは何か，そして涅槃する時点(生前か命終か)に関連する議論について，これまでの涅槃の研究史を簡単に振り返っておくこととする．

1.4. 涅槃の研究史(初期仏典に関して)

19 世紀前半: 涅槃は消滅かどうかの議論

ヨーロッパを中心にインド仏教の文献学的研究が興るのは 19 世紀に入ってからのことである(Welbon 1966 p. 300). 当初は Skt.文献が主たる研究対象であり，仏教の涅槃観に近代的研究手法を取り入れた最初の研究者は Colebrooke 1827 とされる．彼は nirvāṇa「涅槃」に関して，特に仏教が重用した語であること，そしてその語根は√vā「[風が]吹く」から「風によって吹き消す」であり，インド思想において Skt. mukti, mokṣa「解脱」と同様に捉えられる傾向にあるが，この語の意味は「無身解脱」による最高梵との永遠の合一を表す annihilation「完全消滅」ではなく unceasing apathy「継続的な感覚休止」であると主張する(宮本 1985 p. 390). この分析は，当時既に nirvāṇa が annilihation of human existence「人間存在の完全消滅」であるとの考えが一般的であった背景を表す(Welbon 1966 p. 307).

これに対し，Skt.に加えてパーリ文献の研究も進み始めていた 19 世紀中頃に中心的研究者であった Burnouf 1826 は，語源は同じく√vā として extinction「消滅・消火」(火やランプが消えること)とするが，Skt. anupadhiśeṣa nirvāṇa「燃料の残余のない(無余依)涅槃」に論及し，この意味は「何にも個性が残らない虚無」であり，結局 annihilation「完全消滅」であると反論して(宮本 1985 p. 391), 消えてしまった火はブッダ世尊の死に喩えられると主張する(Welbon 1966 p. 308). 同様に Hilaire 1862 も nirvāṇa は absolute nothing「虚無」であると言及する(Welbon 1966 p. 309).

Veda において annihilation = 至福であると捉えられる中にあって，仏教が重用した nirvāṇa という語の含意に関しては，目指すべき境地でありながらもニヒリズム的に「消滅・ネガティブ・哲学的・推論的」と解釈すべきか，そうではなく「至福・ポジティブ・宗教的・実践的」と解釈すべきかを巡って，その後も長く論争が続くこととなる．

19 世紀後半: 涅槃には二種あることが議論に加わる

Childers 1875 の辞書はこの議論に決着をつけるべく，nirvāṇa の意味についてかなりの誌面を割いて説明する(s.v. nibbānaṃ: pp. 265 – 274). それによると涅槃の教

説に二種, 即ち,「生前 = bliss = 阿羅漢 = 熱望から自由になること(freedom from human passion)」および「その阿羅漢の死 = annihilation = 個人の存在の消滅」があることが指摘され, これらは, 相容れることのない異なる境涯を表す二種の涅槃として, Müller 1869 や Trübner 1871 等によっても記述されていると紹介する(p. 266). 但し, Müller 氏が annihilation「完全消滅」は後代のアビダルマ教学の説であり本来は bliss「至福」を意味すると解釈するのに対し, Childers 氏は, 二種の涅槃とも初期仏典に裏付けがあることを確認した上で, 真の涅槃は「存在の消滅」である命終時に得られるとして, Müller 氏の説に反論する(pp. 265 – 266). その解釈は, continued existence「存在の連続[輪廻]」は苦しみであり, その苦しみからの解放は, release from existence「存在からの解放」によってのみ獲得できるものであり, 阿羅漢は現に肉体の death「死」に至る故に, 涅槃の下での eternal「永遠」とはいえない(pp. 266 - 267).[49] そして, 涅槃に関する原典の様々な描写や同義語がある中でも nirodha「滅」を重視して, 涅槃の意味は annihilation of individual「個人[存在]の完全消滅」であると結論づけ, もう一つの涅槃である阿羅漢性は, そのための条件・約束として解釈することで, これら二種の涅槃がつながり, 矛盾は解消されると主張する(p. 267). さらに, これら二種の区別を明示する場合は, saupādisesanibbānaṃ「燃料の残余のある(有余依)涅槃」, anupādisesanibbānaṃ「燃料の残余のない(無余依)涅槃」が使用され, 両者の違いは five skandhas [Skt]「五蘊」の有無であると説明し, 経典中の諸用例をこれらのいずれかにあてはめて解説する(pp. 267f).

涅槃に関して生前と命終という 2 時点を認識するが, 真の涅槃は命終時に得られるとのこの Childers 氏の見解に対し, その後も二種涅槃を認めた上での涅槃の真の意味と時点に関する議論は続く. 例えば, T. W. Rhys Davids 1877 は, here and now「今ここで」憎しみや欲望や智慧のなさを消滅させることにより, 次の生存へと向かう法則が機能しなくなり, 死に際し, 生まれ変わりが起こらないと存命中を重視した見解を示す(Welbon 1966 pp. 312 - 313).

Oldenberg 1881 は, 世尊自身が修行完成者の死後についての質問には答えなかったこと(無記 [50])を根拠に, 涅槃に関する従来の annihilation「完全消滅」か supreme bliss「最高の無上の幸福」かという議論やその命題には意味がないと反論する(Welbon 1966 p. 313). 原典研究が進み, nirodha「滅」をもって虚無論に陥ってきたこれまでの研究傾向が是正され, 具体的には「〜の滅」であることが分かってき

[49] 同様の見解は Norman 1996 p. 19 や Harvey 1995 p. 249 にも見られ, 生前の涅槃は「一時的」であり, 出たり入ったりするものとの解釈を示す.

[50] 無記とは, 世尊が世界は永遠か有限か, 魂と肉体は同じものか, 如来は死後生じるか等の形而上学的命題には答えなかったことを言う(経典例としては, 十無記が説かれる MN I pp. 483 – 489 [72 経] Aggi-vacchagottasutta「アッギ・ヴァッチャゴッタ経」等).

たのがこの頃である(宮本 1985 p. 393).

20 世紀以降: 議論の活発化・多様化

20 世紀に入り, Schrader 1905, Heiler 1922, Beck 1919, 1920 や和辻哲郎 1927 もまたブッダ世尊の無記の立場を高く評価する論を展開するが, その中で Schrader 氏は「火が消えたようにと言われる涅槃は, 虚無になったのではなく, 目に見えない本来清浄なる火に帰ったのである」とし, また Heiler 氏は仏教の Versenkung「三昧」に実証される涅槃は, 神秘的至高善であるとして, 全ての宗教人が求める境地であり, ウパニシャッドの梵我一如と仏教の涅槃とは内容的に全く差別がないと結論づける(宮本 1985 pp. 395, 400).

Poussin 1898 は, 仏教をその背景であるインド宗教のヨーガの一種として位置づけ(Welbon 1966 p. 316), Oldenberg 氏の経典解釈とは異なる解釈を示して, 涅槃とは, 従来の見解通り annihilation「完全消滅」と考えてよいと主張する(Poussin 1917 p. 117). 但し, そのことを根拠に仏教を「厭世主義」と考えてきた先行研究(Childers 氏他)を否定し, それはつまり happy state of concentration「精神集中した幸福な状態」であると生前の境地として理解する(Poussin 1917 pp. 121 – 123). そして, 涅槃とは, 煩悩の火を鎮静化した聖人(阿羅漢)の sanctity, the state of a living Saint「神聖さ, 生きている聖人の状態」であり, また, the state of Saint after death「聖人の死後の状態」でもあるとするが, パーリ文献においては, いずれを表すかは明確でない場合があり(pp. 113 – 114), その理由として, 仏教は実践重視であるため, 形而上学的命題に関して世尊は答えなかったこと(pp. 126 - 127), および対機説法を行ったため矛盾を避けようとはしなかったことを挙げる(pp. 137 – 138).

Stcherbatsky 1927 は, Poussin 説の涅槃観を, ブッダが退けた Soul's immortality「魂の不滅」を信奉するものであるとして否定する. そして, nirvāṇa に Absolute「絶対」との英訳をあてて, 初期仏教の涅槃を「あらゆる現象存在の絶対的終焉」(pp. 2, 231)であるとした上でその涅槃観を随所に示すが, その主張は後の文献に依拠した部派や大乗の涅槃観の変遷を論及する立場からの見解であり, 初期仏典への配慮に欠けるものである(宮本 1985 pp. 396 – 397).

涅槃の時点について Eliot 1921 は, 死後に得られるものであるとはブッダは説いておらず, 努力精進してこの現実人生において達せられる安楽の境地であると表明する(宮本 1985 p. 386).

語根の問題

Rhys Davids および Stede によって 1925 に完成を見た PED p. 362, 366 において

は, 涅槃を表す nibbuta が nibbāna より古い形であるとして, その影響から nibbāna の語源に関しても√vṛ「覆う」をあてる. そこから「消えた, 止んだ」との解釈がなされ,「三毒の煩悩の火が消えた」意味に用いられ, それが「寂静, 清涼, 安穏, 安楽」とも表現される涅槃の境地であると解釈し,√vā「吹く」をあてたのでは, 火を煽ることになり適切ではないと主張する.

西洋におけるインド仏教の文献学的研究の流れを受けて, 本邦においても精力的に初期仏典の研究が進められてきたが, 前記 PED は日本の研究者の間で重要視され, 宮本 1985 p. 403 は「原始仏教研究に一応の締めくくりをつけた」辞書と称して, PED の説に同調する.[51]「それまで見られなかった新しい形容詞 nibbuto (安らかになった)が涅槃の境地に用いられた一番古い形である」と論じた上で, 仏教はウパニシャッド当時から見られる「もはや輪廻しない, この生死の生活に還ることはない」という「不再生」の記述をそのまま「悟りの基本型」とし, 現世における涅槃を「渇愛を滅して解脱した」状態と規定する(p. 374).

例外的な見解

Mrs. C. A. F. Rhys Davids 1936 は, nirvāṇa が annihilation「完全消滅」であるとの negativism「消極主義」は, パーリの伝承を世尊の滅後 500 年以降にまとめた出家僧侶たちによって作り出されたものであり, 仏教本来の目的は, ポジティブに人を向上させるものであるため, 人の関与がなく, 想像がつかず理解不可能である涅槃は人々の目標たりえず, もともとは精神修養の特定の段階として捉えられていたものとの見解を表す(Welbon 1966 p. 318). 涅槃を修行者の究極の目標と考えない点において他の研究者とは大きく異なる.

現世(生前)を重視する見解

Thomas 1933 は虚無説に反論を唱え, 涅槃は苦しみを滅するポジティブな実践道であるとする. そして, 涅槃の語彙が初期ウパニシャッドに見出されないことから, バラモン的な領域に起源をもつものではなく, 梵我一如には似ているがその思弁を無益であると退けたのがブッダであると分析する(宮本 1985 p. 404). そし

[51] 涅槃に関する研究をその興起から概観した Welbon 1966 pp. 323 – 324 も, √vṛ「覆う」を語源とする従来の√vā「吹く・消える」説への異論(PED p. 362)があることを挙げて, この問題が「完全消滅」か「至福」かという単純な問題だけではないことは誰しも認めることであり, 文献範囲や時期を限定した文献のさらなる解明が必要と結ぶ. 2010 年に刊行された Cone の辞書には語根は明記されていないが, nibbāna に記載された語義から√vā を想定していることがわかる(p. 580).

て Thomas 1948 は Childers 説を否定し, T. W. Rhys Davids 説を支持して, 経典テキストから裏付けられるのは個人の消滅ではなく今世での熱望の消滅であるとの考察結果を示す(Welbon 1966 p. 313). さらに Thomas 1947 pp. 294 – 295 は, それまでヨーロッパの学界において, Waldschmidt 1944 の「大般涅槃経」研究の功績等の影響から, 当時, 命終時に到達する涅槃を表すと解釈されてきた pari 付きの涅槃の語彙が, 目前の世尊(Sn 359 後述 2. 2. 3. 3.参照)や生きている人に使われている用例(SN IV p. 102 後述 2. 3. 2.参照)を挙げて, pari が付された涅槃の語彙に関する注意喚起を行った.

Conze 1962 も, 涅槃のポジティブな側面に注目し, 個人の extinction「消滅」はネガティブと捉える必要はないとして, 老いと死の「消滅」であり, nothing「無」である涅槃は, 思考の及ばない, 理解不可能なことと説明する(Welbon 1966 p. 321).

Rāhula 1962 は, 涅槃は自分で to see it, to realize it「見て覚ること」しかなく, 当初から議論されていた speculative discussions「推論による議論」から理解できるものではないこと, そして Skt.文献も含めて, 火が消える喩えは涅槃ではなく, 涅槃を得た者の五蘊として形成されたものが消えることをを指すと指摘する(Welbon 1966 p. 322).

消滅ではなく不可視化

Keith 1930 – 1932 および Renou and Filliozat 1953 は, 当初から言われてきた annihilation「完全消滅」を文字通りではなく an unmanifest, an unseen state「不可視化・見えない状態」への鎮静化であると捉え, 消火されたら炎は確認できないが存在するのと同様であるとして, √vā に由来する涅槃の原意についての関心を, 火が消えた・吹き消された後の coolness and calm「冷たさや静けさ」や visible to invisible「見えるから見えない」に移して議論する(Welbon 1966 pp. 322 - 323).[52]

上記同様に, 畑 2002 は, 如来の命終後に関して, DN I p. 46, II. 13 - 18「修行完成者の身体は存在へと導くものが断ち切られたまま, とどまっているのですよ. (筆者略)身体の崩壊により, 命が尽き果てた後は神々や人間たちはこれを見ないでしょう[畑訳]」を引用して「身体の崩壊後, 見えなくなる」(p. 42)までの言及であ

[52] 榎本 2012 p. 155 は火が消える喩えが『マハーバーラタ』Mbh 12 p. 180: Mokṣadharma の Bhṛgu の説に「霊魂(jīva)は死後も他の身体に赴き(yāti dehāntaram)存続し, その喩として, 薪が燃え尽きても火は虚空(ākāśa)に付き従い, 消滅する(pranaśyati)ことなく, 見えない(na dṛsyate)ままで存在している(san)と説かれる」ことを指摘する. 村上 1972 は, 死後にも存続する霊魂はパーリ聖典でも異見として知られるが,「それに対する仏教の立場は, そのいずれをも採用せず, また敢えて否定もしないが, しかもそれらの諸説の根拠をも知悉し, それらを超越した態度をとっている. 要するに原始仏教においては, ātman(霊魂)そのものは問題にされなかったようである」と解する.

り, 消滅するかどうかは問題にされず「不可視化を意味する」のが仏教の立場であると記す.

日本における研究の展開

日本にインド学仏教学の近代的研究の道をつけた高楠順次郎 1947 は, 燃料の残余のない涅槃は形式的にはブッダ世尊の死を指すとするが, nirvāṇa を Perfect Freedom「完全なる自由」と英語で表現し, 死後は invisible state「目に見えない状態」となるとして, 上記と同様の見解を示し, そしてさらにそのことは時空を超え「無住処涅槃」となることであるという大乗唯識の涅槃観へとつなげて論じる(宮本 1985 p. 408).

宇井 1936 は, 前述の Eliot 氏と同じく, 涅槃の実現はブッダに成ったこと(成仏), 即ち, 真の人たるを得たことであり, 生前に得るもので死とは関係ないと主張する. また燃料, つまり執着の有無による二種涅槃[界]の教説が興った背景として, ブッダ世尊の成仏こそ完全なる涅槃であるが, 世尊の滅後の弟子達にとっては, 修行しても煩悩の断尽が難しいため, 生前の有余依涅槃が考えられ, 無余依涅槃を来世証得とするようになったという, 時代の変遷による語義の多様化を指摘する(宮本 1985 p. 410). 二種涅槃[界]の解釈に関して, 渡邊 1961 p. 126 – 127 も同様に来世証得と解し, 有余涅槃は「不還」のことで, 死後天界へ生まれ無余涅槃を得ると解釈する.

そしてさらに, 命終の涅槃が pari を付した語で設定されたことに関して, pari が付された般涅槃を「完全な涅槃」, pari のない涅槃を「不完全な涅槃」と捉えるようになった思想展開が存在したとの指摘が, 宇井 1965 pp. 231 – 258 をはじめ複数の先行研究に示されるが,[53] 片山 2001 p. 467 は涅槃に完全・不完全の優劣の区別はないと反論する. 有余依涅槃[界]・無余依涅槃[界]は後代の教説であるとしてその原典 It pp. 38 – 39 を解説して, あたかも異なる二種の涅槃であるかのように誤解されているが, 二種涅槃界とも「漏尽者の涅槃の状態そのもの」であることに変わりなく,「いわゆる心身としての五蘊が保持されているかどうかの区別による呼称」にすぎず(pp. 467 - 469),「阿羅漢・漏尽者の死」といった言葉も考え方も成り立たないとの見解を示す(p. 462).

Norman 氏の見解

[53] この思想の展開に関しては, 並川 2005 pp. 102 – 108, 宮下 1989 pp. 30 – 35, 藤田 1988a pp. 272 – 286 参照.

上記 Thomas 氏に賛同し, Norman 1996 pp. 16 - 17 は nibbāna と parinibbāna が共に生きている人にも使われる点を挙げて, pari 付きの涅槃の語が命終を表すとの見解が広く認められる原因を DN II pp. pp. 72 – 168「大般涅槃経」であると指摘する. 並川 2008 p. 138 も同様に, その語義と用法の転換はゴータマ・ブッダの死が契機であったと推測する. そして Norman 1996 p. 25 は Gombrich 1971 に合意し, 涅槃とは「個人の存在や魂」ではなく「煩悩を吹き消すこと」であるとする. そして Norman 1991 p. 253 は, 涅槃を得た如来といってもブッダは見た目そのままであるため, 二種涅槃の考えが生まれたと説明する. 命終の涅槃において何が消えるのかに関して, Norman 1996 p. 15 は, khandha「[五]蘊」を消すことであると説明する(宮下 1989 p. 27, Ñāṇamoli 1975 p. 790 n. 72 等も同じ見解をとる). さらに命終後は再生しないのであるが, それを「個人存在の消滅」と見てしまうと世尊自身が退けた断滅論を支持することになり矛盾をきたすと説明する(p. 14).

Wynne 氏の見解

前記した通り khandha「[五]蘊」の滅という場合, 火が消える喩えとともに, 命終時に涅槃したことと理解する先行研究が複数ある中で, Wynne 2007 pp. 90 – 100, pp. 106 – 107 および Wynne 2011 p. 179 - 180 は, 従来の見解が後の伝統的テーラヴァーダ(上座部)教義に依拠した解釈であるとして, 初期仏典においては, 現世・生前における解脱者の meditation「瞑想」の状態として理解すべきであること, さらに質問者は命終後を意図して尋ねるが, 世尊の答えは生前の解脱・涅槃を示唆する内容であるという問答の誤解・食い違い(cross-purpose: Wynne 2007 p. 92; 99; 100; 107)が見られることを指摘して, これまでとは異なる論を展開する.[54]

藤田氏の見解

生前の涅槃に関して, 藤田 1988a p. 267 他は「成道の時」であり, それは「幾つかの同義語をもって」経典に描写されているとして「一切の形成作用の静まること, 一切の依着を捨て去ること, 愛執(渇愛)の滅尽, 離貪, 止滅, ニッバーナ」(SN I p. 136, etc. 藤田訳)等を挙げて, これらの併記語を同義語と解釈する. さらに, SN IV pp. 362 – 373 には 33 種の同義語が列挙されると紹介する(p. 269).

[54] Wynne 2011 は Collins 2010 の涅槃論を批判する書評であり, 具体的に Sn 1074 および MN I pp. 483 – 489 [72 経]を挙げて反論する(pp. 179 – 180). Sn 1074 を含む経には涅槃の語彙は現れないが, MN 72 経には aggi nibbuto「火が消えた」が出てくる. 問答の誤解・食い違いがあるのかどうか, Sn 1074 の検証および涅槃の語彙が現れる Sn Ch. 2 Vaṅgīsasutta「ヴァンギーサ経」を例として, 後述 3.にて論じる.

Thomas 氏の論文に呼応して，藤田 1988b は，日本における概説書や辞書においても同様に，nirvāṇa と parinirvāṇa の両語の関係について明確に記述がなされていないことを指摘し，涅槃の語彙について分析を行った結果を発表した．それによると，pari 付きの語彙は，最古層には現れないが，ほぼ同じ用法を示す abhinibbuta が出てくることから，同様に古くから，韻文・散文を問わず初期仏典において，nibbāna, nibbuta と全く同義で現世において解脱したことを表す文献上の事実を示し(pp. 2 – 5),[55] その上で「解脱者たちの死(p. 5)」が明記される具体例も挙げる(例: Sn 235; 346 他)．藤田 1988a pp. 273 – 274 は，涅槃[または般涅槃]が死と結びつけられるに至った理由として，これらの語が元来「消滅」を意味すること，そしてそれは，「火または火に譬えられる煩悩の消滅をさすが，広い意味では煩悩をもつ人間存在全体の消滅にも適用される語であった」といえるからであると指摘する．さらに藤田氏は「完全な解脱は身体の死をもって実現される」という当時の思想一般の動向とも結びつける．

榎本氏の見解

榎本 2012 p. 150 は，二種涅槃の観点から生前の涅槃において消える要素は「人間の中の煩悩である」と結論づけられるとする．そして解脱者の命終時に消える要素を，榎本氏は SN I p. 169 (7. 1. 9)を論拠として，解脱者の内部で自己(アートマン)の火が消えることであると，これまでにない見解を提示する(p. 155)．つまり，煩悩の火は覚りの時に消えたが，自己の中の火は命終まで燃え続けるということである．さらに，attan「自己」に関して，原文では attan に sudanto「よく御された」が付されていること，また attan は肯定的文脈で仏教経典でしばしば用いられること等から，絶対的なアートマンや霊魂を意味するものではなく，ここでの attan が無我説と矛盾するものではないと説明する(pp. 154 – 155).[56]

研究史のまとめ

上記に概観した研究史から，初期仏典の涅槃に関して多彩で複雑な論争が為されてきたことがわかる．古くから二種の涅槃を認知した上での議論が大半であるが，涅槃の語彙の意味や時点に関する議論も見られる．これらをまとめて以下に列挙すれば次の通りである．

---

[55] 同様に，先行研究やこれまでの翻訳においても，接頭辞 pari の有無によって涅槃の意味に相違は生じないとの理解が大半である(中村 1984, 荒牧・本庄・榎本 2015, 村上・及川 1986, Norman 2006, 並川 2008 pp. 129, 130 等).

[56] この点に関し榎本 2012 p. 159 n. 41 は「村上 1972 pp. 149 - 151 が既に指摘」と注記する．

- 涅槃の語彙に関する先行研究においては，全語彙をほぼ等しく同義で涅槃であると解釈する．
- 消える要素に関して，生前の涅槃は「煩悩の滅」であるとして従来の見解はほぼ一致しているが，命終時に関しては見解が分かれているところがあり，例として「五蘊の滅」とする見解,「煩悩を持つ人間存在全体の消滅」(藤田氏)等「個人存在の消滅」とみなす見解，アートマンの火が消えること(榎本氏)であるとする等の見解が見られる．
- 真の涅槃とは命終時に達成されるとの解釈に対し，真の涅槃は現世にて生前に得られるとする解釈もある．
- 初期仏典の後期に二種涅槃[界](生前は有余依涅槃[界]，命終は無余依涅槃[界])の教説[It pp. 38 – 39]が現れ(つまり，現世で煩悩を滅して有余依涅槃[界]に入り，五蘊を滅して無余依涅槃[界]に入ること)，その違いは五蘊・身体の有無であると解説するが，初期のテキストから同様の二種の涅槃が認められるとの前提で考察を行う研究が大半である．
  注: 文字通り涅槃に二種あるとみる考え方と，二種涅槃といっても涅槃の内容自体に違いはなく，違いは五蘊の有無だけであり，肉体の死は涅槃とは関係ないとみる見解(片山)がある．
- 時代層による変遷を認める見解．
  最古層では涅槃は現世・生前で得るものであり，古層からこの世で涅槃を得た者の「死」を表す用例も見られるようになり，散文では pari が付された涅槃の語彙が「完全な涅槃」として「死」を示す傾向が一層強くなる(藤田氏，並川氏)．

Sn 中の涅槃の語彙に関して

筆者が基本資料とする Sn 中の涅槃について，二種涅槃の視点から分析した藤田 1988b は，ほぼ註釈の理解に倣い，多くの用例は生前の涅槃を示唆するが，Sn 235: nibbanti および Sn 346 = Th 1266 は解脱者[達]の「死」を意味するとの見解である(p. 5)．また Sn 765 については，註釈は両義挙げて説明するが，藤田氏は判断できない(p. 7)と解釈する．その一方，並川 2008 pp. 126 - 129 は Sn 全用例において，生前の涅槃であるとの考察結果を示す．

2. 初期仏典中の涅槃の語彙の分析

ここでは, 先学の成果による文献の層分け(前述序論 pp. 3 - 4 参照)を有意的な仮説として利用して, 涅槃の語彙の用例を収集し考察する. 2. 1.では最古層, 2. 2.では古層, 2. 3.では散文, そして 2. 4.では註釈文献を取り上げる. Sn を中心としつつ, その他の初期仏典についても検討する. なお, 比較の意味で, 涅槃の語彙に註釈が付されている場合には, その解釈を各用例ごと簡潔に示す.

Sn の用例について

全 51 用例あり, 偈文(韻文)が大半の 46 例を占め, 散文に 5 例ある. 語形による内訳は, 名詞形が計 21 例: nibbāna: 17 例, nibbuti: 3 例, parinibbānagata: 1 例; 定動詞形が計 5 例: nibbāti 2 例(nibbāti, nibbanti), parinibbāti 1 例(parinibbanti), parinibbāyati 2 例(nibbāyi, parinibbaye); PP が計 25 例: nibbuta: 6 例, parinibbuta: 13 例, abhinibbuta: 6 例である.

2.1. 最古層

該当用例は 16 例ある. 名詞形 nibbāna が最も多く, 複合語を含めて 9 例ある. nibbuti は 2 例, PP nibbuta は 4 例, 定動詞 pres. ind. nibbāti が 1 例である.[57] まず nibbāna の用例を検討する. その次に nibbuta, そして nibbuti の用例を考察する. これらの語彙の定義づけ(nibbāna: Sn 1094; 1109, nibbānapada: Sn 1086, nibbuti: Sn 933)が, 最古層にのみ見出せる.

2.1.1. nibbāna

2.1.1.1. nibbāna の用例

nibbbāna の定義

まず「nibbāna とは～である」と定義づける記述がなされる Sn 1094 および Sn 1109 を見てみよう.

[57] Sn 中の涅槃の語彙の全用例は, 最古層・古層の順に列挙した付録 1, 2 を参照のこと. 付録 1 は涅槃の語彙と考察結果を端的にリストにしたものである. 付録 2 には, 該当用例の経の概要, 経中の用例の原語と和訳, パラレルの有無, 註釈の解説の原語と和訳を示す.

① Sn 1094: akiñcana anādāna「所有しないこと，取り込まないこと」, dīpa anāpara「更なる渡り先(避難所)を持たない島」, jarāmaccuparikkhaya「老いと死の滅尽」

Ch. 5: Kappamāṇavapucchā「バラモン学生カッパの質問経」Sn 1094 に，次のように定義づけされる．

Sn 1094 akiñcanaṃ anādānaṃ etaṃ dīpaṃ anāparaṃ,
nibbānaṃ iti naṃ brūmi, jarāmaccuparikkhayaṃ.
何も所有しないこと，取り込まないこと，これが更なる(≒ より良い)渡り先(避難所)を持たない島である．それを nibbāna と[私は]言う．[それ(nibbāna)は,] 老いと死の滅尽である．

ここでは nibbāna の原意である「[火が]消えること」が直接表出しているとはいえないが，いくつかの「ない」要素が示されている．涅槃の定義と位置付けられる「何も所有しないこと，取り込まないこと」,「更なる(≒ より良い)渡り先(避難所)を持たない島」,「老いと死の滅尽」とは，初期仏典において何を意味するのであろうか．[58]

---

[58] 涅槃を定義づける akiñcana「所有しないこと」, jarāmaccuparikkhaya「老死の滅尽」(本偈 Sn 1094)および taṇhāya vippahānena「渇愛の捨離によって」(下記 Sn 1109)と関連する語が，最古層 Ch. 5: Mettagūmāṇavapuccā「バラモン学生メッタグーの質問経」の結びの 2 偈に現れる(本経に涅槃の語彙は出てこない):

Sn 1059 yaṃ brāhmaṇaṃ vedaguṃ [Be: vedagum] ābhijaññā* [Se: abhijaññaṃ]
akiñcanaṃ kāmabhave asattaṃ,
addhā hi so ogham imaṃ atāri,
tiṇṇo ca pāraṃ akhilo akaṃkho, [Se: akaṅkho]
ヴェーダに精通した者で，何も所有しておらず，諸々の欲望の対象と生存に執着しないバラモンであると[君が]理解するならば，
そういう人は確かにこの激流を渡った．
頑固でなく，欲望がない者として向こう側へと渡っている．
[*a 句 ābhijaññā は，韻律 Triṣṭubh のカデンツであるため，abhi が ābhi と「長」となっている(Oberlies 2001 p. 36 sec. 6. 4.参照)]

Sn 1060 vidvā ca so vedagu [Be; Se: vedagū] naro idha,
bhavābhave saṅgam imaṃ visajja
so vītataṇho anigho [Be: anīgho] nirāso,
atāri so jātijaran ti brūmī [ti].
そして諸々の生存に対するこの執着を捨てて
彼は，今ここにおいて，知者であり，ヴェーダの達人である．
そういう彼は渇愛を離れており，怒りがなく，願望がない．
そういう人は生老を渡ったと[私は]言う．

akiñcanaṃ「何も所有しないこと」が，注記した最古層 Sn 1059; 1060 では現世の世尊を表現する語として使用される．この場合この語は，「欲望の対象[59]や生存に対する執着がない」「渇愛から離れている」「怒りがない」「願望がない」とも同時に形容される，知者・ヴェーダの達人・[真の]バラモンの属性の一つである．古層 Sn 455[60]においても，あるバラモンから素性を尋ねられた世尊が，自分は何者でもなく，何も所有していないと答える．このように，この語は，家や財産の所有は言うまでもなく，その人の世俗的立場や内面的な障りをも所有していないことを示唆する可能性がある．但しこの語には，禅定の一段階とされる「無所有」の意味もあり，[61] この語の使用だけで直ちに修行完成者や涅槃を意味するとまでは言えない．実際，古層 Th 36 には，聞き実践すること，家のないこと等が「何も所有していない者の沙門たることである」(sāmaññam akiñcanassa)とあり，akiñcana が出家した状態を一般的に示す可能性もある．

また akiñcanaṃ は，ここ以外にも anādānaṃ「取り込まないこと」と併記される場合もあり(例: Sn 620 = Dhp 396, Sn 645 = Dhp 421)，[62] これら両語で，欲望や煩悩等が既になく，それ以上障りとなる一切を取り込むこともない，つまり煩悩を滅して取著がない状態を示唆する．ā-√dā「取り込む」ことの否定である「取り込まないこと」を表す語は，しばしば涅槃の語彙とともに使用される．同じく最古層 Sn 915 で anupādiyāno「取り込むことなく」が nibbāti にかかる表現があり，近似性が認められる．他の時代層(例: 古層: Sn 638; MN I p. 187G，散文 MN p. 148)については後述 2.にて議論する．

涅槃の語彙とともに使用されるという点からみると，「何も所有しないこと」は Sn 1094 のみであるため，涅槃との結びつきは「取り込まないこと」を表す語のほ

Sn 1059 までのこの経の文脈から(ここでは原文は省略する．Sn 1049 でメッタグーが世尊のことを vedagū と称することも然り)，両偈の世尊の言葉は 3 人称で語られているが，世尊自身のことである．現に説法している世尊について，何も所有しておらず，知者であり，既に渇愛を離れており，生老を渡った者であると説く．煩悩や執着がないこと，および，生死・輪廻を超越すること，または(実質的な生老死の停止・超越は肉体が滅ぶ時に可能となるので)それが出来る段階に達したことが現世で達成できることであることの傍証となる内容である．

[59] 古層 Dhp 88 では hitvā kāme akiñcano「諸々の欲望の対象を捨てて，何も所有していない」と paṇḍito「聡明なる者」の状態を言う．

[60] Ch. 3: Sundarikabhāradvājasutta「スンダリカバーラドヴァージャ経」．涅槃の語彙が出てくるため，後述 2. 2. 3. 2.にて検討する．

[61] 最古層 Ch. 5: Upasīvamāṇavapucchā「バラモン学生ウパシーヴァの質問経」Sn 1070; 1071; 1072: ākiñcaññaṃ. Be に akiñcana ともあり，抽象化された同義の語である．この経では「無所有を意識して見る」「無所有に依りかかる」等，禅定の文脈で現れる．

[62] 冒頭に散文があり韻文が続く Sn Ch. 3: Vāseṭṭhasutta「ヴァーセッタ経」である．本経の偈文の多くが古層 Dhp: Brāhmaṇavagga「バラモンの章」にも出てくる．本経には，nibbuta が 2 回出てくるため(Sn 630; 638)，後述 2. 2. 3. 1.にて検討する．

うがより強いといえるであろう. 但し,「何も所有しないこと」に代わり,「煩悩の滅」に関する言及が涅槃の語彙とともにより多く用いられる.

dīpaṃ anāparaṃ とは, もはやこれより先に渡って身を寄せるべき島のない島, つまり最高の場所(避難所)のことである. 本偈は, 本経の冒頭偈(Sn 1092)において,「師よ, 大いなる恐怖である激流が生じた時, 老と死に襲われた人々にとっての島(避難所)について話して下さい」(oghe jāte mahabbhaye jarāmaccuparetānaṃ dīpaṃ pabrūhi mārisa)とカッパに請われた世尊の答えを成しており,「島」が難から逃れ, 身を寄せる場所・避難所を意味するのは明らかである.[63] 本偈以外で涅槃の語彙とこの語がともに現れる例は初期仏典中に見出せないが, 後の時代層になると nibbānadhātu「涅槃界」との表現が現れ, 領域や場所を示唆する語で涅槃を表すことにつながる概念であるといえる. また Sn には用いられないが, 古層文献では, sukha「安楽」という救護所とも称されるようになる.[64]

「老いと死の滅尽」は, 実際には物理的に見て老いて死ぬ訳であるから, 注記した通り,[65] 老いと死に縛られている状態を脱することである. それは具体的に輪廻・再生を止めることに他ならないが, それが(1)命終の後, つまり次生(以降)のことだけなのか, あるいは(2)今生でのことも含むのかは分からない. (2)の場合, 今世での老死や死・再生の滅尽は, それらに影響されない = それらを超越する, 等の意味に解されよう. nibbāna の時点は, これらの違いに応じて, (1)であれば命終となり, (2)であれば生前と判断され得よう. 文脈から(2)と判断される用例も見出せる(例: 注記した Sn 1060; 下記 Sn 1095 等).

上記の議論に関して, 本偈を受けた次の偈では, diṭṭhadhammābhinibbuta「現世において／ダルマを見て abhinibbuta している人」が出てくる. PP nibbuta については別途その意味を検討するが, ここでは nibbāna の定義を受けてこの語が用いられるため, 従来言われてきた nibbuta = nir-√vā の PP である可能性を簡単に考察する.

Sn 1095 etad aññāya ye satā diṭṭhadhammābhinibbutā,
na te Māra-vasānugā, na te Mārassa paddhagū"[66] ti

---

[63] このことは, 古層 Dhp 25 に,「賢明なる者は, 激流が圧倒することのない島を作れ」(dīpaṃ kayirātha medhāvī yaṃ ogho nābhikīrati)との描写があることからもいえる.

[64] 例えば, Thī 476 では devesu pi attāṇaṃ nibbānasukhā paraṃ n'atthi「神々の中にも救護所(tāṇa)はなく, nibbāna という安楽の他には[救護所は]ない」と, 救護所として語られる.

[65] 古層 Thī 493-cd 句に jarāmaraṇe が出てくる. 最古層本偈の jarāmaccu に相当する語であるため, 参考までに以下に記す:

anubandhe jarāmaraṇe tassa ghātāya ghaṭitabbaṃ
老いと死に縛られている時, それをたたき出すことに努めるべきだ

[66] Se: paṭṭhagū. この語は pra√sthā [standing near, attending] PED p. 402). paddhagū: going, servant (PED p. 410). この語は pra-adhvaga: traveling (MW p. 24).

このことを理解した後, 留意していて,
現世において／ダルマ(真理・法則性)を見て abhinibbuta している人々,
彼らは, 死魔の支配下にあるのでなく, 彼らは, 死魔の召使ではない.

diṭṭhadhammābhinibbutā の diṭṭhadhamma は一般的には「現世」を表す語であり,「ダルマを見て」と解釈する場合でも「彼ら」の現状を表すため, nibbuta = nir-√vā の PP とすれば, 複合語全体は現世・生前において涅槃した状態を言っていると理解できる.[67] なお, 最古層には PP が他にも 3 例あり [Sn 783: abhinibbutatto; 1041: nibbuto; 1087: diṭṭhadhammābhinibbutā], いずれも文脈は現世・生前のことである.

すると ab 句全体は「これ(以上[nibbāna]のこと)を理解して(aññāya), 留意して[忘れず](satā), かつ現世において涅槃している人達」となる. わざわざこう言うことの背景には, 涅槃とは死に伴う・死後の問題という意識があった可能性がある. またその際, 前偈の「老いと死の滅尽」の類似句である cd 句は, 今現在, 生きている彼らは, 実際には老いと死は避けられないにもかかわらず「死魔の支配下にあるのでなく, 死魔の召使でもない」と理解され, 前偈 cd 句の議論で示した現世・生前を含む(2)の解釈(今世においても死に影響されない = それを超越する)が可能である.

しかしだからと言って, 前偈も同様に現世・生前のことに言及していると結論付けることはできない. 上記のように, 本偈が「現世」を特別に表現しているとすれば, そうした条件無しの涅槃は一般に命終時と考えられていた可能性があるからである. その一方で, 涅槃(した人)と老死との関係性に言及しているという点で, 前偈と本偈が内容的に並行的・連続的であることは, nibbuta が =nir-√vā の PP として使われていることを強く支持しよう.

但し, PP nibbuta の意味に関しては各層ごとの用例検討[後述最古層 2. 1. 2., 古層 2. 2. 3., 散文 2. 3. 3.等, 語根・原意の議論については前述 1. 1. 4.参照]をもって, 総合的に判断する必要がある.

diṭṭhadhamma は術語として「現世」と訳されることが多いが, この語は「現世で」と訳さずとも, 文字通りに「実際そのダルマを見て(≒ 知って, 会得して 涅槃を得た人」とも訳すことができる.[68]

なお, 本論においては, 上記の通り, 同じ経に複数の涅槃の語彙が出てくる場

[67] abhi は, 通常 acc.を支配する接頭辞であり, 副詞的に「〜に対して,・〜に向かって」と「可能・勝っている」という意味がある. しかし, 本用例ではこの本来の「〜に向かって」の意味は表出していないといえる.

[68] 別用例 Sn 1087 の註釈 Pj II p. 596 にはその裏づけとなる同様の説明がなされる(後述 4. 1.参照). 参考までに記すと, 並川 2005 p. 68 は, Sn 1097: diṭṭhadhammābhinibbutā を「現世において涅槃した人々」, 村上・及川 1989 VI p. 121 は, 「現実に涅槃に入った」, 中村 1984 p. 229 は,「現世において全く煩いを離れた人々」と和訳している.

合には, 一緒に考察する. 何故なら, 経の文脈によって涅槃の語彙の意味を理解する必要があるからである.

② Sn 1109: taṇhāya vippahānena nibbānaṃ「渇愛の捨離によって nibbāna」

もう 1 偈, nibbāna の定義に準ずる用例が Ch. 5: Udayamāṇavapucchā「バラモン学生ウダヤの質問経」Sn 1109 にある.[69] 上記同様, nibbāna の原意である火が消えることは表出せず, さらに上記定義づけとは内容が異なり, 捨てる要素として taṇhā「渇愛」が nibbāna と結び付けられる.

Sn 1109 nandīsaṃyojano[70] loko, vitakk' assa vicāraṇā,
taṇhāya vippahānena nibbānaṃ iti vuccati.
世間は喜びを束縛とする. 思いめぐらしが, それ(世間の人々)を, あちこち動かしている. 渇愛の捨離によって nibbāna と言われる.

ここでは煩悩にあたる「渇愛」を捨てることが inst.で(vippahānena) nibbāna と言われるのための中核的要素・最大の特徴として表される.

涅槃の定義として先行研究においてよく引用される散文 SN IV pp. 251, 261[71]では, 述語名詞構文によって, rāga「熱望」, dosa「憎しみ」, moha「迷妄」という 3 種の煩悩(「三毒の煩悩」と言われる)の滅が涅槃と定義される. 本偈の taṇhā「渇愛」も, 一般的に煩悩(kilesa)と総称される語の一つであり, SN IV pp. 251, 261 に対応する類似表現である.

この Sn 1109 同様, Sn 916 cd-句で yā kāci taṇhā ajjhattaṃ, tāsaṃ vinayā sadā sato sikkhe「いかなる渇愛が内心に[生じようとも], それら[渇愛の]除去のため,[72] 常に留意している者 [73]として学ぶ(修行する)べきである」と世尊が語る場面があり,[74] 「渇愛の除去」つまり煩悩を滅することが涅槃を得るためには必須であることを

---

[69] 本経は, 7 偈からなるウダヤという名のバラモン学生と世尊の問答である.
[70] Be: nandisaṃyojano, Se: nandisaññojano.
[71] rāgakkhayo dosakkhayo mohakkhayo idaṃ vuccati nibbānanti「熱望の滅, 憎しみの滅, 迷妄の滅, これが nibbāna [nt. nom.: nibbānaṃ]と言われる」.
[72] vinaya「除去」[vi√nī]の abl.の形であるが, 註釈 Pj II p. 562 が参照する経典テキスト vinayāya [dat.]として和訳した.
[73] 本偈 Sn 916 では sata である人は学ぶべきことがある人とここで説かれるため, いまだ有学であり修行完成者ではないことを意味する. sadā sato sikkhe は同経 Sn 933 にも出てくる. これに比べて, 同じく最古層 Sn 1041: nibbuto の併記表現として現れる sadā sato は涅槃している人の属性として使われる(下記 2. 1. 2.参照).
[74] Ch. 4: Tuvaṭakasutta「迅速経」である. 本経には涅槃の語彙 nibbuti が出てくるため後述にて論じる(2. 1. 3.参照).

表す.

その時点について従来より, 煩悩の滅はその者が生きている間に達成されるものであり, それ故, 生前の涅槃であると解釈されているが(榎本 2012 p. 150 他), 本偈 Sn 1109 の nibbāna の時点に関しては, ab 句の文脈が現世のことであるため, 続く cd 句も同じく nibbāna が現世でのことである可能性はあるが, しかし本偈だけからその時点を断言することはできない. なぜなら, 上記の inst.の理解によって, vippahāna の時点と nibbāna の時点とが必ずしも同一である必然性は無いからである. つまり, 生前に vippahāna が為されていれば命終時に涅槃に到達する, との解釈も成り立つからである.

筆者のこの考察結果は, 生前の涅槃と解釈する註釈家の見解(下記参照)とは異なる. 本研究における考察結果は, 経典内容のみからの判断によるものであり, 註釈の解釈は加味していない.

≪註釈: 生前の涅槃≫

本偈 nibbāna について註釈は説明をしていないが, 本経他偈 Sn 1107 の註釈 Pj II p. 600 は avijjāppabheda「無知を裂くこと」が nibbāna と定義され, aññāvimokha「理解による解放(解脱)」が nibbāna によって生じたと説明する. これは阿羅漢の境地の解脱を指すため, 本注釈の nibbāna の時点は生前であるといえる.

nibbāna attano「自らの涅槃」

nibbāna attano「自らの涅槃」という表現が, 最古層 Ch. 4: Attadaṇḍasutta「取られた棒経」Sn 940 および Ch. 5: Dhotakamāṇavapucchā「バラモン学生ドータカの質問経」Sn 1061, 1062 に 3 例見出せる. Sn では最古層にのみ現れる. 他層の用例では, 古層 Ud p. 28 偈文のみで, 散文には現れない. 以下に具体的に示す.

Ch. 4: Attadaṇḍasutta

本経は, 対立しあい, 世間に繋がれている人々を見て怖れを感じ, 人はどうあるべきかが説かれる. Sn 940 は, 世尊が世間の有り様を解説した後の偈文である. また最終偈 Sn 954 では寡黙の聖者は主張しないと結ぶ.

Sn 940　tattha sikkhānugīyanti:[75]

[75] 荒牧 1985 p. 9 は, この a 句を anu √gā (暗唱する)を踏まえ「散文の序詞による導入部分」とし,「Sn 945 を除く, Sn 940 – 947 が佛弟子による附加部分に相当する」と考える. Norman 2006 p. 363 は,「reciter への指示が本文に挿入されたもの」と看做すが,「非常に古い句」と

yāni loke gathitāni,[76] na tesu pasuto siyā,
nibbijjha[77] sabbaso kāme sikkhe nibbānam attano.
そこで, 諸々の学習が暗唱される.
世間に結び付けられている諸物, それらに対して
追い求める者であるべきでない. 欲望をあらゆる面から洞察して,
自らの nibbāna を学ぶべきである.

世俗の執着や欲望をよく理解して, 自らの nibbāna を学ぶべきとあるが, 原意「火が消える」の考察で示した通り(前述 1. 3.参照), gen.の attan は, 自分自身が消えることと理解すべきでなく, 自身の[火的要素]が消えることと解すべきである. しかしながら, 消えるべき要素は示されておらず, 涅槃の時点・内容とも明らかではない.

attan「自己」が複合語の後分である abhinibbutatta の用例検討において, 註釈家が-atta を-citta に言い換えて, attan の使用を避けていたことが示される(後述 4. 1.参照). 従って, この「自らの涅槃」という表現は限定的で古い用法であると思われる.

本経 Sn 942 には nibbānamanasa が出てくるが, nibbāna を伴う複合語の一つとして下記 2. 1. 1. 2.にて取り上げる.

Ch. 5: Dhotakamāṇavapucchā

本経は,「自らの nibbāna を」学びたい(Sn 1061 以下参照)というバラモン学生ドータカとの問答である. 世尊は, 私の教えを聞いて, 賢明な留意した者として熱心に学べ(下記 Sn 1062)と語り始め, 次に,「君に鎮まり(santi: Sn 1066)について告げよう」と,「次々の生存に対して渇愛を作るな」(bhavābhavāya mā kāsi taṇhan: Sn 1068)と説く.

Sn 1061 pucchāmi taṃ Bhagavā, brūhi me taṃ,
icc-āyasmā Dhotako
vācābhikaṃkhāmi mahesi tuyhaṃ:
tava sutvāna nigghosaṃ sikkhe nibbānam attano.
尊者ドータカが[言う].
「世尊よ, 君に尋ねます. 私にそのことを言って下さい.

記述. 漢文パラレル『義足経』巻下(『大正』4, 189 中)にはこれにあたるものなし.
[76] Be; Se: gadhitāni.
[77] Se: nibbijja.

君の言葉を[私は]待ち望みます, 偉大なる聖仙よ,
君の発声を聞けば, 自らの nibbāna を学ぶことができる」

Sn 1062 tena h' ātappaṃ karohi,
Dotakā ti Bhagavā
idh' eva nipako sato
ito sutvāna nigghosaṃ sikkhe nibbānam attano.
「ドータカよ」と世尊が[言う].「それでは, 熱心さを作りなさい.
他ならぬ今ここで, 賢明な留意した者として, ここから(この私から)
声を聞いて, [君は]／[人は]自らの nibbāna を学ぶべきである」

本経も前述の用例同様に「自らの nibbāna を」学ぶべきと語り, そのために熱心に, 留意して, 世尊の説法を聞く必要があると説く. ここでも涅槃は学ぶ対象であり, 目標であり, その時点・内容とも明らかではない.

≪註釈: 生前の涅槃≫
Sn 1061 の註釈 Pj II p. 592 は, 自らの nibbāna を「自分の熱望などが消えること」と説明する. Sn 1062 の註釈はなし.

2.1.1.2. nibbāna を伴う複合語

nibbānapada

Sn 1086: chandarāgavinodana「欲求や熱望の除去」

nibbānapada の定義が, Ch. 5: Hemakamāṇavapucchā「バラモン学生ヘーマカの質問経」Sn 1086 に示される. 本経は上記 Kappamāṇavapucchā 経と同様に 4 偈からなる短い経であり構造も似ている. 定義の後に diṭṭhadhammābhinibbuta が使用される.

Sn 1086 idha diṭṭhasutamutaviññātesu[78] piyarūpesu Hemaka
chandarāgavinodanaṃ nibbānapadam accutaṃ.
ヘーマカよ, この世において見られたり, 聞かれたり, 考えられたり,
認識されたりした諸々の好ましい姿・形をしたものたちに対する
欲求や熱望の除去が, 不動の nibbāna の境地／への足場である.

[78] Se: diṭṭhasutamutaṃ viññātesu.

「欲求や熱望の除去」は上記 Sn 1109 の「渇愛の捨離」と同様の概念と思われ，欲求や熱望や渇愛はいわゆる煩悩に総称される要素である．

pada [Skt.: pada]は，√pad「踏み込む」から派生しており，文字通り「足」「足跡」「歩」(古層 Sn 83; 690: dipada「二本足のもの→人間」)[79]から，関連する「足場」「[梯子の]段」「[修行の]道」等，そして「在り方」「境地」等まで，幅広い意味があてられる語である．本偈の nibbānapadam に関しては従来より「涅槃の境地」との意味で翻訳されているが，[80]「踏み込む」という原意に即して厳密に解釈すると，nibbāna への足掛かり・前提・条件を意味する可能性があることを指摘しておきたい．本偈において①境地と②足場の二つの可能性のいずれが妥当であるか判断はつけられない．-pada をどう理解すべきはさらに他の用例を検討する．[81] 古層 Sn 204 の nibbāna-padaṃ に関しては，「不死，鎮まり，不動」と同格として併記されることから，「涅槃の境地」との理解がより適していると判断される(後述 2. 2. 2. 3.参照)．また，nibbāna の時点については，Sn 1086 の文脈は現世であるが，決定できない．

nibbānapada を受けた Sn 1087 で diṭṭhadhammābhinibbutā が，tiṇṇā loke visattikan「世間において執着している渇望を超えた[人々である]」と同じ人々の属性とされる．

Sn 1087 etad aññāya ye satā diṭṭhadhammābhinibbutā,
upasantā ca te sadā,[82] tiṇṇā loke visattikan" ti.
このことを理解した後，留意していて，
現世において／ダルマ(真理・法則性)を見て abhinibbuta している人々，
そういう彼らは常に鎮まっていて，世間において執着している渇望 [83]を越えた人々である，と．

文脈より，diṭṭhadhammābhinibbutā の時点は生前である．この複合語の abhinibbuta

[79] 他に「語」「句」「文」「ことば」等の意味もある(PED p. 408). Skt.の辞書においても意味の一つに Tritt/Schritt「一歩・踏み台」との意味があてられているが，踏み台・足場を表す用例は示されていない(PW VI p. 445).
[80] 村上・及川 1989 p. 121. 他には Norman 2006 p. 132: state of quenching，中村 1984 p. 229:「ニルヴァーナの境地」等.
[81] 最古層の他偈には nibbānapada の用例はなく，Sn 915 に santipada が出てくるが，考察の結果「境地」が示唆される(下記 2. 1. 3.参照).
[82] Se: satā.
[83] visattikā は taṇhā と同義(PED p. 639 参照)．本偈 d 句のこの表現が，古層 SN I p. 1 において parinibbuta である人とされ，世尊を表す．本件については，後述 2. 2. 3. 3.にて論じる．

の内容は具体的に示されていないが，併記される tiṇṇa は√tṛ「渡る」の PP であることから，これらの人達は既に渇望を渡っている(超えている)と理解できる．これは前述 Sn 1109 に示された「渇望の捨離」という涅槃の中核的要素を満たしている人達ともいえよう．また，前偈の nibbānapadam の-pada の解釈がいずれであれ, nibbāna を受けての nibbuta であり，前記した Sn 1095 同様, nibbuta が nir-√vā の PP として用いられていることが支持され,「現世において既に涅槃した[状態である]人々である」との解釈が可能であろう．但し，ここでは煩悩の滅に関する内容のみが語られ，生死・輪廻の超越に関する内容については語られない点において，Sn 1094; 1095 とは相違がみられる．

≪註釈: 生前の涅槃≫

Sn 1086, 1087 の註釈 Pj II p. 596 は nibbānapada は禅定によって理解できることであり，「熱望などが消えることによって abhinibbuta (涅槃)している人々」と，生前の涅槃と解釈する．

nibbānasantike[84]

Sn 822 vivekaṃ yeva[85] sikketha, etad ariyānam uttamaṃ,
tena seṭṭho na[86] maññetha, sa ve nibbānasantike.
他ならぬ遠離を学べ．これが立派な人達の最上のものである．
それによって，優れていると考えるな．そういう者は，
nibbāna の近くにいるのだ．

nibbāna の近くにいる人は現世に生きる人のことであるが, nibbāna の時点・内容は不明である．

nibbānamanasa

Sn 942 niddaṃ tandiṃ sahe thīnaṃ, pamādena na saṃvase,
atimāne na tiṭṭheyya nibbānamanaso naro.
nibbāna-に思考力を向けている人は，眠気や身体的なだるさや沈鬱に打ち

[84] Ch. 4: Tissametteyyasuttaṃ「ティッサ・メッテーヤ経」は，冒頭偈で性の歓び(methuna)の害について，ティッサ・メッテーヤ尊者が質問し(Sn 814)，世尊は，かつて独りで修行に励んでいたものが性の喜びにふけることの災い(Sn 815)やあるべき姿を説く．
[85] Be; Se: vivekaññeva.
[86] Be: na tena seṭṭho.

勝つべきである. うつつを抜かし, 油断とともに住むべきでない.
過度の慢心に留まるべきでない.

nibbānamanaso は初期仏典中, 他に用例がなく,「涅槃に思考力を向けている人」と解した.[87] この人は現世に生きる人であり, 本偈には涅槃を目指す修行者のあるべき姿が説かれているが, 本複合語中の nibbāna の時点・内容となると不明と判断せざるを得ない.

2.1.2. nibbuta

次に nibbuta の用例を見ていきたい. 最古層には nibbuta が 1 例(Sn 1041), abhinibbutatta が 1 例(Sn 783), そして diṭṭhadhammābhinibbuta が 2 例(前記 Sn 1087; 1095)である.

Sn 1041: nibbuta

Ch. 5: Tissametteyyamāṇavapucchā「バラモン学生ティッサ・メッテーヤの質問経」は 3 偈からなる短い経である. nibbuto は世尊の言葉の中に出てくる.

Sn 1041 kāmesu brahmacariyavā
Metteyyā ti Bhagavā
vītataṇho sadā sato
saṃkhāya nibbuto bhikkhu, tassa no santi iñjitā
「メッテーヤよ」と世尊が[言う].
「諸々の欲望の対象に関して(の中にあって)禁欲の修行を保っていて,
渇愛を離れ, 常に留意している者であり, 完全に考察してはじめて
nibbuta である托鉢修行者[がいる]. そういう者には動揺が存在しない」

「禁欲の修行を保っていて」「動揺が存在しない」「常に留意している者」とは, nibbuta である托鉢修行者の現世での状態である.

nibbuto の内容には直接言及されず明確ではないが, nibbuta である托鉢修行者の属性として「諸々の欲望の対象に関して(の中にあって)禁欲の修行を保っていて」「既に渇愛を離れていて」「常に留意している状態である」が併記されている. 渇

[87] 註釈 Pj II p. 567 では nibbāna についての説明はなく, nibbānaninnacitto「nibbāna へと傾く心を持った」と citta に言い換える.

愛を離れている点において Sn 1109 の「渇愛の捨離によって nibbāna と言われる」に通じる内容であり，この涅槃の重要な要素を満たした者であることを本偈 vītataṇho は示唆するといえる．このことから，本偈の托鉢修行者の nibbuta である状態が，nibbuta が nir-√vā の PP であることが支持され，またここではこれが，現世で既に涅槃した人である可能性が導かれる．[88]

≪註釈: 生前の涅槃≫

Sn 1041 の註釈 Pj II p. 589 は「熱望などが消えることによって涅槃している」(rāgādinibbānena nibbuto)と説明する．

Sn 783: abhinibbutatta

abhinibbutatta は接頭語 abhi が付された nibbuta に後分 attan [Skt. ātman](自己・自我・霊魂)が付され-a 語幹化した形であり，この語をどう理解するかは未だ確定していない．先学では文献資料をもってあまり論じられることなく，単に abhinibbuta は parinibbuta とほぼ同義で同じ用法であるとされてきた(藤田 1988b pp. 3, 5; 並川 2005 pp. 96, 97).[89] 筆者は管見の限り先行研究において詳細検討がなされていないこの abhinibbuta に注目し，散文経典には用いられず，最古層と古層の韻文にのみ現れる abhinibbutatta および diṭṭhadhammābhinibbuta の初期仏典中の全用例を本研究において考察する．[90]

Sn 783 の検討に入る前に，-attan に関する先行研究を端的に紹介しておく．

<u>-attan に関するこれまでの見解</u>

---

[88] 本偈の saṃkhāya [ger]は，saṃkhāti/saṃkhāyati「完全に考察する」「完全に照覧する」「数えあげる」という意味がある．具体的な内容はここからはわからないが，nibbuto の前にこの行為が行われたと構文から示される．参考までに saṃkhāya の別用例を 1 例挙げると，Sn 1048 では ab 句で「向こう・こちら」(parovarāni)を saṃkhāya した後，「そういう者には動揺が世間のどこにもない」(yass' iñjitaṃ n'atthi kuhiñci loke). そして cd 句でそういう santo である者は「生と死を渡った」(atāri so jātijaran)と世尊(1 人称)が説く．

[89] 藤田 1998b p. 3 は，Sn の涅槃の用語に関する検討結果を示す中で，abhinibbuta (Skt. abhinirvṛta)が最古層とされる Ch. 4 および Ch. 5 の詩句に出る点を根拠として，「最初期の仏教から採用された語」であると推測する．

並川 2008 p. 137 は，Sn 中の涅槃の用語に関して「その原語に違いはあっても用法(筆者注: abhi, pari, 接頭辞なし)にはほとんど差異はなく，いずれも生存中における修行者の理想の宗教的境地を示している」と示す．

[90] Sn には全 6 例あり，最古層に 3 例(本項にて用例提示)，古層に abhinibbutatta が 3 例見出せる(Sn 343, 456, 469: 後述 2. 2. 3. 2.参照). 初期仏典における abhinibbuta 用例数は 13 例あり，Sn 以外では古層: Th 1263 (≒Sn 343), MN I p. 187 偈文 = AN I p. 143 (3. 35)偈文, AN III p. 311 (6. 23)偈文, Ud p. 29 偈文, Ja II no. 277, Ja III no. 303(後述 2. 2. 3. 2.参照).

abhinibbutatta の理解として，松本 1989 p. 200 は,「覆いをとりさられて解き放たれたアートマンを有する」と解釈し，仏教一般の「無我説」とは根本的に対立する概念であるが，ジャイナ教などの「我(霊魂)」を認める説の影響を受け，結果として原始仏典では「アートマン」を認めているとする．これに反し，前記村上・及川 1986 p. 28, n. 15 および榎本 2012 pp. 154 – 155 は, attan は「自分」「自己」を表しているとの理解である．また, abhinibbutatta にあたる Skt. abhinirvṛtātman について, Schmithausen 1987 p. 155 は, -attan は単なる接尾辞であり，翻訳の必要がないと解す．筆者も村上氏・及川氏，榎本氏同様に，一般的な概念での「自分」「自己」を表すと解釈する(後述 2. 2. 3. 2. abhinibbuta の考察結果にて論じる).

それでは Ch. 4: Duṭṭhaṭṭhakasutta「悪意八偈経」中の abhinibbutatta を以下に示す．本経は，悪意ある人々はどのような見解を持ち，どのような言葉を発するのか，それに反し，聖者はどうであるのかにつき 8 つの偈文が列記される．発話者の記述はなく，誰が説いたかは不明であるが，註釈は Bhagavā「世尊」と説明する．本経には，いわゆる「自己・自分自身」(attan; Skt.: ātman)を意味する語が頻出する．該当用例は，聖者は，悪評や議論，そして自分の見解にもとらわれてはいけないと説く中の 1 偈であり, abhinibutatta である托鉢修行者は鎮まって，自慢することなく，尊大ではないと述べる．

Sn 783　santo ca bhikkhu abhinibbutatto
“iti ’ham” ti[91]　sīlesu akatthamāno, —
tam ariyadhammaṃ kusalā vadanti,
yass’ ussadā n’atthi kuhiñci loke.
そして鎮まって, abhinibbutatta であり,「私はこうである」と
諸々の生活習慣について自慢していない托鉢修行者であり,
諸々の尊大さがこの世のどこにもない．
そういう人を立派な人の性質を持つ者であると達人たちは言う．

本偈は，文脈から現世のことであるとわかる．本偈では abhinibbutatto と santo「鎮まって」[√śam の PP]が併記され，両語とも主語である托鉢修行者の属性を示す.[92]

[91] Se: hanti.

[92] 最古層 Attadaṇḍasutta Sn 946 に santo が使用される:
saccā avokkamma muni thale tiṭṭhati brāhmaṇo
sabbaṃ so paṭinissajja sa ve santo ti vuccati
寡黙の聖者である[真の]バラモンは，真実から逸脱せず，陸地に立つ．
彼は一切を捨てて，彼は実に鎮まった人と言われる．
「一切を捨てて」の paṭinissajja が ger.であるので，文構造から, santa であるこの人は，既に

後述の Tuvaṭakasutta において nibbuti = santi であり，それが煩悩が既に滅し取著(取り込み)がない涅槃の状態を示唆するとの考察結果から，それらの PP および PP を含む本偈の abhinibbutatta と santa にも，対応する意味の近似性が類推され得る．ただし, abhi がつき，また attan との複合語であることや, abhinibbutatta の具体的内容に触れられていないことから, abhinibbutatta が nibbuti や nibbāna と同じ状態であるとの理解が導けるとは言えない．

≪註釈: 生前の涅槃≫

Sn 783 の註釈 Pj II p. 521 は「熱望などの煩悩が鎮まること」と説明し, abhinibbutatto と santo は同義であると解釈する．

2.1.3. nibbuti

Sn 933: nibbuti = santi「鎮まり」

次に, nibbuti の用例検討に入る．まず Ch. 4: Tuvaṭakasutta「迅速経」において，経のまとめとして nibbuti = santi「鎮まり」と定義される Sn 933 を以下に示す:

Sn 933 etañ ca dhammam aññāya
vicinaṃ bhikkhu sadā sato sikkhe,
'santī' ti nibbutiṃ ñātvā[93]
sāsane Gotamassa na-ppamajjeyya.[94]
そして，以上のダルマ(教え)を知って，
弁別しつつ，托鉢修行者は常に留意して，学び修行すべきである．
nibbuti を「鎮まり」と理解して，ゴータマの教えにおいて，
油断すべきでない.[95]

一切を捨てたと解することができる．この表現は，前述の涅槃の定義(Sn 1094)の中の「何も所有していないこと」と同様の意味であるといえる．

[93] Be; Se: ñatvā.

[94] Be: na pamajjeyya.

[95] そして次の偈文(Sn 934)で本経が終わる．
abhibhū hi so anabhibhūto
sakkhi dhammam anītiham adassī
tasmā hi tassa Bhagavato
sāsane appamatto sadā namassam anusikkhe [ti Bhagavā ti]
というのは，その人は自ら支配する人であり，支配されたことがない．
[彼は]伝聞によらないダルマ(真理・法則性)を目の当たりに見た．
それ故，まさに，かの世尊(幸せを分け与えるお方)の教えにおいて
油断せず，常に礼拝しつつ，順々に学習すべきである[と世尊は[言った]と].

「ゴータマの教え」とあるが，この偈を語っているのはゴータマ・ブッダ自身である．最古層で nibbuti が現れるのは本経のみである.[96]

先行研究において nibbuti は，用例の詳細検討が為されることなく nibbāna と「ほぼ同義」とされるのみ(例: 藤田 1988a p. 265 他)であるが，上に示した通り，両語に関する最古層における定義が異なることから，本研究において初期仏典中の全用例を検討して，「ほぼ同義」であるかどうかについて検証する．

前記した nibbāna の定義には santi「鎮まり」との記述が見られないため，少なくともこの用例のみから nibbuti = nibbāna であることは導けないが，本経の文脈から間接的に，nibbuti/santi が煩悩が滅した，取り込み(取著)がない涅槃の側面を示唆する考察結果を以下に論じる(下記 Sn 915 参照)．また，具体的に何の nibbuti/santi なのかは本偈からは明らかにならないが，本経の文脈から間接的に「自己の内面」(下記 Sn 919 参照)のことであると判断できる．

本経は 20 偈からなる経であるが，nibbuti の定義とされる santi「鎮まり」が，本経冒頭(Sn 915)にて santipada として，nibbāti とともに世尊への質問として現れる:[97]

Sn 915　pucchāmi taṃ Ādiccabandhuṃ[98]
vivekaṃ santipadañ ca mahesiṃ:[99]
kathaṃ disvā nibbāti bhikkhu
anupādiyāno lokasmiṃ kiñci.
偉大なる聖仙であり，太陽の末裔である君に，
遠離と鎮まりの境地を[私は]尋ねます．
どのように見て，托鉢修行者は，世間において，
何も取り込むことなく nibbā するのでしょうか．

viveka と santipada とが kathaṃ ... nibbāti と言い換えられている．このことから，質問者は viveka, santipada, nibbāti を目標と認識し，類似概念として捉えていることが読み取れる．このように santi が nibbā することに同じか近い概念で使われてい

本経では世尊が自身のことを Gotama や Bhagavā と語る．

[96] 他層の全用例について後述にて考察するが，用例は次の通り: Sn 古層に 1 例(Sn 228: nibbutiṃ bhuñjamānā), Sn 以外の古層 Th と Ja に計 6 例(Th 32: tappamānena nibbutiṃ, Th 418: pāpeti nibbutiṃ, Th 586: nibbutiñ cādhigacchatīti, Ja III p. 523: nibbutiṃ bhuñjati, Ja VI pp. 437, 442: nibbutiṃ nādhigacchāmi), 散文 3 経に見出せる(nibbuti viditā 複数回: DN I pp. 1 – 48 [1 経] Brahmajāla Sutta「梵網経」; DN III pp. 1 – 35: Pāṭika-suttanta「パーティカ経」, labhāmi paccattaṃ nibbutin-ti: MN I p. 323).

[97] 先行研究においては，本偈の-pada を「境地」と解釈する(Norman 2006 p. 114: the state of peace, 村上・及川 1986 p. 786, 中村 1984 p. 200).

[98] Be: ādiccabandhu.

[99] Be: mahesi.

ることは, Sn 933 で santi = nibbuti と定義される上記議論に対応する. このことは, santipada が鎮まりの状態を表しており, -pada が「足場」というより「境地」を意味することを支持しよう.

viveka「遠離」は, √vic「離れる」が原意で,「離れること」や「一人でいること」を表す語であり, 涅槃の異名ともされる概念である(例: Sn 註釈 Pj II p. 593 [後述 4.1.参照], PED p. 638 他). この「離れていること」という概念は, Sn 1094 に涅槃の一定義として出てくる「取り込まないこと」に関係するともいえよう.

lokasmiṃ「世間において」と現世の文脈であり, lokasmiṃ は通常 nibbāti「涅槃する」にかかるため, 涅槃する時点は今世生きている間のことである可能性が高いが, lokasmiṃ が anupādiyāno にかかる可能性も考えられるため, 涅槃する時点は生前であるのか命終時であるのか決定できない.

nibbāna の定義づけ(最古層 Sn 1094)の一語である anādāna「[自分に]取り込まない」と同じ, an-ā-√dā から派生する anupādiyāno「取り込むことなく」[an-upa-ā-√dā の passive part. med] が, ここ Sn 915 では nibbāti と共に現れる. このことから, 否定辞＋ā-√dā で表される「取り込まないこと」という概念は, 涅槃と結びつきが強いことが本用例からも導かれる.

では本経中の次の nibbuti 用例を以下に示す.

Sn 917 yaṃ kiñci dhammam abhijaññā
ajjhattam[100] atha vā pi bahiddhā,
na tena thāmaṃ[101] kubbetha,
na hi sā nibbuti sataṃ vuttā:
内にあるいは外にも, 何ものをもダルマ(物事・要素)であると理解するとしても, それによって, 立脚点が作れるわけではない.
というのもそれは善き人々にとっての nibbuti であるとは言われていないからである.

ここで nibbāna ではなく nibbuti が使用されていることは, nibbuti が santi と同義とされる(同経 Sn 933)ことを前提として, 質問の santipada を意識してのことであろうと推測できる. また, nibbuti の時点は本偈においては明確ではないが, 托鉢修行者の在り方を説くその後の文脈から, 托鉢修行者の現世での状態を意図している可能性が高いといえるであろう.

---

[100] Be; Se: -taṃ.
[101] 註釈 Pj II p. 562 は thāma を māna「慢心」と理解:「それによって, 慢心を抱くべきでない」. 中村 1984 p. 200, 荒牧・本庄・榎本 2015 p. 248 の和訳も註釈の理解に準ずる. 漢訳『義足経』下『大正』4, p184b: 強力進所在作.

≪註釈: 生前の涅槃≫

Sn 933 の註釈 Pj II p. 565 は nibbuti を rāgādīnaṃ santi「熱望などの鎮まり」と具体的に示す.「熱望など」との説明から, 生前の時点との解釈である. そして nibbuti を santi で置き換えている. これは Sn 933 で nibbuti = santi と定義されることを受けている.

Sn 915 の註釈 Pj II p. 562 は,「見ている者が諸々の煩悩を止めるように[102]」parinibbāti と, 現世の文脈で, 生前の涅槃であると解釈しており, nibbāti を parinibbāti に置き換える.

nibbuti の用例は最古層では本経のみであるため, 後述 2. 2. 4.にて他経の nibbuti の用例を収集し, 引き続き考察を試みることとするが, Sn 933 において nibbuti と同値される santi が同経中 Sn 919 にも出てくるため, 以下に検討する. ここでは santi は目標として, そして同じく√śam「鎮まる」の派生語である PP upasanta が「自己の内面」であると説かれる.

Sn 919 ajjhattam eva[103] upasame
nāññato[104] bhikkhu santim eseyya
ajjhattaṃ upasantassa
n'atthi attā, kuto nirattaṃ[105] vā.
他ならぬ自己の内面を鎮めよ.
托鉢修行者は別に鎮まりを求めてはならない.
自己の内面を鎮めた者には, 取り込まれたもの[106]はない.
あるいは捨てられたものがどこにあるのか.

「自己の内面を鎮めた者には, 取り込まれたものはない」という内容における n'atthi attā は, nibbāna の定義の一つである前記 Sn 1094: anādānaṃ「取り込まないこと」とに同じく ā-√dā の否定である. 従って, この upasanta「鎮まっている」者

[102] yathā passanto kilese uparundhati. 註釈文献に頻出する kilesa「煩悩」は Sn には 1 例のみ (Ch. 2: Vaṅgīsasutta Sn 348 既出, この経については後述 2. 2. 3. 2.参照)である[index (Pj II 3 p. 685)および検索にて確認]. 煩悩を表す語として, Sn では rāga「熱望」, chanda「欲求」, āsava「漏」等が使われる.
[103] Be: evupasame.
[104] Be: na aññato.
[105] Be: nirattā.
[106] attā は Skt. ātta [ā＋√dā「取る」の PP]と理解する. Sn 787, 858 と同様である. この語を attan「自分」[m. nom. sg]と考えるのは本偈文脈からは適当でないと考える. 参考までに記すと, Sn 787 の註釈 Pj II p. 523 では atta-diṭṭhi「我見」・ucchedadiṭṭhi「断見」あるいは, gahaṇamuñcana「掴むこと・手放すこと」と両義挙げる.

は, 涅槃の一定義を満たしている人であるとも理解できる. そしてこの人は, b 句にある本来求めるべき santi「鎮まり」を会得していると考えられよう.

本偈から, 鎮まりとは, 内面的なことと理解でき, その後, 現世での修行者の生活面での在り方, 特に言動について, 具体的に語った後で, 上記 Sn 933: 'santī' ti nibbutiṃ と, 総括して述べる. 本経のこの文脈の流れから言えることは,

> 取り込まれたものがない(Sn 919) = 涅槃の一側面を満たした者(Sn 915; 1094) = 自己の内面を鎮めた者(Sn 919) = 鎮まり(santi)を会得した者(Sn 919; 933) = nibbuti を会得した者(Sn 917; 933)

となり, 間接的に nibbuti は nibbāna の一定義である「取り込まないこと」を満たした自己の内面の鎮まりのことであり, その時点は生前との解釈が可能であることが示唆される. 但し, この考察結果は, 最古層の用例が非常に限定されている中, あくまでも本経の文脈においてのみ導き得るものである. nibbuti の意味内容に関してはさらなる用例検討が必要であり, 初期仏典において用例数は限定的であるが, 残る古層・散文の全用例を検討してから, 再度論じることとする.

2.1.4. 最古層小結

nibbāna

nibbāna は Sn 1094 において, akiñcana「何も所有していないこと」であり anādāna「取り込まないこと」, また dīpa anāpara「更なる渡り先(避難所)を持たない島」, 即ち jarāmaccuparikkhaya「老と死の滅尽」であるとの記述で定義される. そして, Sn 1109 において taṇhāya vippahānena「渇愛の捨離によって(inst.)」[nibbāna と言われる]との表現で, 煩悩の滅が涅槃のための中核的要素・最大の特徴であることを示唆する. それに対して, 散文 SN IV pp. 251, 261 では, 煩悩の滅が涅槃そのものであると述語名詞構文によって定義づけられる. それぞれ表現は異なるが, 渇愛の捨離や煩悩の滅が nibbāna の重要な要素であるということでは, 最古層以来一貫しており, よってそれらが nibbāna という概念の中核を担っていたであろうことが結論付けられる.

最古層の nibbāna の定義(Sn 1094; 1109)を仏教術語の「涅槃」と捉えて, そこを基点に考察した結果, 他偈(Sn 822, 940, 942, 1061, 1062, 1086, 1108, 複合語を含む)の nibbāna は等しく「涅槃」を意味するといえるが, いずれの用例もその涅槃の時点は特定できないとの考察結果であった. Sn 1086: nibbānapada は「欲求や熱望の除去」と定義される. -pada の解釈によって,「欲求や熱望の除去」が①涅槃の境地,

あるいは，②涅槃への足場との 2 種の理解が可能であるが，いずれが妥当かは断定できなかった．

nibbuta の諸用例

これらの内容に関して，現世で涅槃した状態を示唆するとの考察結果が導かれる用例(Sn 1041; 1087; 1095)と，対照的に，涅槃した状態かどうか判断がつかない用例も見い出せた(Sn 783)．いずれにせよ，人の中の火的要素が消えていることを表しているため，nibbuta が nir-√vā の PP の役割を果たしていることを支持することが確認できた．それら PP の時点については，時点の判別がつかない nibbāna とは対照的に，全て現世・生前の文脈であった．

diṭṭhadhammābhinibbuta (Sn 1087; 1095)は，あえて「現世にて」との術語と結びつけることにより，それをブッダ世尊は強調する意図があったと考えられる．あえて強調する必要があったのは，当時，世尊を除く一般的な思想背景として涅槃した状態が命終[後]と結び付けて捉えられる傾向があったことを物語る．この語は Sn では最古層にのみ現れ，初期仏典中の用例数も少なく韻文に限定されるため，比較的古い用法であるといってよいであろう．

nibbuta の諸用例の中には，現世で既に煩悩が滅している状態を表す内容が示される場合(Sn 1041; 1087)，および現世で「老いと死の滅尽」，つまり生死・輪廻を超越したという内容が表される場合も確認され(Sn 1095)，これについては，実際には物理的に老いて死ぬ訳であるから，解釈としては，象徴的な意味として，現世を含む(2)の解釈(今世でそれに影響されない = それを超越すること)と判断され得ることを指摘した．

nibbuti

nibbuti は 1 経のみで 2 用例あり，santi「鎮まり」と定義される(Sn 933)．nibbāna の定義(Sn 1094; 1109)に「鎮まり」は示されていないが，経の文脈から間接的に，nibbuti が，取り込みがない涅槃の一側面(Sn 1094 の定義)を満たした自己の内面の鎮まりを意味する可能性が導かれた(Sn 915; 919)．この考察結果から，その時点は生前であることが示唆された．また語形の観点からも，前述の通り，nibbuta の諸用例が nibbā の PP として機能していることから，nibbuti は nibbā の行為名詞・抽象名詞であるといえる．

まとめ

最古層における涅槃の語彙は全16例と少なく，限られた時代層の中の限定された範囲内での調査ではあるが，語彙間の若干の相違が見出だせる考察結果となった. nibbāna「涅槃」および nibbāti「涅槃する」に関しては，全 10 例中，文脈が現世である場合においても(時点が不明である文脈も複数ある)，涅槃そのものの時点は決定できず，このことは，世尊によって涅槃が説かれる時に，そもそも生前・命終等という時点が意識されていないことを物語っていると考えられる．それに対して nibbuta の諸用例は，全 4 例とも明確に現世の文脈であり，該当語彙がかかる人が，生前で既に涅槃した状態である diṭṭhadhamma で強調される abhinibbuta 用例と，対照的に，涅槃しているかどうかよくわからない-atta を後分に伴う abhinibbuta 用例が見出せた. nibbuti は，nibbāna の定義の中の取り込みがない一側面を満たした，現世で既に涅槃している人の自己の内面の鎮まりを意味する可能性が導かれた.

最古層において nibbuti/santi/nibbuta の諸用例の意味するところは，主として内面が鎮まった，自己主張しない在り方である．この内面が鎮まったということに関連して，「主張しない」態度が，前記した最古層 Ch. 4: Attadaṇḍasutta;[107] Ch. 4: Duṭṭhaṭṭhakasutta や Ch. 4: Tuvaṭakasutta 等，随所に展開される．このように，仏教は寡黙を重視することが，最も古いとされる文献から確認できる．この点において，言葉が重視されるヴェーダの思想やバラモンの伝統から仏教が大転換を図ろうとしたことが見て取れる.[108] また，散文 DN I pp. 1 – 46 [1 経] Brahmajāla Sutta「梵網経」には，世尊が退けた六十二見の中に出てくる現法涅槃論(diṭṭha-dhamma-nibbāna-vāda)五種が示されるが(DN I pp. 36 – 38)，異見として問題とされるところは，現世で得られる涅槃自体ではなく「涅槃を得たと語ること」である．つまり vāda が仏教の立場から否定されるのである.[109]

---

[107] 例えば，最終偈 Sn 954 では寡黙の聖者は主張しないと説く:

> na samesu na omesu na ussesu vadate muni,
> santo so vītamaccharo nādeti na nirassati
> 寡黙の聖者は，同等の者達の中にいて[自己を]主張しないし，劣った者達の中にいて[主張]しないし，優れた者達の中にいて[主張]しない．彼は鎮まった者，利己心を離れた者であり，取り込まず，捨て去ることもない.

[108] 荒牧 1988 p. 67 - 68 は，本経を「ゴーダマ・ブッダの『金言』」が含まれる．また因習化した古代祭式文化から離れた「ウパニシャッドの哲人達や[ジャイナ経の]苦行者の伝統を継承しながらも，ややもすると両極端にはしる修行を超克したゴーダマ・ブッダの根本の宗教体験をうたい，かれの教えの根本思想を説いているといってよい」，さらに，「かれらの論争を批判するところから，ゴーダマ・ブッダの根本思想が成立してきた」として詳しく論じる.

[109] 六十二見については，畑 2006b に詳しい.

2. 2. 古層

涅槃の語彙は Sn 古層には計 30 例あり, 名詞形 10 例のうち nibbāna が 9 用例(pari 付き 1 用例)および nibbuti が 1 用例あり, 定動詞が 4 例(pari 付き 2 用例), PP の諸用例が 16 例(abhi 付き 3 用例, pari 付き 8 用例, 接頭辞なし 5 用例)出てくる.

Sn の用例をまず検討した後, 他経の用例を考察する.

2. 2. 1. nibbāna

Sn 古層に「nibbāna とは～である」と定義づける記述は見出せず, Sn 758: nibbānaṃ[110]を除き, ほぼ全て複合語として現れるのが特徴的である. 涅槃の語彙が火や灯火が消える原意を表す用例が Sn 古層文献においても見られる(前述 Sn 19: nibbuto gini; 下記 Sn 235: yathāyam padīpo nibbanti). Sn 以外の古層文献においても, 名詞形 nibbāna が原意「[火が]消える」の意味で,「灯火の消火／消失のごとき心の解放が生じた」との表現で複数箇所に用いられる. これらについては 1. 1. 3.の原意の分析において少し触れたが, ここでこれが, 生前・命終のいずれの涅槃に関して言われているかを論じておきたい.

<u>nibbāna の原意「火が消えること」</u>

Sn 19 akkodhano vigatakhīlo 'ham asmi
iti Bhagavā
anutīre Mahiy' ekarattivāso,
vivaṭā kuṭi, <u>nibbuto</u> gini, —
atha ce patthayasī, pavassa deva.
世尊は[答える].「私は怒ることなく, 心の頑迷さを離れている.
マヒー河のほとりで一夜を過ごしている.
小屋はあばかれ, 火は消えた状態である.
そこで, 神よ, もし望むなら, 雨を降らせよ」

Sn 235 'khīṇaṃ purāṇaṃ, navaṃ[111] n' atthi sambhavaṃ,'
virattacittā āyatike bhavasmiṃ
te khīṇabījā avirūḷhichandā

[110] 同じ経中に pari の用例が複数出てくるため後述にて考察する.
[111] Be: nava.

nibbanti dhīrā yathāyam[112] padīpo, —
idam pi Saṃghe ratanaṃ paṇītaṃ,
etena saccena suvatthi hotu.
「過去のものは滅し, 新しいものが再生されつつあることはない[113]」
未来の生存に対する愛着から離れた心を持ち, 種が滅し,
成長への欲がない, そういう賢者達は, この灯火のように nibbā する.
これも集いにおける優れた宝[である]. この真実によって幸いなれ.

古層 Sn 19 の火が消えた時点は現世でのことであるが, Sn 235 の「灯火のように nibbā する(消える／涅槃する)」という時の nibbā の時点は, 一般論を説く現世の文脈であることから, 涅槃する時点は生前である可能性が導かれる.[114] これに対して, DN II p. 157G と Th 906 は, いずれも世尊の命終(般涅槃)時のアヌルッダ尊者の偈頌部分であるが, これらにおいては, 明確に世尊の命終が意図されている.

まず DN II p. 157G を, その前の一文ともに引用する. なお, 本経 DN II pp. 72 – 168 [16 経] Mahāparinibbānasuttanta の散文では, 世尊が命尽きた「般涅槃」を明示するのに, parinibbāna/parinibbuta が多用される.

parinibbute Bhagavati saha parinibbānā āyasmā Anuruddho imā gāthāyo abhāsi
世尊が般涅槃した時, 般涅槃と同時に, アヌルッダ尊者がこの偈頌を唱えた.

nāhu assāsa-passāso ṭhita-cittassa tādino.
anejo santim ārabbha yaṃ kālam akarī munī[115]
asallīnena cittena vedanaṃ ajjhavāsayi:[116]
pajjotass' eva nibbānaṃ vimokho cetaso ahūti.
心確立したそのようなお方の, 出る息, 入る息が生じなかった.

---

[112] Be: yathāyaṃ.
[113] 村上・及川 1986 p. 289, 中村 1984 p. 53, 荒牧・本庄・榎本 2015 p. 76 和訳は, a 句に「業」を補う. Norman 2006 p. 205 は補わず, the old is destroyed, the new is not arising「古いことは滅し, 新しいことが生じていない」と,「何が」については明記していない. Norman 氏は, 註釈では navaṃ にあわせて natthisambhavan と複合語にしているが, 自分は句読点をつけて n' atthi saṃbhavaṃ として, saṃbhavaṃ を現在分詞と理解すると記述. Cf: Mv. I p. 293 a 句: kṣīṇaṃ purāṇaṃ navo nāsti saṃcayo. (saṃcaya = m. gathering; sam√ci).
[114] 藤田 1988b p. 5 は, 註釈に準じ, 明確に「解脱者の死」を意味すると解釈する. Sn 235 以外にもこの Ratanasutta には涅槃の語彙が出てくるため後述にて用例検討を行う(2. 2. 4.参照).
[115] Be; Ce: muni.
[116] Ce: ajjhavāsayī.

鎮まりを得て, 命終を迎えた時, 動じることのない寡黙の賢者は, 怯まぬ心で感受に耐えた. 灯火の消火／消失の如き・如く心の解放が生じた.[117]

世尊の臨終に接した場面でアヌルッダ尊者によって発せられた本偈の kālam akarī は, 時を為した = 命終を明確に表すものである.「灯火の消火／消失の如き心の解放」についても, 同じく命終を示唆すると考えられる.

≪註釈: 命終の涅槃≫

DN 註釈 Sv p. 595[118]は「無余依涅槃」と解釈し, 世尊の命終を表す.[119]

次に DN のパラレルである Th 905, 906 (Anuruddho thero「アヌルッダ長老経」Th 892 – 919)を取り上げる. DN II p. 157G 中の yaṃ kālam akarī munī の部分が, Th 905-d 句では chakkhumā parinibbuto「眼を持つお方は般涅槃した」とあり, この部分だけが異なるが, 世尊の命終を表すことに変わりはない.

そして次偈 Th 907-cd 句で nāññe dhammā bhavissanti sambuddhe parinibbute「完全に目覚めたお方が parinibbuta する時, 他の諸要素は生じないであろう」と, 世尊の命終時を parinibbuta で表す. 続く Th 908-cd 句において vikkhīṇo jātisaṃsāro n'atthi dāni punabbhavo「誕生である輪廻は尽きて, 今や再生はない」との記述があ

---

[117] a 句の最後にピリオドがあるためこのように和訳した. Cf: DN 註釈 Sv p. 595:

..santim ārabbha kālam akari, tassa ṭhita-cittassa tādino* idāni assāsa-passāso na jāto n' atthi na pavattatī ti

鎮まりによって命終を迎えたその者の, 心確立したそのようなお方の出る息, 入る息が, 今, 生じず, 存在せず, 働かない, と.

註釈は, b 句を a 句にかけた理解を示す. *Ee: tadino を Be に倣い訂正.

[118] *santim ārabhā* ti anupādisesa-nibbānaṃ ārabbha paṭicca sandhāya santim「santim ārabhā〈鎮まりによって〉とは無余依涅槃によって, を縁として, の意味において」.

[119] 本経中には註釈と同一の表現 anupādisesa-nibbāna は見出せず, 定型句: anupādisesāya nibbāna-dhātuyā parinibbāyati/parinibbuto「燃料の残余のない(無余依)涅槃界において般涅槃する／した[状態である]」として現れる(本定型句に関しては後述 2. 3. 4.参照). 本経散文において, 涅槃の語彙は全て命終が意図される. 初期仏典において It pp. 38 – 39 [44 経]で二種涅槃界(有余涅槃界・無余涅槃界)が唯一説かれるが, DN 註釈 Sv では, 経典段階には現れない定型句:「有余依涅槃界に般涅槃する」を用いて説明する. 鍛冶工チュンダの食事供養について Sv pp. 571 - 572:

Bhagavā hi Sujātāya dinnaṃ piṇḍapātaṃ paribhuñjitva saupādisesāya nibbāna-dhātuyā parinibbuto, Cundena dinnaṃ paribhuñjitvā anupādisesāya nibbāna-dhātuyā parinibbuto ti: evaṃ parinibbāna-samatāya pi sama-phalā

なぜなら, 世尊は, スジャーターによって布施された托鉢食を食べて, 有余依涅槃界に般涅槃し, チュンダによって布施された[托鉢食を]食べて, 無余涅槃界に般涅槃した, と. このように般涅槃の等しさにおいても同じ果報[である]

このことは, 本経成立時から註釈文献 Sv 成立までの間に, これら二種涅槃界の定型句が確立したことを示唆するといえるであろう.

るが，下記 Thī 47 (2. 2. 2. 2.参照)のパラレル表現ではウッタマー長老尼の生前の状態を表すこの表現が，ここでは世尊の命終の状態として用いられている．従って，最古層 Sn 1095 で論じた(1), (2)の二つの解釈(再生・輪廻の停止が，今世での老死の滅尽を含むか(2) = 生前の涅槃，含まないか(1) = 命終時の涅槃)の可能性が，用例によって確認されたことになる．[120]

≪註釈: 命終の涅槃≫

上記偈文に関して Th 905 – 906 の註釈 Th-a pp. 70 – 71 は詳細の解説を加える．Th 905 の註釈 Th-a pp. 70 – 71 では，世尊が第四禅から出た直後に「無余涅槃界へ般涅槃した」と説明する．[121] 次の偈 Th 906 註釈 Th-a III p. 71 では，般涅槃したことを，消えた火は存在せず見えなくなる，そして[五]蘊の連続性が消えて見えなくなると解釈する．

このように古層文献においては，同一語彙やフレーズが異なる時点を示唆する場合があり，注意を要する．

なお,「心の解放」は散文にも見られるため，続けて本項にて簡潔に検討する．Sn Ch. 3: Dvayatānupassanā 経の散文の最後に(p. 149)，世尊の説法に歓喜し，修行者達の「心が解放された」との記述がある:

> inasmiṃ kho pana veyyākaraṇasmiṃ bhaññamāne saṭṭhimattānaṃ bhikkhūnaṃ anupādāya āsavehi cittāni vimucciṃsū ti.
> この説示中に，喜んだ 60 人の托鉢修行者達の心が，諸漏を取り込むことなく，解放されたのだ．

ここでの「心の解放」は,「諸漏を取り込むことなく」とあることから，涅槃を意味することが示唆される．そして文脈は現世である．

---

[120] また，古層には，下記 Thī 116 のように，ここと同じ「心の解放」という表現が現世の文脈で使われる場合もある．Thī 112 – 116: Paṭācārā「パターチャーラー長老尼経」において，灯火を手に取って精舎に入り(Thī 115)，最終偈を唱える:

Thī 116 tato sūciṃ gahetvāna vaṭṭiṃ okassayām' ahaṃ
padīpasseva nibbānaṃ vimokkho ahu cetaso
それから針を取って，私は灯心を引き下げる．
灯火の消えることが，心の解放であった

本偈の「心の解放」が生前の涅槃を示唆する可能性はあるが,「灯火が消えること」に喩えられた「心の解放」が涅槃を意味するのかどうかの確証はない．註釈 Thī-a p. 114 は生前の涅槃と解釈する．

[121] 散文 DN II p. 156 では以下の記述がある:

> catutthajjhānā vuṭṭhahitvā samanantarā Bhagavā parinibbāyi
> 第四禅から出て，直後に世尊は般涅槃した

上記に示した通り，消火の喩えとともにしばしば出てくる「心の解放」は，古層・散文文献に見られる表現であり，「涅槃」の意味で使用されることが多いが，明らかではない場合も見られる．その時点に関しては，上記涅槃の語彙の解釈に対応して，文脈によって生前・命終のいずれも確認される．

2. 2. 2. nibbāna を伴う複合語

Sn 古層では，ほぼ全て複合語として現れるのが特徴的であると先に触れたが，具体的には以下の通りである:

・Sn 86 nibbānābhirato [Ch. 1: Cundasutta] 世尊の言葉(下記参照)
・Sn 186 nibbānapattiyā [Ch. 1: Āḷarakasutta] ブッダの言葉(下記参照)
・Sn 204 nibbānapadaṃ [Ch. 1: Vijayasutta] ブッダの言葉(下記参照)
・Sn 233 nibbānagāmiṃ [Ch. 2: Ratanasutta] 発話者不明(下記参照)
・Sn 267 nibbānasacchikiriyā [Ch. 2: Mahāmaṅgalasutta] 世尊の言葉(付録 2 参照)
・Sn 365 nibbānapadābhipatthayāno [Ch. 2: Sammāparibbājaniyasutta] 世尊の言葉(下記参照)
・Sn 454 nibbānapattiyā [Ch. 3: Subhāsitasutta] 質問者の言葉(付録 2 参照)
・Sn 514 parinibbānagato [Ch. 3: Sabhiyasutta] 世尊の言葉(下記参照)

pari 付き用例は最古層には見出せず，古層から使用が認められ，散文でも多く見られる．parinibbāna は「般涅槃」と漢訳・和訳され，一般的にはゴータマ・ブッダはじめ解脱者の命終を表す語として本邦においても広く知られている．用例検討に入る前に，接尾辞 pari の説明と pari の有無に関する先行研究について触れておく．pari は「周りに」「周囲にぐるりと」「すっかり」「完全に」という副詞的意味を動詞自体の意味に付加する．先行研究やこれまでの翻訳では，nibbāna および parinibbāna の接頭辞 pari の有無，つまり「涅槃」と「般涅槃」の間に意味の相違はないとの理解が大半である(荒牧・本庄・榎本 2015, Norman 2006, 並川 2008 pp. 129, 130, 藤田 1988b, 村上・及川 1986, 中村 1984 等)．これらの先行研究の中で，藤田 1988a pp. 265 – 266 他は，そのように同義での使用を認めつつも，涅槃する時点については，「般涅槃」がいわゆる肉体の死を表すこともあるとする(他には例えば，並川 2008 pp. 129, 130; 2005 pp. 96 - 101, Norman 1996 pp. 16 – 18, 宮下 1989 pp. 24 - 26).[122] そして，本来は「涅槃」「般涅槃」とも同義語で，生前で得られるべき

[122] Norman 1996 pp. 17 - 18 は Thomas 説に合意して「pari 付き動詞は『境地を得ること』であり，pari がつかない動詞は『涅槃の境地にいること』」と説明する(Norman 引用原文: He *parinibbāyati*, attains the state, and then *nibbāyati*, is in the state expressed by *nibbāna*). この

境地を表していたが, しだいに「般涅槃」が「解脱者の死」と結び付けられるようになったと説明する研究も中にはあり(例えば藤田 1988a p. 273), その契機は, ブッダ世尊の死であったとみる解釈(並川 2008 p. 138 前述 1. 4.参照; 2005 p. 100)など, 歴史的な展開を想定する研究も存在する.

対して, 片山 2001 は歴史的な変遷を認めず, nibbāna はもともと「涅槃」として理解して, parinibbāna「般涅槃」は「漏尽者の『いわば死』を指す(p. 467)」, そして「その『いわば死』は, ふつう『入滅』『完全な消滅』と言われ, 『涅槃』とは呼ばれない(p. 463)」と述べる.「いわば」との前置きは「仏の死, 如来の死, 阿羅漢の死, 漏尽者の死といった言葉も考え方も成り立たない(p. 462)」と解するからである.

以上を踏まえた上で, 具体例を検討する.

2. 2. 2. 1. parinibbānagata

Ch. 3: Sabhiyasutta Sn 514 parinibbānagato[123]

Sn 514 pajjena katena attanā
Sabhiyā ti Bhagavā
parinibbānagato vitiṇṇakaṃkho
vibhavañ ca bhavañ ca vippahāya
vusitavā khīṇapunabbhavo sa bhikkhu.
「サビヤよ」と世尊は[答える].「自ら行じた道によって parinibbāna に達した, 疑惑を超越した者であり, 非生存と生存を打ち捨てて,
再生を滅した修行完成者であるその人が, [真の]托鉢修行者[である]」

Thomas 説は理解に苦しむ. Thomas 1947 p. 295 は, この相違は「単に文法的なもの」であり, 英語話者にはわからないが, ギリシャ語ではよく知られる用法と説明する.

[123] 本経は, 遊行者サビヤと世尊の問答で, 散文と韻文から構成されるが, 問答の途中にサビヤのことが散文で記される. 多くの人達が聖者だと崇めている教祖達であるプーラナ・カッサパ, マッカリー・ゴーサーラ, アジタ・ケーサカンバリン, パクダ・カッチャーヤナ, サンジャヤ・ペーラッティプッタ, ニガンダ・ナータプッタは, サビヤの問いに満足な答えを与えることができなかった. サビヤは偶によって, 様々な真の人について世尊に問いかける. 世尊の答え全てに喜んだサビヤは, 出家し入門式を行い比丘となり, その後阿羅漢となる. 該当用例 Sn 514 はサビヤからの具体的な問いに答える世尊の最初の言葉である.

本経は, バラモンが強く意識され, 六師外道の教祖たちより世尊が優れていることを示す. 最後の散文で「出家させ, 入門式を行い, 比丘と認める」とあり, 教団としての運営が始まっていた頃のサビヤと世尊の問答であることがわかる.

[真の]托鉢修行者の属性として parinibbānagata と並行表現されている「疑惑を超越した者」は煩悩に関わる内容であり,「非生存と生存を打ち捨てて, 再生を滅した修行完成者」は輪廻・命終に関わる. 再生, つまり生死・輪廻を khīṇa「滅している」[√kṣi の PP]とあることは, 最古層 Sn 1094 の nibbāna の定義である「老と死の滅尽」と同じことを意味するといえる. 従って, 本偈の parinibbāna は, 最古層の nibbāna と同じく「涅槃」を表すと考えられる.

本研究の範囲内において parinibbānagata は他に用例が見出せない. -gata を後分に持つ他の複合語である tathāgata「そういう状態に至っている人」(Sn 467; 469 下記参照)や vijjāgata「明知に達した」(Sn 730)[124]から, また kiṃpattinam [Skt.: pra-√āp「達する, 獲得する」] āhu bhikkhunaṃ「何に達した人が托鉢修行者と言われるのですか(Sn 513)」との質問の答えとして Sn 514 の-gata が使われていることから, 本偈の parinibbānagata が「既に[般]涅槃に達している・至っている者」を意味することが導かれる.

parinibbānagata「[般]涅槃に達した」時点が生前のことであるのは, そういう者を bhikkhu「[真の]托鉢修行者」と呼んでいることからも分かるが, また続く偈で語られる諸々の真の人(例: sorata「やさしいお方」Sn 515; danta「自制したお方」Sn 516; buddha「目覚めたお方と」Sn 517 等)の資質が, 文脈的に現世でのことであることからも分かる. またこれら真の人の資質と同様の表現をもって, サビヤが目前におられる世尊のことを, Sn 540: sorata「やさしい」, Sn 541: sambuddha「完全に目覚めた」, Sn 542: damappatta「自制を会得した」; sītibhūta「冷たくなった(鎮まった)」お方と表現することも, 更なるその証左となろう.[125]

しかしここで注意すべきことは, parinibbānagata という複合語が生前のことを表すということが, 必ずしも nibbāna 自体の時点が生前であることを意味しないということである. 直接定動詞や PP によって「涅槃する・した」と言うのと異なり,「nibbāna へと至った」との表現は, 実際に[生前に] nibbāna に至ったとも, あるい

---

[124] cd 句: vijjāgatā ca ye sattā, nāgacchanti [Be: na te gacchanti] punabbhavan ti「そして明知に達したそういう人々は, 再生へと赴かない[と]」.

[125] 以下の通り, Skt.パラレルは生前の文脈で捉えているようである.

大衆部 (Mahāsaṃgika) に伝わる Skt.仏伝 Mv. III p. 395 では, pari ではなく abhi (abhinirvāṇagata)である. また c 句 vippahāya「打ち捨てて」が jñātvā loke「世間において[非生存と生存を]知って」. この 2 ヶ所以外は全てパーリ語に相当する Skt.である(padyena kṛtena ātmanā/ abhinirvāṇagato vitīrṇakāṃkṣo/ vibhavaṃ ca bhavaṃ ca jñātvā loke/ uṣitavāṃ kṣīṇapunarbhavo sa bhikṣuḥ//). pari が abhi に置き換えられている背景には, 当時 pari 付きの涅槃の語彙が「命終」と解釈されていたことが考えられ, それを危惧して, 生前を表す意図があったのではないかと推測可能であろう.

『仏本行集経』巻 39 (『大正』3. p. 834 上)では,「向涅槃岸」と pari に相当する「般」はなく, さらに PP gata「達した」に相当する漢訳は「向」であり,「達した」とは漢訳されず. さらに a 句の attanā は漢訳には現れず,「苦行無礙」と漢訳.「苦行無礙求菩提 渡諸疑向涅槃岸 有有無有悉喜捨 梵行漏尽名比丘」.

は(命終時に至る・得る) nibbāna に生前に至った, つまり nibbāna に至る権利・資格を生前に得た, それが約束された, との意味に捉えられる余地をも残す. このように, nibbāna を語る文脈が現世であることと, nibbāna 自体の時点が現世であることとは分けて考えなければならないが, 従来の研究では, この点が考慮されてきたとは言い難い.

以上の理解によれば, 本偈で parinibbānagata が生前であることと, 最古層 Sn 1094 で nibbāna 自体が(「老と死の滅尽」の二つの解釈に応じて)生前と命終の二通りに理解可能であったとは, 全く矛盾しない.

≪注釈: 生前の涅槃≫

Sn 514 parinibbānagata を註釈 Pj II p. 425 は kilesanibbānapatto「煩悩が消えることを獲得している」と説明する.

2. 2. 2. 2. nibbānābhirata

Sn の用例

Ch. 1: Chundasutta Sn 86: nibbānābhirato[126]

Sn 86 yo tiṇṇakathaṃkatho visallo
nibbānābhirato anānugiddho
lokassa sadevakassa netā,
tādiṃ maggajinaṃ vadanti buddhā.
疑いを超え, [煩悩・苦悩の]矢から離れ, nibbāna を楽しみ,
貪欲を離れていて, 神々を含めた世間の導き手であるような,
そのような人を道の勝者であると目覚めた者達は言う.

先にも触れた通り, 複合語後分の-abhirata の-abhi には「〜に向かって」を意味す

[126] 本経は,「広大な理解力ある寡黙の聖者にお尋ねします. 目覚めたお方, ダルマ(真理・法則性)の主, 渇愛を離れ, 人間の最上者であり, 最も優れた調御者であるお方に. 世間に沙門たちはどれだけいますか. どうかそのことを語ってください」(Sn 83: "pucchāmi muniṃ pahūtapaññaṃ [Se: pahuta-]/ buddhaṃ dhammassāmiṃ vītataṇhaṃ/ dipaduttamaṃ [Be: dvi-] sārathīnaṃ pavaraṃ/ kati loke samaṇā, tad iṃgha brūhi.")という鍛冶屋の子チュンダの世尊への問いかけから始まる. 世尊は(Sn 84)沙門には 4 種あり, 即ち, maggajina「道の勝者」, maggadesaka「道を説く者」, magge jīvati「道の中で暮らす」, maggadūsī「道を汚す者」と答えた後, チュンダから具体的に問われ(Sn 85), 世尊が, 道の勝者の説明として述べた偈文が該当用例である.

るため, abhi-√ram が「〜に向かって・見据えて, 楽しむ」＝「期待する」を意味しないかどうか検討する必要がある. しかし, 他の複合語 Sn 275: vihesābhirato「他人を苦しめ悩ますことを好む」, Sn 276: kalahābhirato「論争を楽しんでいる」, kāmābhirata「欲望の対象を楽しんでいる」, dānābhirata「与えること・布施を楽しんでいる」等(CPD p. 367 参照)の用例からは, -rata のみの複合語 Sn 212: jhānarataṃ「禅定を楽しんでいる」と同様の現在何かを楽しんでいることの意味しか想定できず, よって nibbānābhirata も, 既に nibbāna を楽しんでいる状態を意味すると思われる.

次に文脈であるが, 複合語に併記される「疑いを超え, [煩悩・苦悩の]矢から離れ, 貪欲を離れていて」は, 煩悩の滅という涅槃のための重要な要素を満たしていることを示唆し, また, この者は「導き手」であり「道の勝者」とも説かれることから, 本偈の主語が, 修行中ではなく涅槃を既に得た修行完成者であることを表す. 従って, 涅槃を楽しんでいる(nibbānābhirata)のは現世のことである. しかし, 既に議論したように, だからといって複合語全体の文脈と nibbāna 自体の時点が無条件に一致するとは即座には結び付けられるものではないため, 分けて考察する必要がある. 上記のように, 通常 abhirata が現に存在するものを楽しむこととして用いられることから, nibbāna も, 連動して生前の涅槃を意味する可能性が導かれるが, その一方で, 複合語中の nibbāna の具体的内容や時点に関して直接言及がないため, この者が楽しんでいる nibbāna がいったい何なのか, その内容や時点について本偈から明らかにすることはできない. 現に, 涅槃していない人が「涅槃を楽しんでいる」(下記 Thī 450: nibbānābhiratā) 1 用例も見出せ, nibbānābhirata が必ずしも nibbāna を得たことを意味しないことが分かる.

この Sn Chundasutta は, 入滅の直前の世尊の説法と言われている[127](村上・及川 1985 p. 398 n. 1 参照). 文脈から, 様々な修行者がいる様子や, 該当用例でも buddha が複数形で現れることから, 世尊以外にも覚りを得ていた阿羅漢が複数いて, 在家のチュンダを相手に説法していることから, 相当数の在家の存在も窺える. その中には, 道を汚す修行者もいて, 問題が起こっていることもわかる. 従って, 世尊が多くの弟子を抱えていた時代背景が裏付けられる点で, 最古層経典との違いが読み取れる内容である.

≪註釈: 生前の涅槃≫

Sn 86 の註釈 Pj II p. 163 は, MN I p. 249(『南伝』9, 435)を引用して, 世尊の禅定と解説する. Th 696: assāsarato「入る息を楽しみ」の註釈 Th-a p. 10 では禅定において「最高の入る

[127] チュンダは, 最期となる托鉢食の供養を世尊に行った在家信者として知られている. DN II pp. 126 – 127 [16 経] Mahāparinibbānasuttanta「大般涅槃経」中には, チュンダに対する説法の内容に関しては記述がない.

息が生じている涅槃を楽しむ」とより具体的に説明される.

Sn にはこの語は他に出てこないため(Pj II 3 index 参照, Be 検索でも確認済み), 他経の用例について次に考察する.

Sn 以外の用例

この複合語は, 古層(Thī 46, 359, 450)および散文(SN I p. 38, AN III p. 293, 294, 435)に見出せる. 本項では全用例を列挙しないが, いずれも Sn 86 同様, 複合語中の nibbāna の具体的内容および時点とも明確には決定できない. ここでは古層 Thī『テーリーガーター(長老尼の偈頌)』の 3 用例に関して原語を挙げて論じたい.

Thī は Th『テーラーガーター(長老の偈頌)』とともに Sn と同じ『小部』に収録される韻文経典群である. Th/Thī は仏弟子達が自身の出家や覚りについて語るものである. その内容や語彙から, 筆者は古層の中でも後期の成立と判断する.[128]

Thī 46 は aññatarā Uttamā「別のウッタマー長老尼」が語る 3 偈からなる短い経である. 冒頭偈 Thī 45 には nibbānapattiyā が, Thī 46 に nibbānābhiratā が現れる:

Thī 45 ye ime satta bojjhaṅgā maggā nibbānapattiyā
bhāvitā te mayā sabbe yathā buddhena desitā.
nibbāna を得るための道であるこれら 7 つの覚りの主要部分は
ブッダによって示された通り, 私によって全て修められた.

Thī 46 suññatassānimittassa lābhinī 'haṃ yad icchakaṃ
orasā dhītā buddhassa nibbānābhiratā sadā.
空性と無相について, 私は望むものを得る.
仏の実の娘として, 常に nibbāna を楽しんでいる.

Thī 47 sabbe kāmā samucchinnā ye dibbā ye ca mānusā;
vikkhīṇo jātisaṃsāro n'atthi dāni punabbhavo.
天人そして人間としてのあらゆる欲望の対象が完全に断たれて,
誕生である輪廻は尽きて, 今や再生はない.

本経の内容は, 語っている本人の現在の状態である. Thī 45 では,「nibbāna を得るための道 = 覚りの主要部分が修得された」と言っていることから, その道が修得

[128] 荒牧 1988 pp. 91 は Th/Thī を「最新層の韻文経典群」とする.

された = そのものに到達した，とも解釈可能であるが，nibbāna ではなく nibbāna を得るための道とわざわざ言っているということは，命終時に涅槃するための準備がなされたことを意味する可能性が指摘されよう．

Thī 46 で，常に涅槃を楽しんでいる時点は現在のことである．[129] しかしながら，上記 Sn 86 と同様に，複合語がかかる人に連動して複合語中の nibbāna もその生前の涅槃を示唆する可能性がある一方，複合語中の nibbāna そのものの意味内容や時点については断定できない．[130] 次の偈において，この者は既に煩悩を滅しており，現世において既に輪廻が尽き，再生がないと語られることから，前述最古層 Sn 1094 で見た老死の滅尽 = 輪廻の停止に対応して 2 つの解釈の可能性がある．

本経には Sn には見出せない「7 つの覚りの主要部分」や「無相」などの言葉が使われている．このような，数字で表す教理や禅定の体系化は，古層の後期および散文文献において成立したと考えてよいであろう．

対照的に，Thī 448 – 522: Sumedhā「スメーダー長老尼」では，出家前に nibbānābhiratā ahaṃ[131]「私は nibbāna を楽しんでいる(Thī 450)」と両親に語り，出家を願う(Thī 458: pabbajissāmi [pabbajati の fut. 1st sg]). Thī 476 では devesu pi attāṇaṃ nibbānasukhā paraṃ n'atthi「神々の中にも救護所(tāṇa)はなく，nibbāna という安楽の他には[救護所は]ない」と，Sn には現れない sukha「安楽」という語で「涅槃」を表す．そして出家した後(Thī 516: pabbaji [aor]), 理解力を目の当たりにして(Thī 516: abhijñā sacchikatā), 涅槃を得たことを示す(nibbānaṃ āsi [aor. atthi]: Thī 517).

このように，Thī 448 – 522 においては，nibbānābhirata である者は，まだ出家もしていないし，涅槃も得ていない人であることがわかる．[132] この場合も，複合語の文脈は現世であるが，複合語中の nibbāna そのものの意味内容や時点については決定できないという上記の結果が支持される．

また，この結果から，同じ涅槃の語彙であっても，その語がかかる人の境涯が涅槃前，涅槃後と異なる場合があることに留意して文献を読み解く必要があるといえる．

2. 2. 2. 3. nibbānapada

Sn の用例

---

[129] 註釈 Thī-a p. 48 では「空性」および「無相」を samāpatti「禅定」と説明する．
[130] Thī 359 の用例も具体的にはここに記述しないが，同様の考察結果であった．
[131] Be: nibbānābhiratāhaṃ.
[132] この語の他の用例に比べ(前述 2. 2. 2. 2), 本偈は abhi √ram の本来の意味「〜に向かって・見据えて，楽しむ」＝「期待する」を表出した用例であるといえよう．

Vijayasutta Sn 204

Sn 古層には 1 例 nibbānapada が Ch. 1: Vijayasutta Sn 204 に現れる.[133] 以下にて考察する.

Sn 204　chandarāgaviratto so bhikkhu paññāṇavā idha
ajjhagā amataṃ santiṃ nibbāna-padam[134] accutaṃ.
欲求や熱望から離れ, 理解力を有するその托鉢修行者は, ここで不死, 鎮まり, 不動[135]である nibbāna-pada へと達した.

内容的に, 煩悩から既に離れており, 理解力を有し, 生死・輪廻の滅である amata「不死」[136]へと ajjhagā [aor]「達した」と説かれる. 煩悩を滅して取著していない状態に加えて, paññā「理解力」を伴って涅槃を表す内容は, 最古層文献には現れない.

nibbāna-pada の平行表現として amata「不死」, santi「鎮まり」と出てくる. 最古層では nibbuti は santi「鎮まり」であると定義され(Sn 933), 筆者は経の文脈から間接的に santi/nibbuti を, 煩悩が滅し, 取り込み(取著)がない涅槃の一側面を示唆する可能性を提示した(前述 2. 1. 3.参照). また, 当箇所でも, amata「不死」が涅槃の定義にある生死・輪廻の滅を意味するため, 本偈 Sn 204 の托鉢修行者は「涅槃の境地へ達した」と理解できる. 従って, 本偈に関しては, -pada は「足場」より「境地」がより適していると考えられる. ヴァリアントである Be は nibbānaṃ padaṃ となっており, padaṃ は「不死」「涅槃」との併記語であり, やはり「境地」の解釈を支持する.

ここの文脈は, 前後で愚かな者がどう身体を考えるか, 理解力を有する托鉢修行者がどう理解しているか等が語られていて, その修行者が涅槃の境地へと ajjhagā [aor]「達した」時点は現世・生前であることが示唆される. しかしながら, そのことが, nibbāna 自体の時点が生前であると連動していえることにはならない. 前記した複合語中の nibbāna の時点が決定できないのと同様である.

---

[133] 本経は「〜が(語る)」(... ti)との記述なく, 導入の散文もない説法(韻文)の形をとる. 身体がいかに不浄であるかを説くブッダの言葉(Sn 193 – 201)と, それを聞いた理解力ある托鉢修行者(Sn 202: Buddhavacana; bhikkhu paññāṇavant)について語る.

[134] Be: nibbānaṃ padamaccutaṃ. この形は「涅槃の境地」を支持する.

[135] 藤田 1988c p. 95 では「不死」と和訳.「主に詩歌に現れ, 散文経典においては amata が圧倒的に多く使われる. 詩句では amara が用いられることがあるが, 散文では全く使われない」と, 韻文と散文の用語の違いの例として挙げる.

[136] amata「不死」は最古層には現れないが, 同じことを示す表現として例えば Sn 950: sa ve loke na jiyyati「彼はこの世において老いないのだ」が見出せる.

本偈のパラレルが同じ古層の Thī 97 に見出せる. この偈では複合語としては現れないが, 冒頭偈に nibbānaṃ padaṃ, 最終偈(Thī 101)に nibbutā が出てくるため, 以下に取り上げる.

Sn 以外の用例

Thī 97: nibbānaṃ padam accutaṃ

Sakulā「サクラー長老尼経」(Thī 97 - 101)の内容を確認した上で nibbāna と pada のことについて考察する.

Thī 97: agārasmiṃ vasantī 'haṃ dhammaṃ sutvāna bhikkhuno
addasaṃ virajaṃ dhammaṃ nibbānaṃ padam accutaṃ.
私が家に住んでいた時, 托鉢修行者のダルマ(教え／真理)を聞いた後に
私は塵を離れているダルマ(教え／真理)を, 不動の nibbāna という pada を
見た(√dṛś).

この後,「家のない状態へと出家した」(Thī 98: pabbajiṃ anagāriyaṃ)サクラー尼は,「熱望と憎しみそして一処にある諸漏を捨てた」(Thī 99: pahāsiṃ rāgadosañ ca tadekaṭṭhe ca āsave)と続き, 次の偈で比丘尼(bhikkhunī)となる:

Thī 100: bhikkhunī upasampajja pubbajātim anussariṃ
dibbacakkhuṃ[137] visodhitaṃ vimalaṃ sādhu bhāvitaṃ.
私は比丘尼戒を受けて, 以前の生まれを思い出した.
天眼は浄化され, 垢を離れていて, よく修行した.

Thī 101: saṅkhāre parato disvā hetujāte palokine
pahāsiṃ āsave sabbe sītibhūta mhi[138] nibbutā
因より生じて崩壊する諸々の形成されたものを他のものと見て,
一切の諸漏を捨て, 冷たく(清涼に)なって, nibbuta で私はある.

Thī 97: nibbānaṃ のヴァリアントとして PTS p. 133 は nibbāna を挙げる(Be, Se, Ce ではないパラレル). このヴァリアントを採用するなら, 複合語 nibbāna-padam と読むべきであり,「不動の nibbāna への[のための]足場」との解釈が可能となろう.

[137] Be: dibbacakkhu.
[138] Be: sītibhūtāmhi.

もし出家前に「涅槃を見た・涅槃が見えた = 涅槃した」というということであれば, その後出家して比丘尼となって最終偈 Thī 101 においてその状態を nibbuta と語ることと矛盾する. この場合, Thī 97 はヴァリアントを採用し, nibbāna padaṃ「涅槃への足場」との理解のほうが, より妥当である. しかし, 前述の Thī 45: nibbānābhiratā「涅槃を楽しみ」のように, 出家前に涅槃を楽しみ, 出家後涅槃を得たとの記述もあることから, 出家前の涅槃へと至っていない在家であっても, 涅槃を見る・涅槃が見える(「涅槃を予見した, 見据えた」ほどの意味か？)ことが可能であったと理解できる. その場合は「涅槃の境地」との解釈も十分に成り立つであろう.

Thī 101 に nibbutā と出てくる.「一切の諸漏を捨て, 冷たく(清涼に)なっている」サクラー長老尼の現世の状態である. 煩悩の滅に加えて, 前世を知る等,「三明」を既に会得したとする記述もあり, これは, 涅槃を得ている状態を表すと考えられる. つまりここでは, nibbuta が nir-√vā[2] の PP の意味として使われていると同時に, 生きている間に涅槃したことが言われていると結論付けられる.

≪註釈: 生前の涅槃≫

Thī 98 註釈 Thī-a p. 92 は, 出家して, 私は預流者となる(sotāpannā homi), Thī 99 の註釈 Thī-a p. 93 は第三の道 [139]によって滅せられるべき諸漏を捨てた(tatiyamaggavajjhe āsave *pahāsiṃ*), そして理解力という眼で見て(paññācakkhunā *disvā*), 最高の道 [140]によって残った一切の諸漏を捨てたと説明する. 四向四果の段階を経て, 現世において覚り・涅槃を得たことを示唆する.

初期仏典にあと 1 例のみ複合語 nibbānapada の用例があるので, 確認しておく.

Th 725: nibbānapadaṃ

> te pabbajitvā sugatassa sāsane bhāvetvā[141] bojjhaṅgabalāni paṇḍitā
> udaggacittā sumanā katindriyā phusiṃsu nibbānapadaṃ asaṅkhatan ti
> 彼等賢者達は, よく行ったお方の教えのもとに出家して,

---

[139] 不還のこと(村上・及川 2016 p. 93). anāgamin「不還」は Sn Ch. 3: Dvayatānupassanāsutta の散文に見出せるのみであり, 本研究で調べた該当用例を含む Sn 経典群から, 修道階位である四向四果(預流・一来・不還・阿羅漢の 4 種それぞれに「向」と「果」がつき「八輩」とも言われる)の教説の存在を数字を挙げて示唆する経は Ch. 2「宝経」のみ(Sn 227: puggalā aṭṭha「8 人の人間」, cattārī etāni yugāni「四対」とあり). 最古層といわれる Ch. 4, Ch. 5 では確認できない.

[140] 阿羅漢のこと(村上・及川 2016 p. 93).

[141] Be: bhāvetva.

覚りの部分の諸力を修養した後，高揚した心を持ち，よい思考を持ち，
感覚器官を制して，作られたものではない nibbānapada を触知した．

Adhimutto thero「アディムッタ長老」に関する最終偈であり，現世の文脈で「涅槃の境地」を示唆すると解釈可能である．

≪註釈: 生前の涅槃≫

Th-a III p. 18 は, nibbānaṃ adhigacchiṃsu「涅槃へ到達した」と, nibbānapadaṃ を nibbānaṃ に言い換える．

また,「〜への足場」との理解を補強する-pada の別の用例も見られる．古層 Dhp 21 に使われる amatapada である:

Dhp 21: appamādo amatapadaṃ pamādo maccuno padaṃ
appamattā na mīyanti ye pamattā yathā matā.
油断していない状態は不死への足場であり，
油断している状態は死への足場である．
油断していない人々は死なない．
油断している人達は死んだと同様である．

Dhp 21 – 32 は Appamādavagga「油断していない状態の章」であり，修行僧は怠けることなく勤め励むべきことが説かれる．最終偈 Dhp 32 において,「油断していない状態を楽しんでいる托鉢修行者は」(appamādarato bhikkhu),「他ならぬ涅槃の近くにいる」(nibbānass' eva santike)と経を結んでいることから，この冒頭偈 Dhp 21 が既に涅槃を得た修行完成者ではなく，修行者のことを言っているのがわかる．それ故,「不死への足場」との理解のほうがより適切であるといえよう.[142]

従って, nibbānapada は文脈によって,「涅槃の境地」あるいは「涅槃への足場」のいずれの解釈も成り立つといえるが,「涅槃への足場」の解釈であっても，それは涅槃にとても近い状態を示すものであろう．

2. 2. 3. nibbuta の諸用例

2. 2. 3. 1. nibbuta

[142] 註釈 Dhp-a I p. 228 では amataṃ を nibbānaṃ と定義して,「不死に達するための手段」(amatassa adhigama-vupāyo [Be: adhigamūpāyo])と説明し, -pada を「〜への足場」と同様に解釈している．

Sn の用例

古層には 5 例ある(Sn 19, 593, 630, 638, 707). Sn 19: nibbuto は, 前述 1. 1. 3.にて火が消えるを直接表す用例として検討済みであるため, その他の Sn の用例を本項にて考察する. 最古層には 1 例 Sn 1041 のみで前述 2. 1. 2.において考察した結果, 煩悩を滅した nibbuta である人は現世で涅槃している可能性が認められた. その点において nibbāna「涅槃」(nir-√vā「[火が]消える」の派生語)の PP の役割を果たし, その人の中の火的要素が消えた[状態]を示唆するものであるといえる. では, 古層の場合はどうであろうか. 本項ではまず Ch. 3: Nālakasutta「ナーラカ経」[143]を取り上げる.

Sn 707　ūnūdaro[144] mitāhāro appicch' assa alolupo,
sa ve[145] icchāya nicchāto anicco[146] hoti nibbuto.
腹を満たさず, 食を制限し, 少欲で, 欲張らない者であれ.
そういう人は, 欲に対して貪欲でなく, 無欲で,
nibbuta となる(である).

少欲, 無欲であることを促す本偈の文脈は現世のことであるが, hoti nibbuto の具体的内容・時点とも直接言及なく不明である.「無欲」という煩悩に関係する内容でもあるため, この nibbuta が涅槃していることを示唆する可能性がないとは言えないが, しかしながら, 修行者の在り方として食に貪欲にならず単に静かで穏やかであることを言っている可能性も考えられるため, 本偈だけから nibbuto が涅槃していることであるかどうかははっきりいえない.[147]

本経において, 世尊の言葉として, あるべき姿である「鎮まった[状態]」(Sn 702:

---

[143] 本経は, 前半 18 偈はアシタ仙の予言を伝える仏伝部分, 後半はナーラカと世尊との問答である. ナーラカがアシタ仙の言った通りとなったと告げて(Sn 699), 托鉢修行を行うにあたり, muni「寡黙の聖者」の在り方について世尊に問う(Sn 700). そして世尊(Sn 701: ti Bhagavā)が答える偈文経典である.

[144] Se: onodaro.

[145] Be; Se: sadā.

[146] スリランカ版: anicchā.

[147] 同様に, nibbāna に関しても, 該当偈の文脈において「涅槃」を意味するのかどうか, はっきりわからない用例が古層 Dhp 134 に見出せる:
sace neresi attānaṃ kaṃso upahato yathā
esa patto si nibbānaṃ sārambho te na vijjati.
壊れた鐘のように自ら沈黙しているなら
君は既に nibbāna を得ていて, 怒りが見られない.

santo, Sn 721: santaṃ)が 2 度使用される. 最古層で「渇愛を離れている」(Sn 1041: vītataṇho)や「鎮まっている」(Sn 1087: upasantā)の併記語として現れる sata「留意している」は本経には用いられず, jhāna「禅定」(Sn 709), jhāyin「禅定する人」(Sn 719)が使われ, Sn 719 では kāmacāgin「欲望を追い出した人」と併記される. このように煩悩の滅および鎮まりは, 禅定と関係が深い概念であることが古層の本経において見て取れる.

≪註釈: 生前の涅槃≫

Sn 707 の註釈 Pj II P. 495 は nibbuto を「鎮まっている」[√śam]と置き換え, 火的要素は kilesaparilāho「煩悩の燃焼」と説明する.

次に Ch. 3: Sallasutta「矢尻経」Sn 593 について検討する.[148]

Ch. 3: Sallasutta Sn 593: nibbuto

Sn 593 abbūḷhasallo[149] asito santiṃ pappuyya cetaso,
sabbasokaṃ[150] atikkanto asoko hoti nibbuto [ti]
矢尻をとり除けば, とらわれなく, 心の鎮まりを得て,
あらゆる悲しみを乗り越え, 悲しみなく nibbuta となる(である).

本経を締めくくる最終偈である. 本経は冒頭から人の命ははかなく(Sn 574), 生まれた者は必ず死ぬ(Sn 575, 576, 577, 578, 587, 588, 589), 親族は嘆き悲しむがそれは無益なことである(Sn 580, 582, 583, 584, 585, 586)という趣意が繰り返し語られる. 誰が説いているのかは経典では不明であるが, 註釈 Pj II p. 457 は世尊が息子を亡くした信者に対して説いたと由来を説明する.

本経は, 親族を亡くす悲しみを乗り越え, 現世において穏やかであるという一般的な意味を表す可能性もあり, 本偈のみからは, nibbuto が「涅槃している」という意味には即座に結びつくとはいい難い.

しかし, 本偈における santi と nibbuta の関係を見てみると,「鎮まりを得た後に nibbuta となる」とあり, 最古層 Sn 933 で nibbuti = santi と定義され, nibbuti (形は nibbuta と同じ語根の抽象名詞)が自己の内面の鎮まりを表し, 涅槃の一側面を示唆する可能性が見出せたことから(2. 1. 3.参照), ここの nibbuta が涅槃している意味

[148] 本経 Sn 591: parinibbaye は消火の意味で使われているため, 前述 1. 2.で既に論じた. 本経該当 2 用例についての註釈はない.
[149] Be; Se: abbuḷhasallo.
[150] Se: sabbaṃ sokaṃ.

を示す可能性も導ける.

また, 矢尻を取り除くことは nibbuta の前提条件であるが, 矢尻とは, 直前の偈 Sn 592 で「自らの悲嘆と願いと憂い」であると説かれ,[151] これらはいわゆる諸煩悩を含む世俗的な感情を意味する解釈が可能であろう. またここでは矢を抜くことが「自らの安楽」につながることであり,「安楽」は他経において = 涅槃と定義されることから(例: Thī 476, 前述 2. 1. 1. 1.参照), 矢を抜くことが涅槃の必要条件である可能性を示唆する.

さらに「矢を抜く」ことが, 間接的に涅槃である可能性が類推され得る古層 Ch. 2: Uṭṭhānasutta「奮起経」Sn 334-cd 句もある:

> appamādeva vijjāya abbahe sallam attano [ti].
> 勤め励むことによって, 明知によって, 自分にささった矢を抜け.

vijjā「明知」は, バラモンの三ヴェーダを批判する仏教がその意味内容を転換し, tisso vijjā「三明」として世尊が説いたものであり, 散文経典(例: MN I pp. 271 - 280 [39 経] Mahā-assapura-sutta「大アッサプラ経」等)では, 四禅定を備えて三明を得た者は阿羅漢となると説かれる.[152] 上記 Sn の他偈の考察結果から, 本偈 Sn 593 の nibbuta に関しても, 涅槃した状態を示唆する可能性が高いであろう.

Vāseṭṭhasutta, Sn 630: nibbutaṃ, Sn 638: nibbuto

本経は, ヴァーセッタとバーラドヴァージャという二人のバラモン青年が「どのような人が[真の]バラモンか」について, ブッダ [153]となり名声を得ている世尊

---

[151] Sn 592: paridevaṃ pajappañ ca domanassañ ca attano:
attano sukham esāno abbahe sallam attano.
自らの悲嘆と願いと憂いを[抜くべきである],
自らの安楽を望むなら, 自らの矢を抜くべきである.
註釈 Pj II p. 461 は pajappā「願い」を taṇhā「渇愛」と説明する.

[152] 三明に関しては榎本 1981, 1982 に詳しい. 榎本 1982 p. 70 は, 散文経典(MN I pp. 16 - 24 [4 経]および AN VIII p. 11)で「四禅 → 三明」が誕生する, そして「心の浄化」が明の前提と論じる.

[153] Sn 646 の注で中村 1984 p. 363 は「ジャイナ教でもブッダと呼ばれる修行者を讃えていることに注意(それは釈尊を讃えているのではない)」と, Utt. XXV 34 ジャイナ教教祖のジナがブッダと呼ばれる例をあげる. また Sn 650「行為によってバラモンとなる」についても, 中村 1984 p. 364 は, Utt. XXV 33, MBh III 261, 15 をあげ,「こういう表現は当時どの宗教においてでも, 自由思想家たちによってなされていたのである」と記す. Sn 655 に関しても中村 1984 p. 364 は,「tapa, brahmacariya, dama はウパニシャッドに述べられている修行であり, 制戒 saṃyama は叙事詩に説かれている. 何ら仏教特有のものではない」「tapas はジャイナ教でいう苦行」. 中村 1984 p. 365 は Utt. XXV 22「自己に打ち勝ち, 痩せて血

のもとへ行き，問答をする．真のバラモンの姿を該当偈を含めて様々に示し，世尊はその中で行為(kamma)でもってバラモンとなると説く．世尊の答えに喜んだ二人は，世尊(bhavant Gotama)と教え(dhamma)と比丘教団(bhikkusaṃgha)に帰依し，在家信者(upāsaka)となり経が終わる．

Sn 630　aviruddhaṃ viruddhesu attadaṇḍesu nibbutaṃ
sādānesu anādānaṃ tam ahaṃ brūmi brāhmaṇaṃ.
妨げあう者達の中にいて，妨げられない人であり，
暴力に訴えようとする人々の中にいて nibbuta である，
取り込みを有する人たちの中で取り込みを持たない人，
その人を私は[真の]バラモンと言う．[154]

Sn 638　yo imaṃ[155] palipathaṃ duggaṃ saṃsāra-m-oham[156] accagā
tiṇṇo pāragato[157] jhāyī anejo akathaṃkathī
anupādāya nibbuto tam ahaṃ brūmi brāhmaṇaṃ.
この障害であり困難である輪廻という激流を超え進んで，渡り終え，

肉を減らし，よく誓戒をまもり，ニルヴァーナに達した苦行者」と当時の状況を説明する．
しかし，Sn の本経散文部分では，バラモン青年二人が世尊を尋ね，説法を聞き，在家信徒となるという展開から，世尊が説いた教えが，他より優れたものであることを本経は示そうとしていると筆者は推測する．Sn 228「ゴータマの教え」Gotamasāsana と世尊の教えが他の教えより優れていることが示されていることも然りである．
榎本 2012 p. 155 は,「仏教が誕生する遥か以前からインドで行われていたヴェーダ祭式」においては,「火が消えることは不吉な現象として忌み嫌われていたのである．ところが，初期仏教(やジャイナ教，後にはヒンドゥー教)では，火が消える涅槃が，修行の目的，究極の幸福と捉えられた．涅槃は古代インドにおける価値観の逆転現象の象徴である」と説明する．

[154] 本偈と Dhp 406 はパラレルで同一．Dhp Brāhmaṇavagga「バラモンの章」は最後の 41 偈 (Dhp. 383 – 423)であり，本経 Sn 620 - 656 と共通偈が多い．但し，Dhp は韻文のみ．Sn 本経は散文を含み，バラモン青年二人が世尊を尋ね，説法を聞き，在家信徒となるという説話・物語的要素がある．両経とも伝統的バラモンに対し，[真の]バラモン，つまり修行完成者とは，という仏教思想を説く内容である．Sn 散文では在家信徒になるという話であるが，韻文は在家の功徳を説く内容ではない．両経韻文中に anāgāro paribbaje「家なき者として遊行するがよい」と(Sn 639 = Dhp 415 および Sn 639 = Dhp 416)，内容的には出家を勧めている部分もあり，韻文と散文の内容に少し相違が見られる．

[155] Be: maṃ.

[156] Ee; Be; Se: saṃsāram moham を saṃsāra-m-oham (< ogham)と理解．この理解での和訳は荒牧・本庄・榎本 2015 p. 163. Dhp 414 はパラレルで同一．パーリに異読はないが，Skt. Udv XXXIII: saṃsāraugham．註釈 Pj II p. 469 は「この熱望という障害と煩悩という困難と輪廻転生と四諦を洞察しない迷妄を超えて」(yo bhikku *imaṃ* rāga*palipathañ* c' eva kilesa*duggañ* ca *saṃsāra*vaṭṭañ ca catunnaṃ saccānaṃ appaṭivijjhanaka*mohañ* ca atīto)と理解．註釈と同じ理解の翻訳は，中村 1984 p. 139, Norman 2006 p. 79. Norman は Udv を注記(p. 276).

[157] Be: pāraṅgato.

向こう側へ達した. 禅定に励みつつ, 不動にして, ああだこうだと
疑うことなく, 取り込むことなく nibbuta である／した.
その人を私は[真の]バラモンと言う.

nibbuta は[真の]バラモンの属性の一つである. 該当両例とも, 偈の文脈は現世のことであるため, 両偈の nibbuta の時点は生前と理解できる. 但し, Sn 638 については, PP nibbuto を過去を表す定動詞としても理解可能であるため, その場合は今世生きている間あるいは命終時に起こったこととも解釈できることとなる. しかしながら, 最終句で「その人を私は[真の]バラモンと言う」との同一表現を繰り返す本経において, 本偈のみ命尽きた人のことを伝えているとは考えにくいであろう. ここで注目したいことは, 両偈に最古層 Sn 1094 で nibbāna の定義の一つである an-ā-√dā「取り込まない」が出てくることである. Sn 630 では anādānaṃ「取り込むことのない[人]」が nibbutaṃ の併記語として次の句に, Sn 638 では anupādāya「取り込むことなく」が nibbuto にかかると思われる. さらに本経 Sn 620 および 645 では akiñcanaṃ anādānaṃ「無所有で何もとりこまない者を」私は[真の]バラモンと言うと説かれる. akiñcana を加えたこの表現は nibbāna の定義づけがなされる Sn 1094 と同一表現である. 従って, [真の]バラモンが現世において涅槃を得た者であることが裏付けられる.

さらに Sn 638 では「輪廻という激流を超え進んで, 渡り終え」と accagā [ati-√gā の aor.]および tiṇṇo [√tṛの PP]で, [真の]バラモンが輪廻を超えたことを明示する.[158] このことから, 前述の(2)の解釈(今世で輪廻に影響されない = それを超越する)が可能であろう.

≪註釈: 生前の涅槃≫

註釈に関して, Sn 630: nibbuta は Pj II に説明なしのため不明であるが, パラレルの MN 注釈 Ps III p. 438 は「煩悩が消えることによって」と解釈する. Sn 638 の註釈 Pj II p. 469 はこの MN 注釈 Ps III p. 438 と同じ表現を使って, 煩悩の滅によってとの説明を加えて,「取り込まない」が煩悩の滅と併記される. 本経のテーマである[真の]バラモンの属性 amata「不死」(Sn 635)を注釈 Pj II p. 469 は amataṃ nibbānaṃ「不死とは涅槃」と定義づける.

Sn 以外の用例

DN II p. 136G [16 経] 偈頌部分 nibbuta

[158] 同様に Ch. 3: Sabhiyasutta Sn 538 においては, サビヤが世尊のことを oghatam agā [√gā「行く」の aor.形]「激流を渡った」と述べる.

仏伝である本経 Mahāparinibbānasuttanta は偈頌を含むが, 基本的には散文経典として知られていて, 散文には pari 付き用例が頻出する(後述 2. 3. 3.参照). 一貫して世尊の命終を示し, 経典名にあるようにそのことが主要テーマである. 1 人称の pari 付き用例で世尊が自身の命終を語る場面もある. にもかかわらず, また般涅槃を間近に控えたこの場面でありながら, 引用される偈文では, 命終とは判別つかない涅槃の語彙が現れる.

例えば, 世尊が寿命形成力を捨てた状態であり, 命終に近い場面で, 鍛冶工チュンダ(最後となる托鉢食を世尊に供養する在家信者)に後悔してはいけないと語る場面で, 最後に世尊は, 以下の感嘆の言葉(udāna)を述べる(DN II p. 136G):

> dadato puññaṃ pavaḍḍhati, saṃyamato veraṃ na cīyati,
> kusalo ca jahāti pāpakaṃ, rāgadosamohakkhayā sa nibbuto [ti].
> 与えつつある者の功徳は増大する, 自制ゆえに恨みは集積しない,
> そして, 達人は悪を捨てる, 熱望・憎しみ・迷妄の滅ゆえに,
> その者は nibbuta している.

この古層文献においては, rāgadosamohakkhaya「熱望・憎しみ・迷妄の滅」が abl.(理由・根拠)として説かれる. この文構造から, 意味内容としても, いわゆる煩悩の滅が nibbuta の前提条件であると解釈可能である. その前提条件を満たした人として nibbuta が「涅槃した状態」を意図して使用されていると推測でき, このことは, 最古層 Sn 1109 で「煩悩の滅」が inst.で表現され, nibbāna と言われることから,「煩悩の滅」が涅槃の中核的要素を表すとの解釈に類似する. また一方で, rāgadosamoha といわゆる「三毒の煩悩」を示す点で, 散文 SN IV pp. 251, 261 に示される三毒の煩悩の滅が涅槃であるとの定義とも近似する内容である. 文脈は現世の状態を表し, nibbuta の時点は生前であり,「涅槃している」と理解可能である.

≪註釈: 生前の涅槃≫

DN II p. 136G の註釈 Sv p. 572 は,「熱望などの滅ゆえに」(abl)に,「煩悩が消えることによって」(inst)を補って, 涅槃していると説明する.

2. 2. 3. 2. abhinibbuta

Sn の用例(abhinibbuta と parinibbuta)

Sn 古層に abhinibbutatta が 3 例あり, Sn 343 は Ch. 2: Vaṅgīsasutta「ヴァンギーサ

経」; 他 2 用例(Sn 456, 469)は Ch. 3: Sundarikabhāradvājasutta「スンダリカバーラドヴァージャ経」である. 両経とも abhinibbutatta に加え parinibbuta の両語が出てくる(Sn 346, 467). 同じ経典内にこの両語が出てくる経典は, 管見の限りパーリ聖典において他には見い出せない. それ故, 比較検討に有用であると考え, 以下に考察する.

parinibbuta は Sn に全 13 例あり, Ch. 2: Sammāparibbājaniyasutta「正しい遊行経」に 2 例(Sn 359, 370), Ch. 3: Dvayatānupassanāsutta「二種の考察経」に 4 例(Sn 735, 737, 739, 758)出てくる. Vaṅgīsasutta 散文部分に 5 例あるが, これら散文の用例は韻文の用例と一緒に本項にて取り上げる.

Ch. 3: Sundarikabhāradvājasutta (Sn 456, 467, 469)[159]

Sn 456 saṃghāṭivāsī agiho[160] carāmi
nivuttakeso abhinibbutatto
alippamāno idha mānavehi[161]
akalla[162] maṃ brāhmaṇa pucchi[163] gottapañhaṃ.
髪の毛を落とし, abhinibbutatta である[私は]法衣を着て, 家無く,
この世で, 人々によって汚されることなく歩む.
バラモンよ, 私に姓を尋ねたことは, 善きことではない.

Sn 467 yo kāme hitvā abhibhuyyacārī,
yo vedi jātimaraṇassa antaṃ,
parinibbuto udakarahado va sīto,
tathāgato arahati pūraḷāsaṃ.

---

[159] 本経は散文序文において, スンダリカ・バーラドヴァージャという名のバラモンがスンダリカ河の岸辺で聖火の祀りを行った後, 残った供物を誰が食べるべきだろうかとあたりを見渡したところ, 衣をまとって座っているブッダ世尊を見つけ, 供物を持って世尊に近づきその素性を尋ねる. そして続く偈文では, 世尊がまず, 自分は何者でもなく何も所有していない(Sn 455), 素性を尋ねることは適切ではないと答える(Sn 456). その言葉を聞き, 世尊を尊敬するようになったスンダリカ・バーラドヴァージャ・バラモンは, 供養について, そして誰に供養するべきなのかを世尊に尋ねる. 世尊は献供に値する者の資質につき示し「バラモンが功徳を求めて祀りを執り行うなら, そういう如来にこそ献供しなさい」と説く. そして最後の散文部分で, スンダリカ・バーラドヴァージャがその後世尊に帰依して阿羅漢となったと記す.

[160] Be; Se: agaho.

[161] Be; Se: māṇavehi.

[162] Be; Se: -aṃ.

[163] Be; Se: pucchasi.

諸々の欲望[164]を捨て去り打ち勝ち, 進み, 生と死の終わりを知って,
湖のように冷たく鎮まっていて parinibbuta している.
そういう状態に至っている人(如来)は, 供物の祭餅に値する.

Sn 469 yamhī[165] na māyā vasatī[20] na māno,
yo vītalobho amamo nirāso
panuṇṇakodho[166] abhinibbutatto,
so[167] brāhmaṇo sokamalaṃ ahāsi,
tathāgato[168] arahati pūraḷāsaṃ.
その人の中に, 偽りと慢心が住んでいないで, 貪りを離れ,
「私のもの」という思いなく, 願望なく, 怒りが除かれ,
abhinibbutatta であるような, そういう人は[真の]バラモンとして,
憂いの垢を捨て去った. そういう状態に至っている人(如来)は,
供物の祭餅に値する.

Sn 456 は世尊が自身のことを abhinibutatto と語る. ブッダ世尊は一般的に覚りの時に涅槃を得たと言われているが, このことは, 最古層において直接的な言及がなく確認できなかった. 最古層のこの語の用例(Sn 783)検討から筆者は, 現世で既に涅槃を得た人であるかどうか判別ができないという解釈の可能性を示した. しかし, 本偈の abhinibbutatta である世尊は, 修行完成者であり, 現世で既に涅槃しているお方であることは明白である.

そうなると, 同じ経中 Sn 469 の abhinibutatto も同様に涅槃している人を表すこととなろう. 本偈に併記される内容はいわゆる煩悩や欲望に関するものであり, 主語である人は, 既に煩悩を滅していて欲望のない, 心鎮まった状態である涅槃の一側面を表すことが示唆される.[169]

Sn 467 では, parinibbuta である人を, Sn 469 では, abhinibutatta である人を「そういう状態に至っている人(如来)」であると述べる. 供物を捧げるのは現世であるため, 本経文脈から abhinibutatta も parinibbuta も時点は生前である.

---

[164] kāma には「欲望」と「欲望の対象」という意味がある. 註釈は Pj II p 407 は vatthukāme と vatthu「もの, 対象」と説明する. 「打ち勝ち進み」も kāma のことであるため, 筆者は「欲望」と和訳しておく.
[165] Be; Se: -i.
[166] Se: panunna-.
[167] Be; Se: yo.
[168] 467 偈以降 478 偈まで最後の句は, tathāgato arahati pūraḷāsaṃ である. tathāgata の原意に関しては, 榎本 1993b 参照のこと.
[169] Sn 469 と類似する内容の偈文が Ud III p. 29 にあり abhinibbutatta が出てくる(本項下記 2. 2. 3. 2.参照).

Sn 467 は「生と死の終わり」という「再生の滅」とも「誕生の滅」とも類似する概念が現れ, nibbāna の定義である「老いと死の滅尽」(Sn 1094)に通じる内容であるが, 本偈ではそのことを「知っていること」(vedi)と parinibbuta が併記される.[170]

上記考察結果から, 本経においては, abhinibbutatta も parinibbuta も現世で涅槃している人を表し, 生前の涅槃を意味することが確認される. abhinibbutatta に関しては, 最古層 Sn 783 では, 涅槃かどうか判別できないという考察結果であったことに比べると, 明確に意味が示されているといえる.[171] 先行研究においては両語はほぼ同義とされているが, 本経において abhinibbutatta は, いわゆる煩悩や欲望に関する文脈であるのに対し, parinibbuta は知ることおよび生死・輪廻の滅の文脈であった. 本経での両語の文脈に見られたこの若干の相違点が, 実際にこれらの語の含意の相違を表すかどうかについてはにわかに判断できない.

≪註釈: 生前の涅槃≫

Sn の註釈 Pj II pp. 403, 407 は, 燃焼が鎮まる・消えると説明し, 「生と死の終わり」を涅槃と定義づける.

そして次に検討する Ch. 2: Vaṅgīsasutta では, 上記とは対照的に, parinibbuta が「命終」の「般涅槃」を意味する.

Ch. 2 Vaṅgīsasutta

---

[170] 榎本 1982 p. 72 によると, 韻文では, 三明の第三知である漏尽知の語は現れないが,「『再生の消滅』を知ることが第三知として確立されていた」と述べて, jātikhaya「誕生の滅」が再生の消滅にあたると示す. このことは, 生死・輪廻の滅を表す涅槃の側面と, それを「知っている」ことを表す「漏尽知」との結びつきを示唆するものである.

[171] 村上・及川 1988 p. 124 は「自ら寂滅を得て」と訳す. 中村 1984 p. 96 n. 343 は「こころ静まり」と和訳し,『涅槃の境地に達した』と解するのは, 後代の解釈である」と記すため, この語を涅槃であるとはいえないとの見解を示しているようである. 但し, 中村 1984 は Sn 343: abhinibbutatto (下記参照)については nibbāna と同じ意味で理解していたようである. なぜなら註釈の解釈に添ってカッパ師は生前阿羅漢であったと注記 p. 320 しており, nibbāna に「安らぎ」との和訳をあてているのと同様に, ここを「こころが安らぎに帰して」と和訳して(最古層 Sn 783 も同じ和訳), Sn 469「こころ静まり」とは少し異なる理解が表されているといえる. 中村 1984 は Sn の詩句は最も古いものであり(p. 438), 仏教特有のものがほとんどない(p. 442). 従って, 後代の仏教教理は表明されていないため(p. 438), 註釈や後代のものものしい解釈や, 特殊な漢訳語を持ち込もうとすると原意から離れてしまう(p. 441)との危惧を示していることから,「涅槃」という訳語を避けた意図は窺えるのであるが, 最古層に 3 例ある nibbāna には「ニルヴァーナ」あるいは「安らぎ(ニルヴァーナ)」をあて, 他の nibbāna を「安らぎ」と和訳しており, 単なる「安らぎ」だけの意味ではないと解釈していたことは確かであろう. それが仏教術語の「涅槃」でないなら, 何であると考えていたのかは具体的に示されていないが, 涅槃の語彙の相違に関わらずほぼ同じ意味として理解していたことは読み取れる.

涅槃の語彙は散文部分[172]およびヴァンギーサの言葉として parinibbuta, abhinibbutatta, nibbāyi が出てくる. 本経は冒頭に散文があり, 偈文が続く構成である. 亡くなった自分の師ニグローダカッパ長老が般涅槃したかどうか, 疑問が生じたヴァンギーサ尊者が, 世尊に偈で話りかけてそれを尋ねる. その際, 様々な言葉で世尊を讃嘆し答えを求める. 偈文中, 世尊の言葉は, Sn 355 の一偈のみ.[173] 世尊の答えを聞いて, 師の境涯を知り, ヴァンギーサ尊者は大変喜ぶ.[174]

散文 p. 59:

> ekaṃ samayaṃ Bhagavā Āḷaviyaṃ viharati Aggāḷave cetiye. tena kho pana samayena āyasmato Vaṅgīsassa upajjhāyo Nigrodhakappo nāma thero Aggāḷave cetiye aciraparinibbuto hoti. atha kho āyasmato Vaṅgīsassa rahogatassa paṭisallīnassa evaṃ cetaso parivitakko udapādi: 'parinibbuto nu kho me upajjhāyo udāhu no parinibbuto' ti.
>
> ある時世尊はアーラーヴィーにおけるアッガーラヴァのほこらに滞在していた. それは, ヴァンギーサ尊者の師であったニグローダ・カッパ長老が, アッガーラヴァのほこらで parinibbuta になったばかりのことである. その後, ひとり瞑想中のヴァンギーサ尊者に, このような心の考えが生じた,「わが師は parinibbuta している／したのか, あるいは parinibbuta していない／しなかったのか」と.[175]

---

[172] 散文部分に涅槃の語彙が現れるのは Sn 中本経のみ.

[173] Sn 355

> "acchecchi tanhaṃ idha nāmarūpe
> ti Bhagavā
> kaṇhassa sotaṃ dīgharattānusayitaṃ,
> atāri jātimaraṇaṃ asesaṃ" — icc-abravī Bhagavā pañcaseṭṭho.
> 「この世において, 名称と形への渇愛を断ち切った, と世尊は[言った]
> 長い間潜んでいた闇の流れを, 生と死を, 余すところなく渡ったのだ」と,
> 五人の中で最上の人, 世尊は仰せになった.

Sn 355 の註釈 Pj II p. 351:

> anupādiseso parinibbāyī ti dasseti. 燃料の残余なく般涅槃したと示す.
> [Be: anupādisesāya nibbānadhātuyā parinibbāyī]

この世尊の答えについては, 後述本論 3.にて論じる.

[174] 経典パラレル: Th 1263 – 1278(この経の偈文の後半部分と Sn 本経は同一). 漢訳:『雑阿含』第 1221 経(巻 40,『大正』2, 333 上中);『別訳雑阿含』255 経(巻 12,『大正』2, 463 上) : 偈は始めの 6 行(12 句)を有するのみ. 漢訳序文ではヴァンギーサ尊者は師の臨終に立ち会ったとあるが, パーリ註釈の序文では師の臨終の際にそばにいなかったと説明する(Pj II p. 346).

[175] 散文部分該当用語の漢訳パラレル:『雑阿含』同 333 上中は「有余涅槃 無余涅槃」. 漢訳経典では, ヴァンギーサは阿羅漢であった師の命終に立ち会った上でこの疑問が生じているため, 師の命終後の境涯について問うた内容であると推測できる.

散文 p. 60:

ekamantaṃ nisinno kho āyasmā Vaṅgīso Bhagavantaṃ etad avoca: “idha mayhaṃ bhante rahogatassa paṭisallīnassa evaṃ cetaso parivitakko udapādi: ‘parinibbuto nu kho me upajjhāyo udāhu no parinibbuto’” ti.

一方の端に座ったヴァンギーサ尊者は, 世尊にこのように言った.「尊いお方よ, ここで私がひとり瞑想中にこのような心の考えが生じました.『わが師は parinibbuta している／したのか, あるいは parinibbuta していない／しなかったのか』」と.

上記 parinibbuta が出てくる文の内容は, 亡くなったヴァンギーサの師が命終時に般涅槃したかどうかという質問である. このことは, 散文の冒頭で parinibbuta になった直後とあり, また冒頭の偈文(下記 Sn 343)で, 世尊に kālam akāsi「時を作った = 命尽きた」と告げることから, 師の命終を契機にこの疑問が浮かんだと推測される. 世尊に問うているのは師の命終[後]の状態である.

Sn 343 pucchāma Satthāraṃ[176] anomapaññaṃ,
dhiṭṭhe va dhamme yo vicikicchānaṃ chettā:
Aggāḷave kālam akāsi bhikkhu
ñāto yasassī abhinibbutatto.

他ならぬ現世において, 疑いを切り捨てたお方, 完全な理解力のある師にお尋ねします. アッガーラヴァにおいて, よく知られ, 名声のある, abhinibbutatta であったひとりの托鉢修行者が亡くなりました.[177]

亡くなった師が生前 abhinibbutatta であったと述べる. 目前の世尊のことは,「疑いを切り捨てたお方, 完全な理解力のある師」と, 煩悩を滅し理解力も伴って, 現世において涅槃しているという意味内容で表現されている.

それに対して, 生前のニグローダ・カッパ師を描写する abhinibbutatto については, 本偈のみから「自らが涅槃している」意味であるかどうか, 判断がつかない. 生前「よく知られ, 名声のある」人であったため, 既に生前で涅槃を得ていた阿羅漢であった可能性はあるが, そうであるとの確証はない.

Sn 346 では parinibbutaṃ が用いられ, 涅槃の語彙を使い分ける.

---

[176] Be: -ram.

[177] Sn 343 用例部分のパラレル:『雑阿含』同 333 上「命終般涅槃」;『別訳雑阿含』「比丘入涅槃」; Th 1263.

Sn 346　chind’ eva no vicikicchaṃ, brūhi m’ etaṃ,
parinibbutaṃ vedaya bhūripaññā,
majjhe va[178] no bhāsa samantacakkhu
Sakko va devānaṃ[179] sahassanetto.
我らの疑いを断って下さい. 我にこのことを説いてください.
［師が］parinibbuta している／したことを
(parinibbuta である人のことを)[180]知らせてください.
豊富な理解力を持つお方よ, 我らの中で説いて下さい. 全てを見る人よ,
神々の中で千の眼を持つインドラのように.

本偈の parinibbutaṃ は, 師のことを聞いたと理解する以外に, 一般論として「般涅槃した人」を尋ねたとも解釈可能である. しかし, 師のことで自分たちの疑いを断つよう要請していることや, 本経の文脈ではヴァンギーサは一貫してニグローダ・カッパ師の命終に関して質問していることからも, 本偈も, 師の命終について尋ねていて, 一般論を問うたわけではないと考えられる. 同じ経中でこれら両語を使い分けていることから, 全く同じ意味として使用しているとは考えにくく, 異なる意味を持つことが推測される. 両語の意味の具体的相違は偈文のみからは明らかにならないが, 時点に関しては, abhi-PP の用例は現世の文脈であり, pari-PP の用例は命終[後]を意図して尋ねているといえる.

本経において, abhinibbutatta が生前に涅槃していることを表すかどうか明らかでなく, 対照的に parinibbuta が命終時に涅槃したことを示唆するという考察結果を得たが, 先行研究においてこの両語はほぼ同義とされる見解とは異なる結果であった.

そして再度ヴァンギーサは以下の質問をする:

Sn 354　yadatthiyaṃ[181] brahmacariyaṃ acāri[182]
Kappāyano,[183] kacci ’ssa[184] taṃ amoghaṃ,
nibbāyi so ādu saupādiseso,

---

178 Se: ca.
179 Be: devāna.
180 Sn 346 パラレル:『雑阿含』同 333 上 該当漢語なし; Th 1266.
181 Be; Se: -kaṃ. Norman 2006 p. 225 は, yad と atthiya を分離して考え, yad を-cariyaṃ にかかる acc. sg.とし, また atthiya を Skt. arthya (proper, fit, useful)と解釈する. PED は atthika とする.
182 Be: acarī.
183 Kappāyana とは Kappa の尊敬形.
184 Se: kiñcissa.

yathā vimutto ahu taṃ suṇāma.[185]
目的を持って, カッパーヤナは禁欲の修行を行いました.
それは彼にとってむなしくなかったのでしょうか.
彼は nibbā した[186]のでしょうか.
それとも燃料の残余がある[187] [つまり, nibbā していない]のでしょうか.
どのように解脱したのか, それをお聞きします.[188]

nibbāyi (aor)の時点は, 本偈のみから明らかではないが, それまでの文脈から, 修行の集大成として命終の涅槃を尋ねていると考えられる.「涅槃した」に対し, ādu「それとも・あるいは」と別の選択肢を示す saupādiseso「燃料の残余がある」は,「涅槃していない」と解され, 質問は即ち「涅槃したのか, していないのか」と尋ねていることになる[下記(i)の解釈].

ところが, 漢訳パラレルや過去の翻訳においては, この(i)の解釈の他に, 二種涅槃界という下記(ii)の解釈をとる先行研究も複数存在する:

(i) 涅槃したか否か

宇井 1965 p. 237, 村上・及川 1986 p. 611 (註釈に準じ),[189] Norman 2006 p. 44, 榎本 1993a p. 3, 藤田 1988b p. 10, 荒牧・本庄・榎本 2015 p. 170, 宮下 1989 p. 26.

(ii) 涅槃に 2 種あり, 無余依涅槃[界]であったか, あるいは有余依涅槃[界]であったか

[185] Be; Se: suṇoma.
[186] Sn 354: 漢訳経典に記述なし; Th 1274.
[187] upādi は通常単独では現れず, 複合語 upādisesa として現れる. 諸説見られ, 語義は確定していない. upa + ā + dā から語源を表す「燃料」という和訳をあてておく. 本項下記にてさらに論じる.
[188] 渡邊 1961 p. 126 – 127 は, パーリ聖典の Sn を含む比較的古いとされる経典の二種涅槃について,「執着」の有無であると解す. 有余涅槃(saupādisesa-nibbāna)の nibbāna は有余執着者が「死ぬ」という意味であり,「証得涅槃」のことではなく,「不還」のことであると結論づける. 従って, 渡邊氏は本経の saupādiseso を「死んで不還」と解釈する. 漢訳の一つ(『増壹阿含経』16 - 2 大正蔵 2, p. 159 上)にこの考え方がある.
[189] 村上・及川 2009 p. 380 sv. upādi は saupādisesa を「有余依の[涅槃界]」とする. また本偈註釈を「有学(非阿羅漢)のように有余依の解脱なのか」と和訳する. 有余依に涅槃界を補っているため, (ii)二種涅槃界と解しているようである. しかし, 註釈の和訳では, 有余依に解脱を補い, 有学に非阿羅漢と補うことからすると, こちらの有余依は涅槃界ではないとの解釈であろう. ここの両氏の解釈は曖昧である.

漢訳『雑阿含経』, 中村 1984 p. 75,[190] 並川 2005 p. 209 n. 58.[191]

本偈において, (ii)の解釈(二種涅槃[界])はなぜ存在するのであろうか. 本偈の「どのように解脱したのか」に関連すると推測できる. 一般的に生前・命終で区別する二種涅槃[界]は, 初期仏教の終盤に成立したとされ, 唯一 It pp. 38 – 39 [44 経]に説かれる. その相違は註釈やこれまでの研究成果によって「五蘊, つまり身体の有無」に集約される. そうであれば, Sn 354 の(ii)の解釈は, 既に亡くなっているニグローダ・カッパ師が「身体のない無余涅槃であったのか, 身体のある有余涅槃であったのか」と質問したことになり, 意味が全く成り立たない. 初期仏典の涅槃の語彙を調査した中で, 二種涅槃[界]を設定する経は It pp. 38 – 39 [44 経]のみであり, 従って本経での質問を(ii)の解釈として理解することには無理があると筆者は考える.

漢訳においては, 不還[192]を有余涅槃とする教理が見出せる. It pp. 38 – 39 [44 経]に対応する『増壹阿含経』16 - 2 大正蔵 2, p. 159 上によると,「不還が上界において阿羅漢果を得て般涅槃することを有余涅槃とする」(宮下 1989 p. 30). また Sn 725 cetovimutti, paññāvimutti の註釈 Pj II p. 504 では,「心解脱は不還」との一説が示される. 筆者が研究対象とした初期仏典においては, これらの説を裏付ける記述は見出せない.

ここで, 上記二種涅槃の解釈にも関係する upādi としばしば混同される upadhi について以下に整理しておきたい.

upādi と upadhi について

saupādisesa は, 接頭辞 sa (with, 所有を表す) + upādisesa である. 複数の辞書にお

190「かれは, 消え滅びたのでしょうか. それとも生存の根元を残して安らぎに帰したのでしょうか」との和訳. この意味は把握しづらいが, パラレルである Th 1274 の注記(中村 1982 p. 292)を見る限り, 有余涅槃の概念の萌芽と見做しているようである. また, nibbāyi を Sn 本偈では「消え滅びた」と訳し, パラレルである Th では「安らぎに帰した」と訳す.

191 (i)の解釈をとる村上・及川 1986 を引用しつつも, 有余依に「涅槃界」を追記して,「あるいは, 有学者たちのように, 有余依[涅槃界]であるのか, と尋ねることである」と, 漢訳に準じる(ii)の解釈のようである.

192 不還は, 四向四果の第三段階である. 藤田 1959 pp. 72 – 73 は, 不還果は四向四果の中の四沙門果の型が成立する以前からあり「イティヴッタカ(It pp. 95 - 96)によると, 欲軛(kāmayoga)を斷つたが未だ有軛(bhavayoga)に結ばれてゐる者を不還と名付け, それは欲軛と有軛との何れにも結ばれてゐる『還るもの (āgāmin)』(凡夫)よりは優位にあるけれども, その何れをも斷つた阿羅漢よりは劣位にあるとせられる」とし「不還という術語は, はじめから, 欲界という現状には還らない(が, しかし色界〔乃至無色界〕には化生する)という意味で考案されたもの」と解釈する. Sn において, anāgamin「不還」は Ch. 3: Dvayatānupassanāsutta の散文に見出せるのみである.

いて確認したところ,[193] 由来は upādi = upādāna (upa + ā + √dā「自分の(ā)ほうへ(upa)取り込む・執着する(√dā)」)あるいは upadhi「存在の根本要素, 執着」のいずれかとされる.

筆者は, 先に少し触れた通り, upādi の語源は upa-ā-√dā「自分のほうへ取り込むこと」であり, an-ā-√dā「自分に取り込まないこと」は涅槃の語彙にかかる形で(最古層 Sn 915: nibbāti; anupādiyāno, 古層 Sn 638: nibbuto; anupādāya), また併記される形で(Sn 630: nibbutaṃ; anādānaṃ)現れる. 煩悩が滅していて取り込み(取著)がない涅槃という意味である.[194]

同じ意味で, 散文において, anupādāparinibbāna「取り込むことのない parinibbāna」という成句が現れるようになる(例: MN I p. 148, SN IV p. 48, SN V p. 29, AN I 44, MN III p. 187 = AN I p. 142 後述 2. 3. 1.参照).[195] さらに, 散文では, anupādisesā nibbānadhātu「燃料の残余のない(無余依)涅槃界」という成句も使用され用法の多様性が韻文に比べ確認できる. この成句は anupādisesāya nibbānadhātuyā parinibbāyati/parinibbuta「燃料の残余のない(無余依)涅槃界に parinibbā する／

---

[193] Cone I p. 482 sv. upādi は, from upādiyati? BHS upādi, upadhi とし, *material support (the result of previous* kamma); *taking as one's own, grasping*「物質的支え(以前の行為の結果); 自分のものとして取り込む・掴むこと(執着)」とする. PED p. 149 には upādi = upādāna (upa + ā + dā「自分に取り込む」)で, fuel「燃料」, supply「供給物」, grasping/attachement「執着」, having some fuel of life left「命の燃料がまだ残っている」ともある. upādāna に関し CPD p. 488 には, basis, esp. said of a fire = fuel「火の元 = 燃料」及び clinging, grasping「執着, 掴むこと(執着)」とあり, Cone I p. 481 は, taking as one's own, grasping「自分に取り込む・掴むこと」及び fuel「燃料」とした上で, it is often difficult to determine which meaning is intended; both reinforce each other: previous grasping produces fuel, which is itself then grasped「このどちらかを判断するのは困難な時が多い. 互いに補完し合う関係. 以前の取り込みが燃料を生み, その燃料自体が取り込まれたものとなる」. また BHSD には upadhi は(⇐ Pāli upadhi, upādi) 1. substratum of continued existence; attachment; bond uniting one to existence, 2. material things「[パーリ語 upadhi, upādi と同じ] 1. 連続している存在の根本, 執着, 存在と人を繋ぐもの; 2. 物質」とある.

[194] 涅槃の語彙が同じ偈に出てこない単独使用の用例は, 最古層 Sn 800; 876, 古層 Sn 363; 470; 546 = 572, 751 = 753. また upadhi が同じ偈に現れる場合もある(Sn 363: upadhīsu, Sn 546: upadhī). 村上・及川 1988 p. 216 は, Sn 546 で anupādāno に併記される upadhī te samatikkantā「あなたには諸々の所有物が越えられている」という概念が, Sn 特有であるとする. 何故なら, 本経 Ch. 3: Sabhiyasutta「サビヤ経」のパラレル文献である漢訳『仏本行集経』38 – 39 (『大正』3, 831b – 835b)および Mv III pp. 389 – 401 には本偈のパラレルがないからである. 従って, Sn 546 は「Sn が強調する仏陀観が示されている」(p. 216)と解釈する.

Cf. 本偈 upadhi に関して註釈 Pj II p. 436 は以下 4 種と説明する:

> *upadhī* ti khandhakilesakāmaguṇābhisaṃkhārabhedā cattāro.
> upadhī〈諸々の所有物〉とは, 蘊・煩悩・欲望の対象・潜在的形成作用の 4 種である.

[195] Ee: anupādā parinibbāna を Be に倣い修正. anupādā vi√muc としてより多く現れる(例: vimutto: DN I p. 17, MN I p. 235, SN II pp. 18; 48; 115; 253, SN V p. 194; 205, vimokkho: AN V p. 64, cittassa vimokkho: MN II p. 265, AN I p. 198, vimuccanti: MN III p. 187 = AN I p. 142 (CPD p. 199 sv. an-upādā).

parinibbuta である・した」という定型句として複数例見出せる. この定型句については, 散文の用例検討において論じることとする(後述 2. 3. 4.参照).

一方, 辞書や先学では upādi を upadhi とする説も見られる. upadhi は前つづり upa「〜に・の方へ」と√dhā「置き定める」由来で, 自分の手に取る, 自分のものにする(med.)ということから, その者の「所有物」を表す. 筆者は上記に述べた通り, upadhi は, この語源通り, つまり, その人の所有物一般であり, その中には本人の存在自身や身体や所有欲も含まれ, 従って, 厳密には前記の upādi とは語源および語義を異にすると考える.

≪註釈: 生前に涅槃を得ていた阿羅漢の命終の涅槃≫

本経の註釈 Pj II p. 346, 347 は, ニグローダ・カッパ師に, 手の無作法などの習慣が, 阿羅漢になってからも見られていたため, ヴァンギーサに疑問が生じたと説明する. Sn 354 の註釈 Pj II p. 350 は「無学」か「有学」かと補う.

散文を含む本経全体として筆者は上記のように考察した. しかしながら, 散文を切り離し, 本経偈文だけで経を見てみると, ヴァンギーサが発した parinibbuto や nibbāyi が, 師の命終時あるいはそれ以後を意図していたのか, 師の生前の状態を亡くなった後になって確認したくなったのか, はたまた, pari の有無によってヴァンギーサはそれぞれ異なる涅槃を意図して質問したのか等, はっきりしない.

師が生前に涅槃していたのかそうでなかったのかが疑問であったとすれば, abhinibbutatta は生前の涅槃, 即ち阿羅漢であったことを意図していなかったということになり, 修行中の鎮まった自己を持つ者というほどの意味であったということになる. 一方, 命終[後]を意図していたとすれば, abhinibbutatta は生前阿羅漢であった可能性が示唆される. あるいは, 鎮まった自己を持つ非阿羅漢者としてヴァンギーサが認識し, 修行に励んでいた彼の師が, 命終時に般涅槃したのか, つまり修行が最終的に報われたのかどうかを尋ねたとの解釈もあり得よう.

このように, 本経は, 韻文のみで読み解こうとすると, 涅槃に関して様々な解釈の可能性を許す内容であることが読み取れ, 先行研究において涅槃の概念がいまだ曖昧であるとされる所以が窺える.

しかし, いずれにせよ, 亡くなった修行者が修行完成者であったかどうか, 生死・輪廻を現に止めたのかどうか, つまり, 涅槃したかどうかについては, 世尊の弟子達にはわからないことであり, 世尊に質問をして確認していることは明らかである. 修行の果報に関する関心が高かったことが背景にあることが示唆されよう. Sn 354 で「涅槃した」ことに相対する saupādiseso「燃料の残余があるのか」という疑問に関して, Sn Ch. 3: Dvayatānupassanāsutta の散文部分で, 世尊が繰り返し説く upādisese anāgāmitā「燃料の残余があれば不還の状態である」(Sn p. 140 他)と

いう教理へと展開する道筋が指摘できよう．この経には韻文部分に parinibbuta, nibbāna, parinibbāti の用例が出てくるため，後述にて考察する(2. 2. 3. 3.参照).

Sn 以外の全用例

では，次に Sn 以外の初期仏典の-abhinibuta-を伴う複合語の全用例を列挙し考察する．Sn 以外では abhinibbutatto: Th 1263 (= Sn 343 前記参照); Ud III p. 29 偈文, abhinibbutattā: Ja II p. 383 (no. 277); Ja III p. 14 (no. 303), diṭṭhadhammābhinibbutā: MN I p. 187 偈文 = AN I p. 143 偈文; AN III p. 311 偈文に用例がある．Sn の用例を含めても全 13 例で(Sn 中の 6 例は既に考察済み)， diṭṭhadhammābhinibbutā の 3 例はパラレルで同じ内容である．これらは，初期仏典における使用が韻文のみで用例数も少ないことから，古い用法であったといえよう．以下に Sn 以外の用例を挙げる．なお, Ud-v I p. 396 (30 経 17 偈)に 1 例だけ dṛṣṭadharmābhinirvṛta が見出せるので，最後に参考までに記す.

Ud III p. 29 Nanda-vagga 偈文: abhinibbutatto

賤民の言葉で語りかけるピリンダヴァッチャ比丘のことを，ブッダ世尊は，内に憎しみを抱かずしていることであり, 500 回バラモンの家系に生まれた者で，長い間そうしてきたからなのだと，他の比丘達に告げて，以下のウダーナを唱える(Sn 469 と内容類似).

> yamhi na māyā vattati na māno, yo khīṇalobho amamo nirāso
> paṇunnakodho abhinibbutatto, so brāhmaṇo so samaṇo sa bhikkhū ['ti]
> その人には偽りも慢心も働かず，貪りを滅し，「私のもの」という
> 思いなく，願望なく，怒りが除かれ, abhinibbutatta である．
> そういう人は[真の]バラモンであり，沙門であり，托鉢修行者である．

abhinibutatta の併記表現として，「偽りも慢心も働かない」「怒りが除かれ」等とあり，文脈は現世のことであり，内容は煩悩や欲望に関わることである．前述した Sn 469 同様(2. 2. 3. 2.参照)，主語である人は，既に煩悩を滅していて欲望のない，心鎮まった状態である涅槃の一側面を表すことが示唆される.

≪註釈: 生前の涅槃≫

註釈 Ud-a p. 195 では，煩悩がすっかり消え，冷たくなった(鎮まった)状態(sīti-bhūta)との表現を補って説明する.

次の Ja no. 277 のみ, 人ではなく鳥に対して使われている例である. 従って,「涅槃」を意味しないことは明らかである.

Ja II p. 383 [no. 277] abhinibbutattā

Romakajātaka「ローマカ前世物語」と題したこのジャータカ物語は, ブッタ世尊が鳩の首領であった時の話である. 近くの庵に住んでいた詐欺師の苦行者が, その鳩らを捕らえて食べてしまおうと企てたところ, 鳩の首領はそれに気付き, 正体を見破ったと明かし, 詐欺師の苦行者はその場所に住めなくなって逃げていく. 以下は甘い言葉で鳩を捕まえようと, 苦行者が語るくだりである(Ja no. 277):

> vassāni paññāsa samādhikāni
> vasimha selassa guhāya romaka,
> asaṃkamānā abhinibbutattā
> hatthattam āyanti mam' aṇḍajā pure. (79)
> 我々は 50 有余年の年月の間, 岩窟に住んでいた. 羽毛ある者よ.
> かつて卵生のもの(鳥)たちは,
> 疑うことなく abhinibbutatta であり, わたしの手中に来ていた.

これまで全て人の状態・境地・資質に関する表現としての abhinibbutatta であったが, 本偈では, 複数の鳩に対して abhinibbutatta が使われている. 人間に対して用いているわけではなく,「自らが涅槃した」とは解釈し得ない. 疑いがなくなり, 鳥自身, 内面でも, 穏やかで安らかな状態であるという意味にとれる.

Ja III p. 14 [no. 303]: abhinibbutattā

ブッダ世尊が, バーラーナシー王であった時の話である. コーサラ国のダッパセーナ王に捕らえられ, 頭を下にして吊るされたが, バーラーナシー王は怨まず慈愛の心で瞑想し, その結果, 縄がほどけ, 空中に足を組んで座った. 一方, 高熱に苦しむようになったダッパセーナ王は, バーラーナシー王に許しを請い, 詩を唱えた. ダッパセーナ王が唱えた詩の最後の部分に abhinibuttattā が出てくる:

> panujja dukkhena sukhaṃ janinda
> sukhena vā dukkham asayhasāhi
> ubhayattha sattā abhinibbutattā

sukhe ca dukkhe ca bhavanti tulyā ti
苦によって楽をたたき出した後, 王よ.
あるいは楽によって苦をたたき出した後, 耐え難きを耐える人よ,
abhinibbutatta である人々は両方, つまり,
楽においても, 苦においても等しいものとなす.

文脈から, abhinibbutattā が示す人々はこの物語の中で現世に生きる人々のことである. この人達は, 苦も楽もたたき出しているとある. 既に涅槃を得た人達のことであるかもしれないが, 本研究で調べた範囲で, この内容で涅槃の語が現れる用例はなく,「涅槃」を意味するかどうかはわからない.

MN I p. 187 偈文& AN I p. 142 偈文 [196]**: diṭṭhadhammābhinibbutā**

MN I Devadūta-sutta「神々の使い経」(pp. 178 - 187)の最後の詩の部分に出てくる. 本経は, 世尊が, サーヴァッティーに近いジェータ林のアナータピンディカの園に滞在していた時の話である. 托鉢修行者達に, 現世での身・口・意による善行を行った者は, 天界か人間界に生まれるが, 悪行を行った者は, 死後ヤマの詰問を経て, 苦しみの世界に赴くと説き, その苦しみについて詳しく説いたものである. そしてヤマが思ったことを「この世界において諸々の悪行をなす人々は, そのように多様な罰を受けるらしい. ああ, 必ず私は, 人間の存在を得ますように. そして, 世界に, 阿羅漢であり, 正しく覚られた如来が現れますように. そして, 私はその世尊を崇拝しますように. そしてその世尊が, 私にダルマをお説きくださいますように. そして私は, その世尊のダルマを理解できますように」(Ye kira bho loke pāpakāni kammāni karonti, te evarūpā vividhā kammakāraṇā karīyanti: — Aho vatāhaṃ manussattaṃ labheyyaṃ, Tathāgato ca loke uppajjeyya arahaṃ sammāsambudho, tañ cāhaṃ Bhagavantaṃ payirupāseyyaṃ so ca me Bhagavā dhammaṃ deseyya, tassa cāhaṃ Bhagavato dhammaṃ ājāneyyan ti)と話した後, ここに説いた全てのことは, 世尊自身が自ら理解し, 自ら見, 自ら知った(sāmañ ñātam, sāmañ diṭṭham, sāmañ viditam) こととして語っていると言い, 最後に詩を唱える:

coditā devadūtehi
te dīgharattaṃ socanti
ye ca kho devadūtehi
coditā nappamajjanti,
ye pamajjanti māṇavā,
hīnakāyūpagā narā.
santo sappurisā idha
ariyadhamme kudācanaṃ

[196] AN は MN のパラレルで, 神々の使いの数の相違以外ほぼ同じ内容である.

upādāne bhayaṃ disvā　　jātimaraṇasambhave
anupādā vimuccanti　　jātimaraṇasaṃkhaye
te khemapattā sukhitā　　diṭṭhadhammābhinibbutā
sabbaverabhayātītā　　sabbadukkhaṃ upaccagun [ti]

神々の使い達に促されて[も]漫然としている青年たち,
彼らは, 劣った身を持つ人間たちとして, 長きにわたり憂う.
しかし, この世で善人たちは, 神々の使い達に促されることで,
立派な人のダルマ(教え)に対し, いかなる時も漫然としていることなく,
生と死が起こる燃料(取り込み・取著)に対し, 恐れを見た後,
生と死の滅尽において[燃料を]取り込まない故に, 解脱する.
そういう彼らは, 安穏を得ていて, 安楽となって,
diṭṭhadhammābhinibbuta であり,
あらゆる憎悪・恐れを超えて, 全ての苦しみを超えた.

本経においても, 最古層 2 例同様(前記 Sn 1087; 1095 参照)「ダルマ(教え)を説いてください」との言葉がある. それは悪行の結果赴く苦しみの世界を知り尽くしたヤマが言った言葉である. ダルマとの関連から, diṭṭhadhamma の意味はここでも一般的な「現世にて」という意味にとる以外に「ダルマ(真理・法則性)を見て[直ちに]」とも理解可能である.

生死・輪廻の滅尽に関する内容および取り込まないとの表現は, 最古層 Sn 1094 の nibbāna の定義に通じる. その後に diṭṭhadhammābhinibbuta である人達は「苦しみを超えた」[upa-ati-√gā の aor. pl]とあり, 文脈からも現在の状態を表すことが示唆される. さらに, khemapattā「安穏を得ている」や sukhita「安楽となった」がこの語にかかり, 一般的に「安楽」や「安穏」とは涅槃の異名とされていることからも(例: Thī 476, MN I p. 167. 前述 2. 1. 1. 1.; 2. 3. 1.参照), これらの人々は「現世で涅槃を得ている」と解釈可能であり, 前述の(2)の解釈(今世で生死・輪廻に影響されない = それを超越する)が導かれる.

本経においてヤマが人間の存在を得たいと望んでいることから, その大前提に, 涅槃を得る, あるいは解脱するためには, 現世での人間としての存在が必要であることが示唆される. 当時の仏教の考え方が示されているように思える. 解脱できるのは人間のみという考え方は、仏教だけではなく, ジャイナ経でも信じられていたようである.[197] 現世で修行が完成しなければ, 天界に生まれ変わり, そこで般涅槃するという教理も初期仏典の後期に見出せる(後述 2. 3.参照). 但し, その

[197] こういう考え方をジャイナ教では bodhidurlabhatva「覚りの得がたいこと」と称し, 白衣派聖典の古いところでは例えば Uttarajjhāyā 3 章及び 10 章で明確に示されている.

場合であっても, まず人間界での修行完成者を目指すという点では, まず人間としての存在が必要なのであろうと考えられる.

また本経での upādāna「燃料」の記述から, 前記 Sn Vaṅgīsasutta の saupādisesa, および anupādisesa の解釈を考えてみると, saupādisesa「燃料の残余がある状態」に関して, ここでは生と死が起こる upādāne「燃料(取り込み・取著)」とあり, 輪廻を起こす要素を表す. 他方, anupādisesa「燃料の残余がない状態」は, ここでは anupādā「燃料がない故」生と死の滅尽において解脱することとあることから, 解脱・涅槃を表すことがわかる. ここの解釈に準ずるならば, Sn Vaṅgīsasutta でのヴァンギーサの質問が, 輪廻の燃料のない涅槃の状態へ至ったのか, 輪廻の燃料の残余があって「涅槃していないのか」と尋ねたことの裏付けとなる.

AN III p. 311 偈文: diṭṭhadhammābhinibbutā

AN III p. 311 は, 恐れについて述べた経である. 恐れは kāmānam ... adhivacanaṃ「諸々の欲望を指す言葉」であり, 欲求や熱望に縛られて, 今世も来世も, 恐れから解放されることはないと説く. 最後に以下の詩で結ぶ. 詩の後半部分は, 上記 AN I p. 142 の詩の後半部分とほぼ同じであるため, 考察結果は, 前記 MN I p. 187 に準じる:

> bhayaṃ dukkhaṃ rogo gaṇḍaṃ saṅgo paṅko ca ubhayaṃ:
> ete kāmā pavuccanti, yattha satto puthujjano.
> upādāne bhayaṃ disvā jātimaraṇassambhave
> anupādā vimuccanti jātimaraṇasaṃkhaye.
> te khemapattā sukhino diṭṭhadhammābhinibbutā
> sabbaverabhayātītā sabbadukkhaṃ upaccagun [ti]
> 恐れと苦しみと病気とできものと執着と沼地のふたつ,
> これらは世俗の人が執着している諸々の欲望と言われる.
> 生と死が起こる燃料(取り込み・取著)に対し, 恐れを見た後,
> 生と死の滅尽において, 燃料がない故に, 解脱する.
> そういう彼らは, 安穏を得ていて, 安楽となって,
> diṭṭhadhammābhinibbuta であり,
> 全ての憎悪・恐れを超えて, 全ての苦しみを超えた.

Ud-v I p. 396 [30 経]: dṛṣṭadharmābhinirvṛtāh

パーリ語 diṭṭhadhammābhinibbuta にあたる Skt.である dṛṣṭadharmābhinirvṛta の用

例が一例だけ説一切有部で編纂された Ud-v I pp. 392-407 [30 経] Sukhavarga「安楽に関する偈文集」第 17 偈に見られるので, 参考までに記しておく.

Sukhavarga は安楽に関する 52 の偈文から構成され, Dhp, Ud に対応する偈が複数ある. パーリ語同様, 語形は nir-√vṛ由来であるが, 原意は「[火が]消える」と捉えられていたことがわかる.[198]

> kṣemaprāptā hi sukhitā dṛṣṭadharmābhinirvṛtāḥ[199] /
> sarvavairabhayātītās tīrṇā loke viṣaktikām // 17
> 何故なら, 安穏を得て, 安楽で, dṛṣṭadharmābhinirvṛta している人達は
> 全ての憎しみと恐れを越えて, 世間において執着を越えている.

この偈にパーリ文のパラレルはないようであるが, Sn 1087, Ud III p. 29 および AN III p. 311 偈文に類似性が見られる. パーリ語 diṭṭhadhammābhinibbuta と同じ意味で使われていることが, この偈から確認でき, 現世において涅槃している状態を表す.

abhinibbuta の考察結果

最古層同様, 古層経典においても abhinibbutatta は全用例において現世の文脈であり, 鳥の用例を除く古層の用例では, 現世において涅槃した状態を意味する可能性はあるが, 確証がなく判別がつかない用例が見出せた(Sn 343 = Th 1263, Ja III p. 14). それに対して, Sn 456: abhinibbutatto は世尊が自身をそう語る場面であり, 従って現世において涅槃している人の属性を表す. 同経中に再度使われるこの語(Sn 469)も同様であると判断可能であり, またパラレルである Ud III p. 29 についても, 主語である人は, 既に煩悩を滅していて欲望のない, 心鎮まった状態である涅槃の一側面を表すことが示唆される.

文脈から判断して, abhinibbutatta は「鎮まった自己を持つ者」「自分自身を鎮めた状態」ということであり, その状態を「鎮火」になぞらえて abhinibbutatta と表現したと推測できる. このような attan の用例は, 例えば, Dhp 380 によっても確認できる:

---

[198] BHSD p. 304 sv. nirvṛta: ppp. to Skt. nir-var-, but even in Skt. used in ways which suggest secondly association with nir-vā- ; so in Skt. extinguished, of fire.「nir-var-の PP であるが, Skt. においても nir-vā-との二次的関連を示唆する形で使われる; 従って, 火が消えている」.

[199] 参照した初版には dṛṣta-/-nirvṛta とありṛが母音記号では表されていないため修正した (Ānandajoti Bhikkhu による 2nd edition 2005 にて確認した).

attā hi attano nātho attā hi attano gati /
tasmā saññāmay' attānaṃ assaṃ bhadraṃ va vāṇijo. //
何故なら，自らが自己の保護者であり，自己のよるべであるからだ.
それ故，自己を制御するべきである，商人が優れた馬を制御するように.

ここから, attan/ātman は，一般的な概念での「自分」「自己」を表していると考えられる.[200] そして自己に主眼を置き，自身の涅槃を強調する傾向は特に最古層経典において顕著であり，例えば Sn 940 や 1062 においては nibbānam attano「自分の涅槃を」学ぶべし，と世尊が述べており，最古層には attan が繰り返し話題となる.

≪註釈: abhinibbutatta を abhinibbutacitta と説明≫

一方，註釈は, abhinibbutatta の attan を citta「心」に言い換える(例: Sn 343, Sn 456, Ud III p. 29, Ja no. 277). このことから，註釈家の時代には,「霊魂」や「根源的なアートマン」を意味する可能性のある attan の使用を避けていたととれる.[201] 聖典成立時から註釈の時代における attan の思想的展開が窺える.

古層文献より後代，註釈文献より古いとされる散文経典においても attan/ātman の使用を避ける例が見出せる. 畑 2006a pp. 2, 3 は, DN I Brahmajālasutta「梵網経」p. 34 および MN CII Pañcattayasutta「五三経」p. 228 を挙げ，否定される外道の説では attan/ātman を使用するが，ブッダ自身は satta「人・生きもの」と言い換えていることを指摘する. この点で散文経典およびより後代の註釈文献とに共通傾向が確認され，より古いとされる韻文経典との相違が見て取れる.

diṭṭhadhammābhinibbuta は diṭṭhadhamma と「現世にて」という成句を伴うため,「現世」を強調していると考えられるが，用例を含む文あるいは用例が出てくる文脈の中で，生死・輪廻の滅や超越が一緒に説かれる場合が多い(例: 前記 Sn 1095, MN I p. 187G; AN I p. 143G; AN III p. 311G). このことは翻って，生死・輪廻を止めて涅槃することは，命終[後]であろうという理解が，ブッダ世尊や世尊の弟子である修行完成者達を除く，当時の一般的涅槃観であった背景が推測される. そのような時代背景の中，生死・輪廻の滅や超越が，現世において達成されていて，生前に涅槃している状態を表すこの複合語は，象徴的に前述の(2)の解釈(今世で生

[200] しかしながら，この接尾辞は他にも多くの用例があり，簡単には片付けられない問題である.
[201] 註釈家の時代とほぼ同時代とみなされている説一切有部系『倶舎論』38 偈[Abhidharmakośabhāṣya]の説明においても同様に attan/ātman の表記を実は citta であると説明する. ahaṃkārasanniśrayatvāc cittam ātmety upacaryate「我執の拠りどころ故に citta が ātman と仮に言われるのである」.

死・輪廻に影響されない = それを超越する)が示唆されよう. この場合, -abhi の「〜に向かって」という本来の意味は表出せず, nibbuta が nibbāna の PP の役割を果たしていることが支持される.

2. 2. 3. 3. parinibbuta

まず, parinibbuta が生前に涅槃していることを明確に示す Sn Ch. 2: Sammāparibbājaniyasutta「正しい遊行経」の用例を検討する. なお, Sn の考察の後, Sn 以外の parinibbuta の用例として, SN I [8 経]: Vaṅgīsa-thera-saṃyutta「ヴァンギーサ長老相応経」を取り上げる.

Sn の用例

Ch. 2: Sammāparibbājaniyasutta (Sn 359, 365, 370)

本経は, 托鉢修行者の遊行の正しい在り方についての質問に対し, 世尊 (Bhagavā Sn 375)が答えて 15 偈の説法を行い, 最後に質問者が世尊に合意して経を結ぶ.

Sn 359 pucchāmi muniṃ pahūtapaññaṃ
tiṇṇam pāragataṃ[202] parinibbutaṃ ṭhitattaṃ
nikkhamma gharā panujja kāme
kathaṃ bhikku sammā so loke paribbajeyya.
豊かな理解力を持つ寡黙の聖者に, 向こう側へと渡り終えた,
parinibbuta していて, 自己が確立しているお方に[私は]尋ねます.
家から出て諸々の欲望の対象を追い払った後, どのように
その托鉢修行者は世間において正しく遊行すべきでしょうか.

Sn 365 vacasā manasā ca kammanā[203] ca
aviruddho sammā viditvā dhammaṃ
nibbānapadābhipatthayāno
sammā so loke paribbajeyya.
言葉によって, 思考によって, 行為によって,

[202] Be: pāraṅgataṃ.
[203] Be; Se: kammunā.

妨げられることなく, 正しくダルマ(真理/教え)を知った後,
nibbāna の境地／への足場を望みつつ,
その者は世間において正しく遊行すべきである.

Sn 370 āsavakhīno[204] pahīnamāno
sabbaṃ rāgapathaṃ upātivatto
danto parinibbuto ṭhitatto
sammā so loke paribbajeyya.
慢心を打ち捨てた漏尽者であり, あらゆる熱望の道を越えて,
自制し, parinibbuta していて, 自己を確立している者としてその者は,
世間において正しく遊行すべきである.

Sn 359 では, 質問者が修行完成者である目前の世尊のことを parinibbutaṃ と語るため, その時点は生前である. この parinibbuta である世尊の属性として「理解力を持つ」とあることから,「理解力」は涅槃に深く関係する語であると言える. 同様に前述古層 Sn 204 も paññā「理解力」を有することが涅槃の語彙とともに使用されていた. 次に,「向こう側」とは仏教術語で「彼岸」, 即ち, 覚り・涅槃の境地を表すことから, 輪廻を渡り終え既に彼岸へと達しているという生死・輪廻に関する内容が示される. 煩悩の滅・理解力・輪廻の超越という複数の涅槃の側面を本偈は表している.

Sn 365 の nibbānapada は求める対象であり,「涅槃の境地」あるいは「涅槃への足場」との 2 種の解釈が可能である. 本偈の文脈は現世であるが, 本複合語中の nibbāna の時点についてははっきりしない.

Sn 370 に, parinibbuta である人は「世間において正しく遊行すべきである」とあり, parinibbuta の時点は生前である. 世尊を描写する Sn 359 を受けた共通表現が見られる(parinibbuta + √sthā).「熱望の道を越える」と記述されており, 内容的に最古層 Sn 1109 で示された煩悩の滅につながる. また本偈では, āsavakhino「漏尽者」が併記されている. āsava は元来「漏入・流入」を意味し, この含意は,「取り込み」に類似し, 最古層の涅槃の定義のひとつである anādānaṃ「取り込まないこと」につながる語であるといえる [205]. この考察結果から, 本偈の主語は「涅槃している人」と考えてよいことが導かれる.

---

[204] Be; Se: -khīṇo.

[205] āsava については榎本 1983; 1979 参照. 散文 MN I pp. 160 – 175 [26 経] Ariyapariyesanasutta では, 禅定(八禅, 想受滅)の説明が最後にあり, 禅定に住し「そして, この理解力によって見て, 諸々の漏の完全なる滅が生じる」(paññāya c' assa disvā āsavā parikkhīṇā honti)とあり, 理解力と諸漏の滅(漏尽)の密接な関係が示唆される.

≪註釈: Sn 359 は生前の涅槃; Sn 365 は命終の涅槃; Sn 370 は生前の涅槃≫

Sn 359 の parinibbuta を註釈 Pj II p. 362 は「燃料の残余のある(有余依)涅槃によって」と説明する. Sn 365 の註釈 Pj II p. 364 から, nibbāna の内容は「燃料の残余がなく蘊(心身の構成要素)が消える境地」と解釈する. Sn370 註釈 Pj II p. 365 は, parinibbuta の内容は「煩悩の火が鎮まることによって冷たく[清涼に]なった状態」とする. kilesaaggi「煩悩の火」と煩悩が火的要素であることを明示し, √śam「鎮まる」の派生語を使用して, parinibbuta を sītibhūta に置き換える.

Ch. 3: Dvayatānupassanāsutta (Sn 724 – 765)

本経では, 二様の考察によってダルマ(真理・法則性)を正しく理解するよう世尊が参集した托鉢修行者達に語る. ほぼ同じ形式の導入(散文)後, 関連する世尊の説法が偈文で続く. 苦しみがある状態と苦しみが生じない状態(二様)を主題として, 苦しみの原因として, 所有物(upadhi), 無明(avijjā), 形成作用(saṃkhāra), 識(viññāṇa), 接触(phassa), 感受(vedanā), 渇愛(taṇhā), 燃料(upādāna), 悪行(ārambha), 糧(āhāra), 動揺(iñjita)等, 縁起説や五蘊の要素も一部出てくる. また, 繰り返される散文では,「托鉢修行者達よ, このように二種の考察を正しく行い, うつつを抜かすことなく, 熱心に, 自己を奮い立たせて励んでいる托鉢修行者には, 2 種の果報のうちのいずれかの果報が期待される. 現世での理解, あるいは, 燃料の残余があれば不還の状態である(p. 140 他)」(evaṃ sammā-dvayatānupassino kho bhikkhave bhikkhuno appamattassa ātāpino pahitattassa viharato dvinnaṃ phalānaṃ aññataraṃ phalaṃ pāṭikaṃkhaṃ: diṭṭhe va dhamme aññā, sati vā upādisese anāgāmitā)と修行の成果についても 2 種語られる.[206]

このように散文では「現世の理解, あるいは燃料の残余があれば不還の状態である」と説かれるが, 続く偈文群では, 不還の思想は表されず, [般]涅槃かそうでないかの文脈で語られ, 散文部分と韻文部分が一致してないことが示唆される.[207]

---

[206] 本経では数字をもって整えられる諸教理へと後に展開する教えが説かれている. 散文部分では四向四果, 韻文部分からは縁起説(例:「十二因縁」)である. 荒牧 1988 pp. 91- 92 は本経を「『四つの根本真理(四諦)』の仏教教理を確立しようとする」「最新層の韻文経典群」の一経と位置づける.

[207] 村上・及川 1988 p. 534 n. 1 は「散文部分は本経特有であるらしい. してみると, 本経の偈の方が古い素材なのであろう」, さらに偈文は個別に説かれていた教えを集めたもので, 偈の収集後に散文が追記された可能性を指摘する(Bodhi 2017 p. 32 も同様の見解を示す). 註釈によると Sn 727: cetovimutti が不還果との一説を挙げており, その解釈を採用すれば, 本経の散文とも乖離がなくなる可能性がある.

不還(anāgami(n))および不還の境地(anāgamitā)は Sn では本経以外見出せない. Ch. 2, 1: Ratanasutta「宝経」(後述 2. 2. 4.参照) Sn 227 (≒ Khp 6, 6) に 8 人の人間(puggalā aṭṭha), 四対

以下に本経に出てくる parinibbuta の 4 例(Sn 735; 737; 739; 758)について検討する:

Sn 735　etam ādīnavaṃ ñatvā ‘dukkhaṃ viññāṇapaccayā’
viññāṇūpasamā[208]　bhikkhu nicchāto parinibbuto [ti]
「認識機能に依って苦が[生じる]」という，このことを患いだと理解して，
認識機能の鎮まり故に，托鉢修行者は，欲望なく，parinibbuta である．

Sn 737　ye ca phassaṃ pariññāya aññāya[209]　upasame[210]　ratā,
te ve[211]　phassābhisamayā nicchātā parinibbutā [ti]
そして，接触を完全に認識して，理解して，鎮まりを楽しんでいる，
そういう人々は，まさに接触を洞察していて，欲望なく，
parinibbuta である．

Sn 739　etaṃ ‘dukkhan’ ti ñatvāna mosadhammaṃ palokinaṃ
phussa phussa vayaṃ passaṃ evaṃ tattha virajjati,[212]
vedanānaṃ khayā [213]bhikkhu nicchāto parinibbuto [ti]
[Sn 738　感受されるものは何であれ]
壊れることになる虚妄なもので，このものは「苦しみ[である]」と
理解して，触り触っては，消滅を見つつ，このようにそこから心離れる．
諸々の感受機能の滅ゆえに，托鉢修行者は，欲望なく，parinibbuta である．

Sn 758　amosadhammaṃ nibbānaṃ tad ariyā saccato vidū,
te ve saccābhisamayā nicchātā parinibbutā [ti].
虚妄ではないダルマ(真理・法則性)である nibbāna を,[214]
それを立派な人達は真実と知る．彼らは，まさに真実を洞察して，
欲望なく，parinibbuta である．

(cattārī etāni yugāni)とあり，註釈 Pj I pp. 182 – 183 は，8 とは「4 つの入る者達および 4 つの成果に立つ者達」(cattāro ca paṭipannā cattāro ca phale ṭhitā)と四向四果の教理のことと説明する．数字を挙げて，教理が成立していたことを示唆する本経および Ratanasutta は，Sn 古層の中でそうでない経典もあるため，比較的新しい経である可能性が高いといえるであろう．

[208] Be; Se: viññāṇūpasamā.
[209] Se: paññāya.
[210] Be: aññāyupasame.
[211] Se: tepi.
[212] Be; Se: vijānati.
[213] Se: yeva natthi dukkhassa sambhavoti.
[214] MN III p. 245 [140 経] dhātuvibhaṅgasutta「界分別経」に amosadhammaṃ nibbānaṃ が Sn 758 と同様の散文文脈で現れる(後述 2. 3. 2.参照).

Sn 765　ko nu aññatra-m-ariyehi[215] padaṃ sambuddhum[216] arahati,
yaṃ padaṃ samma-d-aññāya parinibbanti anāsavā [ti].
立派な人達でなければ誰が, [この]境地を
完全に覚ることができるのか.
そういう境地を正しく理解して, 無漏者達は parinibbā する.

本経の parinibbuta 数例および parinibāti に関しては, 文脈が現世での一般論であるため(特に Sn 737: ye... te...), 生前の時点である可能性が高い.[217] 内容に関して, Sn 735 は「認識機能の鎮まり」[218]を理由として,「欲望なく」, つまり煩悩や取り込みがなく, 涅槃していることを意味するといえる. その他の用例は, 涅槃の語彙とともに理解することを重要視する内容が語られている.

熱心に修行していても, 現世で āññā「理解」が得られない場合は, anāgāmin「不還[二度とこの世に戻ることがない]」と散文で繰り返し述べられていることから, 本経散文の成立背景には, 多くの修行者が世尊のもとにいて, その中には, 現世で阿羅漢に至れないものも少なからずいたこと, そして阿羅漢に至れないとしても, 修行は無ではない, と散文で伝える必要があったことが窺える.

≪註釈: Sn 735, 737 は生前の涅槃, Sn 765 は生前・命終の両義を示す≫

Sn 735: parinibbuto の註釈 Pj II p. 506 は「煩悩が完全に消えることによって」と説明する. Sn 737 の註釈 Pj II p. 506 は, 涅槃した者の禅定であると解釈する. Sn 765 の註釈 Pj II p. 510 は,「煩悩が消えることによって」あるいは「最期において[燃料の残余のない]無余依涅槃界へと般涅槃する」と両義を挙げて説明する. Sn 739, 758 は涅槃の語彙の内容・時点に関する註釈はなし.

Sn 以外の用例

前記古層文献の nibbāna の用例にて「灯火の消火のごとく心の解放が生じた」

[215] Se: aññatra ariyehi.
[216] Se: sambuddham.
[217] Sn 765: parinibbanti に関し, 藤田 1988b p. 7 は,「原始経典では般涅槃の語を現世のそれと見るか, 死後のそれと見るか判断がつきかねる場合もある」その例として本偈と註釈 Pj II p. 510 を挙げ, 両義での解釈が可能とする.
[218] 荒牧 1988 p. 80 は viññāṇa を「認識する意識の流れ」と和訳し, この偈の内容を「禅定が深まりゆくにつれて」「おそらく『意識の流れ』こそが最後に滅亡する最も純粋な相互主体的個体存在そのものであり, いわば時の流れそのものであるであろう」と解釈する. L. Schmithausen 1992 p. 1165 は, vijñāna (Skt)を輪廻主体とみなす.

との表現を分析した際, Th 905, 907 の parinibbuta の用例について, 命終の涅槃を明確に示すとの結果を得ているが, 以下に別の用例を示して考察を行う.

SN I p. 1 [1 経]: Devatā-saṃyutta [第 1 相応]

SN 有偈篇(Sagātha)中の冒頭第 1 経 Oghaṃ「激流」に, parinibbutaṃ が現れる. この短い経は, ある神格(devatā)と世尊との対話であり, 激流を渡った(atari)と答えた世尊のことを神格が以下の通り描写する(SN I p. 1):

> cirassaṃ vata passāmi / brāhmaṇaṃ parinibbutaṃ /
> appatiṭṭhaṃ anāyūhaṃ / tiṇṇam[219] loke visattikan-ti
> 実に久しく[私は]見た. parinibbuta である[真の]バラモンを.
> 止まることがない, 求めることがない,
> 世間において執着している渇望を超えた[お方を].

この parinibbuta は神格が目前の世尊のことを表しているので, 今現在の文脈であり, 生前に涅槃したことを明確に示す. 最古層 Sn 1087 (前述 2. 1. 1. 2.参照)に, この d 句と同じ表現があり, Sn 1087 では diṭṭhadhammābhinibbuta である人々のことを表す. ここに「世間において執着している渇望を超えた人」の同格語として, parinibbuta が現れる古層と, diṭṭhadhammābhinibbuta が使われる最古層との語彙の選択の相違が見て取れる.

≪註釈: 生前の涅槃≫

註釈 Spk I p. 20 は, parinibbutaṃ を, 煩悩が消えることにより(kilesa nibbānena) nibbutaṃ と説明する.

SN I pp. 185 – 189 [1 – 5 経]: Vaṅgīsa-thera-saṃyutta [第 8 相応]

既に前記にて検討した Ch. 2: Vaṅgīsasutta と同じヴァンギーサ尊者に関する SN I: Vaṅgīsa-thera-saṃyutta「ヴァンギーサ上座相応」全 12 経中最初の 5 経 pp. 185 - 189 には, nibbāna を伴う複合語と parinibbuta および Sn では使用例がない nippāpeti [caus]が出てくる.[220] さらに, 関連する√śam の派生語, upadhi, santapada も現れるため, Sn との比較に適当である. 本相応は, ヴァンギーサの出家(第 1 経)から阿羅

[219] Be: tiṇṇaṃ.
[220] nibbāpeti は nibbāyati の caus.であり, 古層・散文に現れる.

漢になる(第 12 経)までを記述した経典群である．涅槃の語彙は，第 1 経 p. 186: nibbānagamanaṃ，第 2 経結びの句 p. 187: parinibbuto，第 4 経 p. 188: nibbāpehi[221]が出てくる．さらに，第 5 経は Sn Ch. 3: Subhāsitasutta とほぼ同一内容である．[222] 第 7 経以降は冒頭散文部分で阿羅漢弟子の数が数百やそれ以上と記されて，韻文の内容からも古層の後期に成立したと考えてよいであろう．

なお，本 SN 第 8 相応の韻文文献は，同じく古層 Th 最終章 Mahānipāta「大集」に，経は順不同であるがパラレルがある．Th Mahānipāta 後半は同じく古層 Sn Ch. 2: Vaṅgīsasutta のパラレル文献である．このことから，古層のこれら 3 経は密接に関係していることが窺える．筆者はこれら 3 経は古層の中でも後代に成立したと推測する．

SN I p. 186 偈文 [1 経] Nikkhantaṃ「出離」nibbānagamanaṃ

第 1 経: Nikkhantaṃ ではヴァンギーサ尊者は出家直後であり，女性達を見て「不快」(anabhirati)が生じ，「熱望が心を汚した」(rāgo cittam anuddhaṃsesi).「自分の不快を除去して，喜びを起こさせて」(attano anabhiratiṃ vinodetvā abhiratim uppādetvā)，偈を唱える．その中の一節に nibbāna を伴う複合語が出てくる(SN I p. 186G):

> nibbānagamanaṃ maggaṃ/ tattha me nirato mano//
> nibbāna へと至る道[を聞いた(suta)]，そこで私の思考は楽しんでいる

涅槃は目標とされており，その時点や具体的内容は本偈だけからは明らかではない．

SN I p. 187 偈文 [2 経] Arati「不快」parinibbuto

続く第 2 経では冒頭散文でニグローダ・カッパ師と共に住んでいる設定である(p. 186). 既に検討した Sn Ch 2: Vaṅgīsasutta では，本経同様，まだヴァンギーサ尊者は阿羅漢になっていない修行中の身であるが，ニグローダ・カッパ師が亡くなったばかりという時期での話である．第 2 経でもヴァンギーサ尊者に不快が生じる．その理由は示されないが，第 1 経と同文にて偈を唱える．その偈の最後に parinibbuto が出てくる(SN I p. 187G):

---

[221] nibbāpeti の 2nd imper.である．本経では，大いなる熱望を(mahārāgaṃ)を消せという内容で出てくる(SN I p. 188).

[222] Sn のこの経には Sn 454: nibbānapattiyā「nibbāna の獲得のために」が出てくる(本経および Sn 454 については付録 2 参照のこと).

dabbo cirarattasamāhito/ akuhako nipako apihālu/
santapadam[223] ajjhagamā muni paṭicca/ parinibbuto kaṅkhati kālan-ti//
有能で, 長時間にわたり精神統一して, 欺かず, 賢明にして渇望なく,
寡黙の聖者は鎮まった境地へ至った.
parinibbuta している者として, [命終の]時を待つ.

ここの parinibbuto は明確に命尽きる前の生前の状態である. parinibbuta である人は vijjā「明知」も得た人であり(p. 188)とあることから, また santapadam「鎮まった境地」へ至った人は parinibbuta であるとも示されていることから,「涅槃」を意味するといえる. このことから, 本偈の-pada の解釈は「境地」がより適当であるといえよう.

≪註釈: 生前の涅槃≫
ブッダゴーサによる註釈 Spk I p. 270 は santapadam「鎮まった境地」を nibbānaṃ「涅槃」に置き換え,「煩悩がすっかり消えることによって」と説明する.

SN 本偈のパラレルである Th 1218[224]は同じ内容である.

≪註釈: 生前の涅槃≫
ダンマパーラによる註釈 Th-a III p. 191 では「取り込みの残余がある(有余依)涅槃界において般涅槃している」と parinibbuto を説明して, その人は「取り込みの残余のない(無余依)涅槃のために時を待っている」と解釈する.

<u>pari 付きの語彙の考察結果</u>

parinibbuta の時点に関して, SN 本相応およびパラレルである Th 1218 では parinibbuta が生前の涅槃を明確に表す結果であった.
それに対し, Sn Ch. 2: Vaṅgīsasutta において, parinibbuta が散文で明確に命終, 偈文 Sn 346 (パラレル Th 1266)でも散文を受けて命終を示唆するとの考察結果であった(但し, 経中の散文を加味せず, 韻文だけで考察する場合には時点ははっきりしない). Th は仏弟子が自身の出家や修行, 覚りや涅槃について偈頌を詠む. 全般的に, 命終の時点も意識され, 体系化されているため, 命終を示唆する涅槃の語

[223] Be: santaṃ padaṃ.
[224] Th 1218 は, SN I p. 187 で複合語のところを, cirarattaṃ samāhito, santaṃ padaṃ と分割し, paṭiccaparinibbuto と複合語にする.

彙も現れる.

古層段階で pari が付された涅槃の語彙が現れ, 上記で考察した用例の中には, 生前の涅槃の意味を表す場合が多かったが, 古層の後期になって, 命終の涅槃のみを意味するようになるという意味と用法の展開を類推することができよう.

なお, 先行研究においては parinibbuta と abhinibbuta は, ほぼ同義とされているが, 涅槃の内容に関して, abhinibbuta は全用例において生前の文脈であり, いわゆる煩悩や欲望の滅に関する内容であるのに対し, parinibbuta は, しばしば取り込まないこと, 生死・輪廻の滅(を理解すること), 理解力を有することが属性として併記され, 異なる文脈で説かれる場合があることが確認された.

涅槃と理解力・理解すること

ここで, 涅槃の語彙と理解力・理解することがしばしば併記され, 両語には少なからず関係性が見出せる可能性を指摘しておきたい. 最古層では, 涅槃の語彙である nibbuti の語が, ñātvā「理解して」[ger., √jñā](Sn 933)とともに, また同偈に aññāya「理解して」[ger., ā-√jñā]が出てくる. 同じく最古層において, diṭṭhadhammābhinibbuta「現世において／ダルマを見て abhinibbuta している[人]」が aññāya「理解した後」と共に現れる(Sn 1087; 1095 前述 2. 1.参照). 筆者は, これら 3 偈の涅槃の語彙を現世で涅槃している人を意味する可能性があると解釈した.

古層になると最古層には見出せない pari 付き用例を含む涅槃の語彙とともに, 理解すること・理解力を表す語が現世で涅槃している人の属性として現れるようになる. 例えば, 古層 Sn 186 において涅槃と paññā「理解力」が結びつけて語られる.[225]

Sn 186 saddahāno arahataṃ dhammaṃ nibbānapattiyā
sussūsā[226] labhate paññaṃ appamatto vicakkhaṇo.
nibbāna-の獲得のために, 阿羅漢のダルマ(教え)を信じつつ,
[ダルマを]聞こうと願うことから, 不放逸で聡明な人は理解力を得る.

重要概念である paññā [pra-√jñā から]の本来の意味は, 前もって解る, 行き先が解

[225] Ch. l: Āḷavakasutta「アーラヴァカ経」. 本経は, 冒頭に散文で導入があり, 古層(偈文)の問答が続く形で, 問答において在家の在り方と来世が説かれ, 涅槃観の展開および在家を含む教団が確立されていたことが窺われることから, 古層の後代の成立であることが推測される(本経については付録 2 参照).
[226] Be; Se: sussūsaṃ.

っている洞察力である.[227] そして, Sn 359 (既出 2. 2. 3. 3)で目前の世尊のことを, 理解力を持つ parinibbuta であるお方と称した上で, その偈を受ける形で, Sn 370 において, 世尊の言葉として parinibbuta と「漏尽者」が併記される. この「漏尽」という語は「取り込みがないこと」に結びつき, なおかつ, 散文(例 MN I pp. 160 – 175 [26 経])において「理解力」とも密接な関係を示す(後述 2. 3. 1.参照).

また, 古層においては, aññāya「理解して」が pari 付きの用例(Sn 737; 758 前記 2. 2. 3. 3.参照)と, paññā「理解力(智慧)」が涅槃の語彙(前記 Sn 186; 204: nibbāna 前記 Sn 359: parinibbuto)と共に現れる用例も見出せ, 涅槃と「理解すること」「理解力」がより顕著に結び付けて語られる. このように様々な[接頭辞なし, ā, pra] + √jñā「理解する」の語に加え, さらに古層では√vid「知る／見つける」も涅槃の語彙とともに使用される(例: 前記 Sn 365; 467; 758)ことからも, 広い意味で類似概念である理解する・知るという作用[228]の役割が, 古層段階から涅槃において強調され始めることが指摘されよう.

2. 2. 4. nibbuti

註釈や先行研究では nibbuti を「涅槃」とほぼ同義と位置付け, 特に註釈家はこれを生前の涅槃と解釈する. Sn 最古層には Tuvaṭakasutta に 2 例あり, santi「鎮まり」と定義され, 考察の結果, 現世において煩悩を滅し, 取り込み(取著)がない涅槃の一側面を示唆する可能性が導かれた.

では, 古層や散文ではどうであろうか. 先行研究においてはこれまで具体的用例を示して詳しく取り上げられることのなかった nibbuti について, 初期仏典の全用例を分析して, 正確な意味を探りたい.

本項において Sn 古層 1 例(Sn 228), Sn 以外の古層 6 例(Th 32, 418, 586, Ja III p. 523, Ja VI pp. 437, 442)を検討する. 散文は 2 ニカーヤに複数例見出せる(DN I p. 38 他, DN III p. 28 他, MN I p. 323. 後述 2. 3. 5.参照).

Sn の用例

Ch. 2 Ratanasutta Sn 228: nibbutiṃ

---

[227] 接頭辞 pra は「前に, 前方に」を表す. Veda 文献における pra-√jñā については中村 2007 参照のこと.

[228] 知覚を意味する両語根を比較し, 中村 2007 pp. 116 – 117 は, √vid には「知覚対象を判断する意味合いが薄く, √jñā には単に『知る』だけでなく,『それが何／どうであるか』という判断が含まれる」と分析する. 涅槃することと関係の深い三明の「明」は vijjā であり, この√vid には「知る」だけでなく「見つける」という意味もあるため, √vid は直感的・視覚的作用を伴うと言えよう.

本経[229]は, 17 偈よりなる. nibbuti 以外に nibbānagāmiṃ (Sn 233)と nibbanti (Sn 235) が出てくるのであわせて記す. 誰の発話か経典レベルでは不明であるが, 註釈 Pj I p. 164 は世尊の言葉をアーナンダが説いたとする(付録 2 参照). 冒頭 2 偈(Sn 222, 223)において, 地上に属する(bhumma)・空中(antalikkha)の全ての生き物(bhūta)に対して,「人間である生きもの(人類)に慈しみを為せ」(mettaṃ karotha mānusiyā pajāya) と呼びかけた後, Buddha「ブッダ(目覚めたお方)」[Sn 224, 233, 234], Dhamma「ダルマ(教え) 」[Sn 225, 226], Saṃgha「集い」[Sn 227,[230] 228, 229, 230, 231, 232, 235]の中に ratana「宝」あり, この真実によって幸いなれ(etena saccena suvatthi hotu)と, ゴータマ・ブッダの教えを説く. そして結びの 3 偈で, ブッダ, ダルマ(教え), 集いに礼拝する.

Sn 228 ye suppayuttā manasā daḷhena
nikkāmino Gotamasāsanamhi,
te pattipattā amataṃ vigayha
laddhā mudhā nibbutiṃ bhuñjamānā, —
idam pi Saṃghe ratanaṃ paṇītaṃ,
etena saccena suvatthi hotu.
ゴータマの教えに対し, 固い思考によってよく励み, 無欲である.
そういう者たちは, 得るべきことを得て, 不死へと入り,
[それを]無償で[231]獲得して[ger], nibbuti を楽しんでいる—
これも集いにおける優れた宝[である]. この真実によって幸いなれ.

---

[229] Sn Ch. 1: Mettasutta, Ch. 2: Ratanamutta; Mahāmaṅgalasutta の 3 経は Khp にも収められている有名な経である. 後代の南方仏教では護呪(paritta)とされ, 重要視されている(村上・及川 1986 p. 301 n. 1, 中村 1984 pp. 282, 300, 306 参照). そのせいか, これらの用例は Pj II 3 index には記載がない. 註釈は Pj II には存在せず, Khp の註釈である Pj I にあるため, そちらを参照した.

[230] Sn 経典群から, 四向四果の教説の存在を数字を挙げて示唆する経は本経のみで, Sn 227 では puggalā aṭṭha「8 人の人間」, cattārī etāni yugāni「四対」は布施に値する人達であるとする. このことから,「集いにおける宝」とは, ブッダ, ダルマ同様, 集いに礼拝することで得られるものがあるという意味であろう.

修行道の四向四果において煩悩が順次滅せられるとされ, 預流において身見(有身見)・疑・戒禁取の三結が断ぜられ, 欲界の一切煩悩を断じて到達される不還において五下分結が断尽され, 上二界(色界・無色界)のすべての煩悩を断じて到達される阿羅漢の覚りにおいて五上分結が断尽されるとされる(水野 1972 pp. 225 – 226). 水野氏は「煩悩に関する考察は説一切有部などの北方仏教の方が極めて発達して詳細に論ぜられ, 南方のパーリ仏教では煩悩論は深く論ぜられなかった」と説明する(p. 224).

[231] PED p. 538: for nothing, gratis. 村上・及川 1986 p. 271「ただで」.

Sn 233 vanappagumbe yathā[232] phussitagge
gimhāna māse paṭhamasmiṃ gimhe,
tathūpamaṃ dhammavaraṃ adesayi
nibbānagāmiṃ paramaṃhitāya, —
idam pi Buddhe ratanaṃ paṇītaṃ,
etena saccena suvatthi hotu.
初夏の暑さに, 林の茂みの中で, 花を咲かせた[数々の]枝先のように
そのように, nibbāna へと導く珠玉のダルマ(教え)を説いた.
最高の利益のために.
これもブッダにおける優れた宝[である]. この真実によって幸いなれ.

Sn 235 'khīṇaṃ purāṇaṃ, navaṃ[233] n' atthi sambhavaṃ,'
virattacittā āyatike bhavasmiṃ
te khīṇabījā avirūḷhichandā
nibbanti dhīrā yathāyam padīpo, —
idam pi Saṃghe ratanaṃ paṇītaṃ,
etena saccena suvatthi hotu.
「過去のものは滅し, 新しいものが再生されつつあることはない[234]」
未来の生存に対する愛着から離れた心を持ち, 種が滅し,
成長への欲がない, そういう賢者達は, この灯火のように nibbā する.
これも集いにおける優れた宝[である]. この真実によって幸いなれ.

Sn 228 の nibbuti は√bhuj の ppr.「楽しんでいる」の目的語である. 現世の文脈であるが, nibbuti 自体の時点や具体的内容は不明である. 但し, 主語である人達は, amata「不死」に vigayha [vigāhati の ger]「入った後で」nibbuti を bhuñjamānā「楽しんでいる」とある. つまり, この者は, 涅槃の一定義である生死・輪廻の滅を表す amata「不死」に既に入っているため, [nibbuti の具体的内容・時点はわからないが], 現世で既に涅槃を得た人で, 今世で死に影響されない = それを超越すると解釈できる可能性があるが, 同時に, 命終時に達成されるための生前の約束とい

[232] Be: yatha.
[233] Be: nava.
[234] 村上・及川 1986 p. 289, 中村 1984 p. 53, 荒牧・本庄・榎本 2105 p. 76 和訳は, a 句に「業」を補う. Norman 2006 p. 205 は補わず, the old is destroyed, the new is not arising「古いことは滅し, 新しいことが生じていない」と,「何が」については明記していない. Norman 氏は, 註釈では navaṃ にあわせて natthisambhavan と複合語にしているが, 自分は句読点をつけて n' atthi saṃbhavaṃ として, saṃbhavaṃ を現在分詞と理解すると記述. Cf: Mv. I p. 293 a 句: kṣīṇaṃ purāṇaṃ navo nāsti saṃcayo. (saṃcaya = m. gathering; sam-√ci).

う解釈の可能性を否定するものでもないといえる.

本経 Sn 225 において, Sakyamunī samāhito「精神統一している釈迦族の寡黙の聖者」と世尊のことが語られ, 世尊は amata「不死」に ajjhagā「達した人」とされる. このことから, 現世の文脈でしばしば「不死」が語られることが確認できる.

Sn 233: nibbānagāmiṃ「nibbāna へと導く」の nibbāna の具体的内容・時点とも本偈からは不明であるが,「最高の利益」に近い概念として涅槃が捉えられているとは言えるであろう.

Sn 235 は,「愛着」という煩悩に関係する内容であるが, それに関して過去のことや未来の生存と, 生死・輪廻にも関連づけられる. nibbāti の主語は dhīrā「賢者達」で padīpa「灯火」に喩えられるため「消える」ことを意味するが, 賢者達が物理的に消える, あるいは消滅することではなく, 火的要素が消えることであるのは既に論じた通りである(前述 1. 3.参照). またこの箇所は, 古層の段階でも,「涅槃」が火的要素の消失であることが明確に意識されていることを示す. そして一般論を説く現世の文脈であることから, 涅槃する時点は生前である可能性が導かれる.

≪註釈: nibbuti は生前の涅槃. nibbanti は命終の涅槃≫

Sn 228: amata の註釈 Pj I p. 185 は, nibbuti を「煩悩という苦悩を鎮めた」と kilesa「煩悩」に絡めて説明し, そして amata「不死」を「涅槃」と定義づけることから,「不死」も現世の状態を表す. Sn 233: nibbānagāmiṃ の注釈なし. Sn 235 の註釈 Pj I p. 195 は nibbanti の時点を無余依涅槃と結び付けて, carimaviññāṇanirodhena「最後の認識機能が滅する仕方で」と説明する.

Sn 以外の用例

Th 32: nibbutiṃ

Suppiyo thero「スッピヤ長老」に関する 1 偈(Th 32):

Th 32 ajaraṃ jīramānena tappamānena nibbutiṃ
nimmissaṃ[235] paramaṃ santiṃ yogakkhemaṃ anuttaran ti.
老いつつあるものを不老に, 焼かれつつあるものを nibbuti に
[私は]取り換えよう, 最高の鎮まりに, 束縛から[解放された]無上の安穏に[取り換えよう], と.

[235] Be: nimiyaṃ.

文脈から nibbuti は焼かれることの反対概念であるため, 人の中の「火が消える」ことを暗示する. このことは nibbuti の語根である√vṛ「覆う」の意味ではなく, nir-√vā[2]「[火が]消える」の意味でこの語が使用されていることを表す.

最古層 Sn 933 で nibbuti の定義とされた√śam「鎮まる」の派生語 santi と共に現れ,「nibbuti に」と同様の位置に, ajaraṃ「不老に」, paramaṃ santiṃ「最高の鎮まりに」, yogakhemaṃ anuttaran「束縛から[解放された]無上の安穏に」とあるため, これらは全くの同義であるとまでは言えないが, 近い概念である可能性が高いといえよう. yogakhema anuttara「束縛から[解放された]無上の安穏」は, nibbāna によく同値される. 散文 AN II p. 247 では, ajaraṃ anuttaraṃ yogakkhemaṃ nibbānaṃ との用例がある. さらに本用例の ajaraṃ「不老」は最古層で nibbāna の定義である jarāmaccuparikkhayaṃ「老死の滅尽」に同じく生死・輪廻を止めることである. 従って, Th 32 の執筆者が nibbāna の意図で nibbuti を使っていた可能性が示唆される. その時点については, nibbāna 同様, 決定できない.

ここは, 最古層から見出せる nibbuti = 鎮まりである側面と, 古層の後代から見られる nibbāna と関係が深い yogakkhema anuttara「束縛から[解放された]無上の安穏」が一緒に列挙されている. よって, nibbuti が次第に nibbāna の同義語として定着してゆく過渡期の用例のようである.

≪註釈: 生前の涅槃≫

Th-a I p. 98 は「不老」を nibbāna「涅槃」と解釈する. さらに, nibbuti を nibbuta-sabhāvo nibbānaṃ「火が消えたことを本性とする涅槃に」と置き換える. このことから, 註釈家も nibbuti = nibbāna と理解していたことがわかり, nibbuti, nibbuta, nibbāna という涅槃の語がいずれも「火が消える」文脈で使われていることが確認できる. そして消える要素は煩悩であるとの解釈がされている. また√tap「焼ける, 燃える, 熱くなる」には「苦しめる」という意味もあるため, その対極である nibbuti には「苦しみを鎮める」という意味もかけられる.

Th 418: nibbutiṃ

Migajālo thero「ミガジャーラ長老」がブッダの教えについて語る 6 偈の中の 1 偈である:

Th 418 “niyyāniko uttaraṇo, taṇhāmūlavisosano,
visamūlaṃ āghātanaṃ chetvā pāpeti nibbutiṃ.
出離へと導き, 渡し, 渇愛の根を涸らし,
毒の根, 殺し場を断ち切って, nibbuti を得させる.

「渇愛の根を涸らし」とあることから，本偈の nibbuti は，最古層 Sn 1109 に示される煩悩の滅が nibbāna の中核的要素であることに通じる内容である．このことから，本偈の nibbuti も煩悩を滅した涅槃の一側面に関連することを表すと解釈可能であろう．しかし，その具体的内容や時点は明らかではない．

≪註釈: 生前の涅槃≫

Th-a II p. 178 は，明確に nibbuti = nibbānaṃ と定義し, kilesa を用いて説明する．

Th 586: nibbutiñ

Upaseno Vaṅganthaputto thero「ヴァンガンタの息子であるウパセーナ長老」が托鉢の修行者の在り方について説く 10 偈の最終偈であり，修行の完成として nibbuti へ到達すると語る:

Th 586 “evaṃ viharamānassa, suddhikāmassa bhikkhuno
khīyanti āsavā sabbe, nibbutiñ cādhigacchatīti.
このように住しつつ，清浄を欲する托鉢修行者の
一切の漏が尽きる．そして nibbuti へと到達する．

一切の漏が尽き, nibbuti へ到達する時点は明確ではない．あらゆる漏の滅が併記され，涅槃のための重要な要素である煩悩の滅と涅槃の一側面である諸漏の取り込みがないことが示唆される内容である．本経最終偈でもあり，修行の完成としての nibbuti であるため,「涅槃」と同様の意味でこの語が使用されていると解釈可能であろう.[236] しかしながら，その具体的意味内容は明らかではない．

≪註釈: 生前・命終の二種涅槃≫

Th-a II p. 250 は, nibbuti を涅槃と解釈した上で，二種涅槃両方へ至ると解説する．

nibbuti の考察結果

古層 nibuti の用例検討から，最古層での考察結果同様, nibbuti が鎮まりを表し，煩悩を滅し取り込みがない nibbāna の一側面を意図して使われる場合に加えて，

[236] Ja III p. 523: nibbutiṃ bhuñjati は上記 Sn 228 と, Ja VI pp. 437, 442: nibbutiṃ nādhigacchāmi は上記 Th 586 と同じ表現であり解釈もそれらに準ずる．

古層においては, 同じく涅槃を表す生死・輪廻の滅・超越を示す内容および古層後代・散文に見出せる「束縛から[解放された]無上の安穏」が併記される場合があることが確認された. このことから, 最古層では涅槃の一側面であった nibbuti が次第に nibbāna そのものとして理解される傾向が見出せる. その時点については, 最古層では「自己の内面の鎮まり」を表し, 生前を示唆していたが, nibbāna として理解される傾向が見出せる古層においては, 全用例で, 生前か命終か判別がつかないという結果であった.

2. 2. 5. 古層小結

涅槃の語彙に関して, Sn を中心とした古層の考察を通じて, 最古層の考察結果を踏襲する解釈も見られたが, 異なる理解の可能性を示す結果も見られた.

nibbāna

最古層では「nibbāna とは〜である」と, 定義づけが見られ, nibbāna が出てくる偈文の文脈も nibbāna の時点も判別がつかないという考察結果であったが, Sn 古層ではこのように定義づける記述は見出せず, ほぼ全て複合語として現れる. nibbāna を伴う複合語の考察によって明らかになったことは, 複合語であっても, 文脈も涅槃の時点も明らかではない用例が多い中, 該当偈の文脈が現世のことであっても(例として nibbānābhirata: Sn 86; Thī 46; Thī 450), nibbāna 自体の時点は判別がつくものではないということである. 先行研究においてこの点への考慮が欠けているため, 文脈が現世であれば, それに連動して涅槃も同じく生前の時点を示唆するとの解釈が為されることが散見される.

また古層文献では, nibbāna を伴う複合語とともに,「煩悩が滅して取り込み(取著)がない状態」のみならず, 最古層には見出せなかった paññā「理解力」を伴うという涅槃の側面が語られる用例が見出せる(例: Sn186; 204).

nibbānapada に関して, 最古層では「涅槃の足場」を意味する可能性を提示したが, 古層 Sn 204 の用例においては, amata「不死」と併記されることから, 涅槃そのものを表す「涅槃の境地」との解釈がより妥当であるとの結果が導かれ, Th 725 においてもこの理解が支持された. Sn 204 のパラレル Thī 97 のヴァリアントの中に「足場」と理解するほうがより適当と考えられる用例, また「足場」との理解を支持する-pada の別の用例として古層 Dhp 21 に使われる amatapada が見出せたが, おおむね nibbāna-pada については「境地」との理解が適当である用例が多いことが確認された.

nibbuta の諸用例

abhi が付された涅槃の語彙全用例を分析した結果, その時点については, 最古層同様, 全用例において現世の文脈であった. abhinibbutatta に関しては, 最古層同様, 涅槃しているとははっきりいえない用例が見られたが(Sn 343; Ja III p. 14), 中にはブッダ世尊が自身のことを abhinibbutatto と語る場合があり(Sn 456), 明確に生前で涅槃を得た人を示す場合, さらに, 煩悩が滅した状態である涅槃の側面を表す用例(Sn 469; Ud III p. 29)が見出せた.

また abhinibbutatta が鳥に使われる用例もあり(Ja II p. 383), 涅槃の意味ではなく, 単に穏やかで鎮まっている状態を表す場合も見られた.

対照的に, diṭṭhadhammābhinibbuta の全用例は現世において, つまり生前に涅槃している状態を表すことが確認された. この状態が, 煩悩が滅し取り込み(取著)がなく, かつ生死・輪廻の滅・超越を表す(MN I p. 187G およびそのパラレル AN I p. 142G; III p. 311G)ことから, 象徴的に現世を含む(2)の解釈(今世において生死・輪廻に影響されない = それを超越する)が可能である. 散文には見られないこの語は, 散文経典より古いとされる韻文経典の時代に, 最古層当初から涅槃とは肉体の死をもって得られるものであると広く考えられていた背景において,「現世において」涅槃することを強調する意図が働いて, ブッダ世尊によって使用されはじめたと推測することができよう.

nibbuta は, 最古層 Sn 1041 同様, 古層においても, 涅槃と解せる用例が認められる. 一方, 涅槃とはいえない可能性がある用例も見出せた(Sn 707). このことは, 接頭辞の有無にかかわらず涅槃の意味であるとする先行研究とは異なる結果であり, 涅槃を意味するといえる用例においても, 語彙間に意味の若干の相違が確認された.

最古層で nibbāna の一定義である an-ā-√dā「取り込むことがない」(Sn1094)を表す語が, 古層において nibbuta と共に現れ(例: Sn 630; 638), 涅槃していることを示す用例が現れる. この「取り込みがない」という状態は, 煩悩を含み何の取り込み(取著)もない状態を示唆することを提示した.

さらに, 古層においては, 理解力・理解することが涅槃の語彙に併記され, 涅槃と結び付けられる用例が最古層よりも顕著に確認できる(例: Sn 359; 467; 737 等). また, 煩悩の滅・取り込まないこと・理解力・輪廻の超越等の涅槃に深く関係する要素の中で, 同じ偈に複数の涅槃の内容が見られる傾向がより多く見出せる(例: 前記 2. 2. 3. 3.: Sn 359; 370, 467; 737 他).

abhinibbuta と parinibbuta に関しては, 同じ経の中で abhinibbutatta と parinibbuta が同じ主語(tathāgato「そういう状態に至っている人(如来)」)の属性として現れる(Sn 467, 469). このように使い分けていることから, 両語が同義といえるわけでは

ない可能性が推察され，さらに，この用例では両語とも生前の状態を表すが，別の用例(Sn 343, 346)では, abhinibbutatta は生前の状態, parinibbuta は同じ人の命終を表すことが確認され，両語の時点にも用例によっては相違が見られることが明らかとなった．また両語の文脈が同じ現世であっても，併記語の内容に違いが見られる用例もあり, abhinibbutatta の場合は，いわゆる煩悩や欲望の滅が説かれるのに対し, parinibbuta は理解すること・理解力および生死・輪廻の内容があわせて説かれる場合があることを指摘した．

parinibbuta をはじめ, pari が付された涅槃の語彙が，生前に涅槃していることを示唆する用例も多い中，命終時を意味する用例も現れ，その場合は古層の後期に成立した経典と思われるため，古層の時代における意味と用法の展開を類推することができよう．

上記の考察結果から, abhinibbuta と parinibbuta をほぼ同義で同じ用法とする先行研究とは，語義･用法とも異なる結果が導びかれる用例も見出せ，涅槃の語彙間には意味の違いが認められる場合もあることが明らかとなった．

nibbuti

最古層では santi「鎮まり」と定義され，考察の結果，煩悩を滅し取り込み(取著)がない涅槃の一側面を意味する可能性が導かれた．古層においては，最古層と同様の意味に加えて，生死・輪廻の滅・超越を表す内容や「束縛から[解放された]無上の安穏」と併記され，涅槃を示す可能性が高い用例が確認された．nibbāna 同様，その時点については判別がつかないという結果であった．

また Th 32 では，文脈から nibbuti は焼かれることの反対概念として現れ，人の中の「火が消える」ことを暗示する．これは nibbuti の原意が nir-√vā[2] であることを裏付ける用例である．

nibbuti の用例数が限られていることから，次第に santi あるいは nibbāna にとってかわられた可能性が推測され得るであろう．

まとめ

古層における文献的事実として，涅槃の語彙自体が表す涅槃の時点に関しては，生前・命終のいずれの場合もあり，さらに判別がつかない用例も名詞形を中心にあることがわかった(先学の問題点: 註釈同様，生前か命終かいずれかであると判断する傾向にある)．従って，涅槃の語彙によって特定の時点は意図されていなかった可能性が高いと思われる．

最古層と古層文献に見出せる相違から，先行研究の成果である最古層と古層

という層分けが妥当であること，また古層文献の中にはその後期に成立したと考えられる経もあり，思想の変遷が垣間見られることが文献から確認できたといえよう．

2. 3. 散文

Sn においては韻文と散文からなる経典が複数見られ(Ch 1 – 3 の全 38 経中 17 経)，その散文に現れる涅槃の語彙は Vaṅgīsasutta の parinibbuta (全 5 例)のみである(Sn pp. 59 – 60)．これらは前記したが，全て命終の涅槃が意図されていた(2. 2. 3. 2.参照)．その消える要素を含む具体的内容は経典からは明らかにならない．Sn 以外の散文中心の経典中の涅槃の語彙の用例を以下に検討する．

2. 3. 1. nibbāna

まず，先行研究において生前の涅槃の定義とされる散文経典 SN IV pp. 251, 261 を取り上げる．

SN IV p. 251: Jambukhādaka-saṃyutta「ジャンブカーダカ相応」

本相応の第 1 経は Nibbānam「涅槃」と題された短い経である．続く Sāmaṇḍaka-saṃyutta「サーマンダカ相応」第 1 経も同じく Nibbānam であり(p. 261)，問答の部分は同一内容である．ブッダ世尊の弟子であるサーリプッタ尊者が遊行者であるジャンブカーダカより涅槃とは何かと問われ，以下の通り答える(SN IV pp. 251, 261)：

> rāgakkhayo dosakkhayo mohakkhayo idaṃ vuccati nibbānan ti.
> 熱望の滅，憎しみの滅，迷妄の滅，これが nibbāna と言われる．

> atthi kho āvuso maggo atthi paṭipadā etassa nibbānassa sacchikiriyāyā[ti].
> 知っての通り，友よ，nibbāna を目の当たりにするための道はあり，修行道はある[と].

そして，サーリプッタは八聖道(ariyo aṭṭhṅgiko maggo)を説く．Sn において，本経同様，涅槃へ至る方法として八聖道が説かれる用例は見出せなかった．三毒の煩悩を滅することが涅槃であり，それは八正道によって達成されるという本経の内容

から, 散文経典の時代には, 涅槃の定義および修行道に関する教義が確立していたことが窺える.

涅槃の時点に関してはどうであろうか. 先行研究においては, 本経を生前の涅槃の根拠のひとつとして挙げる. 涅槃を sacchikiriya「目の当たりにする」とあることから, 文字通り存命中の生前の時点と捉えるほうが妥当であるとも考えられるが, この語は「会得する」[237]という意味もあり, 涅槃という修行の完成が, 必ずしも生前でなくとも命終時に達成されるとの解釈の可能性は排除されず, 生前か命終かの判断はここではつかないといえる. それ故, 本経を根拠に, 煩悩が滅する涅槃の時点が生前という判断は, 厳密には下せない.

≪註釈: 生前の涅槃≫

SN の註釈 Spk III p. 88 は, 煩悩(kilesa)の滅と説明する.

nibbāna および nibbuta

MN I pp. 160 – 175 [26 経] Ariyapariyesanasutta「聖求経」

本経は, 世尊の覚り・成道の前後に関する仏伝である. pari が付された涅槃の語彙は使われず, nibbāna が複数回出てくる. 世尊が出家の托鉢修行者たちに「立派な者たちの求めること」について説く中で, anuttaraṃ yogakkhemaṃ nibbānaṃ pariyesati「無上, 束縛から[解放された]安穏, nibbāna を求める」と語り(p. 163), そして ahaṃ「私(世尊)は」tatth' eva nisīdiṃ「他ならぬそこに座った」後で(p. 167):

> anuttaraṃ yogakkhemaṃ nibbānaṃ ajjhagamaṃ.
> 無上, 束縛から[解放された]安穏, nibbāna に達した.

さらに続けて p. 167:

> ñāṇañ ca pana me dassanaṃ udapādi: akuppā me vimutti, ayam antimā jāti, natthi dāni punabbhavo ti.
> そして私に理解と見が生じた: 私の解脱は揺るぎない. これは最後の生である. もはや再生はない.

[237] PED p. 668: s.v. sacchikiriyā: realization, experiencing.

と語る.[238] 現世において「涅槃に達した」ことが世尊によって宣言される. nibbāna には「無上, 束縛から[解放された]安穏」が同値され, 涅槃に達した状態を,「理解と見が生じた」「解脱(解放)」「最後の生」「もはや再生はない」と表している. 煩悩の滅を示す内容はここでは言及されていない.

また, ここの文脈から, 涅槃・解脱という異なる表現で同じ事象をいい表している可能性が高いといえる. なお, これまでの考察から, nibbāna 自体の時点が決定できていない以上, 涅槃に達したのが現世であったとしても, 命終時に得られる涅槃を先取りした約束であるとの解釈も可能であるため, 本用例においても涅槃の時点は決定できない.

次に同じ p. 167 に出てくる nibbāna の用例を検討する:

> idam pi kho ṭhānaṃ duddasaṃ yadidaṃ sabbasaṅkhārasamatho sabbūpadhipaṭinissaggo taṇhakkhayo virāgo nirodho nibbānaṃ.
> 知っての通りこの道理もまた, つまり, 全ての形成作用の鎮まり, 全ての所有物の放棄, 渇愛の滅, 熱望のないこと, 滅, nibbāna は見難い.[239]

sabbasaṅkhārasamatha「全ての形成作用の鎮まり」, sabbūpadhipaṭinissagga「全ての所有物の放棄」, taṇhakkhaya「渇愛の滅」, virāga「熱望のないこと」, nirodha「滅」が nibbāna の併記語である. この中で, 涅槃の定義が示された最古層に呼応するのは,「全ての所有物の放棄」が「何も所有しないこと」(Sn 1094: akiñcanaṃ)および「渇愛の滅・熱望のないこと」が「渇愛の捨離によって涅槃[と言われる]」(Sn 1109: taṇhāya vippahānena nibbānaṃ)である.

taṇhakkhayo virāgo nirodho nibbānaṃ「渇愛の滅, 熱望のないこと, 滅, nibbāna」という並列表現は散文文献に頻出する(DN II p. 36, MN I p. 167, SN I p. 136, AN I p. 133; II pp. 34, 118; III pp. 35, 164; IV p. 423; V pp. 8, 110, 111, 320, 322, 354, It p. 88). この表現の中の nirodha「滅」[240]は Sn 中の涅槃の語彙の用例において共に現れることはない.[241]

---

[238] パラレル文献: SN Sagātavagga I p. 135 散文部分「梵天勧請」.

[239] 藤田 1988a p. 267 は, 涅槃の同義語が示される一例としてここを挙げる. さらに 33 種の同義語が列挙されるテキストとして, 藤田 1988a p. 269 他が紹介する散文 SN IV pp. 362 – 373 があるが, nibbāna を含むこれらの語は asaṃkhata「形成されていないもの」として列挙されているが, 筆者の考察結果からは, 33 種の語彙の中にも文脈によっては涅槃の同義語であると断定できない語彙がある可能性が指摘されよう.

[240] この語は接頭辞 ni「内へ, 中に」+ √rudh「停止する」の派生語である. 榎本(代表) 2014 p. 212 – 215 では「停止, 封じ込められること」を訳例として挙げ, nirodha はある事象がもつ本来の機能が発揮されない状態に陥ることであり, 第一義的には存在・非存在を表すものではないとする.

[241] 但し, この語がここ p. 167 で nibbāna と同じ事象を表す可能性のある vimutti の動詞形

次に，本散文経典の中の偈文に nibbuta が現れるため，あわせて以下に検討しておく(古層 MN I p. 171G):

> ahaṃ hi arahā loke, ahaṃ satthā anuttaro,
> eko 'mhi sammāsambuddho, sītibhūto, 'smi nibbuto.
> 何故なら私は世間の阿羅漢であるから．私は無上の師である．
> [私は]正しく完全に覚った唯一の者である．
> [私は]冷たく[清涼に]なっており nibbuta である．

これは，世尊が成道後，初転法輪の地へと赴く途中，アージーヴィカのウパカ(Upakaṃ ājīvikaṃ)に対し，世尊が自身について何者であるかを告げる場面である．「唯一の者」と宣言し，外道の修行者で世尊の境地に至った者はまだいないということを示している．阿羅漢・無上の師・正しく完全に覚った唯一の者であるとともに，本偈では，sītibhūto と nibbuto が併記されており，両語は，現世で既に涅槃を得たお方である世尊の状態を表す．それ故，nibbuta が nir-√vā「[火が]消える」の PP の役割を果たしており，それは，現世において涅槃していることを示唆する．

さらに，続く本経の散文部分である p. 175 では，無所有処から非想非非想処(nevasaññānāsaññāyatana)を経て，想受滅(saññāvedayitanirodha)に達して住し，そして理解力をもってこれを見た後，諸々の漏がすっかり尽きる(paññāya c'assa disvā āsavā parikkhīṇā honti)と説かれる．禅定の段階を完了した後，理解力を伴って漏尽者となると示されている.[242] これら複数の禅定の段階を順を追って説く内容の経は Sn には見出せない．

≪註釈≫

註釈においては，漏が滅することは涅槃であると説明される．その一例としては，Sn

と共に使用される用例が Sn 755-cd 句に見い出せる: nirodhe ye vimuccanti, te janā maccuhāyino ti.「滅において解脱している者たち，そういう人達は死を捨離している」．

[242] 禅定については藤田 1972，理解力に関係する三明については前述したが，榎本 1981, 1982 に詳しい．

古層および Sn 散文において，漏尽者という語と涅槃の語彙および涅槃と関係の深い語はしばしば併記され，これらの語が示す人は，涅槃している可能性が示唆される．例えば，以下の通り(各用例は本論 2. 2.を参照のこと):

・Sn 370 において，āsavakhino「漏尽者」と parinibbuto が，正しく遊行する人の属性として併記される．前記した通り(2. 2. 3. 3.参照)，現世で涅槃している人を表す．
・Sn 765「正しく理解して，無漏者達は，parinibbā する(parinibbanti)」
・Th 586「一切の漏が尽きる．そして nibbuti へと到達する」
・Sn 散文 p. 149 では，「諸漏を取り込むことなく，心が解放された(vi√muc)」

374: vivaṭaṃ disvāna pahānam āsavānaṃ「諸漏の捨離を明らかに見て」の註釈 Pj II p. 366: āsavakkhayasaññitaṃ nibbānaṃ「漏の滅と呼ばれる涅槃」がある.

次に nibbāna と nibbuta が散文に出てくる経を検討する.

MN I pp. 339 – 349 [51 経] Kandarakasutta「カンダラカ経」

世尊が大比丘集団と共にいるところに(mahatā bhikkhusaṅghena saddhiṃ)やってきた遊行者(paribbājako)カンダラカと像使いの息子ペッサ(pesso hatthārohaputto)と対話する経の冒頭部分である. まずペッサが世尊を称賛する(MN I p. 340):

> acchariyaṃ bhante, abbhutaṃ bhante, yāva supaññattā c'ime bhante Bhagavatā cattāro satipaṭṭhānā sattānaṃ visuddhiyā sokapariddavānaṃ[243] samatikkamāya dukkhadomanassānaṃ atthagamāya [244] ñāyassa adhigamāya nibbānassa sacchikiriyāya.
> 素晴らしいことです, 尊師よ. 不思議なことです, 尊師よ. また尊師よ, 諸々の生けるものが清まり, 愁いと悲しみを乗り越え, 苦しみと憂いが消え, 正しい理を会得し, nibbāna を目の当たりにするために, これら四念処が世尊によってどれほどよく説示されていることかは.

涅槃を目の当たりにするということは, この場合, = 涅槃を得るという意味である. その手段が禅定修行である四念処であることが明記され, 世尊のように涅槃を目の当たりにすることができるであろう時点は存命中のことであることが推測されるが, その涅槃自体の時点については, 命終時に涅槃する約束との解釈の可能性があるため決定できない. 上記と同じことが Sn 267 の複合語 nibbānasacchikiriyā にも言え,[245] このように nibbāna を伴う複合語や nibbāna に達する文脈と, nibbāna 自体の時点が連動しているわけではないのである.

その後, 世尊の説法の一部として, nibbuta が出てくる以下の表現が繰り返し出てくる(MN I pp. 341, 344, 349):

> idha pana Pessa ekacco puggalo n'ev'attantapo hoti nāttaparitāpanānuyogam-

[243] Be: sokaparidevānaṃ.
[244] Be: atthaṅgamāya.
[245] Sn 267: tapo ca brahmacariyā ca ariyasaccāna dassanaṃ [Be; Se: brahmacariyañca]
nibbānasacchikiriyā ca, etaṃ maṅgalam uttamaṃ.
苦行と禁欲の修行と立派な人にとっての真実を見ることと
nibbāna を目の当たりにすること, これがこの上なき吉祥である.

anuyutto na parantapo na paraparitāpanānuyogam-anuyutto, so anattantapo aparantapo diṭṭhe va dhamme nicchāto nibbuto sītibhūto[246] sukhapaṭisaṃvedī[247] brahmabhūtena attanā viharati.

ペッサよ, ここにまた, ある人は自らを苦しめず, 自らを苦しめる実践にふけらず, 他を苦しめず, 他を苦しめる実践にふけりません. 彼は自らを苦しめず, 他を苦しめず, 現世において無欲で, nibbuta で, 冷たく[清涼と]なっており, 安楽を感受する者として, 崇高な者となることによって, 自ら住します.

上記散文において, nibbuto と sītībhūto が併記されている. 先ほど触れた散文経典中の韻文(古層 MN I p. 171lG)においてもこれら両語は併記され, 存命中に涅槃を得ている世尊の属性として使用されていた. 同様に現世の文脈であるこの散文用例においても, nibbuta は, 今世で涅槃している人を示唆すると考えてよいであろう.

このように同経中に nibbāna と nibbuta が使用され, nibbuta が生前に涅槃している者を表し, nibbāna の用例が現世の文脈である場合, 確定はできないが, nibbāna も生前の涅槃を表す可能性が高いことが示唆され得る.

≪註釈: 生前の涅槃≫

MN 註釈 Ps III p. 10 は, nibbuto に関して sabbakilesānaṃ nibbutattā「一切の煩悩が消えた状態ゆえに」と説明する. さらに, nibbuto を sītibhūto〈冷たく[清涼に]なっている〉と置き換え, 両語が同義であると解釈する. nibbāna に関する註釈はない.

parinibbāna

MN I pp. 145 – 151 [24 経]: Rathavinītasutta「中継車経」anupādāparinibāna[248]

本経は, 自ら解脱(vimutti)等を完了させて(sampanna)尊敬されているプンナ・マンターニプッタ尊者(āyasmā Puṇṇo Mantāṇiputto)の元へサーリプッタ尊者(āyasmā Sāriputto)が赴き, プンナ尊者が世尊のもとで梵行(brahmacariya)に勤めた目的についてサーリップタ尊者から問われ, 取り込むことのない parinibbāna のためである

[246] Be: sītībhūto.
[247] Be: sukhappaṭisaṃvedī.
[248] Be 採用. Ee: anupādā parinibāna. この表現「取り込むことのない般涅槃」は AN IV pp. 70 - 74 にも中般涅槃と共に出てくる. 中般涅槃に関しては後述する(2. 3. 6.参照). DN II pp. 72 – 168 [16 経] Mahāparinibbānasuttanta「大般涅槃経」には anupādisesa (同じく an-upa-ā-√dā から)が涅槃の語彙と共に出てくるが, この経には pari が付された涅槃の語彙が多用されるため, 後述 2. 3. 3.にて論じる.

と答える．そしてそれは生活習慣(sīla)，心(citta)，見解(diṭṭhi)，疑いの超越(kaṅkāvitaraṇa)，道・非道の知見(maggāmaggañāṇadassana)，修行道の知見(paṭipadāñāṇadassana)，知見(ñāṇadassana)の清浄(visuddhi)のことであるかと各々問われたプンナ尊者は，それぞれを否定して，中継車(rathavinīta)の喩えを挙げる．それは，王が急ぎ移動する際，目的地まで7台の中継車が用意され，それらに順番に乗り継ぎ王は目的地に到着したという喩えで，上記の 7 要素の清浄を順番に目的として設定し，それらをつないでいき全ての要素を達成することを示す．問答の後，サーリプッタ尊者はプンナ尊者を称え，二人は喜びあう．[249]

本経中 MN I p. 148 に anupādāparinibbāna「取り込むことのない parinibbāna」が 19 例(テキスト省略あり)出てくる．[250] anupādāparinibbāna は梵行の目的として説かれ，中継車の喩えによって最終的に目的に至った(MN I p. 149: anuppatta [anu-pra-√āp の PP (reached, attained)])ことを表すことから，問答中のプンナ尊者とサーリプッタ尊者とも世尊同様，取り込むことのない般涅槃を現世で得ていると確認できる．しかしながら，上の nibbāna の用例同様に，parinibbāna の時点に関しては，生前とも命終時の約束とも解釈可能であり，いずれかは決定できない．

ここの anupādā (an-upa-ā-√dā「自分のほうへ取り込むことなく」)は，最古層 Sn 1094 の anādānaṃ「取り込まないこと」に同じく ā-√dā の否定であり，ここでも「取り込まないこと」と涅槃の強い結びつきが見て取れる．pari が付された nibbāna であるが，nibbāna であることに変わりなく，pari の意味が特に表出されているとは言えない．

≪註釈: 生前の涅槃≫

MN 註釈 Ps II p. 156 は，「阿羅漢果」および涅槃を獲得した者は「梵行に住している」と説明し，生前の涅槃の境地と解釈する．

<u>-pada の用例</u>

散文の本経では santivarapada が立派な者の求めるものとして現れる(pp. 163, 165, 166 他). nibbānapada に近い概念である可能性が高いこの語を取り上げ，本経において-pada をどう解釈すべきかを検討する．

---

[249] 七種清浄という涅槃に至る道について説く本経は，後代のブッダゴーサによる Vism の基になっている(片山 1997 p. 32 参照).

[250] この成句は他に SN IV p. 48, SN V p. 29, AN I 44, MN III p. 187 = AN I p. 142 で現れる．また anupādā vi-√muc としてより多く現れる(例: vimutto: DN I p. 17, MN I p. 235, SN II pp. 18; 48; 115; 253, SN V p. 194; 205, vimokkho: AN V p. 64, cittassa vimokkho: MN II p. 265, AN I p. 198, vimuccanti: MN III p. 187 = AN I p. 142 (CPD p. 199 s.v. an-upādā).

anuttaraṃ santivarapadaṃ pariyesamāno
無上である最高の鎮まりの境地を求めつつ

この複合語が「無上」と同格であるため, また「最高」という語も入っており, -pada は「境地」の意味とするのがより妥当であろう.[251]

2. 3. 2. nibbāyati

次に Sn 758 の amosadhamma nibbāna「虚妄ではないダルマ(真理・法則性)である nibbāna」と同じ表現および「火が消える」として nibbāyati が現われ, 人に対して parinibbāyati が使われる経を取り上げる.

MN III pp. 237 - 247 [140 経] dhātuvibhaṅgasutta「界分別経」

世尊がヴァッガヴァのところに滞在中、先にそこに留まっていたプックサーティに対し説法した. プックサーティは, 世尊を師と仰ぎ出家したが, 世尊にまだ出会ったことがないため, 世尊と知らず説法を聞いたが, その内容から世尊であるとわかる. 喜んだプックサーティは, 具足戒を受けるため, 鉢と衣を求めて出かけたが, 一頭の牝牛が迷走してきて彼の命を奪ってしまう. その後, 彼の来世を尋ねる修行僧たちに, 世尊は, プックサーティは般涅槃者(parinibbāyī)になったと告げる. 以下 nibbāyati および nibbāna の用例はその説法の一部分(MN III p. 245):

> seyyathāpi, bhikkhu, telañ ca paṭicca vaṭṭiñ ca paṭicca telappadīpo jhāyati; tass' eva telassa ca vattiyā[252] ca pariyādānā aññassa ca anupāhārā[253] anāhāro nibbāyati,—evam eva[254], bhikkhu, kāyapariyantikaṃ vedanaṃ vediyamāno: kāyapariyantikaṃ vedanaṃ vediyāmīti pajānāti; jīvitapariyantikaṃ vedanaṃ vediyamāno:[255] jīvitapariyantikaṃ vedanaṃ vediyāmīti[256] pajānāti; kāyassa bhedā[257] uddhaṃ jīvitapariyādānā idh' eva sabbavedayitāni anabhinanditāni[258]

[251] 片山 1998 p. 7 は anuttaraṃ santivarapadaṃ「最上の寂静句(= 涅槃)を」と和訳し, 涅槃と同義であると追記している. Cf. santipada PED p. 676 も "'the place of tranquility' tranquil state, i.e. Nibbāna"とする.
[252] Be; Se: vaṭṭiyā.
[253] Be; Se: anupahārā.
[254] Be; Se: evameva kho.
[255] Be: vedayamāno.
[256] Be: vedayāmīti.
[257] Be: この後に paraṃ maraṇā.
[258] Ee: sabbavedayitā abhinanditāni. Be 採用. Se: sabbavedayitāni abhinanditāni.

sītibhavissantīti pajānāti. tasmā evaṃ samannāgato bhikkhu iminā paramena paññādhiṭṭhānena samannāgato hoti. esā hi, bhikkhu, paramā ariyā paññā yadidaṃ sabbadukkhakkhaye ñāṇaṃ. tassa sā vimutti sacce[259] ṭhitā akuppā hoti. taṃ hi[260], bhikkhu, musā yaṃ mosadhammaṃ, taṃ saccaṃ yaṃ amosadhammaṃ nibbānaṃ; tasmā evaṃ samannāgato bhikkhu iminā paramena saccādhiṭṭhānena samannāgato hoti. etaṃ hi[261], bhikkhu, paramaṃ ariyasaccaṃ, yadidaṃ amosadhammaṃ nibbānaṃ.

托鉢修行者よ，ちょうど油に縁ってまた灯心に縁ってオイルランプが燃えて，他ならぬその油と灯心の尽き果てること故に，また別の物の供給がない故に，燃料がない[オイルランプの灯火]が消えるように，他ならぬこのように托鉢修行者よ，身体がある限りにおいての感受作用を経験すれば[私は]身体がある限りにおいての感受作用を経験していると理解する．命がある限りにおいての感受作用を経験すれば[私は]命がある限りにおいての感受作用を経験していると理解する．身体の分解から，命が尽き果てた後，他ならぬこの世において，感受されているもの全てが喜ばれないものとして冷たくなるだろうと理解する．それ故，このように体得した托鉢修行者は，この最高の理解力という支えを体得した者となる．というのも托鉢修行者よ，これは最高の立派な理解力―即ち，一切の苦しみの滅尽に関する理解であるから，その人にとって，その解脱は真実に立脚していて揺るぎないものとなる．何故なら托鉢修行者よ，虚偽なるダルマ(真理)は虚妄であり，虚妄ならざるダルマ[つまり] nibbāna は真実であるためだ．それ故このように体得した托鉢修行者は，この最高の真実という支えを体得した者となる．というのは托鉢修行者よ，これは立派な人にとっての最高の真実―即ち，虚妄ならざるダルマ[つまり] nibbāna であるためだ．

前述の散文 MN I p. 167 の用例に類似して，ここでも「その解脱(vimutti)は真実に立脚している」および「最高の真実 ＝nibbāna」とあることから，解脱と涅槃が，同じ事象とまではいえないかもしれないが，非常に近い関係として語られている．

また，「理解力」および「理解すること」と涅槃(および解脱)とに深い関係があることが読み取れる．但し，理解する内容に関してここでは，灯火が消える喩えが，命が尽きることにかけられていて，自身の命終後について「感受されているも

[259] MN 註釈 Ps p. 59: *saccan* ti paramatthasaccaṃ nibbānaṃ.「真実」とは最上の真実，つまり涅槃．
[260] Be: tañhi.
[261] Be: etañhi.

の全てが喜ばれないものとして冷たくなるだろうと理解する」こととあり，これまで検討した用例とは異なり，「身体の分解から，命が尽き果てた後」と明らかに命終[後]であることを示して，その状態を理解するとある．そしてその者は，「最高の理解力という支え」および「最高の真実という支え」を体得した者となる，および nibbāna は，「立派な人にとっての」sacca「真実」であり，「虚妄ならざるダルマ(真理)」であると説明される本経の文脈から，その者は現世において涅槃(および解脱)している者となることが示唆され得るが，命終後が語られる文脈から，その涅槃は命終時に真に達成されるとの解釈も否定できないため，涅槃の時点は判別がつかない．

これまでと異なる具体的例として，その文脈において，sīti-√bhū「冷たくなる」が肉体の死後のこととして捉えられていることが指摘され得る．上記下線部分にはパラレルがあり，二種涅槃界を説く It pp. 38 – 39 [44 経]の散文部分で燃料の残余のない(無余依)涅槃界の説明として出てくるため，同様に命終を示唆する．対照的に，古層の例えば前述した Sn 542 (2. 2. 2. 1.参照)および MN I p. 171 (2. 3. 1.参照)では，世尊が自身のことを sītibhūta「冷たく[清涼に]なった[状態]」であると語り，明確に現世・生前の文脈で使われ，また散文においても，sītibhūta が存命中の人に使われる場合も見出せる(上記 2. 3. 1. MN I p. 341 他参照)．古い韻文の層からより新しい韻文の後期，そしてさらに散文の層へと移行するにつれ，同じ語が示す時点が生前を示唆する場合が大半であったのに加えて，命終[後]のことを理解する文脈と涅槃が結び付けられるようになることが確認される．さらにもう 1 点，火が消える喩えの時点についても，これまでに検討した用例では生前の文脈で語られていたが(例: 古層 Sn 19, 235, 591)，本散文ではそうではない．時代層間に見られるこれらの変遷は，命終時に真に達成されるという涅槃観が次第に主流になっていくことに大きく関与しているのであろうと推測される．

≪註釈≫

Ps pp. 58 – 59 は「冷たくなるだろう」を「諸煩悩が鎮火へと至り来て抑制されている状態」(kilesā hi nibbānaṃ āgamma niruddhā)と説明し，ランプの灯が消える喩えを，輪廻を断ち切ることにより諸々の感受されるものが生じることはないと解釈する．生前と命終と両方の理解を示唆しているようである．

parinibbāyati が使われている箇所(MN III p. 244):

so anabhisaṃkharonto[262] anabhisañcetayanto bhavāya vā vibhavāya vā[263] na

[262] Be; Se: anabhisaṅkharonto.
[263] Se: bhavāya vibhavāya.

kiñci loke upādiyati anupādiyaṃ na paritassati aparitassaṃ paccattaṃ yeva parinibbāyati: khīṇā jāti vusitaṃ brahmacariyaṃ kataṃ karanīyaṃ[264] nāparaṃ itthattāyā ti pajānāti.

その者は生存あるいは非生存のために, 形成することなく, 構想することなく, 世間において何にも執着しない. 執着することなく動揺しない. 動揺することなく, 他ならぬひとりで parinibbā する. 生れは尽きた, 梵行は成就された, なすべきことはなされた, 再びこの世での生存のため[生まれることは]ない[265]と理解する.[266]

定動詞「動揺しない」「理解する」が parinibbāyati に併記されることから, parinibbāyati の時点も生前である可能性が高いが, 本経では前記(MN III pp. 244 – 245)において命終後の状態を理解するとの文脈であり, nibbāna の時点については判別つかないこと, また最後(MN III p. 247 以下)に parinibbāyin が来世で般涅槃する者という意味で使用されることもあり, parinibbāyati の時点が生前以外を示唆する可能性も考えられる.

本経の最後, 突然亡くなってしまったプックサーティの来世について問われた世尊が語った言葉に parinibbāyī が出てくる(MN III p. 247):

paṇḍito, bhikkhave, Pukkusāti kulaputto paccapādi dammassānudhammaṃ, na ca maṃ dhammādhikaraṇaṃ viheṭhesi.[267] Pukkusāti, bhikkhave, kulaputto pañcannaṃ orambhāgiyānaṃ saṃyojanānaṃ[268] parikkhayā opapātiko tattha parinibbāyī anāvattidhammo tasmā lokā [ti].

比丘たちよ, 良家の息子プックサーティは賢者であり, ダルマ(教え)の法則性に従って実践した. そしてダルマに関して私を悩ませなかった. 比丘たちよ, 良家の息子プックサーティは五つの下位の束縛の滅尽によって化生者[となり], そこで parinibbā する人となり, その世界から戻らない者[となった].

---

[264] Se: karaṇīyaṃ.

[265] 片山 2002 p. 275「もはやこの状態の他にはない」. 勝本 2005 p. 487「さらに, この世(輪廻の状態)にいたることはない」. Horner 1990 p. 291: “there is no more of being such or so.” 拙訳含め, 片山氏の解釈が他と異なっている. itthattāya を dat.ととるか abl.ととるかで解釈の違いが存在する(Bodhi 2000 pp. 433 - 434 参照).

[266] SN II p. 82 – 83 に同じ表現あり. 類似した感受作用の説法の中, この経ではオイルランプの燃料の喩えではなく, 窯から出した熱い器の熱が鎮まる(śam)ようだと説明される.

[267] Be: vihesesi.

[268] Se: saññojanānaṃ.

このように，韻文には見られなかったが，散文においては，来世で般涅槃するという教理が説かれる．この教説については後述する(2. 3. 6.参照).

≪註釈≫

Ps p.62 は，アヴィハー梵天界に生まれ変わった．まさに生まれ変わってすぐ阿羅漢性を得たと説明する．

parinibbāyati

韻文の古い層では diṭṭhadhammābhinibbuta が「現世」，つまり生前で涅槃している／したことを強調する意味で使われていた可能性を指摘したが，散文でも diṭṭhe va dhamme parinibbāyati として，現世において[般]涅槃することが語られる．

SN IV pp. 101 - 102: Sakka「サッカ経」diṭṭheva dhamme parinibbāyanti

ここではまず，現世で般涅槃することが，upādāna「燃料・取り込むこと・執着」の有無と絡めて語られる．眼(cakkhu)・耳(sota)・鼻(ghāna)・舌(jivhā)・身(kāya)・思考(mano)に基づいた viññāṇaṇ hoti tadupādānaṃ「認識機能はそれを燃料(取り込み)としたものとなる」場合は「現世において般涅槃しない」と説かれる(SN IV p. 102):

> saupādāno devānam inda bhikkhu no parinibbāyati. ayaṃ kho devānam inda hetu ayam[269] paccayo. yena-m-idhekacce sattā diṭṭheva dhamme no parinibbāyanti.
> 神々の主よ！燃料を持つ托鉢修行者は parinibbā しない．知っての通り，神々の主よ！これが原因，これが理由である．それによって，ここで，ある人々は現世において parinibbā しない．

対照的に，上記六根に基づいた認識機能はそれを燃料(取り込み)としたものとならない場合には「現世において般涅槃する」と説かれる(SN IV p. 102):

> anupādāno devānam inda bhikkhu parinibbāyati. ayaṃ kho devānam inda hetu ayam paccayo yenam-idhekacce sattā diṭṭheva dhamme parinibbāyantīti.
> 神々の主よ！燃料を持たない托鉢修行者は parinibbā する．知っての通り，神々の主よ！これが原因，これが理由である．それによって，ここで，あ

[269] Be; Se: ayaṃ (以下同).

る人々は現世において parinibbā する.

文脈は現世, つまり存命中のことであり, parinibbāyanti は生きている間に涅槃することを示唆する.

≪註釈: 生前の涅槃≫

Spk II p. 391 は,「煩悩がすっかり消えることによって般涅槃する」(kilesaparinibbānena parinibbāyanti)と説明する.

次に同じく「現世において」parinibbāyati の用例であるが, 異なる解釈が許される可能性が指摘され得る散文経典の用例を挙げる.

MN I pp. 400 – 413 [60 経] Appaṇṇaka-sutta 「無碍経」 diṭṭhe va dhamme parinibbāyissāmi

本経において, 世尊はバラモンの資産家達に説法する. MN I pp. 412, 413 に nibbuto が上記 MN I p. 341 他と同じ表現・同じ意味で現れ, その者は無碍のダルマ(真理・法則性)を知る者であることが説かれる.[270] 前述 2. 3. 1.の MN I p. 341 他と違って, この経には nibbāna は使われず, parinibbāyati が出てくる(MN I p. 411):

> ye pana te bhonto samaṇabrāhmaṇā evaṃvādino evaṃdiṭṭhino: atthi sabbaso bhavanirodho ti, sace tesaṃ bhavataṃ samaṇabrāhmaṇānaṃ saccaṃ vacanaṃ ṭhānam – etaṃ vijjati yaṃ diṭṭhe va dhamme parinibbāyissāmi.
> 尊敬すべき沙門・バラモン達は, 生存の滅は全てにおいてある, というこのような説を持つ者達であり, このような見解を持つ者達である. もし, そういう彼等尊敬すべき沙門・バラモン達の言葉が真実であるならば, 現世において[私は]parinibbā するであろうという, このことが道理として知られる.[271]

現世で般涅槃することが語られ, その条件となるのは, そういう者達の「生存の滅がある」という主張が真実(saccaṃ)である場合である. 生存の滅, 即ち, 生死・輪廻に関わることであるが, 最古層の用例(Sn 1187; 1195: diṭṭhadhammābhinibbuta)が, 現世で既に涅槃していることを表していたのと同様に, ここでも diṭṭhe va dhamme

[270] 他にもパラレルあり, 宮本 1989 p. 173 によると, MN II pp. 159 – 160; AN II p. 206. 本経該当用例には註釈がされていない.
[271] parinibbāyissāmi に関する註釈はなし.

「現世にて」と存命中の文脈であることを強調して parinibbāyati が使われているとの解釈も可能であろうが, 新層である本散文においては, 別の解釈の可能性も否定できない. 無碍のダルマの説明(MN I p. 402 他)の中に,「化生している者達(sattā opapātikā)がいる...あの世(para loka)を自らよく知り(sayaṃ abhiññā)...」等と, 来世に関する内容があり,「身体の崩壊後, 死後」(kāyassa bhedā param[272] maraṇā)」(MN I p. 403 他)および「現世において」(diṭṭha va dhamme)が繰り返し対比される. また上記引用部分に相対する見解を持つ者達は神格達(devā)として生まれ変わるという内容が直前に出てくる(MN I p. 411). このような文脈から, また上記散文 MN III p. 247 では来世において般涅槃者となるという教理も見出せるようになることを加味して推論すると, 本散文経典における parinibbāyati の解釈として, 来世での命終時に般涅槃することに対比する意図で, 現世での命終時に般涅槃する, 即ち, 生死・輪廻が止まることを意味する可能性もある. このように時代層による教理の変遷が推測され得る.

但し, 本散文経典においては, parinibbāyati の用例の後に nibbuto が, 先に検討した散文経典 MN I p. 341 他(MN I [51 経] Kandarakasutta)のパラレルとして現れ, 同じく生前に既に涅槃している者を表すことが導かれる. 本経では parinibbāyati の時点は判別がつかないと解釈したため, 命終と解釈する場合は涅槃の語彙に pari の有無による時点の違いがある可能性が推測され得る. 一方前述の Kandarakasutta においては, 生前に涅槃していることを表す nibbuta とともに nibbāna が使用され, 四念処が涅槃への手段として説かれるため, nibbāna の時点は確定できないが生前の涅槃を示唆する可能性が高いことが指摘され得た. 生前の涅槃と解釈する場合は, pari が付されない涅槃の語彙が意図的に使用されたとも推測できるであろう.

2. 3. 3. nibbuta の諸用例

前記 2. 3. 1.において散文経典中の nibbuta の用例(MN I p. 341 他)を既に考察し, 今世で涅槃している人を示唆する結果が得られている. 散文には abhi 付きの PP の用例は現れず, pari 付きの涅槃の語彙が数多く見出せる. 散文経典において特徴的なことは, 世尊の命終を示す仏伝である DN II pp. 72 – 168 [16 経] Mahāparinibbānasuttanta において parinibbuta をはじめとする pari が付された涅槃の語彙が集中的に使用されていることである. 例えば DN 全 34 経中, parinibbuto は DN index p. 201 に 31 例の記載がある中で, 30 用例がこの経に出てくることからだけでも, それは明らかである. 従って, 本項においてはこの経を中心に検討

[272] Be: paraṃ.

することとするが, その前に DN 中にあと 1 例ある parinibbuta の用例を見ておきたい(DN III p. 55):

parinibbuta

DN III p. 55: parinibbuta

> parinibbuto so Bhagavā parinibbānāya dhammaṃ desetīti.
> parinibbuta であるかの世尊は parinibbāna のためダルマ(教え／真理)を説示する, と.[273]

これは世尊が自身のことを述べた言葉であり, parinibbuta は世尊のことを表し, 文脈は現世・生前のことであることがわかる. また「parinibbāna のために」と parinibbāna が目的の対象として出てくる. この語の具体的内容と時点に関しては, ここからは明らかにならないが, parinibbuta な世尊が他者も parinibbuta になるよう parinibbāna を説示するのであるから, この parinibbāna も生前の涅槃の可能性が高いとはいえるであろう.

DN II pp. 72 – 168 [16 経]: Mahāparinibbānasuttanta

本経は「般涅槃」として世尊の命終が大きくクローズアップして描写され多用される. 世尊が命終を迎えるまでの様子を記した仏伝である.[274]

如何に本経に pari が付された涅槃の語彙が集中しているかは, DN 全 34 経中に 164 例ある涅槃の語彙のうち 135 例が本経に現れ, その中で pari 付きの用例が 126 例 (parinibbāyinī, parinibbāyino, parinibbāyeyyaṃ, parinibbāyissati, parinibbātu, parinibbāna(ṃ), parinibbāyissāmi, [定型句]: anupādisesāya nibbāna-dhātuyā parinibbāyati/parinibbuto, parinibbuto, parinibbāyatu, parinibbāyi, parinibbute, parinibbānā)と頻出する. 散文経典には, 最古層や古層とされる韻文経典には見られない定型句: anupādisesāya nibbāna-dhātuyā parinibbāyati/parinibbuto「燃料のない(無余依)涅槃界において般涅槃する／般涅槃している(した)」も使用される.

「般涅槃」は, 本経のテーマであることもあり, 冒頭での化生者(opapātika: 本項下記にて論じる)の説明の際に使用される用例以外は, 全て世尊の命終を示す. こ

[273] DN III pp. 36 – 57 [25 経] Udumbarikasuttanta「ウドゥンバリカ経」. 本経はウドゥンバリカの遊行者の園に滞在中であるニグローダ遊行者に対する世尊の説法である.
[274] 本経の涅槃の語彙に関する個々の用例については, 全用例を列挙した付録 4 (用例リスト)および付録 5 (用例検討)も参照されたし.

れは，これまでの用例検討において時点の判別がつかないとの考察結果である名詞形の parinibbāna にもあてはまる．例えば，マーラ(魔)と世尊の会話がある:

parinibbāna

マーラ(魔)の言葉(DN II p. 104):

> parinibbātu dāni bhante Bhagavā, parinibbātu Sugato, parinibbāna-kālo dāni bhante Bhagavato.
> 尊いお方よ，世尊は，今，parinibbā してください，善く行ったお方は，parinibbā してください．尊いお方よ，今が世尊の parinibbāna-の時[です].

世尊の言葉(DN II p. 106):

> appossukko tvaṃ pāpima hohi, naciraṃ Tathāgatassa parinibbānaṃ bhavissati, ito tiṇṇaṃ māsānaṃ accayena Tathāgato parinibbāyissatīti.
> 悪しき者よ，心配なきよう．まもなく如来の parinibbāna が起こるでしょう．これから 3 ヶ月後に如来は parinibbā するでしょう，と．

ここでは，世尊自身のことを「如来は般涅槃する」と 3 人称で表現している．マーラも世尊も具体的に「今が」,「3 ヶ月後に」と言うことから，ここに出てくる parinibbāna は，その動詞形とともに，明らかに世尊の命終を示しているといえる．この点において，本経は初期仏典の中でも特徴的であるように思われる．以下に他の涅槃の語彙を続けて検討する．

本散文経典と同様に，古層 Sn Ch. 1 – 3 (散文あり)においても，世尊が多くの弟子を抱え，僧団が確立し，在家信徒も大勢いることが想起される経典が複数見られる．しかしながら，世尊の命終について語られた経典はなく，前述 2. 2. 3. 2.で取り上げた Ch. 2: Vaṅgīsasutta 中に命終を示唆すると解釈可能である用例が見られるのみである．

pari の有無

具体的には，本経中の pari 付きの用例 126 例中 115 例が，明確に世尊の命終のみを意図して使用される．動詞形が多く見られ，世尊の命が尽きる事象(出来事)を示す．残り 11 例は，世尊が他の者について，来世で「般涅槃者」(parinibbāyin)となると語る散文部分の 10 例，および，世尊が語る偈頌の 1 例(parinibbuto, DN II

p. 123G)で，この偈については，その時点は判別がつかないとの解釈を提示した(付録 5 参照).

また，散文とは対照的に，途中に盛り込まれる偈頌には pari の付かない用例も現れる．偈頌の 5 用例のうち，生前に既に涅槃している者を表すと判断できる nibbuta (DN II p. 136G)，および，生前か命終かの時点がはっきりしない parinibbuta があり(DN II p. 123G)，涅槃の用法について統一感があり，なおかつ体系化されている散文と古層の偈頌部分には用法および意味において相違が見られる．

これまでの考察において，明らかに現世で涅槃している可能性を示す parinibbuta の用例が散見されたが(例: 古層 Sn 370, 467，散文 DN III p. 55)，本経の散文部分において，生前の涅槃を示唆する涅槃の語彙は現れず，それは別の語(例えば「覚り」[√budh]等)により表現される．[275]

2. 3. 4. 定型句

anupādisesāya nibbāna-dhātuyā parinibbāyati/parinibbuto

この定型句は本経に 5 回出てくる．以下に一例を挙げる．本用例は，チュンダの托鉢食を食べ，病気となり，クシナーラーへと移動した世尊の皮膚の色が清浄で純白であることに気付いたアーナンダに対し，世尊が語った言葉である(DN II p. 134):

> evam etaṃ Ānanda. dvīsu kho Ānanda [276] kālesu ativiya Tathāgatassa parisuddho [277] hoti chavi-vaṇṇo pariyodāto. katamesu dvīsu? yañ ca Ānanda rattiṃ Tathāgato anuttaraṃ sammāsambodhiṃ abhisambujjhati, yañ ca rattiṃ anupādisesāya nibbāna-dhātuyā parinibbāyati.
> アーナンダよ，これはその通りです．アーナンダよ，2 つの時において，如来の肌の色が清まり，極めて清浄になります．どんな 2 つであるか．アーナンダよ， 如来が無上の正しい覚りに目覚めた夜と，燃料の残余のない(無余依)涅槃界 [278]に般涅槃する [279]夜にです．

---

[275] 例えば，DN II p. 108 および p. 134 (下記 2. 3. 4): anuttaraṃ sammā-sambodhiṃ abhisambujjhati「無上の正しい完全な覚りを完全に覚る」である．

[276] Be: 引用部分最初の Ananda 以降: evametaṃ, ānanda dvīsu.

[277] Be; Se: kāyo parisuddho.

[278] dhātu は Sn には現れない語であり，「要素・性質・領域・世界」他，様々な意味を有する．PED p. 340; BHSD pp. 282 – 284 参照.

[279] 本定型句中の anupādisesāya nibbāna-dhātuyā (f.)は語形から abl. (理由)/inst. (手段)/dat. (目的地)/gen. (所有)/loc. (位置)を示す可能性が考えられるが，dat.あるいは loc.の理解が先行研

「覚りに目覚めた」時と「般涅槃する」時が対比され，世尊の命終を pari 付きの涅槃の語彙を含む定型句が使われている．

次に PP の定型句を 1 例挙げる．4 つの感動する場所の中の 1 つとして世尊が以下の通り語る(DN II p. 140):

> “idha Tathāgato anupādisesāya nibbāna-dhātuyā parinibbuto” ti Ānanda saddhassa kula-puttassa dassanīyaṃ saṃvejanīyaṃ ṭhānaṃ.
> 「ここで如来が，燃料の残余のない(無余依)涅槃界に般涅槃した」と，アーナンダよ，信ある良家の子息にとっては，目に美しい感動する場所[である].

散文においては，この定型句が見出せるようになる.[280] 命終時に般涅槃する意味で使用され，新層である散文では涅槃の用法の多様性が窺える．この経は大変有名であり，涅槃観および涅槃の語彙の用法の展開に大きな役割を果たしたといえよう．

註釈や先行研究においては，初期仏典において唯一，二種涅槃界が説かれる It pp. 38 – 39 [44 経]の内容に呼応して，saupādisesā nibbānadhātu「燃料の残余のある(有余依)涅槃界」つまり生前の涅槃に相対する境地として，本定型句中の anupādisesā nibbānadhātu「燃料の残余のない(無余依)涅槃界」を，解脱者の命終[後]の境涯であると解釈する.[281]

生前・命終で区別する二種涅槃界の upādi の意味は「五蘊」「身体」であり，こ

究における翻訳に見られる(例: 片山 2004 p. 283「無余依の涅槃界において入滅する」，中村 1980 p. 120「煩悩の残りのないニルヴァーナの境地に入る」，Walshe 1987 p. 260: “he attains the Nibbāna-element without remainder at his final passing”).

[280] DN index p. 20 に anupādisesāya の記載は 6 例あり(Be 検索でもチェック済み)，うち 5 例が本経 DN 16 経の定型句である．残り 1 例の定型句は，DN III Pāsādikasuttanta [29 経] p. 135 に使用され，この例では，sammā-sambodhi「正しく完全な覚り」と無余依涅槃界において般涅槃する，yaṃ etasmiṃ antare bhāsati lapati niddisati「この間に語り，話し，示す」とあり，「覚り」が生前の正覚，「般涅槃する」が命終を表す．この散文経典においても，本経同様に「覚り」に「涅槃」の語彙の使用を避ける意図が推察される．

[281] 中村 1993 は「修行者にとってなかなか理想が実現されがたいことが自覚されると，ニルヴァーナを目的視して，一定の距離をおいて考えるようになる(p. 925)」．そして「時代の経過とともにニルヴァーナは死後に起こるもの(p. 930)」と考えられるようになり，「現世において得られるニルヴァーナもあるはず(p. 930)」であるので「二つのニルヴァーナを想定するようになった(p. 931)」と説明する．

藤田 1988b は，「無余涅槃界に般涅槃する(p. 9)」と和訳し，この定型句が単独に説かれることを根拠に，無余涅槃界を「有余涅槃界より先に成立した(p. 9)」ものと位置づけ，「涅槃を得た者の死後の境界を具体的・積極的に表したもの(p. 9)」との見解を示す．

れはこの語の意味が「取り込み(取著)」から upadhi の意味と同じ「[五]蘊」「身体」へと転換したことを表し, upādi の含意の時代層による変遷が類推される.[282] 註釈もこの教説の観点から経典解釈がなされ, 先行研究においても, この It pp. 38 – 39 [44 経]の二種涅槃界の教説は重要視される.[283]

本経を含む散文において saupādisesāya を使用する定型句 saupādisesāya nibbānadhātuyā parinibbāyati/parinibbuta「燃料の残余のある(有余依)涅槃界に般涅槃する／している・した」は見出せず, anupādisesāya の定型句のみが現れるため(DN II p. 108; 135, DN III p. 135, Ud 55; 85, It 121, AN II p. 120, Ja I 28; 55), It pp. 38 – 39 [44 経]とは用法が少し異なっている. このことから, 散文経典の時代において, Mahāparinibbānasuttanta の成立より後に, saupādisesā nibbānadhātu「燃料の残余がある(有余依)涅槃」という概念が生じて, It pp. 38 – 39 [44 経]が成立した可能性が示唆され得る. そして, 初期仏典より後代になって, saupādisesāya を含む定型句が確立することが指摘され, 紀元 5 世紀ごろとされる註釈家の時代には解脱者の生前・命終, つまり身体の有無を表す二種涅槃界の教説が定着することにつながると推測可能であろう. さらに, It pp. 38 – 39 [44 経]中に示されたこの転換した upādi の意味の影響を受けて, Skt.形では二種涅槃界に upadhi の語をあてるようになったと推測できる.

2. 3. 5. nibbuti

Sn 最古層には Tuvaṭakasutta に 2 例あり(Sn 917; 933), santi「鎮まり」と定義され, それは現世における自己の内面の鎮まりを示唆し, 生前に涅槃している状態を表す可能性が, 考察から間接的に導かれた(前述 2. 1. 3.参照). 次に Sn 古層 1 例(Sn 228), Sn 以外の古層 6 例(Th 32, 418, 586, Ja III p. 523, Ja VI pp. 437, 442)を検討した結果(前述 2. 2. 4.参照), 古層では, 涅槃の定義である煩悩の滅や取り込みがないこと, また生死・輪廻の滅を表す内容や「無上の安穏」が併記語として現れ, 涅槃を意図して用いられている可能性が確認されたが, その時点については判別がつかなかった. 残る散文の用例として, nibbuti は 2 ニカーヤ(DN, MN)に繰り返しによる複数例が見出せる. nibbāna が定義づけされる SN には nibbuti の用例は

[282] upādi に関して, 宮本 1989 は,「語源的には upādāna (執着・燃料)に通じ『取著』を意味(p. 164)」していたが, 涅槃観に変遷あり, 二種涅槃界の upādi は「身・命の存続する限り, 異熟身を『取るはたらき』(取著作用)が残っていると見なされる(p. 180)」ようになったと解釈する. そして宮本 1989 p. 164 は,「パーリ聖典では upādi であるが, サンスクリット系の経, 論ではそれと語源を異にする upadhi が用いられている. 何故この初伝の相違が起こったかについては不明の点が多い」とする. upadhi については宮本 1975 も参照のこと.

[283] 宮本 1989 p. 163 は,「後代の経, 論に現れるこの教説の淵源と考えられる」と It pp. 38 – 39 [44 経]を重要視する(p. 163).

ない.

DN I pp. 1 – 48 [1 経] Brahmajāla Sutta「梵網経」[284]

本経においては, 62 の異見を退ける仏教の立場が示される. 繰り返される如来に関する表現中に nibbuti が使われる(DN I pp. 16, 21, 25, 29, 38 他: nibbuti viditā「nibbuti が知られて(見られて)」; 同様の用例 DN III pp. 28, 30, 32, 33, 34 他, 下記参照). 異見の中に, 現世涅槃論がある(DN I p. 38):

> 'ime[285] kho te, bhikkhave, samaṇa-brāhmaṇā diṭṭha-dhamma-nibbāna-vādā[286] sato sattassa parama-diṭṭha-dhamma-nibbānaṃ paññāpenti[287] pañcahi vatthūhi. ye hi keci, bhikkhave, samaṇā vā brāhmaṇā vā diṭṭha-dhamma-nibbāna-vādā sato sattassa parama-diṭṭha-dhamma-nibbānaṃ paññāpenti, sabbe te imeh' eva pañcahi vatthūhi etesaṃ vā aññatarena, n'atthi ito bahiddhā.
>
> tayidaṃ, bhikkhave, Tathāgato pajānāti: "ime diṭṭhiṭṭhānā evaṃ-gahitā evaṃ-parāmaṭṭhā evaṃ-gatikā bhavissanti evam[288]-abhisamparāyā ti." tañ ca Tathāgato pajānāti, tato ca uttaritaraṃ pajānāti, tañ ca pajānanaṃ na parāmasati, aparāmasato c' assa paccattaṃ yeva[289] nibbuti viditā, vedanānaṃ samudayañ ca atthagamañ ca[290] assādañ ca ādīnavañ ca nissaraṇañ ca yathā-bhūtaṃ viditvā anupādā vimutto, bhikkhave, Tathāgato.
>
> 托鉢修行者達よ, 知っての通り, これらの沙門・バラモン達は, 現世涅槃論を唱えて, 衆生の最高の現世涅槃を 5 つのこと[291]によって説く. なぜ

---

[284] 本経の先行研究については畑 2006b 参照; 現世涅槃論については, 特に pp. 70, 86, 87, 121 を参照のこと.

[285] Be; Se: imehi.

[286] Ee: -nibbānā-. Be; Se 採用.

[287] Be; Se: paññapenti (以下同).

[288] Be; Se: bhavanti evaṃ.

[289] Be; Se: paccattaññeva.

[290] Be; Se: atthaṅgamañca.

[291] ① "yato kho bho ayaṃ attā pañcahi kāma-guṇehi samappito samaṅgi-bhūto paricāreti, ettāvatā kho bho ayaṃ attā parama-diṭṭha-dhamma-nibbānaṃ patto hotīti." [Se: paramadiṭṭhadhammanibbānappatto]
「知っての通り, 友よ, この自分は五種の欲望の対象を与えられ, 備え, 付き従う故に, その限りにおいて, 知っての通り, 友よ, この自分は最高の現世涅槃を獲得している, と」(DN I p. 36)

ettāvatā「その限りにおいて」以下同で, 残り 4 つが説明される. ②paṭhamajjhānaṃ upasampajja viharati「第一禅に入って住している」③dutiyajjhānaṃ「第二禅に」④tatiyajjhānaṃ「第三禅に」⑤catutthajjhānaṃ「第四禅に」(DN I pp. 37, 38). つまり, 現世涅槃論とは, これら 5 つの一部か全部を根拠に現世涅槃を獲得していると「論じる」ことである.

なら托鉢修行者達よ, そのような沙門達やバラモン達であれ, 現世涅槃論を唱え, 衆生の最高の現世涅槃を説く彼らは皆, 他ならぬこれら 5 つのことによって, あるいはこれらのいずれかによる以外はないからである.

托鉢修行者達よ, 如来はそれを次のように理解する.「このように捉えられ, このように囚われたこれらの諸見地 [292]は, これこれの行先, これこれの将来をもたらすものとなるであろう, と」如来はそれを理解し, それ以上のことも理解する. そしてその理解に囚われない. 托鉢修行者達よ, そして, 囚われることがないこの如来によって, 他ならぬ自ら, 自身の nibbuti が知られている(見つけられている). 諸々の感受機能の生起, 消滅, 味わう事, 危難, 離脱をありのままに知って(見て), 取り込むことなく如来は解放されている(DN I p. 38 他).

如来は自身の nibbuti を知っている(見つけている)[√vid]とあり, 現世の文脈である. 修行完成者である如来の状態であるので, nibbuti は nibbāna に相当すると考えてよい可能性が高いが, nibbuti の具体的な意味は直接言及がなく, またその時点についても決定できない. nibbuti の直後に「諸々の感受機能の生起, 消滅, 味わう事, 危難, 離脱を知って(見つけて)」とあるので, nibbuti の言い換え, あるいは, これらに関連する意味を表す可能性は指摘されよう.

≪註釈: 生前の涅槃≫

DN 註釈 Sv I p. 108 は「囚われている諸煩悩の鎮まり」(parāmāsa-kilesānaṃ nibbuti)であり, 如来の涅槃を示すと説明する.

DN III pp. 1 – 35: Pāṭika-suttanta「パーティカ経」

世尊の言葉[1 人称]として複数回(正確には 5 回)出てくる. 本経後半部分で世界の起源に関する説について世尊が 1 人称で語る. この部分は「梵網経」のパラレルである.

aggaññañ cāhaṃ, Bhaggava, pajānāmi. Tañ ca pajānāmi, tato ca uttaritaraṃ

[292] 註釈 Sv I p. 107: diṭṭhiyo va diṭṭhiṭṭhānā nāma. api ca diṭṭhīnaṃ kāraṇaṃ pi diṭṭhiṭṭhānam eva「diṭṭhiṭṭhānā というのは他ならぬ諸見解である. そしてまた諸見解の原因も diṭṭhiṭṭhānam である」との説明および中性名詞の diṭṭhiṭhānā が男性活用をしていることからこの複合語は bahuvrīhi として「見解を根拠として持つもの」と理解すべきであり, それは(*abhi-)vāda が意図されている[畑 2006b pp. 80, 81 参照].

pajānāmi, tañ ca pajānaṃ na parāmasāmi, aparāmasato[293] me paccattaṃ yeva[294] nibbuti viditā, yad abhijānaṃ Tathāgato no anayaṃ āpajjati. (DN III pp. 28, 30, 32, 33, 34)

バッガヴァよ，私は起源を理解している．そして[私は]それを理解し，それ以上のことも理解する．そしてその理解に囚われない．そして，囚われることがないこの私によって，他ならぬ自ら，nibbuti が知られている(見つけられている)．そういうことを理解している如来は，非道に踏み込むことがない．

本用例は理解する内容は異なるが，前述の DN I p. 38 他と同じ表現である．理解する内容は三明を表す．世尊のことであるため，涅槃している人の資質として「nibbuti が知られている(見つけられている)」とあるが，nibbuti 自体の具体的内容は明らかではなく，時点についても判別がつかない．

≪註釈: 生前の涅槃≫

DN 註釈 Sv III p. 830 は「他ならぬ自身によって自分の中で煩悩(kilesa)が消えること(nibbānaṃ)」と説明する．

MN I p. 323 Kosambiyasutta「コーサンビヤ経」pp. 320 – 325

sotāpattiphalasamannāgato hoti「預流果(以下参照)を備える者になる」(MN I p. 325)ための 7 つの理解について世尊が語る中で，第 2 の理解として「自ら nibbuti を得る」と説かれる(MN I p. 323).

puna ca paraṃ bhikkhave ariyasāvako iti paṭisañcikkhati: imaṃ nu kho ahaṃ diṭṭhiṃ āsevanto bhāvento bahulīkaronto labhāmi paccattaṃ samathaṃ. labhāmi paccattaṃ nibbutin-ti. so evaṃ pajānāti: imaṃ kho ahaṃ diṭṭhiṃ āsevanto bhāvento bahulīkaronto labhāmi paccattaṃ samathaṃ, labhāmi paccattaṃ nibbutin-ti. idam-assa dutiyaṃ ñāṇaṃ adhigataṃ hoti ariyaṃ lokuttaraṃ asādhāraṇaṃ puthujjanehi.

また更には，托鉢修行者たちよ，立派な弟子[295]は次のように熟慮する．私はこの見に従いつつ，修養しつつ，繰り返し行いつつ，自ら鎮まり(寂

[293] Be: ca, Se: va 挿入.

[294] Be: paccattaññeva.

[295] sāvaka「弟子」は Sn 最古層には使われず，古層において数例認められる: Ch. 2: Dhammikasutta「ダンミカ経」では出家・在家問わず弟子の意味で使われる．

止)を得るのであろうか. 自ら nibbuti を得るのであろうか, と. 彼は次のように理解する. 知っての通り私は, この見に従いつつ, 修養しつつ, 繰り返し行いつつ, 自ら鎮まり(寂止)を得る. 自ら nibbuti を得る, と. これはこの者が到達した第 2 の理解であり, 凡夫達と共通ではない, 立派な者にとっての出世間的なものとなる.[296]

ここでは, 自ら samatha「鎮まり(寂止)」を得ること[297]および自ら nibbuti を得る[√labh]ことを理解する[pra-√jñā]ことが四向四果(預流・一来・不還・阿羅漢の 4 種の修道階位)の初段階である「預流果」の 1 つの条件であるとされる. 最古層 Sn 933 で santi「鎮まり」と定義される nibbuti が, ここでは santi と同じ√śam「鎮まる」の派生語である samatha「鎮まり(寂止)」とも形容され, 共に目標とされる状態を示唆するといえる. しかし, その意味が, nibbāna と同じであるのか, 異なるのか, 本経だけからは判別できない. 預流果の段階では samatha も nibbuti も実際には得られていないことがわかるが, nibbuti が獲得される時点がいつなのかも判断つかない.

nibbuti の考察結果

最古層で santi と定義され, 間接的に涅槃している状態を表す可能性が導かれたが, 古層ではより明確に nibbāna を示す文脈として使用され, 散文においては, それまでの nibbuti を「得る・到達する」という文脈が, 修行完成者は nibbuti を「知っている(見ている)」に変わり, さらに, 修行者(四向四果の最初の段階である預流果)が「nibbuti を得ることを理解する」という, それまでとは異なる現世における文脈に展開を見せる. この考察結果と nibbuti の用例数が非常に限定されていることから, 考えられる可能性の一つとして, nibbuti は次第に santi (後代には samatha) あるいは nibbāna にとって代わられ, 使われなくなっていったのではないかとの推論が立てられるかもしれない.

2. 3. 6. 涅槃の教義の多様化

散文経典では修行途中で天界に行った者のその後を含め, 涅槃の教義が細かく

[296] MN 註釈 Ps には nibbuti, samatha の説明はない.
[297] Sn においては samatha「鎮まり(寂止)」は 2 例確認される. 古層とされる Sn 67: samathaṃ, 732: sabbasaṃkhārasamathā である. 最古層には用例はない. 散文では禅定の術語として vipassanā「内観」と一緒に用いられる(例として MN I p. 494). vipassanā は Sn には見出せない.

多様性を持って説かれる. 以下に, 散文経典での涅槃観の展開の一例を端的に示す.

化生者[298]

上記に示したが, DN II [16 経]: Mahāparinibbānasuttanta において, アーナンダが世尊に亡くなった人達の行き先 (gati)・来世(abhisamparāya)について尋ね, 世尊が答える場面がある. DN II p. 92:

> Nandā Ānanda bhikkhunī pañcannaṃ orambhāgiyānaṃ saṃyojanānaṃ[299] parikkhayā opapātikā tattha – parinibbāyinī anāvattidhammā tasmā lokā.
> アーナンダよ, ナンダー比丘尼は, 5 つの下位の束縛[300]の滅尽によって, 化生者[となり], そこで般涅槃者[となり], その世界から戻らない者[となった].

これ以降, 複数名の名前や在家信者達(upāsakā)について同じ内容を語る.

中般涅槃者

AN IV pp. 70 – 74 において, 人の[死後の]7 つの行き先と取り込むことのない般涅槃が説かれる. 7 つとは、中般涅槃者(antarāparinibbāyin) 3 種類, ぶつかってから般涅槃する者(upahaccaparinibbāyin), 無行般涅槃者(asaṅkhāraparinibbāyin), 有行般涅槃者(sasaṅkhāraparinibbāyin), 上向きの流れを持ちアカニッタ天へ行く者(uddhaṃsoto akaniṭṭhagāmin)である.[301] 中般涅槃者以降の状態についての説明は同じ内容であるが, 火花の喩えのみで違いが示される. 意味がとりにくい経である. この中般涅槃の教理は, 中有の存在が認められる経として解釈されるが, 註釈においては中有を認めないとされている.[302]

---

[298] 藤田 1988c p. 464 他は, 不還＝化生者と分類. 大西 2003 p. 47 によると, 本来「(依存することなく)直接次の状態へ到る」ということである.
[299] Se: saññojanānaṃ.
[300] 五下分結と言われ「欲貪・瞋恚・有身見・戒禁取見・疑」のことである. また, 五上分結は「色貪・無色貪・掉挙・慢・無明」とされる(中村 1981 pp. 358, 368). 修行道の四向四果において, 不還において五下分結が断尽され, 阿羅漢の覚りにおいて五上分結が断尽されるとされる(水野 1972 pp. 225 – 226).
[301] 同様の教理は AN に多く見出せる. 本経パラレルは, 後述に加えて AN I pp. 232 – 235; II pp. 133 – 134; V pp. 119 – 120 である.
[302] 一例として Harvey 1995 pp. 100 – 102 は, AN IV pp. 70 – 74 および AN II p. 133 - 134 を根拠に, 初期仏典は中有の存在を認めていると結論づける. Somaratne 1999 p. 137 も同様に,

AN IV pp. 12 – 15 において，供養に値する 7 種の人達について説かれる．存命中に無漏(anāsava)となる人，漏(āsava)と命(jīvita)が同時に無くなる人，5 種(中般涅槃者，ぶつかってから般涅槃する者，無行般涅槃者，有行般涅槃者，上向きの流れを持ちアカニッタ天へ行く者)である．本経では，これら 5 種の状態・資質は同じ．化生者となり，そこで般涅槃すると説明する．

AN IV pp. 378 – 382 では，世尊がサーリプッタに，残余を持って死につつある時(p. 379: puggalā sa-upādisesā kālaṃ kurumānā)，三悪趣(地獄・餓鬼・畜生界)から解放される，つまり死後三悪趣に生まれ落ちることがない 9 種の人たちについて語る．うち 5 種については，中般涅槃者から上向きの流れを持ちアカニッタ天へ行く者まで上記と同様の順番を示す．その後第 6 が一来(sakadāgamin)で、第 7 が一種者(ekabījin)，第 8 が家々の者(kolaṅkola)，第 9 が最大 7 回の者(極七変生者: sattakkhattuparama)である．[303] 5 種については，明確に死後を想定し，悪趣から解放されているとあるが，不還・化生者との言葉はない．

2. 3. 7.　散文小結および 2.のまとめ

nibbāna の定義・時点

散文経典では，三毒の煩悩の滅が涅槃であると定義される(SN IV pp. 251, 261)．先行研究は，この経に関し，生前の涅槃を説いた経と解釈するが，筆者はこれについても，その可能性をもちろん排除するものではないが，涅槃の時点に関しては本経の文脈から判別がつけられるものではないとの見解を示した．実際，層分けにおける分析の結果，時代層にかかわらず，文脈は現世のことが多いが，涅槃の時点がいつなのか判別つかない用例が多数ある結果が得られたことから，初期仏典において涅槃が語られる場合，世尊はじめ説法者である修行完成者はその時点を意識せずに，「涅槃」を説いた場合が多かったであろうと推測できよう．

nibbāna を伴う複合語においては，複合語自体の文脈が現世であるからといって，複合語中の nibbāna 自体の時点も生前であるとはいえないことに注意を払うべきである．先行研究においてはこの点が考慮されず，涅槃の解釈が為されてきたと

AN IV pp. 70 – 74 の中般涅槃者 3 種の火花の喩えを根拠に，転生することなく中有にて般涅槃する(while they are in *antarā*, an intermediate state, without being born to another life)と中有の存在が認められるとする．

[303] 本経での説明(pp. 380 - 381)では，一来・一種者・家々の者・極七変生者とも，諸々のよい生活習慣に関して完成者となっているが，精神統一すること及び理解力に関しては，完成者とはなっていない．三結を断じている．一来はこの世界へあと一度だけ転生，一種者は人間界にあと一度だけ転生，家々の者は良家から良家へと 2〜3 回転生，極七変生者は神々と人間に最大 7 回転生する．

いえる(Sn 86; 267; 942 他).

nibbuta

散文の用例(MN I p. 341 他)は, 筆者が調べた限定された範囲内において, 生前で涅槃を得た人の属性としてこの語が使用されていることを確認した. このことは, nibbuta が nibbāna (nir-√vā「[火が]消える」)の PP の役割を果たしていたことを裏付けるものであり, 涅槃を表す場合には, その人の火的要素が消えていることが示唆される.

nibbuti

散文の全用例を調べたところ, DN 中の 2 経に同文の繰り返しで複数例, MN 中に 1 例見出せた. 分析の結果, DN の用例は, 修行完成者である如来によって自身の nibbuti が知られている(見つけられている) [√vid]とあり, 現世で涅槃している人の状態を示唆することがわかった. それに対して MN の用例は, 預流果の 1 条件として, 自ら nibbuti を得ることの理解であると世尊が説く場面であり, それが涅槃を意味するのかどうかは不明であり, また全用例において文脈は現世であるが, nibbuti 自体を得る時点がいつなのかは判別がつかないという考察結果であった.

初期仏典中の nibbuti の用例数は限定されているが, santi「鎮まり」(後に samatha)か nibbāna「涅槃」のいずれかをより顕著に表すようになっていることが確認できることから, 時代の経過とともに, santi あるいは nibbāna にとって代わられ, 使われなくなっていったのではないかと推測され得る可能性を指摘した.

pari の用例と nibbāna について

散文には abhi 付き用例は現れず, pari 付き用例が数多く見出せる. 散文文献においても, 現世において涅槃していることを示唆する parinibbuta (例: DN III p. 55: 世尊のことを表す語として)が確認された. 古い韻文の層からより新しい韻文の後期, そしてさらに散文の層へと移行するにつれ, この語が示す時点が当初は生前の涅槃を示唆する用例が多く見られたが, 加えて, 理解力が涅槃と密接に結びつくことが明確となり, そのうち理解力でもって命終[後]のことを理解する文脈と涅槃が結び付けられるようになることが確認され(例: MN III p. 245), このことが, 涅槃は命終時に真に達成されるという解釈が次第に主流になっていくことに大きく関与しているのであろうと推測される. このことは, 特に有名な仏伝である DN

II pp. 72 – 168 [16 経] Mahāparinibbānasuttanta の散文において, 世尊の命終を示す語として, pari 付き涅槃の語彙が集中的に使用されていることから顕著に表されていることを確認した. その経中においては, 生前の涅槃を示す涅槃の語彙が全く使用されず, あえて使用を避けている意図が推測できた. それはつまり「般涅槃」こそが真の涅槃であるとの用法の確立が意図されているとも推論され得る. 一方で他経においては従来通り, 涅槃の語彙が現世で涅槃する意味も初期仏典中に残しつつも, 命終のみを表す般涅槃は, それ以降の涅槃の思想の展開に大きく影響を与えたと考えられる.

その思想を受けてか, 同じく散文経典で仏伝とされ, 世尊の覚りの前後を描いた MN I pp. 160 – 175 [26 経] Ariyapariyesanasutta の中では, 世尊の命終は語られないため, pari が付された涅槃の語彙は使用されていない. その生前の文脈において, 世尊が自身のことを「nibbāna に達した」(MN I p. 167)と語り, それは, 世尊の覚りである生前の涅槃が示唆されている可能性が高いが, 具体的に記されておらず, 命終時に涅槃することの約束を得たとの解釈も可能であり, 判別はつけられない.

このようなことから, 最古層 Sn 1094 において示された涅槃の一定義,「老いと死の滅尽」という生死・輪廻の滅がいつ達成されるのかという時点を考える時, Sn 1094 においては時点の判別がつかず, その他の用例を検討した結果, 現世の文脈で生死・輪廻の滅を表す内容であっても, 涅槃の時点が連動して生前を表すものではなく, その解釈は, 生前・命終のいずれも可能であり, 従って, nibbāna そのものが示す時点の判別はつくものではなく, そもそも涅槃の時点は意識されていなかったという解釈の可能性を提示した.

但し, 筆者が考察した範囲内において, 先に触れた DN II pp. 72 – 168 [16 経] Mahāparinibbānasuttanta のみは, 例外的に parinibbāna が明確に世尊の命終を示していた. またこの経では, 散文経典に現れる定型句: anupādisesāya nibbānadhātuyā parinibbāyati/parinibbuta「燃料の残余のない(無余依)涅槃界に般涅槃する／している・した」という表現も命終時に般涅槃する意味で使用され, 涅槃の用法に多様性が見出せる. この経は大変有名であり, 涅槃観および涅槃の語彙の用法の展開に大きな役割を果たしたといえよう.

註釈や先行研究においては, 初期仏典において唯一, 二種涅槃界が説かれる It pp. 38 – 39 [44 経]の内容に同じく, 本定型句中の anupādisesā nibbānadhātu「燃料の残余のない(無余依)涅槃界」は, It の同経にある saupādisesā nibbānadhātu「燃料の残余のある(有余依)涅槃界」に相対する境地, 即ち, 解脱者の命終[後]の境涯であると解釈する. この It pp. 38 – 39 [44 経]は, その後の涅槃観に大きく影響を与え, 註釈家の時代には確立したものとなる(この場合の upādi は五蘊・身体を表す). 一方, 生前に涅槃することを意味する saupādisesāya nibbānadhātuyā parinibbāyati/parinibbuta「燃料の残余のある(有余依)涅槃界に般涅槃する／してい

る・した」という定型句表現が，新層である散文文献にも現れず，註釈文献に見出せることから，この定型句は，散文の時代より後に成立し，註釈文献の時代には確立していた用法であった可能性が類推される．

涅槃の語彙間の相違

従来の諸研究においては，涅槃の語彙はほぼ同義として解釈されているが，本論 2.において各用例ごと記した上記考察結果から，涅槃の語彙の中には，それが人を指す場合であっても涅槃とははっきりいえない用例が見出せた(例: 最古層 Sn 783, 古層 Sn 343 = Th 1263, Sn 707, Ja III p. 14, 散文 MN I p. 323. これらは abhinibbutatta か nibbuti の用例). そしてまた，涅槃を表す場合においても，その具体的意味と時点において，涅槃の語彙間に，違いが見られる場合があった．

時代層による層分けの検証

本研究においては，先行研究の成果である経典を最古層・古層・新層である散文文献という時代層に分けて，それを作業仮説として，最古層から順に考察を進めた．その結果，上に示した考察結果が示す通り，おおむね時代層の仮説は成り立ち得ることが導かれた．その中で，広範囲を含む古層においては，その時代層の前期と後期にさらに分けられる可能性が示唆された．韻文とともに散文も現れる経に関しては，韻文の内容と散文の内容が完全に一致しているわけではないと思われる経典が見出せた(例: Sn Ch. 2: Vaṅgīsasutta, Ch. 3: Dvayatānupassanāsutta).

さらに，散文経典においては，涅槃の教理の多様化が見出せることから，韻文経典に比べて，思想の展開が見られることが確認された．

以上のような考察結果から，初期仏典においては涅槃観の多様性・多層性が確認された．

3. 生前・命終の問題

3.1. 質問者の意図と世尊の答えの真意について

前述 2.で考察した涅槃の語彙の用例中，涅槃の意味を表していても，その時点がはっきりとせず，判別できない用例が多く見出せた(以下表 1 参照).

表 1

	用例数	現世の文脈	生前の涅槃	命終の涅槃	時点不明
最古層	16	12	5	0	10
古層 Sn	30	23	14	2	12
古層 Sn 以外	35	19	11	5	15
韻文　計	**81**	**54**	**30**	**7**	**37**
散文 Sn*	1	0	0	1	0
散文 Sn 以外*	28	13	8	4[304]	8

(* 散文の場合は繰り返しが多いため，涅槃の語彙ごとの用例数ではなく，考察した経典数を示す)

文脈が明らかに現世を表す用例においても，涅槃した時点に関して，文脈と等しく生前であるとはいえず，判別がつかない用例が多いことも明らかとなった. 従来の諸研究においては，このことが考慮されずに，文脈に連動しつつ，二種涅槃[界]を前提として，生前か命終かのいずれかに分けて涅槃の解釈がなされる傾向にあり，それは註釈の解釈に準ずる場合が多い. 今回の考察結果を基にして，判別がつかない用例については，そもそも涅槃の時点は意識されていなかった可能性が高いことは既に指摘済みであるが，本項においては，その見解をさらに補強し，なおかつ，その点に関連して，質問者と世尊の回答が必ずしも綺麗に一致するとは限らない可能性を論じたい.

DN II [16 経] Mahāparinibbānasuttanta において，アーナンダが世尊に亡くなった人達の行き先(gati)・来世(abhisamparāya)について尋ね，世尊が答える場面で，修行途中で命尽きた托鉢修行者に関し，化生者(opapātiko)となり，そこで(天界で)般涅

[304] 筆者が考察した範囲内において，経全体で明確に命終の涅槃が示されていた散文経典は DN II 16 経のみであった. この経の散文部分の涅槃の語彙数は 7 と計上し(parinibbāyin, parinibbāyati [opt., fut., pret.含む], parinibbātu [inf], parinibbuto [PP, -e: loc.含む], nibbāpesi [caus], parinibbāna, nibbāna- [定型句中]), その中で，世尊の火葬薪の消火を表す nibbāpesi および定型句中の nibbāna, そして来世天界において[般]涅槃者(parinibbāyin)となる内容を除き，本経の涅槃の語彙は，明確に世尊の命終の意味を表していたため「4」と計上した.

槃者(parinibbāyin)となるという，命終後について答える教理を紹介した(前述 2. 3. 6.参照). 引き続きアーナンダは，阿羅漢の死後の行き先・来世についても尋ねるが，世尊は，阿羅漢についてのみ，現世の境地のみで行き先については語らない(DN II p. 92):

> Sāḷho Ānanda bhikkhu āsavānaṃ khayā anāsavaṃ ceto-vimuttiṃ paññā-vimuttiṃ diṭṭhe 'va dhamme sayaṃ abhiññā sacchikatvā upasampajja vihāsi.
> アーナンダよ，サーラ托鉢修行者は，諸漏の滅ゆえに，漏尽・心解脱・慧解脱を現世において自ら理解し，目のあたりにし，獲得して住した.

解脱者・阿羅漢の命終後についての質問に対するこの答え方から，世尊が解脱者・阿羅漢の命終後に関しては返答しないという姿勢が現れているといえる.

命終後に関する質問に対し世尊が生前の解脱を説いた例として，Wynne 2007 は，最古層文献 Sn Ch. 5: Upasīvamāṇavapucchā「バラモン学生ウパシーヴァの質問経」を挙げる(pp. 90 – 100, pp. 106 – 107). 本経には涅槃の語彙は出てこないが，世尊の答え(Sn 1074)に，火が風で消えてしまうことに喩えて,「寡黙の聖者は,... 解放され，消えてしまって，呼称に至らない」(本項下記参照)と答える. Wynne 氏は，本問答は, cross-purpose「食い違い・誤解」(pp. 99, 100, 107)が見られる珍しい例と解釈し，この点を根拠に，本経に示される世尊とウパシーヴァの問答は歴史的事実であることの裏付けとなると結論づける(p. 107). 註釈や複数の先行研究が Sn 1074 は解脱者の命終を説いたと理解する中で,[305] Wynne 氏はこのようにこれまでにない指摘をしている.

問答に食い違いや誤解があるという見解は，上記散文 DN II p. 92 に関してであれば，世尊が質問に答えていないという点で，そのような解釈が成り立つといえるかもしれないが, Sn 1073; 1074 については，世尊の答えは質問者の意図と完全に一致するものではないが，答えとしては成立しているのではないかと筆者は考える. そして，同様の見解が古層文献で考察した Ch. 2: Vaṅgīsasutta のヴァンギーサの質問(Sn 354)と世尊の答え(Sn 355)にもあてはまると考える. 両経の該当箇所をここで取り上げ，筆者の論拠を以下に示す.

Sn Ch. 5: Upasīvamāṇavapucchā Sn 1073; 1074

世尊はウパシーヴァに，無所有(ākiñcaññaṃ)によって涅槃を得るように説き(Sn

[305] Pj II p. 594, Norman 2006 p. 390, Collins 2010 pp. 67, 81, 村上・及川 1989 pp. 106 – 114, 中村 1984 p. 226 がある. Wynne 氏と同じく，生前の文脈で「禅定の実践による解脱の境地」との理解は，荒牧・本庄・榎本 2015 pp. 286, 310 – 312 である.

1069-1070), ウパシーヴァの質問をそのまま返す形で「想念からの解放という最高のものにおいて解放されている人は(saññāvimokhe parame vimutto)そこにとどまることができる」と説く(Sn 1071-1072). そして以下の問答をする:

1073 tiṭṭhe ce so tattha anānuyāyī
pūgam pi vassānaṃ samantacakkhu,
tatth'eva so sītisiyā vimutto,
bhavetha[306] viññāṇaṃ tathāvidhassa.
もしその人が[他の人／思想に]従うことなく, そこで数多くの年をもとどまることができ, 四方にあまねく眼をお持ちのお方よ,
他ならぬそこでその人は解放された者として冷たくなれるのであれば,
そういう人の認識機能は生じますか.

1074 accī yathā vātavegena khitto[307]
Upasīvā ti Bhagavā
atthaṃ paleti na upeti saṃkhaṃ,
evaṃ munī[308] nāmakāyā vimutto
atthaṃ paleti[309] na upeti saṃkhaṃ."

---

[306] Pj II p. 594, Be および Nidd II は cavetha [√cyu (move, decease)]. また Pj II p. 594 のテキスト引用部分に cavetha とあり, 註釈家が参照していた経典が bhavetha[√bhū]の伝承ではないことが示唆される. いずれにせよ, 輪廻するかどうかを尋ねている.

[307] Be は acci/acchi および khittā(f., nom., sg)である. 筆者は Ee を採用し accī を Skt. arci の m., khitto を m. nom. sg.と理解する. CPD p. 34 並びに Cone 2001 I p. 24 参照.

[308] この場合は m. nom. sg. Oberlies 2001 p. 151 参照. Be: muni.

[309] atthaṃ √gam/√i「沈む・消える」と同じ語義.「我が家に行く, 戻る」が原義で, リグヴェーダ以来「太陽が大地の西に沈む」こと, さらには「死ぬ」ことを意味する(阪本 2015, p. 6, p. 45 参照).

Sn 中に atthaṃ paleti として現れるのは本経のみ. 同じ語義の複合語 atthagatā として Sn 古層に 2 度(Sn 472, Sn 475)出てくるが, 主語が人ではないため比較対象とはならない. Sn 以外で atthaṃ √gam の用例は複合語を含むと四ニカーヤ中, 禅定の文脈などにおいて多数現れる(Concordance I pp. 90 - 91 参照). しかしながら Sn 1074 同様「人」が主語の用例は, ほぼ内容が同じ次の 2 例のみである. It p. 58 [69 経]および SN IV p. 158 であり, 両偈はほぼ同じ内容で, 輪廻の大海を渡り終えた者の境地について世尊が述べている偈文である. atthaṅgato の主語は彼(so)であり, 文字通りは大海を渡った人が「消える」(attaṅgato), 消えてしまったらその者を測る尺度はない(sa na pamāṇam eti), 死の王を惑わせた(amohayi maccurājan-ti)と語られ, 命終を意図しているように理解できる. しかし, 主語である人の中の何らかの要素が消えたとも考えられ, その場合は現世の文脈とも理解可能であろう. 註釈 It-a II p. 35 は熱望(rāga)と説明し生前の涅槃と解釈する. いずれの解釈も可能であり確定できない.

上記の用例検討から, リグヴェーダ以来「死」を意味することがある atthaṃ √gaṃ/√i の用語を, 世尊は生前の涅槃を意図して使った可能性もあり, 初期仏典の語彙の検討の際に

ウパシーヴァよ，と世尊が[言う]
炎が風の勢いで投げられ消えてしまって呼称に至らない
(言葉で表現できない)ように，このように，寡黙の聖者は，
名称と身体[310]から解放され，消えてしまって，呼称に至らない
(言葉で表現できない).

次に，消えてしまった者は永続か断滅か説明を求められた世尊は以下の通り答えて経が終わる:

1076 atthaṅ gatassa na pamāṇam atthi,
Upasīvā ti Bhagavā
yena naṃ vajju, taṃ tassa n'atthi,
sabbesu dhammesu samūhatesu
samūhatā vādapathā pi sabbe [ti]
消えてしまったものには尺度は存在しない.
何かを使ってその人を語るところの，そのことがその人にはない.
一切のものが完全に叩き出されている時，
一切の言葉の道も完全に叩き出されている.[311]

は，質問者(バラモン)と世尊の語彙の選択とその言葉の持つ意味を分けて考える必要があるといえよう.

[310] 複合語 nāmakāya の理解に関して異なる見解が見られる. (1)限定複合語ととり，非物質の集まり・精神的諸要素(五蘊の中の四蘊)と理解する(Wynne 2007 p. 90, Norman 2006 p. 130, 村上・及川 1989 p. 109). これらは nāmakāyā vimutto を註釈 Pj II p. 504 が無色界の禅定と解釈することに基づく. (2)並列複合語ととり，名称と身体(あるいは rūpa 形態)，あるいは精神的諸要素と身体(物質的諸要素)と理解する(中村 1984, pp. 226, 424「名称と身体」∈「名称と形態」つまり「精神と身体」と注記, Collins 2010 pp. 67, 81 "name-and-form", Olalde 2014 p. 128 "Name und Körper". 中村氏および Collins 氏は nāmarūpa と同義とする. Olalde 2014 p. 155 は, nāmarūpa は人を示すが，五蘊に分類される人を意味するわけではないとの見解). (1) (2)とも可能である.

古いとされる経典で，複合語中の nāma-が精神的諸要素(四蘊)を意味したか否かは再考の余地がある. Sn 1074 の「呼称に至らない」や, Sn 1076 の「一切の言語の道も完全に叩き出されている」といった，言詮の不可能性を言う表現は, nāma-が本質的に「名称」だという意識が働いた可能性がある. その場合, nāma とは個人の identity を含む「名称」を指し，kāya と一体化してはじめて個体存在としての「一個人」を意味したという可能性もあろう.

Sn 中 nāma と kāya が共に使用されている例はなく，四ニカーヤ内で nāmakāya は Sn 1074 以外では DN II p. 62 のみ. そこでは rūpakāya と対で使用され, -kāya は「集まり」を意味する. そして nāma-の説明に adhivacana「呼称」を使用し, nāma-に呼称の要素が含意される可能性を示す(Schmithausen 2000 p. 56, Olalde 2014 p. 72 参照). Bhikkhu Bodhi 2000 p. 50 は, "mental body", DN 註釈 Sv p. 501 は, adhivacana を mano「思考」として四蘊と理解. しかし, adhivacana に mano や mental body で表される心的要素の意味はない.

[311] Sn 1076 の註釈 Pj II p. 595 は結論となる本偈で atthaṃ paleti「消えてしまった」を

Sn 1073 における「他ならぬそこでその人は解放された者として冷たくなれるのであれば，そういう人の認識機能は生じますか」との質問は，文脈から命終後の状態を尋ねているといえる．しかし，世尊は認識機能という同じ語を使って返答せず，「寡黙の聖者」について語る．

ウパシーヴァの関心が，命終後に向けられているにもかかわらず，世尊の返答は，解脱者の生前とも命終とも理解可能であり，決定できない．それ故筆者は，生前か命終かという時点は世尊によって意図されていなかった，更に進んで，その二つの区別に意味が無いことを暗に伝えようとした可能性があると考える．生前・命終にかかわらない状態であるということは，翻って，生前にも命終にもあてはまる境地であるとも解釈可能であるため，質問者の関心をも満たす答えであった可能性が指摘され得る．また，火が消える喩えは，註釈を含め大半の先行研究においても命終の時点と解釈されることが多いが，これについても明確にそうとは言えない.[312]

上記で論じたように，Sn 1074 の解釈に関して，筆者は Wynne 氏と異なる見解を示したが，用例研究をする際に，質問者の言葉とブッダ世尊の言葉の意味を分けて考える必要があるという新たな視点は重要であると考える．涅槃に関する経典を読み解くには，この点に留意する必要があろう．

Ch. 2: Vaṅgīsasutta Sn 354; 355

筆者が上記に示した解釈は，古層文献で考察した Ch. 2: Vaṅgīsasutta の質問(Sn 354)および世尊の答え(Sn 355)にもあてはまる(前述 2. 2. 3. 2.参照)．本経ではヴァンギーサが彼の師の命終後のことが気になって，世尊に質問していることは明らかである．ヴァンギーサが世尊の返答に大変喜び(Sn 356)，世尊の答えはヴァンギーサの関心を満たす内容であったと推測されることから，世尊も命終後の境地を説いたと考えるのが自然ではあるが,[313] しかし，世尊の返答(Sn 355-c 句)である atāri jātimaranaṃ asesaṃ「余すところなく生死を渡った」時点は，命終の時点が意図されていたとも，現世でそのような状態に至っていたとも解釈でき，決定できない．

---

parinibbuta「般涅槃した」と表して命終の涅槃を示唆する．

[312] Collins 2010 p. 67 は，火が消える喩えによって本経が「阿羅漢の死後」(Arahant after death)に関するものとの見解を示すが，本論で考察した用例の中には，火が消える喩えが必ずしも命終のみを表すわけではないことが示されている(例: Sn 19; 235 は生前)，.

[313] 世尊の答え(Sn 355)に関する註釈 Pj II p. 351 は，Sn 354 のヴァンギーサが発した nibbāyi に pari を付して，さらに anupādiseso「燃料の残余なく」を補い涅槃の説明をする．それによって，二種涅槃界の無余依涅槃界，即ち，命終をより明確に示したと推測される．この通り註釈は，命終の般涅槃と解釈しており，先行研究も註釈の理解に準ずるものが多い(例: 中村 1984 pp. 75, 322).

故に，世尊は，ここでも命終後を意図した質問に，生前・命終という時点を意識せず，涅槃を説いた可能性があるといえよう．このことは，生前の涅槃も命終[後]の涅槃もあてはまる境地であり，ヴァンギーサを満足させる答えでもあったため，質問と返答が一致していなくても，世尊の返答にヴァンギーサが大変喜んだことは(Sn 356)，食い違いではなく，何もおかしいことではないといえる．

3.2. 人々の関心は死後

nibbāna は jarāmaccuparikkhaya「老死の滅尽」(Sn 1094)と定義づけられることに関連して，生死・輪廻を話題にする経が Sn にいくつかある．最古層には 1 経あり，nibbāna の定義がなされる Ch. 5: Kappamāṇavapucchā，古層では Ch 1: Āḷavakasutta, Ch 2: Vaṅgūsasutta, Ch 3: Sallasutta; Vaseṭṭhasutta; Dvayatānupassanā などである．涅槃の語彙が現れない経においても，最古層の時代から，当時の人々の間で死や死後について，はたまた輪廻から解脱することに大きな関心があったことが裏付けられる(例えば榎本 2007 参照)．

このように，当初から人々の関心は死や死後，輪廻から解脱することに向けられてはいたが，世尊は世間の関心が生死・輪廻の解決や死後の境涯にあることを承知の上で，質問者が命終後のことを問うたとしても，無記の態度で「あてはまらない」と，答えない場合もあったが，答える場合には，生前・命終の判別がつけられない用例が多いことから，時点を意識せず涅槃を説いた場合も多くあったと推論できよう．そうであれば，そもそも涅槃とは，生前・命終の二種に分けられるものではないと考えられていた可能性があろう．

但し，古層の後代に成立したと考えられる経や散文経典の中には，やはり従来から指摘されている通り，明確に命終を示す意図をもって「[般]涅槃する」ことが語られる場合もある．このことは，初期仏典において「涅槃 = 不死」と繰り返し説かれることに起因して，それ故に，「死ぬ」という言葉を避けた結果と想定される．さらに，DN II [16 経]: Mahāparinibbānasuttanta の散文において繰り返し世尊の命終に pari 付きの涅槃の語彙が使用され，散文の時代において次第に[般]涅槃するという語が命終の涅槃を主として表すようになっていったことは，先行研究において既に指摘されている．この経はじめ生前の覚りには涅槃の語彙があてられていない散文の用例もあることから(例: DN II 16 経と同じ定型句が現れる DN III p. 135)，命終のみが[般]涅槃であり，真の涅槃であるとする意図が窺われ，そのような流れが，本邦における一般的な涅槃の理解につながっていると考えられる．

4. 註釈における涅槃観のまとめ

註釈の解釈は経典の用例の検討時に簡潔に示したが，基本資料である Sn の註釈 Pj: Paramatthajotikā を中心に(概要は前述序論参照)，四部註 Sv: Sumaṅgalavilāsinī (Dīgha-nikāya-aṭṭhakathā)，Ps: Papañcasūdanī (Majjhima-nikāya-aṭṭhakathā)，Spk: Sārattha-pakāsinī (Saṃyutta-nikāya-aṭṭhakathā)，Mp: Manoratha-pūraṇī (Aṅguttara-nikāya-aṭṭhakathā)の著者であるブッダゴーサ(Buddhaghosa)[314]および Th, Thī, It, Ud の註釈 Th-a: Theragāthā-aṭṭhakathā (Paramatthadīpanī), Thī-a: Therīgāthā-aṭṭhakathā, It-a: Itivuttaka-aṭṭhakathā (Paramatthadīpanī), Ud-a: Paramattha-Dīpanī Udānaṭṭhakathā の著者であるダンマパーラ(Dhammapāla)[315]を比較した註釈に関する考察をここにまとめておくこととする.

4.1. Sn の註釈 Pj について

Sn 註釈は Pj II に収録されているが, Khp にも収録されている 3 経については, Pj II では解説がほぼ省略されているため, Pj I を参照した(Mettasutta: Pj II p. 193; Pj I pp. 232 - 252, Ratanasutta: Pj II p. 278; Pj I pp. 158 – 201, Mahāmaṅgalasutta Pj II p. 300; Pj I pp. 88 – 157 [Maṅgalasutta と記載]). テキストに関しては序論で概説したのでそちらを参照のこと. また付録 1: Sn 用例リストに筆者の経典の考察結果にあわせて註釈 Pj の解釈を端的に示し，付録 2: Sn 用例には註釈 Pj を記した.

Pj に関してはブッダゴーサの真作であることに疑問が呈されており，その涅槃観をまとめておくことは，管見の限りにおいてこれまでに研究実績がないため有用であると考える.

4.1.1. 涅槃の語彙の解釈

4.1.1.1. 生前の涅槃

[314] 5 世紀ごろに活躍した上座部仏教の代表的註釈家であり，代表作は Vism と四部註である. 南インド出身で，生没は AD 370 – 450 とされる(von Hinüber 1996 pp. 102 - 103). ブッダゴーサについては馬場 2008 pp. 14 – 19 も参照のこと.

[315] 筆者が参照した初期仏典中, It-a, Th-a, Thī-a, Ud-a がダンマパーラの著作とされている. von Hinüber 1996 p. 169 によると，ブッダゴーサの後に活躍した註釈家とされており，生没は 450 – 510 年との説や活動年代は AD500 年以降等の説があるが確定はされていない. 出身地も南インドかスリランカかはっきりしていない(pp. 136 – 137). さらに先行研究においては，同名で 2 人の異なる人物と想定されているが(p. 136)，これに Hinüber 氏は疑問を呈している(p. 169). ダンマパーラについては森 1984 pp. 537 – 538 も参照のこと.

nibbāna

nibbāna について, Sn 1061; 1062: nibbānaṃ attao「自らの涅槃」の註釈 Pj II p. 592 において

> attano rāgādīnaṃ nibbānatthāya.
> 自らの熱望などが消えることのために.

と, nibbāna を「熱望などが消えること」と説明する.

「熱望など」を含む, いわゆる kilesa「煩悩」でも説明される.[316] 例えば, Sn 454: nibbānapattiyā の註釈 Pj II p. 399 では以下の通りである:

> kilesanibbānaṃ pāpeti.
> 煩悩が消えることを獲得させる.

上記の例から nibbāna は「消えること」との意味で使用され,「[火が]消える」原意をそのまま表す語として註釈で使われることが確認される. また, 本用例の註釈の説明では, rāgādi「熱望など」が nibbāna「消えること」の対象・要素であり, attan「自分自身が消える」ことは示唆しない. この例は, 前述 1. 3.にて論じたことの傍証となる. そしてまた, 煩悩には時に aggi「火」や pariḷāha「燃焼」という言葉が付され, 明確に火的要素であると註釈は説明する. nibbuta 諸用例の註釈から例を挙げる:

nibbuta

例えば, Sn 370: parinibbuto の註釈 Pj II p. 365 は

> kilesaggivūpasamena sītibhūto.
> 煩悩の火が鎮まることによって冷たく[清涼に]なった.

と,「煩悩の火」であると説明し, Sn 467: parinibbuto の註釈 Pj II p. 407 において

[316] このことは rāgādikilesa「熱望などの煩悩」(Pj II p. 521)とあることからも明らかである.

udakarahado va sīto *parinibbuta*kilesapariḷāhattā.
煩悩の燃焼が parinibbuta〈すっかり消えた状態である〉故に，湖のように冷たい．

と「煩悩の燃焼」であり，この者は世尊自身のことであると説明を加える．さらに，Sn 707: nibbuto の註釈 Pj II p. 495 は以下の通りである:

evaṃ nicchātattā nibbuto hoti vūpasantakilesapariḷāho.[317]
このように貪欲でないため涅槃した状態となり，
煩悩の燃焼が鎮まっている．

上記の複数の例から，煩悩が火的要素とみなされていたことが確認できる．

同様に本論 1.で論じた Sn 19 において，世尊が語る nibbuto gini「火が消えている」の註釈 Pj II p. 32 は，火を rāga「熱望」と説明し，さらに熱望が消えた時点を bodhimūle「菩提樹下で」と，涅槃した時点は世尊の覚りの時と解釈する:

so aggi bhagavato bodhimūle yeva ariyamaggasalilasekena nibbuto.
その火は，世尊にとっては他ならぬ菩提樹下で立派な人にとっての道という水を注ぐことで消えている．

なお，註釈 Pj においては，火や燃焼にあたる言葉を入れずに「煩悩が消える・鎮まる」との表現が大半である．以下にいくつか例を挙げる:

Sn 1041: nibbuto の註釈 Pj II p. 589:

rāgādinibbānena nibbuto.
熱望などが消えることによって涅槃している．

Sn 735: parinibbuto の註釈 Pj II p. 506:

kilesaparinibbānena parinibbuto.
煩悩が消えることによって般涅槃している.[318]

[317] Be: vūpasantasabbakilesapariḷāho.
[318] 同様に，古層の別経典 SN: parinibbuta のブッダゴーサによる註釈 Spk I p. 20 においても kilesa-nibbānena nibbutaṃ「煩悩が消えることによって nibbuta」と説明する．

上記にあるように同じ nibbuto の註釈で, nir-√vā 派生語(前記 Sn 1041 の註釈 Pj II p. 589)および√śam 派生語(前記 Sn 707 の註釈 Pj II p. 495)の両方の説明が為されることから, 註釈 Pj がこれら両者の語彙を同義とみなしていることが見て取れる.

また, この註釈の parinibbuta にあてた解釈は, Sn 783: abhinibbutatto の註釈 Pj II p. 521 と「煩悩が鎮まることによって」とする点で同じである:

> *santo* ti rāgādikilesavūpasamena santo, tathā *abhinibbutatto*.
> santo〈鎮まって〉とは熱望などの煩悩が鎮まることによって鎮まっている. abhinibbutatto〈自らが涅槃している〉も同じである.

さらに diṭṭhadhammābhinibbuta についても同様に解釈される. Sn 1087: diṭṭhadhammābhinibbutā の註釈 Pj II p. 596:

> *diṭṭhadhammābhinibbutā* ti viditadhammattā diṭṭhadhammattā rāgādinibbānena ca abhinibbutā.
> diṭṭhadhammābhinibbutā〈現世において自らが涅槃している人々／実際そのダルマ(真理・法則性)を見て涅槃している人々〉とは, ダルマを知ったので, ダルマを見たので, そして熱望などが消えることによって涅槃している人々]のことである.

これまでの Pj の説明からいえることは, nibbuta, parinibbuta と abhinibbuta の Sn 用例に関して, 註釈がほぼ同様の表現を使って説明していることである.[319] ゆえに, 註釈家が nibbuta の諸用例を, 接頭辞の有無や相違にかかわらず等しく同じ涅槃した状態とみなしていることが確認される. これは, 上記 Sn 1061 で nibbāna を「自らの熱望などが消えること」と説明することにも内容的に一致するため, こ

---

[319] 但し, 煩悩が消える以外に, 燃料の残余がある(有余依)涅槃との説明も存在する. Sn においては 1 例のみで Sn 359 註釈 Pj II p. 362 である:

> *parinibbutan* ti saupādisesanibbānavasena.
> parinibbutan〈般涅槃〉とは燃料の残余のある(有余依)涅槃という理由で.

目の前の世尊のことを表した語であるため, 本偈は明らかに現世の文脈であり, 註釈家のこの有余依涅槃の解釈は, 現世で涅槃を得ていることを表す. upādi「燃料」に当たる要素は khandha「蘊(心身の構成要素)」である. 同経 Sn 365 の註釈(下記参照)で, anupādisesaṃ khandhanibbānapadaṃ「燃料の残余なく, 蘊(心身の構成要素)が消える境地」と khandha を補うことからも導ける.

また本経について註釈 Pj II p. 362 は arahattanikūṭen' eva khīṇāsavapaṭipadaṃ pakāsento pannarasa gāthāyo abhāsi「阿羅漢の境地の頂上をもって(使って), 漏尽者の実践を明らかにして, 15 偈を述べた」と説明する. このことからも, 阿羅漢, 即ち, 現世で涅槃を得た者との解釈であることがわかる.

れらの涅槃の語彙をそれぞれ同じ煩悩が滅した生前の涅槃として解釈していることが確認できる.

また nibbāna も nibbuta の諸用例に関しても同様に「消えること」の意味として説明することから, 註釈家は明らかに nibbuta を nir-√vā[2]「[火が]消える」の PP として使用していたことが裏付けられる.

nibbuti

nibbāna とは別の名詞形 nibbuti についても同様に「熱望などの鎮まり」と説明する. 例として Sn 933: nibbuti の註釈 Pj II p. 565 を挙げる:

> nibbutiṃ rāgādīnaṃ santī ti ñātvā.
> nibbutiṃ[を]熱望などの鎮まりと理解して.

attan = citta

注釈では abhinibbutatta の attan「自分」を-citta「心」に置き換え説明する. Sn 456: abhinibbutatto の註釈 Pj II p. 403:

> *abhinibbutatto* ti atīva vūpasantapariḷāhacitto guttacitto vā.
> abhinibbutatto〈自らが涅槃している〉とは, 燃焼がとても鎮まっている心を持った, あるいは, 守られた心を持った.

このことから註釈家は, attan が霊魂を示す意味でのアートマンと理解されるのを避けるために citta に意図的に言い換えた可能性が推測され得る. そしてこの言い換えは, 経典の時代と註釈が書かれた時代の間に, attan に関する思想的展開が存在する可能性を示唆する(前述 2. 2. 3. 2.参照).

まとめ

上記のように涅槃の語彙が註釈において「煩悩が消えること・鎮まること」として説明される場合には, 各々本論の実例で示した通り, それらのテキストの文脈は現世であると判断可能であることから, 生きている間に獲得した涅槃, つまり生前の涅槃が意図されていると結論づけられる.

上記の事例から「消えること」と「鎮まること」(√śam 派生語)が同じ意味で使われているが, 実際上記 Sn 933: nibbuti の註釈 Pj II p. 565 では nibbuti を santi で置

き換えている. これは Sn 933 で nibbuti = santi と定義されることと一致する. Sn 737 は upasame ratā「鎮まりを楽しんでいる」を註釈 Pj II p. 506 は, nibbāne ratā と, √śam 派生語を nibbāna に置き換える. 従って註釈 Pj は nibbuti = √śam 派生語 = nibbāna と理解していることがわかる.

また前記 Sn 783: santa の註釈 Pj II p. 521 は santa = abhinibbutatta と同義として解釈する. 本偈には santo の併記語として abhinibbutatto が現れる. 両語とも bhikkhu「托鉢修行者」の属性であり, 経典偈文からは同義であるとまでは導けない.

そして, Sn 946: santo「鎮まった人」を註釈 Pj II p. 568 は「涅槃である陸地に立つ人」と生前に涅槃を得た人と解している. Sn 949: upasanto「鎮まった人」を註釈 Pj II p. 568 は arahatta-ppatti「阿羅漢性を得ること」として, upasanta「鎮まった人」は阿羅漢と解釈する. このことから, 註釈 Pj は nibbuta = santa とも理解していることがわかる. 従って, 上記に記した通り, 註釈 Pj は涅槃の語彙を等しく涅槃と捉え, その時点が存命中であれば「煩悩の滅」で説明する. この点において, 散文経典で煩悩の滅は涅槃であるとの定義(SN IV pp. 251, 261)を踏襲している.

そしてさらに涅槃の語彙は「鎮まる」という意味でも説明される. このことに関して, Sn 228 では nibbuti に関して註釈 Pj I p. 185 が

> *nibbutin* ti paṭippassaddhakilesadarathaṃ phalasamāpattiṃ.[320]
> 涅槃とは, 煩悩という苦悩を鎮めた果報である到達／禅定.

注記した通り, samāpatti は「到達」と「禅定」の二つの意味にとれる. 既に涅槃している世尊が禅定していることは, 経典においても語られる. 従って, √śam 派生語に置き換えられる nibbuti や nibbuta は, 註釈 Pj においては具体的に既に解脱・涅槃を得た者の禅定を表す場合があることが確認される.

4.1.1.2. 命終の涅槃

Sn 中の涅槃の語彙に関して, いわゆる死を表す涅槃として「最後の認識機能の滅」「燃料の残余のない(無余依)涅槃界」「蘊(心身の構成要素)が消える」と説明する. Sn 註釈 Pj が生前の涅槃と解釈する用例数に比べ, 命終の涅槃であると解釈す

---

[320] samāpatti (f) [saṃ ā √pad] は, attainment と a stage of meditation との意味あり (PED p. 686). 村上・及川 1986 p. 272 の和訳では「果定: 阿羅漢果の境地における心統一」と, 現世で涅槃を得た後の禅定と解釈する. Sn 165-cd 句(Ch. 1 Hemavatasutta)には,「林の中で禅定を行っている寡黙の聖者ゴータマに, [君は]来たれ, [我々はゴータマに]見えよう」(muniṃ jhāyantaṃ Gotamaṃ ehi passāma)と涅槃・覚りを得ている世尊が禅定すると記す(Hemavata yakkha と Sātāgira yakka の会話部分). また Sn 1105 で, ウダヤは世尊のことを, 禅定するお方(jhāyin) と表現する.

る用例は数が少ないため，涅槃の語彙ごとでなく，註釈の解釈ごと以下に示す.

最後の認識機能の滅

Sn 235 =(Khp 6. 14): nibbanti の註釈 Pj I p. 195:

> carimaviññāṇanirodhena, yathāyam padīpo nibbuto, evaṃ nibbanti
> 最後の認識機能が滅することにより，この燈火が消えたように，そのように消える.

本偈の註釈 Pj I p. 194 は,「消える，とは消[火]されること」(nibbantī ti vijjhāyanti) そして本偈を説いた理由を「無余依涅槃を獲得する徳に依拠して」(anupādisesanibbānappattiguṇaṃ nissāya)と説明する．最後の認識機能の滅という解釈は, Sn 209: na upeti saṃkhaṃ「呼称に至らない(言葉で表現できない)」の註釈 Pj II p. 257 にも使われる:

> carimaviññāṇakkhayā anupādisesanibbānadhātuppattiyā.
> 最後の認識機能が滅して，燃料の残余のない(無余依)涅槃界へ達する故に.

ここでは燃料の残余のない(無余依)涅槃界へ達することと，明らかに命終を表す.

燃料の残余のない(無余依)涅槃界

Sn 765: parinibbanti 註釈 Pj II p. 510:

> sammad aññāya vā anāsavā hutvā ante anupādisesāya nibbānadhātuyā parinibbantī ti.
> あるいは，正しく理解して漏尽者となり，最期において，燃料の残余のない(無余依)涅槃界へと般涅槃する[と].[321]

本経 Ch. 3: Nālakasutta の註釈の最後 Pj II p. 501 に，質問者ナーラカのその後が記されていて，寡黙の賢者となり，行を行い，燃料の残余のない(無余依)涅槃界に般

[321] 本偈の註釈 Pj II p. 350 はこの直前に生前の涅槃: kilesaparinibbānena *parinibbanti*「煩悩が消えることによって parinibbanti〈般涅槃する〉」とも説明し，両義の解釈を示す.

涅槃した(anupādisesāya nibbānadhātuyā parinibbāyi)という記述があり，ナーラカの命終を表す．その後世尊は遺体の葬儀(sarīrakicca)を行って，遺骨(dhātu)を拾わせ，塔廟(cetiya)を建てさせて立ち去ったと註釈家は説明する．さらに，Sn 354: nibbāyi so ādu saupādiseso「涅槃したのでしょうか．それとも燃料の残余があるので[涅槃しなかったので]しょうか」の註釈 Pj II p. 350 は

> *yathā vimutto* ti kiṃ anupādisesāya nibbānadhātuyā yathā asekhā,[322] udāhu saupādisesāya[323] yathā sekhā[324] ti pucchati.
> yathā vimutto〈どの程度，解脱しているのか〉とは，無学のように燃料の残余のない(無余依)涅槃界にいるのか，それとも，有学のように燃料の残余があるのか，と尋ねている．

Sn 355 世尊の答えに関する註釈 Pj II p. 351:

> anupādiseso parinibbāyī[325] ti dasseti.
> 燃料の残余なく般涅槃したと示す．

ここは既に命終を迎えたニグローダ・カッパ師についての問答であり，註釈 Pj は燃料の残余のない涅槃として，命終時およびそれ以後のことを表すとの解釈である．

蘊(心身の構成要素)が消える

Sn 365: nibbānapadābhipatthayāno「涅槃＜の境地／への足場＞を望みつつ」の註釈 Pj II p. 364:

> *nibbānapadābhipatthayāno* ti anupādisesaṃ khandhanibbānapadaṃ[326] patthayamāno.
> nibbānapadābhipatthayāno〈涅槃の境地を望みつつ〉とは，燃料の残余なく，蘊(心身の構成要素)が消える境地を望みつつ．

---

322 Be: asekkhā.
323 Be: upādisesāya.
324 Be: sekkhā.
325 Be: anupādisesāya nibbānadhātuyā parinibbāyī.
326 Be: khandhaparinibbānapadaṃ.

ここで註釈 Pj は，蘊が消えると説明して，阿羅漢である托鉢修行者が望む命終[後]の涅槃であると解する．従って，註釈家の-pada の理解は「〜への足場」ではなく「〜の境地」であるといえる．実際に, Sn 204 nibbānapada を註釈 Pj II pp. 253 は nibbānaṃ と説明する．

上記に示した註釈 Pj の説明から，註釈家の時代には，生前・命終の涅槃を身体・五蘊の有無で区別して燃料の残余のある(有余依)あるいは燃料の残余のない(無余依)涅槃界とする二種涅槃界の教理が確立していたことが確認される．この教説は It pp. 38 – 39 [44 経]が基になっており，その註釈 It-a p. 167 において二種涅槃界の違いは pañca-kkhandhā「五蘊(心身の構成要素)」の有無との解釈が示されている．従って, upādi を「五蘊」と理解して，五蘊の滅は燃料の残余のない(無余依)涅槃界として命終[後]を示唆する．

しかしながら，別の箇所で upadhi「所有物・所有欲」の註釈 Pj の説明では，既に涅槃を得ている修行完成者が現世で khandha「蘊」を滅尽しているという記述もあるため，この語が使用される時点には注意を要する．以下に Sn 中のその例を挙げておきたい．

Sn 374: aññāya padaṃ samecca dhammaṃ,
vivaṭaṃ disvāna pahānam āsavānaṃ
sabbūpadhīnaṃ[327] parikkhayā
sammā so loke paribbajeyya.
境地を理解して，ダルマ(真理・法則性)を体得して，
諸漏の捨離を明らかに見て，あらゆる upadhi の滅尽故に，
その者は世間において正しく遊行すべきである．

文脈は現世に生きる者のことであり, sabbūpadhīnaṃ parikkhayā「あらゆる upadhi の滅尽故に」に関して註釈 Pj II p. 366 は，以下の通り説明する:

> āsavakkhayasaññitaṃ nibbānaṃ vivaṭaṃ pākaṭam anāvaṭan[328] disvā; *sabbupadhīnaṃ*[329] *parikkhayā* ti sabbesaṃ khandhakāmaguṇa-kilesābhisaṅkhārabhedānaṃ upadhīnaṃ parikkhīṇattā.
> 漏の滅と呼ばれる涅槃を明らかに，はっきりと，あらわに見て．sabbupadhīnaṃ parikkhayā〈あらゆる upadhi の滅尽故に〉とは，蘊(心身の構成要素)・欲望の要素・煩悩・形成作用の種類があるあらゆる upadhi の

[327] Be: sabbupadhīnaṃ.
[328] Be: anāvaṭaṃ.
[329] Be: *sabbupadhīnaṃ.*

滅尽された状態故に.

上記の説明によると, upadhi の一要素である蘊(心身の構成要素)が現世で既に滅尽しているということである. 先行研究において, 五蘊の滅は, 物理的な意味において, 命終と解釈する場合が多いが, そうではない場合, つまり修行完成者の禅定状態である可能性もあることに留意しておく必要があるであろう.

4.1.1.3. 二種涅槃界

Sn 765: parinibbanti と同様に, Sn 209: na upeti saṃkhaṃ「呼称に至らない(言葉で表現できない)」の註釈 Pj II p. 257 においては二種涅槃界両方を挙げて説明する.

> imāya catusaccabhāvanāya navappabhedam pi akusalavitakkaṃ pahāya saupādisesaṃ[330] nibbānadhātuṃ patvā lokatthacariyaṃ karonto anupubbena carimaviññāṇakkhayā anupādisesanibbānadhātuppattiyā 'devo vā manusso vā' ti na upeti saṃkhaṃ.
> これら 4 つの真理の修習によって, 9 種もの不善なる思いめぐらしを捨てて, 燃料の残余がある(有余依)涅槃界に達して, 世間のための行を行いつつ, 次第に最後の認識機能が滅して, 燃料の残余のない(無余依)涅槃界に達する故に,「神あるいは人」という呼称に至らない[331]

4.1.2. nibbāna と定義づけされる語

註釈 Pj においては, 経典の様々な言葉を nibbāna のことであると説明する. 以下に註釈 Pj が涅槃と定義づけて説明する経典の語を列挙する.

解脱

Sn 344: mutyapekkho「解脱を求めて」の註釈 Pj II p. 347:

---

[330] Be: saupādisesa-.

[331] 過去の翻訳において解釈が分かれる. 命終後との解釈例: 中村 1984 p. 297 は註釈に従って解したとして「迷える者の部類に赴かない」と和訳. 生前の境地との解釈例: 荒牧・本庄・榎本 2015 p. 69「一つ二つと数えられる存在にかかわらないのである」. 村上・及川 1986 pp. 215 – 216 n. 11 では過去の翻訳 10 例を列挙し,「数に入らない」という解釈は多いけれども, 少なくとも Pj のいまの文脈には適合しない. またこれらの訳文はこの句の深い意味をもとらえていない. Pj が示す解釈は, 聖者したがって仏についての重要な概念を示している」と注を締めくくる (saṃkhaṃ: saṃkhā (f) saṃ√khyā: enumeration, calculation; PED p. 664).

mutyapekkho ti nibbānasaṃkhātaṃ muttiṃ[332] apekkhamāno, nibbānaṃ patthento ti vuttaṃ hoti
mutyapekkho〈解脱を求めて〉とは, 涅槃と呼ばれる解脱を求めつつ, [つまり]涅槃を願いつつ, と言われたことになる.

不死

Sn 228-c 句: amata について註釈 Pj I p. 185 は *amatan* ti nibbānaṃ「不死とは涅槃である」とする.

Sn 225 amata「不死」の註釈 Pj I p. 185 : amatan ti nibbānaṃ と定義づける.

Sn 635 amata 不死を現世の文脈で nibbāna とする: Pj II p. 469 amataṃ nibbānaṃ「不死である涅槃」.

Sn 445 について注釈 Pj II p. 392: nibbānāmataṃ evā ti adhippāyo「他ならぬ涅槃・不死であるという意味である」.

Sn 452 の注釈 Pj II p. 399 では amata を nibbānāmata「涅槃である不死」と説明する.

jātimaraṇassa anta「生と死の終わり」

Sn 467 の註釈 Pj II p. 407:

jātimaraṇassa antaṃ nāma nibbānaṃ vuccati.
jātimaraṇassa antaṃ〈生と死の終わり〉というのは, 涅槃と言われる.

さらに, Ch. 1: Munisutta Sn 209-cd 句「彼の沈黙の聖者は, 生と滅の終わりを見る者であり, 思いを捨てて, 呼称に至らない(＝言葉で表現できないのだ)」(sa ve munī jātikhayantadassī/ takkaṃ pahāya na upeti saṃkhaṃ)に関して, 註釈 Pj II p. 257 は以下の通り解説する.

so evarūpo buddhamuni nibbānasacchikiriyāya jātiyā[333] maraṇassa ca antabhūtassa nibbānassa diṭṭhattā.
このような彼の目覚めた者たる寡黙の聖者は, 涅槃を目のあたりにして, 生と死の終わりとなる涅槃を見た状態故に.

またこのことを同じ Pj II p. 257 において, jāti maraṇa antabhūta「生と死の終わりと

[332] Be: vimuttiṃ.
[333] Be: jātiyā ca maraṇassa.

なった」とも説明する.

誕生の滅／輪廻の苦しみの終わりと彼岸

Sn 517: pattaṃ jātikkhayaṃ tam āhu buddhan「誕生の滅を獲得したその人をブッダ(目覚めたお方)と言う」の註釈 Pj II p. 427 は

> *pattaṃ jātikkhayan* ti nibbānaṃ pattaṃ.
> pattaṃ jātikhayan〈誕生の滅の獲得〉とは, 涅槃を獲得した.

と解説する. さらに, 註釈 Pj II p. 435 は

> vaṭṭadukkhassa antaṃ pārañ ca nibbānaṃ.
> 輪廻の苦しみの終わりと彼岸は涅槃である.

と説明する. また apunabbhava「再生しないこと」Pj II p. 305 とも説明する.

誕生の滅／燃料を滅する

Sn 743 の註釈 Pj II p. 507:

> *upādānakkhayā jātikkhayaṃ* nibbānam *abhiññāya nāgacchanti*[334] punabbhavan ti.
> upādānakkhayā jātikkhayaṃ〈燃料を滅する故に誕生を滅した〉涅槃を理解して再生に至らない[と].

阿羅漢果

Sn 267: nibbānasacchikiriyā「涅槃を目の当たりにすること」の註釈 Pj I p. 152:

> nibbānasacchikiriyā nāma: idha arahattaphalaṃ nibbānan ti adhippetaṃ, tam pi hi pañcagativānena vānasaññitāya taṇhāya nikkhantattā nibbānan ti vuccati.
> 涅槃を目の当たりにすることとは, ここでは阿羅漢果が涅槃との意味である. なぜなら, 五趣の vāna[335]によって vāna と名付けられた渇愛から進み出た状態故に涅槃であるといわれるからである.

---

[334] Be: na gacchanti.

[335] vāna の意味はよくわからない. PED p. 608 も語源がはっきりとしないと注記しつつ, 1. sewing, stuffing [√vā: weave「織る・紡ぐ」], 2: vana「林」から, 抽象的に desire, lust「欲望」と説明する.

さらに, Pj II p. 346 では, nibbānaṃ arahato gati「涅槃は阿羅漢の行く先」とも説明される.

最上の安穏

Sn 21 において世尊が自身について tiṇṇo pāragato vineyya oghaṃ「激流を調伏して渡り向こう岸に至った」と発言する箇所の註釈 Pj II p. 35:

> arahattaṃ patto
> 阿羅漢である状態を獲得した
> sabbāsavakkhayaṃ sabbadhammapāraṃ paramakhemaṃ[336] nibbānaṃ gato
> あらゆる漏を滅した, あらゆるダルマ(事物)の向こう側である最上の安穏である涅槃へ到達した

安楽

Sn 761 sukha「安楽」の註釈 Pj II p. 509:

> 'sukhan' iti ariyehi pañcakkhandhanirodho diṭṭho, nibbānan ti vuttaṃ hoti.
> 五蘊の滅が「楽である」と, 立派な人達によって見られた. 涅槃であると言われる.

pāragata「向こう側へ行った」

Sn 359 註釈 Pj II p. 362:

> *pāragatan*[337] ti nibbānappattaṃ; *parinibbutan* ti saupādisesanibbānavasena.
> pāragatan〈向こう側へ行った〉とは涅槃に達した, parinibbutan〈般涅槃していて〉とは燃料の残余のある涅槃(有余依涅槃)によって.

禅定・精神統一

Sn 86: nibbānābhirata「nibbāna を楽しみ」の註釈 Pj II p. 163 は, MN I p. 249 を引用して, 世尊の禅定・精神統一として解説する.

> *nibbānābhirato* ti nibbāne abhirato, phalasamāpattivasena sadā nibbānaninnacitto ti attho, tādiso ca Bhagavā, yathāha: "so kho ahaṃ

[336] Be: paramaṃ khemaṃ.
[337] Be: pāraṅgatan.

Aggivessana tassā eva kathāya pariyosāne tasmiṃ yeva purimasmiṃ samādhinimitte ajjhattam eva cittaṃ saṇṭhapemi sannisādemi ekodikaromi[338] samādahāmī" ti

nibbānābhirato〈涅槃を楽しみ〉とは, 涅槃を楽しんでいて, 果としての入定(禅定)によって常に[その]心が涅槃に傾倒しているという意味である. そしてそのような方とは世尊である. すなわち「アッギヴェッサナよ. 私自身は, 他ならぬその話[説法]が終わると, その同じ最初の「精神統一の相」 (samādhi-nimitta)において, 他ならぬ内へ心を立たせ, [心を]鎮め, 集中して, 精神統一をはかる」という通りである.[339]

漏尽

Sn 374: āsavānaṃ の註釈 Pj II p. 366:

āsavakkhayasaññitaṃ nibbānaṃ.
漏の滅と呼ばれる涅槃.

苦しみの停止

Sn 724 註釈 Pj III p. 504「涅槃において苦しみが停止する」と説明:

nibbāne hi *dukkhaṃ sabbaso uparujjhati* sabbappakāraṃ uparujjhati sahetukaṃ uparujjhati asesañ ca uparujjhati.
なぜなら, 涅槃において dukkhaṃ sabbaso uparujjhati〈苦しみが全てにわたって停止する〉からである. あらゆる種類[の苦]が停止する, 原因もろともに[苦]は停止する, そして残余なく停止する.

upadhi「所有物・所有欲」がないこと

Sn 1057: anūpadhīkaṃ を註釈 Pj II p. 591 は, anupadhikan ti nibbānaṃ「所有物・所有欲がないことは涅槃」と説明する. upadhi「所有物・所有欲」に関して註釈 Pj は

[338] Be: ekodiṃ karomi.
[339] Th 696 に出てくる「禅定中で」「精神統一した状態」であるナーガ(nāga)の描写について, 註釈 Th-a p. 10 は「涅槃を楽しむ」つまり, 生前に涅槃を得た者の精神統一した状態(samāhita)であると説明する. Th-a p. 10:

jhāyī ti, ārammaṇūpanijjhānena 'va jhāyana-sīlo. *assāsarato* ti, paramassāsa-bhūte nibbāne rato.
jhāyī〈禅定中で〉とは, 他ならぬ対象を瞑想することによって, 禅定が生活習慣であり, assāsarato〈入る息を楽しみ〉とは, 最高の入る息のような涅槃を楽しんで.

以下の通り説明する. Sn 728: upadhīnidānā「所有物・所有欲を根拠として」の註釈 Pj II p. 505 では kammapaccayā「行為(業)に縁って」と説明する. それに対し, 同様の内容である最古層 Sn 1051 の同語の註釈 Pj II p. 590 は taṇhādiupadhinidānā「渇愛などという所有欲を原因として」と説明する. また, 註釈 Pj II では, upadhi を khandha「蘊」と説明することもある.[340] また「蘊」を含む 4 種: kāma「欲望・欲望の対象」; khandha「蘊」; kilesa「煩悩」; abhisaṃkhāra「潜在形成力」とも説明する(Pj II p. 21; 216).[341]

viveka「遠離」

Sn 1065 vivekadhammaṃ「遠離のダルマ(教え)」の註釈 Pj II p. 593:

> sabbasaṃkhāravivekanibbānadhammam.
> あらゆる形成作用から遠離する涅槃のダルマ.

無知を裂くこと

Pj II p. 600 では avijjāppabheda「無知を裂くこと」が nibbāna と定義され, aññāvimokha「理解による解放」が nibbāna によって生じたと説明する.

まとめ

上に列挙したように, 註釈の nibbāna の定義には, 初期仏典, 特に最古層の定義(本論 2.参照)に比べると, 表現の多様化・含意の広がりが見られる.

4. 2. Pj 以外の註釈と比べて

次に, 本論にて引用した Sn 以外の経典の註釈の内容について, Pj との類似点, 相違点に分けて概観する.

---

[340] 例えば, Sn 364-a 句の註釈 Pj II p. 363 は「upadhīsū〈諸々の所有物の中に〉とは蘊(心身の構成要素)という諸々の所有物の中に」(*upadhīsū* ti khandhūpadhīsu)と説明する.

[341] さらに, upadhi としばしば混同される upādi「燃料・取り込み」に関しても, khandha「蘊」であると, 註釈 Pj が説明することもある. 例として, Sn 散文部分の p. 140 他: upādisese の註釈 Pj II p. 504 が挙げられる:

> *sati vā upādisese anāgāmitā* ti, upādisesan ti punabbhavavasena upādātabbakkhandhasesaṃ vuccati, tasmiṃ vā sati anāgāmibhāvo paṭikaṃkhoti dasseti.
> sati vā upādisese anāgāmitā〈あるいは, 燃料の残余があれば不還の状態である〉と, 燃料の残余とは, 再生によって取り込まれるべき蘊(心身の構成要素)の残余が言われる. あるいは, それ(蘊)がある場合, 不還となることが期待されると示す.

4.2.1. Pj との類似点

4.2.1.1. ブッダゴーサ

Pj はブッダゴーサ(Buddhagosa)の著作と記されるが, それを疑問視する研究成果も発表されている(前述序論参照). ブッダゴーサ著作である四部註 Sv, Ps, Spk, Mp における涅槃の語彙の説明で Pj と類似するものをまず以下に示す.

nibbuto

DN II p. 136G の註釈 Sv p. 572 は,「熱望などの滅ゆえに」(abl.)に,「煩悩が消えることによって」(inst.)を補って, 涅槃していると説明する:

> *rāgadosamohakkhayā sa nibbuto* ti so evaṃ pāpakaṃ jahitvā rāg' ādīnaṃ khayā kilesa-nibbānena nibbuto ti.
> rāgadosamohakkhayā sa nibbuto〈熱望・憎しみ・迷妄の滅ゆえに, その者は涅槃している〉とは, 彼は, このように, 悪を捨てて, 熱望などの滅ゆえに, 煩悩が消えることによって涅槃している[と].

註釈での nibbuto の説明に, kilesa「煩悩」が nibbāna「消えること」という説明をしていることから, 本註釈の解釈も, Pj 同様, 生前で得られる涅槃を表す. MN I p. 341 他に現れる nibbuto の註釈 Ps III p. 10 においては, nibbuto に関して「一切の煩悩が消えた状態(nibutattā)」と説明する:

> sabbakilesānaṃ nibbutattā *nibbuto*. anto tāpanakilesānaṃ abhāvā sītalo jāto ti *sītibhūto*.
> 一切の煩悩が消えた状態ゆえに nibbuto〈涅槃している〉. 内面で熱くなる諸煩悩のないこと故に冷たさが生じているとは sītibhūto〈冷たく[清涼に]なっている〉.

また, 諸煩悩があると「熱くなる」と煩悩が火的要素であることを示し, 諸煩悩がないために, sītibhūto〈冷たく[清涼に]なっている〉として, nibbuta と sītibhūta を同義と解釈する. 経典文脈は現世のことであるため, 生前の涅槃を表す. SN I p. 1: parinibbuta 註釈 Spk I p. 20 では kilesa-nibbānena nibbutaṃ「煩悩が消えることによって涅槃している」と説明する. これらの解釈から, Pj 同様, 四部註の著者である

ブッダゴーサは nibbāna も nibbuta も基本的に同じ「火的要素が消える」として捉えていたことが示唆されよう.

SN I p. 187 の註釈 Spk I p. 270 は santapadam「鎮まった境地」を nibbānaṃ「涅槃」に置き換え,「煩悩がすっかり消えることによって」parinibbuta と説明する. そして以下の通り解釈する:

> *paṭicca parinibbuto kaṅkhati kālan* ti, nibbānaṃ paṭicca kilesa-parinibbānena parinibbuto parinibbāna-kālaṃ āgameti.
> paṭicca parinibbuto kaṅkhati kālan〈縁って parinibbuta として, 時を待つ〉とは, 縁って涅槃として煩悩がすっかり消えることによって般涅槃している者は, 般涅槃の時を待つ.

このブッダゴーサの説明は, Pj 同様, nibbāna および parinibbuta とも, 煩悩が消えることのみと結びつけている. santapada を涅槃と理解していることから, parinibbuta である人は既に現世で涅槃へと至っている, つまり parinibbuta が生前の涅槃を意味する語として使われている. また命終の時を parinibbāna-kāla「般涅槃の時」と説明する. ここでは, nibbāna と parinibbuta が生前の状態として, そして parinibbāna が命終の時点として涅槃の語彙が使い分けられている. 現世で涅槃した者は amata「不死」であると初期仏典各所で説かれるため(例: Sn 204, 225, 228 他),「死」を使わず「死」の代わりに parinibbāna が使用されて,「般涅槃している者が般涅槃の時を待つ」との一見奇妙な表現となっている.

パラレルのダンマパーラ(Dhammapāla)による註釈では有余依・無余依の二種涅槃界で説明される(本項下記 Th-a III p. 191 参照).

二種涅槃[界]

ブッダゴーサによる註釈で二種涅槃[界]の術語を使って説明がなされるのは数ある著作の中で DN II: Mahāparinibbānasuttanta のみである.[342]

本経 p. 157G アヌルッダの偈頌部分の註釈 Sv p. 595 において

> *santim ārabhā* ti anupādisesa-nibbhanaṃ ārabbha paṭicca sandhāya.
> santim ārabbhā〈鎮まりによって〉とは燃料の残余のない(無余依)涅槃によって, を縁として, を意図して.

[342] Be オンライン版の検索による結果として.

と説明する．また本経中に定型句: anupādisesāya nibbāna-dhātuyā parinibbāyati/ parinibbuto「燃料の残余のない(無余依)涅槃界において般涅槃する/した[状態である]」が複数回使用されるため，註釈 Sv においてもこの定型句を用いて命終の涅槃であることが示される．しかし, Sv では，初期仏典には現れない定型句「燃料の残余のある(有余依)涅槃界に般涅槃する」を用いて説明する箇所が 1 例見出せる．鍛冶工チュンダの食事供養についての場面である(Sv pp. 571 – 572):

> Bhagavā hi Sujātāya dinnaṃ piṇḍapātaṃ paribhuñjitva saupādisesāya nibbāna-dhātuyā parinibbuto, Cundena dinnaṃ paribhuñjitvā anupādisesāya nibbāna-dhātuyā parinibbuto ti: evaṃ parinibbāna-samatāya pi sama-phalā
> なぜなら，世尊は，スジャーターによって布施された托鉢食を食べて，燃料の残余のある(有余依)涅槃界に般涅槃し，チュンダによって布施された [托鉢食を] 食べて，燃料の残余のない(無余依)涅槃界に般涅槃した，と．このように般涅槃の等しさ故に同じ果報 [である]

このことは，本経成立時から註釈 Sv の成立までの間に，これら二種涅槃界の定型句表現が確立したことを示唆するものである．

4. 2. 1. 2　ダンマパーラ

nibbāna, nibbuti, nibbuta

nibbuti に関して Pj では明確に nibbāna とは解説されず，間接的にそう判断されるが, Th-a では nibbuti を nibbāna と明確に定義づけする．また原意である「火が消える」という意味でも, nibbuti, nibbāna, nibbuta を用いる．

例えば, Th 418(本論 2. 2. 3.参照)の註釈 Th-a II p. 178 は, nibbuti = nibbānaṃ と定義し, kilesa を用いて生前の涅槃と説明する:

> kamma-kamma-kilesaṃ [343] *chetvā* samucchinditvā *nibbutin* ti [344] nibbānaṃ *pāpeti*.
> 業・煩悩を chetvā〈断ち切って〉，つまり，すっかり断ち切って，
> nibbuti という涅槃を pāpeti〈得させる〉．

[343] Be: kammaṃ kilesaṃ vā.
[344] Be: omit ti.

さらに Th 32(本論 2. 2. 4.参照)では, nibbuti を註釈 Th-a I p. 98 は nibbāna に置き換える:

> nibbuta-sabhāvo nibbānaṃ.
> [火が]消えていることを本性とするもの, つまり涅槃.

この解釈から, nibbuta と nibbāna に関しては単純に置き換えられるものでないこと捉えていたことがわかる.

Thī 116 の註釈 Thī-a p. 114 は,「火が消えること」について nibbuto を使って説明する.[345]

> yathā pana vaṭṭitelādike paccaye sati uppajjanāraho padīpo tadabhāve anuppajjanato nibbuto ti vuccati, evaṃ kilesādipaccaye sati uppajjanārahaṃ cittaṃ tadabhāve anuppajjanato vimuttan ti vuccatī ti.
> 灯心や油などの縁があると, 灯火が発生するはずであるが, それがないと発生しないため消えていると言われるように, このように, 煩悩等の縁があると心が起きるはずであるが, それがないと[心が]起こらないため解放されていると言われる.

この註釈 Thī-a の解釈から, 註釈家は nibbuta を nibbāna の語根 nir-√vā[2]「火が消える」の PP の役割で使用していることがわかる. また, 灯火を心に, nibbuta「消えている」を vimutta「解放されている」に置き換えていることから, 火が消えること(nir-√vā[2])に喩えて, 心が解放されること(vi-√muc), 即ち現世における解脱が説明される.

上記の説明から, 註釈家ダンマパーラは nibbuti = nibbāna と理解していたことがわかり, nibbuti, nibbuta, nibbāna という涅槃の語がいずれも「火が消える」文脈で使われていることが確認できる. そして消える要素は煩悩であるとの解釈がされている.

二種涅槃[界]

Th 586(本論 2. 2. 3.参照)の註釈 Th-a II p. 250 も, 同じく nibbāna を用いて説明し

---

[345] 本偈には vimokkho「解放・解脱」(vi-√muc)が現れ, kilesehi vimokkho「諸煩悩からの解放である」と註釈し, 現世の文脈であるとの解釈が示される.

た上で, 偈文の nibbuti へと到達する(adhigacchati)を, 二種涅槃両方へ至ると解説する:

> sa-upādisesa-anupādisesa-ppabhedaṃ[346] duvidham pi nibbānaṃ adhigacchati, pāpuṇāti
> 燃料の残余のある(有余依)・燃料の残余のない(無余依)という種類のある二種もの涅槃へ到達する, つまり獲得する.

前記 SN I p. 187: paṭicca parinibbuto kaṅkhati kālan「縁って parinibbuta として, 時を待つ」のパラレルである Th 1218[347]は同じ内容である. その註釈 Th-a III p. 191 の説明を見てみよう.

> *parinibbuto* ti, ārammaṇa-karaṇa-vasena nibbānaṃ *paṭicca* sa-upādisesāya nibbāna-dhātuyā parinibbuto. *kaṅkhati kālan* ti idāni anupādisesa-nibbān'atthāya kālaṃ āgameti. 'na tassa kiñci karaṇiyaṃ[348] atthi, yathā ediso bhavissati, tathā attānaṃ sampādetī' ti adhippāyo.
> parinibbuto〈般涅槃している〉とは, 対象とすることによって, 涅槃を paṭicca〈縁として〉燃料の残余がある(有余依)涅槃界において般涅槃している. kaṅkhati kālan〈時を待つ〉とは, 今や燃料の残余のない(無余依)涅槃のために時を待っている.「その人には為すべきことは何もない. そのようになるように, そのように自分を完成させる」という意味である.

ダンマパーラによる本註釈は, 生前・命終を区別する燃料の残余がある(有余依)涅槃と燃料の残余のない(無余依)涅槃で説明する.

ところが, 二種涅槃が一緒に説明される場合には, 燃料の残余のない(無余依)涅槃は命終を表すのであるが, 無余依涅槃のみで説明される場合は, 経典同様に, 生前の涅槃を表す場合も見出せるため, 同じ術語が異なる時点を表す場合がある(例: Th 416 註釈 Th-a p. 176). この註釈では Th 416 の「鎮まった者として(sītibhūto), 時(命終)を待て(kālaṃ kaṅkha)」について, 以下の通り説明する(Th-a p. 176):

> *idheva* imasmiṃ yeva atta-bhāve sabba-kilesa-daratha-pariḷāhābhāvena *sīti-bhūto*, nibbuto attano parinibbāna-*kālaṃ kaṅkha*, āgamehī ti. evaṃ Satthārā

[346] Be: saupādisesaanupādisesapabhedaṃ.
[347] Th 1218 は, SN I p. 187 で複合語のところを, cirarattaṃ samāhito, santaṃ padaṃ と分割し, paṭiccaparinibbuto と複合語にする.
[348] Be: karaṇīyaṃ.

anupādisesaṃ nibbānaṃ pāpito,[349] desanāvasāne vipassanaṃ vaḍḍhetvā arahattaṃ pāpuṇi.

idheva〈他ならぬここで[現世で]〉この自分の生存において, あらゆる煩悩・不安の燃焼がないことによって sīti-bhūto〈冷たく[清涼に]なって〉, つまり消えていて(涅槃していて), 自分の般涅槃の kālaṃ kaṅkha〈時を待て〉, つまり期せ, と. このように師によって燃料の残余のない(無余依)涅槃を得せしめられて, 説示の終わりに, 内観を増大させて阿羅漢性を獲得した.

ここはカーティヤーナ長老(Kātiyāno thero)の偈頌であり, 師は世尊である. pra√āp「獲得する」の caus. PP によって,「燃料の残余のない(無余依)涅槃」は「阿羅漢性」の獲得に同じく現世のこととして解釈できる. この解釈の場合 upādi「燃料」は物理的な身体や五蘊を意味するものではなく, 煩悩等の取り込みを意味する. 一方で, 阿羅漢性の獲得とともに, 命終時に無余依涅槃を得ることが現世で確定したという解釈も可能であろう. その場合 upādi は「五蘊・身体」を意味することになる.

次に, 単独で現れる燃料の残余のない(無余依)涅槃が命終を明示する用例を挙げる. Th 905 の註釈 Th-a III pp. 70 – 71 では, 世尊が第四禅から出た直後に燃料の残余のない(無余依)涅槃界に般涅槃したという定型句を用いて, 以下の通り描写して説明する.[350]

nāhu assāsa-passāso ti ādikā tisso gāthā Satthu parinibbāna-kāle bhikkhūhi 'kiṃ Bhagavā parinibbuto?' ti puṭṭho parinibbāna-bhāvaṃ pavedento āha. tattha *nāhu assāsa-passāso ṭhita-cittassa tādino* ti, anuloma-paṭilomato anekākāra-vokārā sabbā samāpattiyo samāpajjitvā vuṭṭhāya sabba-pacchā catuttha-jjhāne ṭhita-cittassa *tādino* Buddhassa Bhagavato assāsa-passāso *nāhu* nāhesun ti attho. etena yasmā catuttha-jjhānaṃ samāpannassa kāya-sankhārā nirujjhanti, kāya-sankhārā ti ca assāsa-passāsā vuccanti (S. iv, 293)[351], tasmā cattuttha-jjhāna-kkhaṇato paṭṭhāya assāsa-passāsa nāhesum ti dasseti. eja-samkhātāya taṇhāya[352] abhāvato *anejo*. samādhismiṃ ṭhitattā vā *anejo*. *santim ārabbhā* ti, nibbānam ārammaṇaṃ

[349] Be: pāpetvā desanāya katāya thero.

[350] DN II: Mahāparinibbānasuttanta p. 157G アヌルッダの偈頌が, 本偈のパラレルである. 散文 DN II p. 156 では以下の記述がある:

catutthajjhānā vuṭṭhahitvā samanantarā Bhagavā parinibbāyi.

第四禅から出て, 直後に世尊は般涅槃した.

[351] S. iv. 293 (assāsa-passāsā kho, gahapati, kāyasankhāro); SA. iii, 94.

[352] Be: taṇhāsaṅkhātāya ejāya.

katvā.[353] *cakkhumā* ti, pañcahi cakkhūhi cakkumā. *parinibbuto* ti, parinibbāyī. ayaṃ h'ettha attho: — nibbānārammaṇaṃ catuttha-jjhāna-phala-samāpattiṃ samāpajjitvā tad-anantaram eva anupādisesāya nibbāna-dhātuyā parinibbuto ti.
nāhu assāsa-passāso〈出る息，入る息が生じなかった〉とは，[これ]等の 3 つの偈は，師が般涅槃の時に，托鉢修行者達により「世尊は般涅槃されたのか」と質問されて，般涅槃の状態であることを伝えようとして語った．そこで nāhu assāsa-passāso ṭhita-cittassa tādino〈心確立したそのようなお方は，出る息，入る息が生じなかった〉とは，順番通りにも逆順にも様々な形や構成要素の，あらゆる禅定に入っては出て，全て終えた後に，第四禅に立った(留まった)心を持ったブッダであり世尊である tādino〈そのようなお方の〉出る息・入る息が nāhu〈なかった〉即ち，なかったという意味[である]．これによって，第四禅に入った[お方]の諸々の身体形成作用が停止する故に，そして，諸々の身体形成作用とは，出る息・入る息が言われたので(SN IV p. 293 参照)，それ故，第四禅の刹那以後，出る息・入る息が生じなかったと示す．動じることと称せられる渇愛が生じない故に anejo〈動じることなく〉である．あるいは，精神統一に留まっているため anejo〈動じることなく〉である．santim ārabbhā〈鎮まりによって〉とは，涅槃をよりどころと為して．cakkhumā〈眼を持つお方は〉とは五つの眼によって眼を持つお方．parinibbuto〈般涅槃した〉とは，般涅槃した．従って，これがここの意味である—涅槃をよりどころとする第四禅果の禅定に入って，他ならぬその直後に，燃料の残余のない(無余依)涅槃界において般涅槃した，と．

ここは Th 892 – 919 の Anuruddho thero「アヌルッダ長老偈」の中でアヌルッダ長老が世尊の命終について語る場面である．世尊の下で出家して修行し，三明を得て修行完成者となり，最後の偈において，jīvitasaṃkhayā「命尽きたなら」nibbāyissaṃ anāsavo「私は漏尽者として涅槃するであろう」と述べるが，その註釈 Th-a III p. 73 は，上記同様に定型句を用いて説明する:

anupādisesāya nibbānadhātuyā parinibbāyissāmīti attho.
燃料の残余のない(無余依)涅槃界において般涅槃するであろうという意味[である]．

不可視化

[353] Be: anupādisesaṃ nibbānaṃ ārabbha paṭicca sandhāya.

次の偈 Th 906 の註釈 Th-a III p. 71 では, 世尊が般涅槃したことを, 消えた火は存在せず, 見えなくなる, そして[五]蘊の連続性が消えて見えなくなると説明する:

> *asallīnenā* ti, alīnena asankupitena vikasiten'eva[354] *cittena*. *vedanaṃ ajjhavāsayī* ti, sato sampajāno hutvā maraṇantikaṃ vedanaṃ adhivāsesi; na vedanānuvattī hutvā ito c'ito ca samparivatti. *pajjotass' eva nibbānaṃ vimokkho cetaso ahū* ti, yathā telañ ca paṭicca vaṭṭiñ ca paṭicca pajjalanto pajjoto padīpo tesaṃ parikkhaye nibbāyati, nibbuto ca katthaci gantvā na tiṭṭhati, añña-d-atthu antaradhāyati, adassanam eva gacchati, evaṃ kilesābhisankhāre nissāya pavattamāno khandha-santāno tesaṃ parikkhaye nibbāyati, nibbuto ca katthaci gantvā na tiṭṭhati, añña-d-atthu antaradhāyati, adassanam eva gacchati ti dasseti. tena vuttaṃ 'nibbanti dhīrā yathāyaṃ padīpo' ti (Khp. *Rat. Sutt*. v. 14); 'acci yathā vāta-vegena khittā' ti (Sn 1074) ādi.[355]
>
> asallīnenā〈怯まぬ〉とは, 萎縮のない, 揺るぎない, 他ならぬ開かれた cittena〈心で〉. vedanaṃ ajjhavāsayī〈感受に耐えた〉とは, 留意して, 正しく理解している者となって, 死ぬまで終わらない感受に耐えた; 感受に従いあちらこちらとのたうち回らなかった. pajjotass' eva nibbānaṃ vimokkho cetaso ahū〈灯火が消えるように, 心の解放が生じた〉とは, たとえば油によって, また灯心によって燃えている灯明, つまり灯火が, それら [油や灯心]の完全に滅せられることにおいて消える. そして消えたら, どこかへ行ってしまって, 存在しない, 全く消えてしまうし, まさに見えない状態となるように, そのように, 諸煩悩と形成作用に依拠して, 働いている[五]蘊の連続性が, それらの完全に滅せられることにおいて消える. そして消えたら, どこかへ行ってしまって, 存在しない, 全く消えてしまうし, まさに見えない状態となることを示す. それで「賢者たちはこの灯火のように消える」Khp. 6, 14d = Sn 235d.「炎が風の勢いで投げられ消えてしまうように」Sn 1074 等[と言われた]

-atta を-citta に言い換える

abhinibbutatta に関して, Sn の註釈 Pj 同様, 涅槃した状態であり, santa「鎮まっている」として説明する. また-atta を-citta に言い換える(例: 同じくダンマパーラ

[354] Be: suvikasiteneva.
[355] Be: ca ādi.

著作 Ud III p. 29 の註釈 Ud-a p. 195):

> yo evaṃ māyā-māna[356]lobha-kodhānaṃ samugghātena tadekaṭṭhatāya sabbassa saṅkilesa-pakkhassa suppahīnattā[357] sabbaso kilesa-parinibbānena abhinibbuta-citto sīti-bhūto
> このように, 偽り・慢心・貪り・怒りの除去によって, それを伴うことから, 全ての煩悩側のものがよく離れていること故に, 全てにわたって煩悩がすっかり消えることによって, 涅槃した心を持ち, 冷たくなった(鎮まった)状態である者

Ja II p. 383 [no. 277] abhinibbutattā の注釈 Ja-a p. 383 も同様に, abhinibbutacittā と attā を cittā に書き換える.[358]

まとめ

本論において参照した Sn 以外の他経の註釈文献の涅槃観に関しても, 涅槃の語彙を Pj 同様の説明を加えて等しく同じ涅槃とみなすことが確認された. さらにブッダゴーサとダンマパーラの註釈において, 頻度は異なるが, 生前・命終で区別する二種涅槃[界]を用いて説明する点において Pj と同様であることが見出せた.

4. 2. 2. 註釈間の相違点

Sn 以外の初期仏典は, 数多くの古層・散文文献を含み, 涅槃の教理の多様性を反映する形で註釈の説明がなされる点で, Pj と異なる. また個別の涅槃の語彙の解釈においても細かい差異が認められる. その例として, ブッダゴーサの著作である SN の註釈 Spk の説明とダンマパーラの著作である Th の註釈 Th-a の説明を以下に示す.

SN I p. 186G: nibbānagamanaṃ maggaṃ「nibbāna へと至る道を」[359]の註釈 Spk p. 269:

---

[356] Be に倣い PTS mayā-mānā を訂正.
[357] Be に倣い PTS suppahīnatta を訂正.
[358] Ja III p. 14 [no. 303]: abhinibbutattā の註釈 Ja-a p. 15 は, abhinibbutasabhāvā「自性が涅槃している人々」と解す. この説明は Pj には見られない.
[359] 本経の涅槃の語彙は 2. 2. 3. 3. parinibbuta 用例(Sn 以外)にて取り上げた.

nibbāna-gamaṇaṃ[360] *maggan* ti vipassanaṃ sandhāy' āha. so hi nibbānassa pubbabhāgamaggo. liṅga-vipallāsena pana *maggan* ti āha. *tattha me* ti, tasmiṃ me attano taruṇa-vipassanā-saṅkhāte nibbān' ādhigame magge[361] mano nirato.
nibbāna-gamaṇaṃ maggan〈涅槃へと至る道を〉とは, 内観を意図して言っている. というのは, それは涅槃の前半である道[のことであるから]. 但し, 性の転換によって maggaṃ と言っている. tattha me〈そこで私の〉とは, そこを, つまり若い内観と呼ばれる涅槃へ至る道を, 私の, つまり自分の思考が楽しんでいる.

ブッダゴーサは〈涅槃へと至る道〉とは, 内観であると説明するが, この「内観」が「涅槃の前分」「若い内観」であるとさらに解釈を加える. この説明の意味はわかりにくい. 本偈は Th1212 にパラレルが存在する. ダンマパーラによる註釈 Th-a III p. 189 で,「内観」とのみ説明される.[362]

Sn 中では SN のように nibbāna と magga「道」がこのように直接的に結び付けられる表現はなく, このような註釈の説明も見られない. 前記した古層 Sn 724; 726 で「苦しみの鎮まりに至る道」と magga が出てくる. この偈は仏教術語で言うところの「四諦」を示唆し, その註釈 Pj II p. 504 は, 涅槃において苦しみが停止する, そしてそこへ至る道とは, aṭṭhaṅgikaṃ maggaṃ「八支の道」と説明する. その道を理解している者は, 心解脱と慧解脱を備える(Sn 727)と説かれる.

散文経典では, 通常この vipassanā「内観」という語は samatha「鎮まり(寂止)」とセットで現れ, 通常 samatha が先に言われる(PED p. 627 s.v. vipassanā 参照). 後代の Vism では, jhāna「瞑想」や samādhi「精神集中」と共に現れることもある. 従って, 禅定と内観という 2 つで 1 セットの修行が涅槃に通じることが示される.[363]

---

360 Be: *nibbāna-gamanaṃ.*

361 Be: nibbānagamanamagge.

362 *nibbāna-gamanaṃ maggan* ti liṅga-vipallāsena vuttaṃ; nibbāna-gāmī-maggo [Be: -magga] ti attho; vipassanaṃ sandhāyāha. *tattha me nirato mano* ti tasmiṃ vipassanā-magge mayhaṃ cittaṃ niratan (Th-a III p. 189).

363 涅槃の用例は出てこないが, Dhp 384 に dvayesu dhammesu pāragū hoti「2 つのダルマ(事柄・教え)において向こう側へ行きついて」とあり, その「ダルマ」に関する註釈 Dhp-a IV p. 140 は, samathavipassanādhammesu「鎮まり(寂止)と内観というダルマにおいて」と 2 種を説明する. Dhp 384 は Brāhmaṇavagga の 1 偈である. Sn Ch. 3: Vāseṭṭhasutta と共通偈が多いが, この偈は Sn に見出せない.

なお, 註釈は pāragū を涅槃と説明する. Sn 372: pāragū の註釈 Pj II p. 366:

> *pāragū* ti pāraṃ vuccati nibbānaṃ, taṃ gato, saupādisesavasena adhigato ti vuttaṃ hoti
> pāragū〈向こう側へと行きついて〉とは, 向こう側が涅槃と言われる. そこに至った. 燃料の残余がある(有余依)という理由で, 到達したと言われた

また前述 Sn 359: pāragataṃ の註釈 Pj II p. 362 も, nibbānappattaṃ「涅槃に達した」と説明し, 註釈は「向こう側へ行くこと」を涅槃と定義していることがわかる.

Sn の註釈 Pj に vipassanā「内観」によって涅槃の語彙が説明される記述が見出せないことは, 近年問題となっている Pj はブッダゴーサの真作ではないとの説を裏付ける根拠の一つとなり得ると推測される.

「取り込むことのない般涅槃」の註釈

Sn 中の涅槃の語彙にこの表現 anupādāparinibāna (MN I p. 148 他)は見出せない.

ブッダゴーサによる MN 註釈 Ps II p. 156 は以下の通り説明する:

> *anupādāparinibbānatthaṃ*[364] *kho āvuso* ti ettha anupādāparinibbānaṃ nāma apaccayaparinibbānaṃ. dve va upādānāni: gahaṇūpādānañ ca paccayūpādānañ ca. gahaṇūpādānaṃ nāma kāmūpādānādi catubbidhaṃ. paccayūpādānaṃ nāma, avijjāpaccayā[365] saṅkhārā ti evaṃ vuttā paccayā. tattha gahaṇūpādānavādino ācariyā, *anupādāparinibbānan* ti catusu upādānesu aññatarena pi kañci dhammaṃ agahetvā pavattaṃ arahattaphalaṃ anupādāparinibbānan ti kathenti. taṃ hi na ca upādānasampayuttaṃ hutvā kañci dhammaṃ upādiyati, kilesānañ ca parinibbutante jātattā parinibbānan ti vuccati. paccayūpādānavādino pana, anupādāparinibbānan ti apaccayaparinibbānaṃ, paccayavasena anuppannaṃ asaṅkhataṃ amatadhātum eva, *anupādāparinibbānan* ti kathenti. ayam anto ayam koṭi, ayaṃ niṭṭhānaṃ. apaccayaparinibbānaṃ pattassa hi brahmacariyavāso matthakaṃ patto nāma hoti. tasmā thero, *anupādāparinibbānan* ti āha.
> anupādāparinibbānatthaṃ kho āvuso〈取り込むことのない般涅槃を目的として, 友よ〉とは, ここでは取り込むことのない般涅槃とは無縁の般涅槃[のことである]. 2 つ自分に取り込むことがあり, 執着の取り込みと縁の取り込みである. 執着の取り込みとは欲望の取り込みなど 4 種. 縁の取り込みとは, 無明を縁として諸々の形成作用が, と, このように言われる諸々の縁. その(2 種の)内, 執着の取り込みを言う教師達は, anupādāparinibbānan〈取り込むことのない般涅槃〉とは, 4 つの取り込みのうち, どれによっても何らダルマ(要素・物事)を掴まないことによって起こる阿羅漢果である取り込みのない般涅槃であると語る. なぜなら, それは, 取り込みに伴うものとなって, 何らダルマに執着しないからである. そして, 諸煩悩の完全に消えた果てに生ずること故, 般涅槃と言われ

[364] Be 採用. Ee: *anupādā parinibbānatthaṃ* (以下同).
[365] Be 採用. Ee: avijjā paccayā.

る．一方，縁の取り込みと言う[教師達は] 取り込みのない般涅槃とは，無縁の般涅槃[である]，縁によって生起しない，形成されたものではない，他ならぬ不死界である anupādāparinibbānan〈取り込むことのない般涅槃〉と言われる．これが終わり，これが終点，これが完了[である]．なぜなら，無縁の涅槃を獲得した者にとって，梵行に住すこと，つまり頂点が獲得されていると名づけられる．それ故，長老は〈取り込むことのない般涅槃〉と発言した」

「阿羅漢果」および涅槃を獲得した者は「梵行に住している」と説明し，経典の文脈に従い生前の涅槃の境地と解釈する．さらに取り込みに 2 種あり，「取り込みのないこと」は，①煩悩(kilesa)のないこと，および，②縁のない(apaccaya)，形成されたものではない(asaṅkhataṃ)，つまり不死界 amatadhātu であると説明する．いずれも anupādāparinibbānan「取り込むことのない般涅槃」の説明であるため，涅槃の二側面を示したものであるといえるであろう．Sn の註釈 Pj では，生前の涅槃を意味する場合は①の解釈のみが示される点において，違いが見られる．

4.3. 註釈小結

註釈文献においては，涅槃の語彙を等しく仏教術語である「涅槃」と解釈し，その時点が生前との解釈であれば，消える要素は主としていわゆる「煩悩」(kilesa)であると説明する．また命終[後]の時点と判断する場合は，「最後の認識機能の滅」「燃料の残余のない(無余依)涅槃界」「蘊(心身の構成要素)が消える」等と説明する．さらに，二種涅槃[界]の説明を挙げて，両義での解釈を示す場合もある．

註釈文献では，nibbāna を「[火が)消えること」の原意で使用する場合があり，nibbuta を nir√vā[2]「(火が)消える」の PP として使用する．また様々な語を nibbāna と定義づけしており，涅槃の同義語としていることが確認される．

註釈家は，attan を citta に置き換える．その理由として，註釈家の時代には，attan が霊魂を示す意味でのアートマンと理解される可能性があったため，それを避けようと，citta に意図的に言い換えた可能性が推測される．そしてこの言い換えは，経典の時代と註釈が書かれた時代の間に，-attan に関する思想的展開が存在することを示唆する．また，註釈は attano 自分自身全体の消滅ではなく，rāgādīnaṃ「自分の熱望など」が消えることと説明し，rāgādi「熱望など」が nibbāna「消えること」の対象・要素であり，attan「自分自身が消える」ことは示唆しない．

註釈においては，It pp. 38 – 39 において初めて説かれた生前・命終で区別する，燃料の残余のある(有余依)涅槃界および燃料の残余のない(無余依)涅槃界という，

二種涅槃界の術語を使って涅槃が説明されることから, その教理が註釈家の時代には確立していたことが見て取れる. しかしながら, ブッダゴーサとダンマパーラの間にはその使用頻度に明らかに違いが見られ, 5 世紀前半に活躍したとされるブッダゴーサは「大般涅槃経」の註釈のみに使用するが, 6 世紀に活躍したとされるダンマパーラの註釈には二種涅槃[界]の術語を用いる説明がより頻繁になされることが確認された. 限定した範囲からの考察結果ではあるが, Sn の註釈 Pj においては二種涅槃[界]の複数回の使用が見出せること, また, Pj に vipassanā「内観」によって涅槃の語彙が説明される記述が見出せないことは, 近年問題となっている Pj はブッダゴーサの真作ではないとの説を裏付ける根拠の一つとなり得ると考えられる.

結論

本論は 4 部構成で，序論と 1.では，涅槃の語彙の原意に関して分析し，研究史をまとめながら問題点を整理した. 2.では，初期仏典の時代的な層分けを作業仮説として実例検討を行い，初期仏典中の涅槃の語彙を分析した. 基本資料 Sn に関しては全用例を検討し，関連する古層・散文経典を適宜取り上げ，そして，管見の限り，これまで詳細に取り上げられることのなかった nibbuti，さらには abhinibbuta を伴う複合語に関して，初期仏典中の全用例を調査した. 3.では，生前・命終の問題とそれに関連する質問者の意図と世尊の返答の真意について掘り下げて再考した. 4.では，解釈史の観点から，Sn の註釈である Pj を中心に，註釈文献の涅槃観をまとめた. 以下に考察結果と新たに得られた知見を示す.

まず 1.において，涅槃の語彙の原意が nir√vā[2] 由来の「[火が]消える」であり，Sn を含む古層韻文において動詞語形は √vā[1]「[風が]吹く」であっても√vā[2] の語義として使用されていたこと，但し，語形√vā[2] で語義√vā[1] の用例はなく，逆は見出せないことが確認された. vāti を vāyati の意味で用いるという混同は Veda から見られるが，本検証結果により，これがパーリ文献の特に古いテキストにも残っていることが裏付けられた. また，nibbuta が nir√vā「[火が]消える」の PP の役割で使用され，そして，その抽象名詞である nibbuti も「鎮火」を原意とすることが認められた. Skt. nirvṛti にはそのような意味での使用はなく，また PP nirvṛta の使用も認められず，これらの語彙の関係性において，Skt.文献とパーリ文献に相違が見出せた.

その「消える」の意味は，そのモノや人自体の消滅ではなく，燃えているそのモノの火が消えること，または，その人の火的要素が消えることであることを指摘した. このことは，近代文献学の研究史において，当初から涅槃は annihilation「完全消滅」であるか否かで長く議論が続いており，その中でその者の「人間存在全体の消滅」との主張も見られるが，涅槃の語彙の原意の分析からはその人自体の消滅とは言えないことが示された. さらに，涅槃の語彙が馬や鳥に使われる事実から(古層 Ja II p. 383 偈文，散文 MN I p. 446)，仏教術語としての「涅槃」は意味せず，落ち着いていて鎮まっていることを表す場合もあることが確認された. なお 2.の考察結果から，人の場合でも，涅槃を意味するかどうか明らかではない用例が見出せた(例: 最古層 Sn 783; 古層 Sn 343 = Th 1263; Ja III p. 14G: abhinibbutatta, 古層 Sn 707: nibbuta，散文 MN I p. 323: nibbuti).

2.では以下の考察結果が得られた. 最古層 Sn 1094 において，nibbāna は「何も所有しないこと」「取り込まないこと」また「更なる(= より良い)渡り先(避難所)を持たない島」そして「老いと死の滅尽」であると定義される. さらに，Sn 1109 では「渇愛の捨離によって nibbāna と言われる」(inst.)と言われ，渇愛等の煩悩の滅が

nibbāna の最大の特徴あるいは中核的要素として理解され得る．これは散文 SN IV pp. 251, 261 において，涅槃が述語名詞構文によって煩悩の滅そのものであると言われることの類似表現である．この SN の用例は，従来より生前の涅槃を表す根拠として解釈されてきたが，渇愛の捨離，つまり煩悩の滅の時点と nibbāna の時点とが必ずしも同一である必然性は無く，涅槃の時点を生前と断言できないことを指摘した．同様に，涅槃の語彙を伴う複合語や「涅槃へと至った」等の表現においては，直接定動詞や PP によって「涅槃する／している・した」と言う場合と異なり，その文脈が生前のことを表すということが，必ずしも nibbāna 自体の時点が生前であることを意味するものではないと判断され得る．例えば，「nibbāna へと至った」(Sn 514: parinibbānagato)との表現は，実際に[生前に] nibbāna に至ったとも，あるいは[命終時に至る・得る] nibbāna に生前に至った，つまり nibbāna に至る権利・資格を生前に得た，それが約束された，との意味に捉えられる余地をも残すのである．このように，nibbāna を語る文脈が現世・生前であることと，nibbāna 自体の時点が現世・生前であることとは分けて考えなければならないが，従来の研究では，この点が考慮されてきたとは言い難い．

nibbāna の一定義である「老いと死の滅尽」(Sn 1094)は，輪廻・再生を止めることに他ならないが，それが(1)命終の後，つまり次生(以降)のことだけなのか，あるいは(2)今生でのことも含むのかは分からない．(2)の場合，今世での老死や死・再生の滅尽は，それらに影響されない = それらを超越する，等の意味に解され得る．nibbāna の時点は，これらの違いに応じて，(1)であれば命終となり(例: Th 907)，(2)であれば生前と判断することが可能であるとの解釈を示した．文脈から(2)と判断される用例も見出せた(例: 最古層 Sn 1095，古層 Sn 235; 359; 638, MN I p. 187 偈文)．

最古層で nibbāna の一定義である「取り込まないこと」を表す ā√dā (動詞または派生語)の否定形が，古層において nibbuta と共に現れ(例: Sn 630; 638)，涅槃していることを示す用例が現れる．この「取り込みがない」という状態は，煩悩等の取り込み(取著)がない状態を示唆する．さらに，理解力・理解すること(paññā, √jñā の動詞または派生語)が涅槃と近い関係であることがより顕著に示されることを指摘した(例: Sn 186; 359; 737; 739; 765 等)．加えて散文では，自身の命終後のことを理解するとの文脈で涅槃の語彙が現れるようになる(例: MN III pp. 244 – 245)．さらに，火が消える喩え(例: Sn 19, 235, 591)も，より古い層では現世・生前の文脈であったが，命終を示唆するようになる．そして，現世の文脈で amata「不死」(例: 古層 Sn 225; 228)へと至った者と描写されることから，そのような解脱者の命終時を表すのに，maraṇa「死」を用いず，特に pari-を付した「[般]涅槃する」が古層の後期・新層の散文の時代から採用され，[366] 更には，この用法を特に高揚した「大般涅

[366]「時を待つ」(kāla + kaṅkhati [√kāṅkṣ])で解脱者の命終を表す場合もある(例: SN I p. 187G)．

槃経」が初期仏典以降に大きく影響を及ぼし，解脱者の「命終」そのものが真の涅槃・[般]涅槃であるとして広く認識されるようになっていったと推察した.

涅槃の語彙間にも意味内容に若干の異同が認められた. nibbuti は最古層で santi「鎮まり」と定義され(Sn 933), 自己の内面の鎮まりを表し，間接的に生前の涅槃が示唆された. 古層・散文のほぼ全用例において nibbuti は，より明確に涅槃を表すことが確認され，その時点に関しては生前か命終か判別がつかない結果であった. 一方, nibbuti は散文においては修行途中の預流果が目標とすべきものとの展開も見られた(MN I p. 323). nibbuta の諸用例は，大半が現世・生前の文脈である点において，時点の判別がつかない nibbāna および明確に命終を表す一部の pari-付きの nibbuta とは対照的である.初期仏典における abhinibbutatta および diṭṭhadhamma-が付された複合語の全用例が，生前の文脈で最古層および古層にのみ見られ，古い用法であることが認められた.「現世」を強調する後者の複合語の使用から，古くから真の涅槃は命終であるとの思想背景が広く世間にあったことを窺わせ，ゴータマ・ブッダは生きている間に涅槃し得ることを強調する意味があったと推論した.

散文には，解脱者の命終[後]の境地を意味する定型句表現: anupādisesāya nibbānadhātuyā parinibbāyati/parinibbuta「燃料の残余のない無有余依)涅槃界に般涅槃する／している・した」が使用され，さらに来世で parinibbāyin「般涅槃者」となる等，古い時代層に比べて，涅槃の用法や涅槃観の多様性が確認された. この定型句中の anupādisesā nibbānadhātu「燃料の残余のない(無余依)涅槃界」は，初期仏典において唯一，二種涅槃界が説かれる It pp. 38 – 39 [44 経]に同じ意味で使用され，その者の生前の涅槃の境地は saupādisesā nibbānadhātu「燃料の残余のある(有余依)涅槃界」と表現される. 生前・命終[後]の涅槃を upādi「五蘊(身体)」の有無で区別するこの経は，同じ ā√dā「取り込む」の動詞または派生語の大半が「取り込み(取著)」を意味することに比べて，初期仏典においては特異であると筆者は考えるが，その後の涅槃観に大きく影響を与え，註釈家の時代には確立した教理となる. saupādisesāya nibbānadhātuyā parinibbāyati/parinibbuta「燃料の残余のある(有余依)涅槃界に般涅槃する／している・した」という定型句表現が，初期仏典には現れず，註釈文献に見出せることから，この定型句は，散文経典の時代より後に成立し，註釈文献の時代に確立していたであろう可能性が推察された.

以上のような涅槃の語彙の考察結果から，おおむね時代層の仮説は合理的に説明され得ることが導かれ，その中で，広範囲の時代に跨る古層は，前期と後期に

また Sn 343 では abhinibbutatta であった人が亡くなった(kālam akāsi [√kṛ])とあり，註釈 Pj II p. 346, 347 や先行研究ではこの者は阿羅漢であったと解釈するが，筆者は abhinibbutatta は現世において既に涅槃していたことを表すかどうか，明確には判別がつかないと解釈した.

さらに分けられる可能性を指摘した. それは基本資料として調査した Sn の古層文献からも裏付けられ, 発表者は, 第 1 章の Āḷavakasutta, 第 2 章の Ratanasutta, Vaṅgīsasutta, 第 3 章の Dvayatānupassanāsutta を古層の後代の成立であろうと推察した.[367] そして散文経典においては, さらなる思想の展開が窺え, 初期仏典における涅槃観の多様性・多層性が確認された.

次に 3.では, 最古層の時代より世間の人々の関心が生死・輪廻や命終後にあったことを示した上で, 時に質問者の意図とブッダ世尊の真意が完全に一致していたわけではなかったが, それは質問者を満足させる内容であったという解釈を提示して, 世尊が説いた涅槃は, 時点の判別がつかない用例も多く, その場合には, そもそも生前・命終という時点を意識しておらず, そのことは逆にどの時点にもあてはまるものであった可能性を示すことを指摘した. この筆者の見解は, 研究史(1. 4.)に示した二種涅槃を前提とする生前か命終かの長きに亘る議論, および, 先行研究において命終後を意図した質問には, 世尊も命終後を示したとする解釈や, 逆に世尊の答えは, 生前の解脱や涅槃を表すとの解釈, そしてその中で問答の食い違いや誤解があったとするこれまでの主張とは異なるものである.

4.において, Sn の註釈である Pj を中心に, 註釈文献の涅槃観を原典と分けて分析・比較することにより, 原典と註釈の理解の相違を明らかにした. 註釈文献は, 火が消えることを直接表す場合を除き, 涅槃の語彙を全て「涅槃」と解釈し, 生前・命終で区別する二種涅槃[界]の教理を前提とする. その上で, 生前の涅槃を煩悩の滅あるいは有余依涅槃[界]と説明する一方, 命終の涅槃は, [五]蘊(心身の構成要素), 最後の認識機能の滅, 燃料の残余のない(無余依)涅槃[界]等と説明しており, 全般的に整備された教理体系に従った解釈であることが窺えた. 筆者が調べた限定した範囲内であるが, Sn の註釈 Pj に比べ, ブッダゴーサの著作である四ニカーヤの註釈において, 二種涅槃界の術語の使用頻度が非常に限定的であることから, このことが, 近年問題となっている Pj はブッダゴーサの真作ではないとの説を裏付ける根拠の一つとなり得るかもしれないことを論じた.

本研究によって, 初期仏典に示されたブッダ世尊の涅槃観と当時の思想背景, 涅槃の語彙間の異同, および涅槃観の多層性・多様性や展開に関し, 従来見過ごされてきた視点や問題点を明らかにするとともに, 大小の幾つかの新たな知見を提示した. これにより, 涅槃の概念の曖昧さの解消に少しでも寄与できたことを願

---

[367] 古層の後代と推察した根拠は以下の通り: Sn Ch. 1: Āḷavakasutta は散文に続く問答の偈文部分(Sn 188)に在家の来世の話が出てくる; Ch. 2: Ratanasutta は数字を用いる教理の体系化(Sn 227: puggalā aṭṭha「8 人の人間」は「八輩」のこと)が見られる; Ch. 2: Vaṅgīsasutta は Sn において涅槃の語彙が命終の涅槃を明確に示す唯一の経; Ch. 3: Dvayatānupassanāsutta は韻文部分に心解脱・慧解脱や縁起説の要素が説かれ, また Sn 中 upādisese anāgāmitā「燃料の残余があれば不還の状態」と「不還」が使用される唯一の経(散文部分 p. 140 他). いずれも命終後の来世に関連する修行体系が背景に窺える.

う．その一方で，仏教の重要概念である涅槃の全容解明のためには，さらに他のパーリ聖典，他部派，および仏教以外の諸文献を視野に入れ，類似概念との関係性を含め，包括的な語彙収集とそれに基づく緻密な検証が今後必要となろう．

付録1　Snの用例リスト

Ch.	sutta	title	用例	spoken by	文脈	涅槃の時点		煩悩滅	無所有	取り込まず	島	理解力	生死停止	その他	Comm.	時点
			*fire; ✓涅槃, △涅槃か？ ( )間接的			Life	End								Life	End
		以下**最古層**														
4	3	Duṭṭhaṭṭhakasutta														
		Sn 783-a	abhinibbutatto	No mention	Life	△								santo	✓	
														自慢していない, 尊大さがない		
4	7	Tissametteyyasuttaṃ														
		Sn 822-d	nibbānasantike	Bhagavā	Life	✓	✓							viveka**を学べ**		
4	14	Tuvaṭakasutta														
		Sn 915-c	nibbāti	Inquirer	Life	✓	✓			✓				**どのように見て何も取り込まず**	(✓)	
														viveka, santipadañ		
		Sn 917-d	nibbuti	Bhagavā	Life	(✓)				(✓)				Sn 919:upatanta, **取り込まず**		
		Sn 933-c	nibbutiṃ (定義)	Bhagavā	Life	(✓)				(✓)				= santi	✓	
4	15	Attadaṇḍasutta														
		Sn 940-e	nibbānaṃ attano	Bhagavā	△	✓	✓							sikkhe: **学ぶべき**	(✓)	
		Sn 942-d	nibbānamanaso	Bhagavā	Life	✓	✓								(✓)	
5	3	Tissametteyyamāṇavapucchā														
		Sn 1041-c	nibbuto	Bhagavā	Life	✓		✓						tassa no santi iñjitā	✓	
														vītataṇho sadā sato, bhikkhu		
5	6	Dhotakamāṇavapucchā														
		Sn 1061-d	nibbānaṃ attano	Dhotaka	△	✓	✓							sikkhe: **学ぶべき**	✓	
		Sn 1062-d	nibbānaṃ attano	Bhagavā	△	✓	✓									
5	9	Hemakamāṇavapucchā														
		Sn 1086-d	nibbānapadaṃ (定義)	Bhagavā	Life	✓	✓	✓						chandarāgavinodanaṃ		
		Sn 1087-b	diṭṭhadhammābhinibbutā	Bhagavā	Life	✓		✓				✓		tiṇṇā loke visattikan	✓	
														aññāya, upasantā, satā		
5	11	Kappamāṇavapucchā														
		Sn 1094-c	nibbānaṃ (定義)	Bhagavā	△	✓	✓		✓	✓	✓		✓			
		Sn 1095-b	diṭṭhadhammābhinibbutā	Bhagavā	Life	✓						✓	✓ (2)	(2)の解釈: 今世で死に影響されず超越すること		
														aññāya [ger.]		
5	14	Udayamāṇavapucchā														
		Sn 1108-d	nibbānaṃ	Udaya	Life	✓	✓							loka	(✓)	
		Sn 1109-d	nibbānaṃ	Bhagavā	Life	✓	✓	✓						taṇhāya vippahānena [inst.]	(✓)	

付録1　Snの用例リスト

Ch.	sutta	title	用例	spoken by	文脈	涅槃の時点		煩悩滅	無所有	取り込まず	島	理解力	生死停止	その他	Comm.	時点
		古層	*fire; ✓涅槃, △涅槃か？ ( )間接的			Life	End								Life	End
1	2	Dhaniya	牛飼いダニヤ, 最後に世尊に帰依													
		Sn 19-c	nibbuto*	Bhagavā	Life	(✓)								gini, 隠喩: 世尊のこと	✓	
1	5	Cunda	沙門について, 在家の在り方にも触れる													
		Sn 86-b	nibbānābhirato	Bhagavā	Life	✓	✓	✓						tiṇṇakathaṃkatho	✓	
														visallo, anānugiddho		
1	10	Āḷavaka	散文あり(在家者も対象, 死後の話題)													
		Sn 186-b	nibbānapattiyā	Buddha	Life	✓	✓					✓		labhate paññaṃ	✓	
1	11	Vijaya	身体の不浄さと理解力ある托鉢修行者について													
		Sn 204-d	nibbāna-padaṃ	Buddha	△	✓	✓	✓				✓	✓	idha; ajjhagā[aor.] paññāṇavā	✓	
			(Be: nibbānaṃ padamaccutaṃ)											chandarāgaviratto; amataṃ santiṃ		
2	1	Ratana	Buddha, Dhamma, Saṃgha	不明												
		Sn 228-d	nibbutiṃ		Life	✓	✓						✓	bhuñjamānā (楽しみつつ)	✓	
			(パラレルJa III p. 523)											amataに入った後で		
														Sn 225: 世尊=amata		
		Sn 233-d	nibbānagāmiṃ		△	✓	✓									
		Sn 235-d	nibbanti*		Life	✓		✓					(✓)(2)			✓
2	4	Mahāmaṅgala　散文あり(在家者への教えが中心)														
		Sn 267-c	nibbānasacchikiriyā	Bhagavā	Life	✓	✓							目の当たりにすること = この上なき吉祥	✓	
2	12	Vaṅgīsa	散文あり(師の命終に関して)													
		p. 59 prose	aciraparinibbuto	prose部分			✓							涅槃を意図　文脈から命終		✓
		p. 59	parinibbuto	Inquirer	End		✓									✓
		p. 59	parinibbuto	Inquirer	End		✓									✓
		p. 60	parinibbuto	Inquirer	End		✓									✓
		p. 60	parinibbuto	Inquirer	End		✓									✓
		Sn 343-d	abhinibbutatto	Inquirer	Life	△								カッパ師の生前の状態	✓	
		Sn 346-b	parinibbutaṃ	Inquirer	End		✓							涅槃を意図　文脈から命終	△	△
		Sn 354-c	nibbāyi	Inquirer	End		✓							[aor.] so ādu saupādiseso		✓
2	13	Sammāparibbājaniya　托鉢修行者の遊行の正しい在り方														
		Sn 359-b	parinibbuto	Inquirer	Life	✓		✓				✓	✓ (2)	理解力, 目前の世尊のこと	✓	
		365-c	nibbānapadābhipatthayāno	Bhagavā	Life	✓	✓							nibbānapadaを求めつつ		✓
		370-c	parinibbuto	Bhagavā	Life	✓		✓		✓				āsavakhino, 熱望の道超えて	✓	

付録1　Snの用例リスト

Ch.	sutta	title	用例	spoken by	文脈	涅槃の時点		煩悩滅	無所有	取り込まず	島	理解力	生死停止	その他	Comm.	時点
		古層	*fire; ✓涅槃, △涅槃か？ ( )間接的			Life	End								Life	End
3	3	Subhāsita	散文あり	ヴァンギーサ尊者												
		454-b	nibbānapattiyā	Inquirer	△	✓	✓								✓	✓
3	4	Sundarikabhāradvāja														
		456-b	abhinibbutatto	Bhagavā	Life	✓				（✓）				(汚されず), 世尊のこと	✓	
		467-c	parinibbuto	Bhagavā	Life	✓		✓				✓	（✓）	kāme hitvā	✓	
														vedi jātimaraṇassa antaṃ		
		469-c	abhinibbutatto	Bhagavā	Life	✓		✓						[真の]バラモン, thatāgata		
3	6	Sabhiya	散文あり													
		514-b	parinibbānagato	Bhagavā	Life	✓	✓	✓					✓	vitiṇṇakaṃkho	✓	
														khīṇapunabbhavo		
3	8	Salla												saraṇam āditttaṃ vārinā		
		591-b	parinibbaye*	No mention	Life	—	—									
		593-d	nibbuto	No mention	Life	（✓）		（✓）						矢尻抜けば, 悲しみなく		
3	9	Vāseṭṭha	散文あり, [真の] バラモン													
		630-b	nibbutaṃ	Bhagavā	Life	✓				✓				次にanādānaṃ, 真のバラモン	✓	
															✓	
		638-e	nibbuto	Bhagavā	Life	✓				✓			✓ (2)	anupādāya [an-upa-ā√dā]	✓	
														jhāyī/saṃsāra-m-oham accagā		
														Sn 620; 645: akiñcanaṃ anādānaṃ		
3	11	Nālaka	muniの在り方													
		707-d	nibbuto	Bhagavā	Life	△	△							食制限, 少欲, 無欲	✓	
3	12	Dvayatānupassanā	散文で世尊の言葉と説明													
		Sn 735-d	parinibbuto	Bhagavā	Life	✓		✓						viññānūpasamā, nicchāto	✓	
		Sn 737-d	parinibbutā	Bhagavā	Life	✓		✓				✓		upasame ratā, aññāya	✓	
		Sn 739-f	parinibbuto	Bhagavā	Life	✓		✓				✓		ñatvāna, vedanānaṃ khayā,		
														nicchāto		
		Sn 758-a	nibbānaṃ	Bhagavā	△	✓	✓							amosadhammaṃ		
		Sn 758-d	parinibbutā	Bhagavā	Life	✓		✓				✓		tad ariyā saccato vidū		
														saccābhisamayā nicchātā		
		Sn 765-d	parinibbanti	Bhagavā	Life	✓				✓		✓		aññāya, anāsavā	✓	✓

付録 2　　Sn 用例[1]

本付録には, 基本資料 Sn 中の涅槃の語彙全 51 用例およびその註釈を, 最古層から経ごとで列挙し, 原語と和訳を示す.

経典中の涅槃の語彙に関して正確な意味を探るのが本研究の目的であり, 考察の結果, 該当用例が「涅槃」かどうかはっきりわからないと, 筆者が判断する場合もあるため, 和訳せずそのまま原語を記すことにする. 但し, 註釈 Pj については, 涅槃の語彙を原意である「火が消えること」以外で人に使用する場合は「涅槃」と解釈していることが本論で確認されるため, 和訳する.

最古層文献[2]　偈文のみ

経典名

Ch. 4 Aṭṭhakavagga　3. Duṭṭhaṭṭhakasutta (Sn 780 – 787)「悪意八偈経」
[本論 2. 1. 2.参照]

該当用例: abhinibbutatta 783-a
発話者: 記述なし; 註釈 Pj II p. 519 世尊.

本経の概要

本経は, 悪意ある人々はどのような見解を持ち, どのような言葉を発するのか, それに反し, 聖者はどうであるのかにつき 8 つの偈文が列記される. 本経には, いわゆる attan [sk: ātman]「自己・自分自身」を意味する語が頻出する. 用例箇所は, 聖者は, 悪評や議論そして自分の見解にもとらわれてはいけないと説いている中の 1 偈であり, abhinibutatta である聖者は自慢することなく, 尊大ではないと述べる.

該当偈

Sn 783　santo ca bhikkhu abhinibbutatto
　　“iti ’ham” ti[3]　sīlesu akatthamāno, —
　　tam ariyadhammaṃ kusalā vadanti,

---

[1] 用例一覧は付録 1 を参照のこと. 最古層文献(Ch. 4, 5)を先に示す. なお, 本論で考察した用例については, 内容が重複している場合がある.
[2] 但し, 後代の付加と言われている Ch. 5 序文と結語部分を除く. 註釈 Pj II もこれらを欠く.
[3] Se: hanti.

yass' ussadā n'atthi kuhiñci loke.
そして鎮まって, abhinibbutatta であり,「私はこうである」と
諸々の生活習慣について自慢していない托鉢修行者であり,
諸々の尊大さがこの世のどこにもない.
そういう人を立派な人の性質を持つ者であると達人たちは言う.

パラレル

本経パラレル: 漢訳『義足経』須陀利経(『大正』4, 177 下)

Sn 783 パラレル:『義足経』巻上(『大正』4, 177 下): abhinibbutatto にあたる漢訳なし

註釈 Pj II pp. 518 – 523:

Sn 783: Pj II p. 521

santo ti rāgādikilesavūpasamena santo, tathā *abhinibbutatto*.
santo〈鎮まって〉とは熱望などの煩悩が鎮まることによって鎮まっている. abhinibbutatta も同じである.

経典名

Ch. 4 Aṭṭhakavagga 7. Tissametteyyasuttaṃ「ティッサ・メッテーヤ経」 (Sn 814 – 822) pp. 160 – 161

[本論 2. 1. 1. 2.参照]

該当用例: nibbānasantike 822-d「nibbāna の近くにいる」世尊の言葉

本経の概要

本経は, 冒頭偈で, 性の歓び(methuna)の害について, ティッサ・メッテーヤ尊者が質問し(Sn 814), 世尊が(Sn 815 Bhagavā), かつては独りで修行に励んでいたものが性の喜びにふけることの災いを説き, muni「寡黙の聖者」は, 遠離を学べ(Sn 822 下記)と説く.

該当偈

Sn 822 vivekaṃ yeva[4] sikketha, etad ariyānam uttamaṃ,

[4] Be; Se: vivekaññeva.

tena seṭṭho na[5] maññetha, sa ve nibbānasantike.
他ならぬ遠離を学べ. これが立派な人達の最上のものである.
それによって, 優れていると考えるな. そういう者は,
nibbāna の近くにいるのだ.

パラレル

本経パラレル:『義足経』巻上「弥勒難経第七」(『大正』4, 179 中); サンスクリット断片 (JRAS 1916, pp. 711 – 712) 村上・及川 1988 III p. 653 参照.

Sn 822-d 句 パラレル: 『義足経』(同)「無倚泥洹次」(泥洹の次に倚るとこなし); サンスクリット断片: (ni)rvbāṇa は確認できる. 他にもパラレル多数あり(矢島 1997 p. 7 参照).

註釈 Pj II pp. 535 – 537: Sn 822-d 句 nibbānasantike に関する註釈なし.

経典名

Ch. 4) Aṭṭhakavagga 14. Tuvaṭakasutta「迅速経」 (Sn 915 – 934) pp. 179 – 182
[本論 2. 1. 3.参照]

該当用例

nibbāti 915-c 質問者の言葉
nibbuti 917-d 世尊の言葉
nibbutiṃ 933-c 世尊の言葉

本経の概要

本経は, 遠離と鎮まりの境地および nibbā するための方法を問われた世尊が, 修行者の在り方について, 具体的にしてはならないことを説く.

該当偈

Sn 915 pucchāmi taṃ Ādiccabandhuṃ[6]
vivekaṃ santipadañ ca mahesiṃ:[7]
kathaṃ disvā nibbāti bhikkhu
anupādiyāno lokasmiṃ kiñci.

---

[5] Be: na tena seṭṭho.
[6] Be; Pj: ādiccabandhu.
[7] Be: mahesi.

偉大なる聖仙であり，太陽の末裔である君に，
遠離と鎮まりの境地[8]を[私は]尋ねます.
どのように見て，托鉢修行者は，世間において，
何も取り込むことなく nibbā するのでしょうか.

Sn 917 yaṃ kiñci dhammam abhijaññā
ajjhattam[9] atha vā pi bahiddhā,
na tena thāmaṃ[10] kubbetha,
na hi sā nibbuti sataṃ vuttā:
内にあるいは外にも，何ものをもダルマ(物事・要素)であると理解するとしても，それによって，立脚点が作れるわけではない.
というのもそれは善き人々にとっての nibbuti であるとは言われていないからである.

Sn 933 etañ ca dhammam aññāya
vicinaṃ bhikkhu sadā sato sikkhe,
'santī' ti nibbutiṃ ñātvā[11]
sāsane Gotamassa na-ppamajjeyya.[12]
そして，以上のダルマ(教え)を理解して，
弁別しつつ，托鉢修行者は常に留意して，学び修行すべきである.
nibbuti を鎮まりと理解して，ゴータマの教えにおいて，
油断すべきでない.[13]

---

[8] santipada は「鎮まりへの足場」とも解釈可能であるが，本経の文脈から「鎮まりの境地」を意味する可能性が高い(本論参照).
[9] Be; Se: -taṃ.
[10] 註釈 Pj II p. 562 は thāma を māna「慢心」と理解:「それによって，慢心を抱くべきでない」. 中村 1984 p. 200, 荒牧・本庄・榎本 2015 p. 248 の和訳も註釈の理解に準ずる. 漢訳『義足経』下『大正』4, p184b: 強力進所在作.
[11] Be; Se: ñatvā.
[12] Be: na pamajjeyya.
[13] そして次の偈文(Sn 934)で本経が終わる.
abhibhū hi so anabhibhūto
sakkhi dhammam anītiham adassī
tasmā hi tassa Bhagavato
sāsane appamatto sadā namassam anusikkhe [ti Bhagavā ti]
というのは，その人は自ら支配する人であり，支配されたことがない.
[彼は]伝聞によらないダルマ(真理・法則性)を目の当たりに見た.
それ故，まさにかの世尊(幸せを分け与えるお方)の教えにおいて
油断せず，常に礼拝しつつ，順々に学習すべきである[と世尊は[言った]と].

パラレル

経典パラレル: 義足経下; 兜勒梵志, SHT 5, No. 662 (p. 272f)

偈のパラレル Sn 915: MNd 339, 344;『義足経』下『大正』4, p184b: 該当語は「滅」.

Sn 917: MNd 349, 350; 義足下 184b. Sn 933: Mnd 398, 399; 義足下 184c (矢島 pp. 80 - 81): 該当漢訳なし. Sn 933:『義足経』下『大正』4, p184b: 該当語は「滅」.

註釈 Pj II pp. 562 - 565:

Sn 915 の註釈 Pj II p. 562:

> atha Bhagavā yasmā, yathā passanto kilese uparundhati, tathā pavattadassano hutvā parinibbāti, tasmā tam atthaṃ āvikaronto nānappakārena taṃ devaparisaṃ kilesappahāne niyojento mūlaṃ papañcasaṃkhāyā ti ārabhitvā pañca gāthā abhāsi.
>
> そこで世尊は, 見ている者が諸々の煩悩を止めるように, そのように, 正しい見方が発動して般涅槃する. それ故, その意味を明かしつつ, 様々に, その神々の集団に, 煩悩の捨断を促しつつ, 妄想と名付けられるものの根本をと始まって, 5 つの偈を語られた.

Sn 933 の註釈 Pj II p. 565:

> nibbutiṃ rāgādīnaṃ santī ti ñātvā
>
> nibbuti を熱望などの鎮まりと理解して

経典名

Ch. 4 Aṭṭhakavagga, 15. Attadaṇḍasutta「取られた棒経」 (935 - 954) pp. 182 – 185
[本論 2. 1. 1.参照]

該当用例

nibbānaṃ attano 940-e (= 1061d = 1062d) 「自らの nibbāna を」
nibbānamanaso 942-d 「nibbāna に思考力を向けている」
両偈とも世尊の言葉.

本経の概要

本経は, 対立しあい, 世間に繋がれている人々を見て怖れを感じ, どうあるべきかが説かれる. Sn 940 は, 世尊が世間の有り様を解説した後の偈文である. また最終偈 Sn 954 では寡黙の聖者は主張しないと説く: na samesu na omesu na ussesu

vadate muni, santo so vītamaccharo nādeti na nirassati「寡黙の聖者は, 同等の者達の中にいて[自己を]主張しないし, 劣った者達の中にいて[主張]しないし, 優れた者達の中にいて[主張]しない. 彼は鎮まった者, 利己心を離れた者であり, とりこまず, 捨て去ることもない」. この点から, 同じ Ch. 4: Duṭṭhaṭṭhakasutta (Sn 780 – 787)「悪意八偈経」の趣意に通じるところが見られる.

該当偈

Sn 940 tattha sikkhānugīyanti:[14]
yāni loke gathitāni,[15] na tesu pasuto siyā,
nibbijjha[16] sabbaso kāme sikkhe nibbānam attano.
そこで, 諸々の学習が暗唱される.
世間に結び付けられている諸物, それらに対して追い求める者であるべきでない. 欲望をあらゆる面から洞察して, 自らの nibbāna を学ぶべきである.

Sn 942 niddaṃ tandiṃ sahe thīnaṃ, pamādena na saṃvase,
atimāne na tiṭṭheyya nibbānamanaso naro.
nibbāna に思考力を向けている人は, 眠気や身体的なだるさや沈鬱に打ち勝つべきである. うつつを抜かし, 油断とともに住むべきでない.
過度の慢心に留まるべきでない.

パラレル

経典パラレル: SHT 5, No. 662 (p. 772f); 義足下 維摟勒王

偈のパラレル: Sn 940: MNd 420, 421; 義足下 189b: 用例部分に該当する漢訳なし, Sn 940d: Sn 1061d, 1062d, Ud 28.

Sn 942: MNd 423, 425; 義足下 189b: 用例部分に該当する漢訳なし.

註釈 Pj II pp. 566 - 569: 該当用例の時点・内容についての説明なし.

Sn 940 註釈 Pj II p. 567: aniccādidassanena「無常などを見ることによって」自らの nibbāna を学べと解説. Sn 942 註釈 Pj II p. 567: *nibbānamanaso* ti nibbānaninnacitto

---

[14] 荒牧 1985 p. 9 は, この a 句を anu-√gā (暗唱する)を踏まえ「散文の序詞による導入部分」とし,「Sn 945 を除く, Sn 940 – 947 が佛弟子による附加部分に相当する」と考える. Norman 2006 p. 363 は,「reciter への指示が本文に挿入されたもの」と看做すが,「非常に古い句」と記述.『義足経』巻下(『大正』4, 189 中)にはこれにあたるものなし.

[15] Be; Se: gadhitāni.

[16] Se: nibbijja.

「〈nibbāna に思考力を向けている〉とは, nibbāna へと傾く心を持った」.

本経の注釈が涅槃を使って説明する箇所

Sn 946　saccā avokkamma muni thale tiṭṭhati brāhmaṇo
　　sabbaṃ so[17] paṭinissajja sa ve santo ti vuccati
　　寡黙の聖者である[真の]バラモンは, 真実から逸脱せず, 陸地に立つ.
　　彼は一切を捨てて, 彼は実に鎮まった人と言われる.

註釈 Pj II p. 568 は, nibbānatthale「涅槃である陸地に」と説明する.

さらに√śam「鎮まる」の派生語である upasanto [upa-√śam の PP]が現れる本経の偈文を示す.

Sn 949　yaṃ pubbe, taṃ visosehi, pacchā te māhu kiñcanaṃ
　　majjhe ce no gahessasi, upasanto carissasi.
　　以前におけるもの, それを枯らせよ.
　　以後, 君に何も生じさせてはならない.
　　もし中間において[君が]つかまないなら, 鎮まった人として歩むだろう.

註釈 Pj II p. 568 はここを arahatta-ppatti「阿羅漢性を得ること」として, upasanta「鎮まった人」は阿羅漢と解釈.

経典名

Ch. 5　Pārāyanavagga　3. Tissametteyyamāṇavapucchā「バラモン学生ティッサ・メッテーヤの質問経」(1040 – 1042)　p. 199

[本論 2. 1. 2.参照]

該当用例: nibbuto　1041-c　世尊の言葉

本経の概要

本経は, バラモン学生であるティッサ・メッテーヤが世尊に冒頭偈で ko ’dha santusito loke「この世間において誰が満足した状態である者であるのか」で始まる質問をして, それに世尊が答える 3 偈からなる短い経である. nibbuta である托鉢修行者の現世の状態が説かれる.

該当偈

Sn 1041　kāmesu brahmacariyavā

[17] Se: sabbaso.

Metteyyā ti Bhagavā

vītataṇho sadā sato

saṃkhāya nibbuto bhikkhu, tassa no santi iñjitā

「メッテーヤよ」と世尊が[言う].

「諸々の欲望の対象に関して(の中にあって)禁欲の修行を保っていて,

渇愛を離れ, 常に留意している者であり, 完全に考察した後,[18]

nibbuta である托鉢修行者[がいる]. そういう者には動揺が存在しない」

パラレル

経典パラレル:『雑阿含』巻 43, 1146 (『大正』2, 310 中). Sn 1041: 用例に該当する漢訳なし.

註釈 Sn 1041 註釈 Pj II p. 589:

saṃkhāya nibbuto ti aniccādivasena dhamme vīmaṃsitvā rāgādinibbānena nibbuto.

〈完全に考察した後, nibbuto である〉とは, 無常などに関することによって, 諸ダルマを考察して, 熱望などが消えることによって涅槃している.

経典名

Ch. 5 Pārāyanavagga　6. Dhotakamāṇavapucchā (1061 - 1068) 「バラモン学生ドータカの質問経」pp. 204 – 205

[本論 2. 1. 1.参照]

該当用例

nibbānaṃ attano 1061-d　　尊者ドータカの質問

= nibbānaṃ attano 1062-d　　世尊の言葉

本経の概要

本経は,「自らの nibbāna を学びたい」(Sn 1061 以下参照)というバラモン青年ド

---

[18] 本偈の saṃkhāya [ger]は, saṃkhāti/saṃkhāyati 「完全に考察する」「完全に照覧する」「数えあげる」という意味がある. 具体的な内容はここからはわからないが, nibbuto の前にこの行為が行われたと構文から示される. 参考までに saṃkhāya の別用例を 1 例挙げると, Sn 1048 では ab 句で「向こう・こちら」(parovarāni)を saṃkhāya した後, 「そういう者には動揺が世間のどこにもない」(yass' iñjitaṃ n'atthi kuhiñci loke). そして cd 句でそういう santo である者は「生と死を渡った」(atāri so jātijaran)と世尊(1 人称)が説く.

ートカとの問答である. 世尊は, 私の教えを聞いて, 賢明な留意した者として熱心に学べ(Sn 1062 以下参照)と語り始め,「君に鎮まり(santi: Sn 1066)について告げよう」と,「次々の生存に対して渇愛を作るな」(bhavābhavāya mā kāsi taṇhan: Sn 1068)と説く.

該当偈

Sn 1061 “pucchāmi taṃ Bhagavā, brūhi me taṃ,
icc-āyasmā Dhotako
vācābhikaṃkhāmi mahesi tuyhaṃ:
tava sutvāna nigghosaṃ sikkhe nibbānam attano.”
尊者ドータカが[言う].
「世尊よ, 君に尋ねます. 私にそのことを言って下さい.
君の言葉を[私は]待ち望みます, 偉大なる聖仙よ,
君の発声を聞けば, 自らの nibbāna を学ぶことができる」

Sn 1062 “tena h’ ātappaṃ karohi,
Dotakā ti Bhagavā
idh’ eva nipako sato
ito sutvāna nigghosaṃ sikkhe nibbānam attano.”
ドータカよ, と世尊が[言う].
「それでは, 熱心さを作りなさい. 他ならぬ今ここで, 賢明な留意した者として, ここから(この私から)声を聞いて, [君は]／[人は]自らの nibbāna を学ぶべきである」

パラレル

経典パラレル: なし. 偈のパラレル: Sn 1061: CNd 19 (102, 110); d 句: Sn 940d, 1062d, Sn 1062: CNd 20 (110, 111).

註釈 Pj II p. 592 - 593:

Sn 1061 註釈 Pj II p. 592:

sikkhe nibbānam attano ti attano rāgādīnaṃ nibbānatthāya adhisīlādīni sikkheyya(ṃ).[19]
sikkhe nibbānam attano〈自らの涅槃を学びたいのです〉とは, 自分の熱望などが消えることのために, 諸々の優れた生活習慣など(三学)を学び[実

[19] Be: sikkeyya.

践し]たい.
Sn 1062 註釈なし.

涅槃に関連する他偈の注釈

Sn 1065 ドータカの問い vivekadhammaṃ「遠離のダルマ(教え)を」を anusāsa「教えよ」について註釈 Pj II p. 593 sabbasaṃkhāravivekanibbānadhammam[20]「あらゆる形成作用から遠離する涅槃のダルマ」と, nibbāna として説明.

経典名

Ch. 5 Pārāyanavagga 9. Hemakamāṇavapucchā (1084 - 1087)「バラモン学生ヘーマカの質問経」pp. 209 – 210
[本論 2. 1. 1.参照]

該当用例

nibbānapadaṃ 1086-d 世尊の言葉
diṭṭhadhammābhinibbutā 1087-b 世尊の言葉

本経の概要

ヘーマカという名のバラモンの問いに世尊が答える 4 偈からなる経である. これまで伝え聞いてきた説(itihītihaṃ)を喜ばなかった(na abhiramiṃ)ヘーマカに,「渇愛を根絶するダルマを説いてください」(dhammam akkhāhi taṇhānigghātanaṃ: Sn 1085)と依頼され, 世尊が語る(Sn 1086, 1087: 以下参照).

該当偈

Sn 1086 idha diṭṭhasutamutaviññātesu[21] piyarūpesu Hemaka
chandarāgavinodanaṃ nibbānapadam accutaṃ.
ヘーマカよ, この世において見られたり, 聞かれたり, 考えられたり, 認識されたりした諸々の好ましい姿・形をしたものたちに対する
欲求や熱望の除去が, 不動の nibbāna の境地／への足場である.

Sn 1087 etad aññāya ye satā diṭṭhadhammābhinibbutā,
upasantā ca te sadā,[22] tiṇṇā loke visattikan” ti.

---

[20] Be: -dhammaṃ.
[21] Se: diṭṭhasutamutaṃ viññātesu.
[22] Se: satā.

このことを理解した後，留意していて，
現世において／ダルマ(真理・法則性)を見て abhinibbuta している人々，
そういう彼らは常に鎮まっていて，世間において執着している渇望[23]を超えた人々である，と．

パラレル

経典パラレル: なし. Sn 1086: CNd 30 (164, 166), Sn 1086-d 句: Sn 204a; Ap 336, 12. Sn 1087-ab 句パラレル:『出曜経』27 (『大正』4, 755 上);『法集要頌経』4 (『大正』4, 794 中下): diṭṭhadhammābhinibbutā に相当する漢訳は「現法而無為」. Cf: Uv 26, 17. Sn 1087-b 句: M iii 187; A i 142; iii 311 (矢島 1997 p. 92).

註釈

Sn 1086, 1087 の註釈 Pj II p. 596:

> *etad aññāya ye satā* ti etaṃ *nibbānapadam accutaṃ* 'sabbe saṃkhārā aniccā' ti ādinā nayena vipassantā anupubbena jānitvā[24] kāyānupassanāsatiādīhi satā.
> etad aññāya ye satā〈このことを理解した後，留意した状態で〉とは，この nibbānapadam accutaṃ〈不動の nibbānapada を〉「あらゆる形成作用は無常である」などの仕方によって，順々に観察しつつ理解して，身体を観察する留意などによって留意した状態のことである．
>
> *diṭṭhadhammābhinibbutā* ti viditadhammattā diṭṭhadhammattā rāgādinibbānena ca abhinibbutā.
> diṭṭhadhammābhinibbutā〈現世において abhinibbuta している人々／実際そのダルマを見て abhinibbuta している人々〉とは，法を知ったので，法を見たので，そして熱望などが消えることによって abhinibbuta である人々．

経典名

Ch. 5 Pārāyanavagga　11. Kappamāṇavapucchā (1092 - 1095)「バラモン学生カッパの質問経」pp. 15 – 16
[本論 2. 1. 1.参照]

---

[23] visattikā は taṇhā と同義. PED p. 639 参照.
[24] Be: jānitvā ye.

該当用例

nibbānaṃ 1094-c 世尊の言葉

diṭṭhadhammābhinibbutā　1095-b　　世尊の言葉

本経の概要

本経は, 4 偈からなる経. 冒頭偈(Sn 1092)で「師よ, 大いなる恐怖である激流が生じた時, 老と死に襲われた人々にとっての島(避難所)について話して下さい. そして君は私に島(避難所)を説いて下さい. 再びこのようなことがないように」(oghe jāte mahabbhaye jarāmaccuparetānaṃ dīpaṃ pabrūhi mārisa, tvañ ca me dīpam akkhāhi, yatha-y-idaṃ[25] nāparaṃ siyā)とカッパに請われ, 世尊は, それを示すと答えて説く(以下 Sn 1094, 1095 参照).

該当偈

Sn 1094 akiñcanaṃ anādānaṃ etaṃ dīpaṃ anāparaṃ,
nibbānaṃ iti naṃ brūmi, jarāmaccuparikkhayaṃ.
何も所有しないこと, 取り込まないこと, これが更なる(= より良い)渡り先(避難所)を持たない島である. それを nibbāna と[私は]言う. [それ(nibbāna)は,] 老いと死の滅尽である.

Sn 1095 etad aññāya ye satā diṭṭhadhammābhinibbutā,
na te Māra-vasānugā, na te Mārassa paddhagū"[26] ti
このことを理解した後, 留意していて,
現世において／ダルマ(真理・法則性)を見て abhinibbuta している人々,
彼らは, 死魔の支配下にあるのでなく, 彼らは, 死魔の召使ではない.

パラレル

経典パラレル: 島 dīpa はジャイナ教 Utt. 23. 68 でも同様に説かれる(榎本 1979 pp. 19 – 21 参照).

Sn 1095 パラレル: 前述の Sn Ch 5, 9. Hemakamāṇavapucchā 経 Sn 1087 と ab 句は全く同じである.

この 2 経は構造が同じであり, 本経では, 前経のダルマに代わり「島(避難所)を説いて下さい」と世尊に懇願するが, 島(避難所)は, nibbāna であると定義される.

---

[25] Be: yathāyidaṃ.
[26] Se: paṭṭhagū.

註釈 Pj II p. 597 で得られる内容: 用例に関する註釈なし.

経典名

Ch. 5 Pārāyanavagga 14. Udayamāṇavapucchā「バラモン学生ウダヤの質問経」(1105 – 1111) pp. 214 – 215

[本論 2. 1. 1.参照]

該当用例

nibbānaṃ 1108-d　ウダヤの質問

= nibbānaṃ 1109-d　世尊の答え

本経の概要

本経は, 7 偈からなるウダヤという名のバラモン青年と世尊の問答である. 冒頭偈 Sn 1105 で, ウダヤは世尊のことを禅定するお方(jhāyin)と表現し, aññāvimokha pabrūhi avijjāya pabhedanaṃ「無知を裂く理解による解脱(vi-√muc)を説いてください」とまず尋ね, 次に nibbāna について質問する(下記 Sn 1108). ウダヤに尋ねられて世尊は, 解脱および nibbāna を説く. 最後三問め(Sn 1110)でウダヤから kathaṃ satassa carato viññāṇaṃ uparujjhati「留意して歩む者にとってどのように認識機能が止まるのか」と問われ, ajjhattañ ca bahiddhā ca vedanaṃ nābhinandato evaṃ satassa carato viññāṇaṃ uparujjhati「内にも外にも感受作用を喜んでいない者, このように留意して歩む者にとっては認識機能が止まる」と世尊が答えて(Sn 1111), 経が終わる.

該当偈

Sn 1108 kiṃ su saṃyojano[27] loko, kiṃ su tassa vicāraṇaṃ,[28]
kiss' assa vippahānena nibbānaṃ iti vuccati.
いったい世間は何を束縛とするのですか.
何が世間[の人々]を, あちこち動かしているのしょうか.
この者の何を捨てることによって, nibbāna と言われるのですか

Sn 1109 nandīsaṃyojano[29] loko, vitakk' assa vicāraṇā,
taṇhāya vippahānena nibbānaṃ iti vuccati.

---

[27] Se: saññojano.
[28] Se: -ṇā.
[29] Be: nandisaṃyojano, Se: nandisaññojano.

世間は喜びを束縛とする．思いめぐらしが，それ(世間の人々)を，あちこち動かしている．渇愛の捨離によって，nibbāna と言われる．

パラレル

経典パラレル: 部分ごとで存在する．Sn 1106 – 1107 は AN I p. 134,『雑阿含』(983),『集異門足論』7 に引用される．Sn 1110 – 1111 は,『瑜伽師地論』19 に, Sn 1032 – 1037 と Sn 1110 - 1111 (Ch. 5, 2: Ajitamāṇavapucchā)に相当する偈文の間に置かれる．Sn 1106 – 1107 に相当する偈の一部が,『雑阿含』(983)のサンスクリット写本断片に残存する(村上・及川 1989 IV p. 141 n. 1).

Sn 1108 – 1109 は, SN I p, 39,『雑阿含』36 (1010) (『大正』2, 264 中),『別訳雑阿含』12 (237) (同 459 中)と同じ．村上・及川 1989 IV p. 141 n. 1 は SN より Sn 編集者が採用した可能性を示す．

Sn 1108 パラレル: = SN I p. 39;『雑阿含』36 (1010) (『大正』2, 264 中):「説名得涅槃」;『別訳雑阿含』12 (237) (同 459 中):「得至於涅槃」

Sn 1109 パラレル: = SN I p. 39; 『雑阿含』36 (1010) (『大正』2, 264 中):「説名得涅槃」;『別訳雑阿含』12 (237) (同 459 中):「是名得涅槃」(村上・及川 1989 pp. 143 – 144).

註釈 該当用例に関する註釈なし．

関連する他偈の註釈

註釈 Pj II pp. 599 - 600 は，ウダヤは catutthajjhānalābhī「第四禅を得ている」ため世尊は解脱を示そうと Sn 1106, 1107 を説き，catutthajjhānavimokkhe ṭhatvā jhānaṅgāni vipassitvā adhigataṃ arahattavimokkhaṃ vadati「第四禅の解脱にとどまった後，禅定の項目を観察して到達した阿羅漢の境地の解脱を言う」と説明する．続いて Sn1107-cd 句で Sn 1106, 1107-ab で説いた内容を aññāvimokhaṃ pabrūmi avijjāya pabhedanaṃ「無知を裂く理解による解脱と[私は]説く」と釈尊が述べる部分の注釈 Pj II p. 600 は, nibbāna を用いて説明する:

> *avijjāya pabhedanan* ti etam eva ca aññāvimokkhaṃ avijjāppabhedasaṃkhātaṃ[30] nibbānaṃ nissāya jātattā kāraṇopacārena ‘avijjāya pabhedanan’ ti brūmī ti.
>
> avijjāya pabhedanan〈無知を裂く〉と，他ならぬこの理解による解放は，無知を裂くことと呼ばれる涅槃によって生じた故に，原因を比喩的に示して「無知を裂く」と[私は]言う，と．

[30] Be: avijjāpabhedanasaṅkhātaṃ.

古層文献

(古層とされるのは, 最古層とされる Sn Ch. 4, 5 を除く偈文のこと, Sn の場合は Ch. 1, 2, 3 の偈文部分, 散文と偈文からなる経もあるが, その散文部分は古層より後代とみなされる)

経典名

Ch. 1. Uragavagga「蛇品」 2. Dhaniyasutta (Sn 18 - 34)「ダニヤ経」(pp. 3 – 6)
[本論 1. 1. 4 参照]

該当用例: Sn 19-c (p. 3) nibbuto gini「火が消えている」世尊の言葉
nibbuto が原意通り(火が)消えたことを示す用例

本経の概要

牛飼いダニヤ(名前の意味は「財産のある」)が肯定的に自分の状況を語り, ce patthayasī, pavassa deva「神よ,もし望むなら, 雨を降らせよ」と繰り返す. それらの言葉を受けて世尊が自分自身の境地について答える形で進み, 最後にダニヤが世尊に帰依するという内容である. 冒頭のダニアの語りに nibbuto gini「火は消えている」と世尊が答える(Sn 19 下記).

該当偈

Sn 18 “pakkodano duddhakhīro ’ham asmi
iti Dhaniyo gopo
anutīre Mahiyā samānavāso,
channā kuṭi, āhito gini, —
atha ce patthayasī, pavassa deva.”
牛飼いダニヤが言った,「私はもう飯を炊き, 乳を搾った. マヒ—河のほとりで, [私は家族と]共に住んでいる. 小屋は覆われ, 火は灯されている. そこで, 神よ, もしも望むなら, 雨を降らせよ」

Sn 19 “akkodhano vigatakhīlo[31] ’ham asmi
iti Bhagavā
anutīre Mahiy’ ekarattivāso,
vivaṭā kuṭi, nibbuto gini, —

[31] Se: -khilo.

atha ce patthayasī, pavassa deva."
世尊は[答える],「私は怒ることなく，心の頑迷さを離れている．
マヒー河のほとりで一夜を過ごしている．小屋はあばかれ，
火は消えた状態である．そこで，神よ，もし望むなら，雨を降らせよ」

パラレル

本経・本偈のパラレルなし.[32]　Sn 19 のパラレル: 婆須密論 1549.803a (矢島 p. 20).

註釈 Pj II pp. 26 – 46:

Sn 19 註釈 Pj II p. 31: *kutī* ti attabhāvo「kutī〈小屋〉とは自分自身」, p. 32: 雨を「煩悩」(kilesa-vassaṃ), 火は rāga「熱望」, そして ***nibbuto*** ti upasanto「nibbuto〈消えた状態である〉とは鎮まっている」と, nibbuta を upasanta [√śam]と定義する．さらに火が消えた時点について Pj II p. 32:

so aggi Bhagavato Bodhimūle yeva ariyamaggasalilasekena nibbuto.
その火は，世尊にとっては他ならぬ菩提樹下で立派な人にとっての道という水を注ぐことで消えている．

このことから，本経における火が消えたことは釈尊の覚り・生前の涅槃を表し，消えた時点は菩提樹下での覚りの時であり，消えた要素は rāga「熱望」と註釈家は理解していたことが確認される．

Sn 21-b 句: 世尊の自身についての発言 tiṇṇo pāragato vineyya oghaṃ「激流を調伏して渡り向こう岸に至った」の註釈 Pj II p. 35:

arahattaṃ patto「阿羅漢である状態を獲得した」
sabbāsavakkhayaṃ sabbadhammapāraṃ paramakhemaṃ[33] nibbānaṃ gato.
あらゆる漏を滅した，あらゆるダルマ(事物)の向こう側である最上の安穏である涅槃へ到達した．

経典名

Ch. 1. Uragavagga「蛇品」　5. Cundasutta (Sn 83 - 90)「チュンダ経」
[本論 2. 2. 2. 2.参照]

該当用例: Sn 86-b (p. 17)　nibbānābhirato 「nibbāna を楽しみ」世尊の言葉

---

[32] Sn 33 – 34 についてはパラレルあり．村上・及川 I p. 117 n. 1 参照.
[33] Be: paramaṃ khemaṃ.

本経の概要

本経は,「広大な理解力ある寡黙の聖者にお尋ねします. 目覚めたお方, ダルマ(真理・法則性)の主, 渇愛を離れ, 人間の最上者であり, 最も優れた調御者であるお方に. 世間に沙門たちはどれだけいますか. どうかそのことを語ってください」(Sn 83: "pucchāmi muniṃ pahūtapaññaṃ[34] / buddhaṃ dhammassāmiṃ vītataṇhaṃ/ dipaduttamaṃ[35] sārathīnaṃ pavaraṃ/ kati loke samaṇā, tad iṃgha brūhi.")という鍛冶屋の子チュンダの世尊への問いかけから始まる. 世尊は(Sn 84)沙門には 4 種あり, つまり maggajina「道の勝者」, maggadesaka「道を説く者」, magge jīvati「道の中で暮らす」, maggadūsī「道を汚す者」と答えた後, チュンダから具体的に問われ(Sn 85), 世尊が, 道の勝者の説明として述べた偈文が該当用例である.

該当偈

Sn 86 yo tiṇṇakathaṃkatho visallo
nibbānābhirato anānugiddho
lokassa sadevakassa netā,
tādiṃ maggajinaṃ vadanti buddhā.
疑いを超え, [煩悩・苦悩の]矢から離れ, nibbāna を楽しみ,
貪欲を離れていて, 神々を含めた世間の導き手であるような,
そのような人を道の勝者であると目覚めた者達は言う.

本経は, 入滅の直前の世尊の説法と言われている[36](村上・及川 1985 p. 398 n. 1 参照). 文脈から, 様々な修行者がいる様子や, 該当用例でも buddha が複数形で現れることから, 世尊以外にも悟りを得ていた阿羅漢が複数いて, 在家のチュンダを相手に説法していることから, 相当数の在家の存在も窺える. その中には, 道を汚す修行者もいて, 問題が起こっていることもわかる. 従って, 世尊が多くの弟子を抱えていた時代背景が裏付けられる.

パラレル

経典パラレル: 漢訳『長阿含』巻 3 (遊行経)『大正』1, 18 中下,『根本説一切有部毘奈耶雑事』巻 37,『大正』24, 390 中下, サンスクリット文 Mahāparinirvāṇa-sūtra

---

[34] Se: pahuta-.
[35] Be: dvi-.
[36] チュンダは, 最期となる托鉢食の供養を世尊に行った在家信者として知られている. DN 16: Mahāparinibbāna-sutta「大般涅槃経」中には, チュンダに対する説法の内容に関しては記述がない(DN II pp. 126 – 127).

(ed. by E. Waldschmidt) II pp. 258 – 262 (断片)他(村上・及川 1985 p. 393 n. 1 参照).

Sn 86 のパラレル:『長阿含』遊行経『大正』1, 18 中: b 句にあたる部分は「入涅槃無礙」であり,『根本説一切有部毘奈耶雑事』巻 37, 『大正』24, 390 下:「唯希円寂非余処」であり, 漢訳はパーリとは文脈が異なる. サンスクリット断片 b 句相当箇所: nirvāṇa の後は解読不能部分.

註釈 Pj II pp. 159 – 166:

Sn 86: nibbānābhirata について

Sn にはこの用例は他にない(Pj II 3 index 参照). Sn 86 の註釈 Pj II p. 163 は, MN I p. 249(『南伝』9, 435)を引用して, 世尊の禅定に結び付けて解説する:

> *nibbānābhirato* ti nibbāne abhirato, phalasamāpattivasena sadā nibbānaninnacitto ti attho, tādiso ca Bhagavā, yathāha: "so kho ahaṃ Aggivessana tassā eva kathāya pariyosāne tasmiṃ yeva purimasmiṃ samādhinimitte ajjhattam eva cittaṃ saṇṭhapemi sannisādemi ekodikaromi[37] samādahāmī" ti
>
> nibbānābhirato〈涅槃を楽しみ〉とは, 涅槃を喜んでいて, 果としての入定(禅定)によって常に[その]心が涅槃に傾倒しているという意味である. そしてそのような方とは世尊である. すなわち「アッギヴェッサナよ. 私自身は, 他ならぬその話[説法]が終わると, その同じ最初の samādhi-nimitta「精神統一の相」において, 他ならぬ内へ心を向けて立ち, [心を]鎮め, 集中して, 精神統一をはかる」という通りである.[38]

Th 696 註釈 Th-a p. 10 に「涅槃を楽しむ」が現れる. 同様に, Th 696: jhāyin「禅定中の人」について, 生前に涅槃を得た者の精神統一した状態(samāhita)であると説明する:

Th 696: so jhāyī assāsarato ajjhattaṃ susamāhito
gacchaṃ samāhito nāgo, ṭhito nāgo samāhito.
彼(ナーガ)は禅定中で, 入る息を楽しみ, 内面においてよく精神統一した状

---

[37] Be: ekodiṃ karomi.

[38] Th 696 註釈 Th-a p. 10 に「涅槃を楽しむ」が現れる. 同様に, Th 696 jhāyin「禅定中の人」について, 生前に涅槃を得た者の精神統一した状態(samāhita)であると説明する:

Cf: Th 696: so jhāyī assāsarato ajjhattaṃ susamāhito/ gacchaṃ samāhito nāgo, ṭhito nāgo samāhito「彼(ナーガ)は禅定中で, 入る息を楽しみ, 内面においてよく精神統一した状態であり, ナーガは, 行きつつ, 精神統一した状態で, ナーガは立ちつつ, 精神統一した状態である」.

註釈 Th-a p. 10: *jhāyī* ti, ārammaṇūpanijjhānena 'va jhāyana-sīlo. *assāsarato* ti, paramassāsa-bhūte (Cf. SN iv 254) nibbāne rato「jhāyī〈禅定中で〉とは, 他ならぬ対象を瞑想することによって, 禅定が生活習慣であり, *assāsarato*〈入る息を楽しみ〉とは, 最高の入る息が生じている涅槃を楽しむ」.

態であり，ナーガは，行きつつ，精神統一した状態で，ナーガは立ちつつ，精神統一した状態である．

註釈 Th-a p. 10:

jhāyī ti, ārammaṇūpanijjhānena 'va jhāyana-sīlo. *assāsarato* ti, paramassāsa-bhūte (Cf. SN iv 254) nibbāne rato.

jhāyī〈禅定中で〉とは，他ならぬ対象を瞑想することによって，禅定が生活習慣であり，assāsarato〈入る息を楽しみ〉とは，最高の入る息が生じている涅槃を楽しむ．

経典名

Ch. 1　Uragavagga　10. Āḷavakasutta「アーラヴァカ経」(散文＋181 – 192)
[本論 2. 2. 3. 3.参照]

該当用例: nibbānapattiyā 186-b「nibbāna の獲得のために」　世尊の言葉

本経の概要

本経は，冒頭に散文で導入があり，問答の偈文が続く形である．nibbānapattiyā「nibbāna を得るために」信じること(saddahāno: ppr. saddahati)と paññā「理解力」を得ることが必要と答え(Sn 186)，さらに，在家の在り方についても説く(Sn 188)．散文部分にアーラヴァカという名のヤッカ(Yakka: 夜叉)が世尊(Bhagavā)への質問に至るまでの背景が説明される．偈文には，経典編纂者による「〜と」(... ti)という質問者と応答者の記載がなく，対話者が明確にはされていない．後半(Sn 191)に atthāya vata me Buddho vāsāy' Āḷavim āgamā「私の利益のためにブッダがアーラヴィに住むためにやって来られた」との記述が手がかりとなるのみである．また答え終わったブッダから Sn 189-ab: iṃgha aññe pi pucchassu puthū samaṇabrāhmaṇe「さぁ，他の沙門・バラモン達にも尋ねよ」と問われ，もうその必要はないと答える(Sn 190)文脈から，本経が，外道も広く意識していることとブッダの優位性を強調していることがわかる．

該当偈

Sn 186　saddahāno arahataṃ dhammaṃ nibbānapattiyā
　　sussūsā[39]　labhate paññaṃ appamatto vicakkhaṇo,

[39] Be; Se: sussūsaṃ.

nibbāna の獲得のために, 阿羅漢のダルマ(教え)を信じつつ,
[ダルマを]聞こうと願うことから, 不放逸で聡明な人は理解力を得る.

在家者への教え, 質問者の関心は死後のこと

本偈の後 gharamesina「在家者」に対し, caturo dhammā「四つのダルマ」[40]があれば, sa ve pecca na socati「死後憂いがないのだ」と死後のことを話題にする(Sn 188). それを受けて質問者も Sn 190-cd: so[41] 'haṃ ajja pajānāmi yo attho samparāyiko「向こうへ行くそのことは, 今, 私は理解する」と死後への関心があったことが示される.

パラレル

経典パラレル: 雑阿含 1326; 別訳雑阿含 325; 有部律 47; cf. 雑寶蔵 203. 487b(序文のみ). Sn 186 のパラレルとして SN I 214; Nett 146; Uv 10, 4 (nirvāṇaprāptaye);『別訳雑阿含』(325)『大正』2. 483 上「阿羅漢得信 行法得涅槃」:「阿羅漢が涅槃を得る」; 出曜 12. 673b; 法集 1. 782af.; 法句上(村上・及川 1986 II p. 136 n. 40:「Sn 186 に相当する偈は漢訳では『別訳雑阿含』(325)のほかあまりはっきりしない」). Sn 186b のパラレルとして cf. Sn 454b; SN i 48 (矢島 p. 31).

註釈 Pj II pp. 217 - 240:

Pj II p. 235:

yena pubbabhāge kāya-sucaritādibhedena aparabhāge ca
sattatiṃsabodhapakkhiyabhedena[42] dhammena arahanto
buddhapaccekabuddhasāvakā nibbānaṃ pattā, taṃ *saddahāno arahataṃ dhammaṃ nibbānapattiyā* lokiyalokuttaraṃ *paññaṃ labhati*
最初は身の善行などの類によって, 後に覚りの部分である三十七類のダルマ(三十七菩提分法)によって, 阿羅漢達であるブッダ・辟支仏・声聞達が涅槃を得たところの, そういう saddahāno arahataṃ dhammaṃ nibbānapattiyā〈阿羅漢のダルマ(教え)を信じつつ, 涅槃の獲得のために〉世間・出世間の paññaṃ labhati〈理解力を得る〉.

経典名

Ch. 1 Uragavagga 11. Vijayasutta「勝利経」(Sn 193 - 206) (pp. 34 – 35)

---

[40] 真実 (sacca), ダルマ(真理・法則性／教え) (dhamma), 堅固さ(dhiti), 施捨 (cāga).
[41] Be: yo.
[42] Be: -bodhipakkhiya-.

[本論 2. 2. 2. 3.参照]

該当用例: nibbānapadaṃ 204-d (p. 35)　「nibbāna の境地」

本経の概要

本経は「〜が（語る）」(... ti)との記述なく，導入の散文もない説法(偈文)の形をとる．身体がいかに不浄であるかを説くブッダの言葉(Sn 193 – 201)と，それを聞いた理解力ある托鉢修行者(Sn 202: Buddhavacana; bhikkhu paññāṇavant)について語る．

該当偈

Sn 204　chandarāgaviratto so bhikkhu paññāṇavā idha
ajjhagā amataṃ santiṃ nibbāna-padam[43] accutaṃ.
欲求や熱望から離れ，理解力を有するその托鉢修行者は，ここで不死,[44]
鎮まり，不動[45]である nibbāna-pada へと達した．

パラレル

経典パラレル: 本経に相当する漢訳経典はないようであるが, Sn 194 – 199 は Jataka I p. 146 (no. 12:『南伝』28, 289 – 290), Sn 205 は, Th 453 に出る(村上・及川 1986 P. 164 n. 1).

該当用例 Sn 204-d 句のパラレル: Sn 1086d; Thī 97d; Ap I 153; 424, 11; 132, 3; 390, 23 (矢島 1997 p. 33).

パラレル Thī 97d:

Sn 204 のパラレル Thī 97-d 句: nibbānaṃ padam accutaṃ を含む Sakulā「サクラー経」(Thī 97 - 101)で紹介されるサクラ―尼は預流を得て出家し，修行を重ね不還，そして阿羅漢という道筋が描かれる．anāgamin「不還」は Sn Ch. 3: Dvayatānupassanāsutta「二種の考察経」の散文に見出せるのみであり，本研究で調べた該当用例を含む Sn 経典群から，四向四果の教説の存在を数字を挙げて示唆する経は Ch. 2「宝経」のみ(Sn 227: puggalā aṭṭha「8 人の人間」, cattārī etāni yugāni「四対」とあり). 最古層といわれる Ch. 4, Ch. 5 では確認できない．

---

[43] Be: nibbānaṃ padamaccutaṃ.
[44] amata「不死」は最古層には現れない．
[45] 藤田宏達 1988c「原始仏典にみる死」p. 95 では「不死」と和訳.「主に詩歌に現れ，散文経典においては amata が圧倒的に多く使われる．詩句では amara が用いられることがあるが，散文では全く使われない」と，韻文と散文の用語の違いの例として挙げる．

註釈

註釈 Pj II pp. 241 – 254 (経題: Kāyavicchandanikasutta):

Sn 204 註釈 Pj II pp. 252 – 253 は, 理解力を arahattamaggapaññāṇa[46]「阿羅漢道の理解」, そして cd 句について

> maraṇābhāvena paṇītaṭṭhena vā *amataṃ* sabbasaṃkhāravūpasamato[47] *santiṃ* taṇhāsaṃkhātavānābhāvato *nibbānaṃ* cavanābhāvato *accutan* ti.
>
> 死が存在しないことによって, あるいはすぐれたものという意味で amataṃ〈不死に〉, 全ての形成作用が鎮まった[48]で santiṃ〈鎮まりに〉, 渇愛と言われる vāna[49]が存在しないので nibbānaṃ〈涅槃に〉, 転落が存在しないので accutan〈不動〉と.

経典名

Ch. 2　Cūlavagga　1. Ratanasutta「宝経」Sn 222 – 238 (pp. 39 – 42)[50]

[本論 2. 2. 4.参照]

該当用例

nibbutiṃ　Sn 228-d (p. 40)　nibbuti を(楽しみつつ)

nibbānagāmiṃ　Sn 233-d (p. 41)　nibbāna へと導く

nibbanti　Sn 235-d　(p. 42)　(灯火のように)nibbā する[火の喩え]

誰の発話か経典レベルでは不明, 註釈 Pj I pp. 164 は世尊の言葉をアーナンダが説いたとする(後述).

---

[46] Be: -maggañāṇa.

[47] Be: -vūpasamanato.

[48] 参考までに, DN 16 経「大般涅槃経」p. 157 で, 世尊の命終時に語られるアヌルッダの偈頌があるが, 該当偈のパラレルである Th 905 の註釈 Th-a p. 70 には kāya-saṅkhārā nirujjhanti「身体形成力が停止する」故に呼吸が止まり般涅槃した(寿命が尽きた)と説明される. 一方, 同経 p. 157 のサッカの偈頌に出てくる saṃkhārā「諸々の形成されたもの」が vūpasanto「鎮まった状態である」とあり, その註釈 DN-a p. 595 は以下の通り:

> *tesaṃ vūpasamo* ti tesaṃ saṅkhārānaṃ vūpasamo asaṅkhātaṃ nibbānam eva *sukhan* ti attho.
>
> 〈それらの鎮まり〉とは, それら諸々の形成されたものの鎮まりであり, 呼称・列挙されることのない他ならぬ涅槃が〈安楽〉という意味.

[49] vāna の意味はよくわからない. PED p. 608 も語源がはっきりとしないと注記しつつ, 1. sewing, stuffing [√vā: weave「織る・紡ぐ」], 2: vana「林」から, 抽象的に desire, lust「欲望」と説明する.

[50] 本経は Khp にも納められているためか, Pj II 3 index p. 716 には本経 3 用例の記載なく漏れている.

本経の概要

本経は,「護呪 (paritta) の一つ」(村上・及川 1986 p. 301 n. 1 参照)と言われ, 17 偈よりなる. 冒頭 2 偈(Sn 222, 223)において, 地上に属する(bhumma)・空中(antalikkha)の全ての生き物(bhūta)に対して, 「人間である生きもの(人類)に慈しみを為せ」(mettaṃ karotha mānusiyā pajāya)と呼びかけた後, Buddha「ブッダ(目覚めたお方)」[Sn 224, 233, 234], Dhamma「ダルマ(教え) 」[Sn 225, 226], Saṃgha「集い」[Sn 227,[51] 228, 229, 230, 231, 232, 235]の中に ratana「宝」あり, この真実によって幸いなれ(etena saccena suvatthi hotu)と, ゴータマ・ブッダの教えを説く. そして結びの 3 偈で, ブッダ, ダルマ, 集いに礼拝する.

該当偈

Sn 228 ye suppayuttā manasā daḷhena
nikkāmino Gotamasāsanamhi,
te pattipattā amataṃ vigayha
laddhā mudhā nibbutiṃ bhuñjamānā, —
idam pi Saṃghe ratanaṃ paṇītaṃ,
etena saccena suvatthi hotu.
ゴータマの教えに対し, 固い思考によってよく励み, 無欲である.
そういう者たちは, 得るべきことを得て, 不死へと入り,
[それを]無償で[52]獲得して[ger], nibbuti を楽しんでいる—
これも集いにおける優れた宝[である]. この真実によって幸いなれ.

Sn 233 vanappagumbe yathā[53] phussitagge
gimhāna māse paṭhamasmiṃ gimhe,
tathūpamaṃ dhammavaraṃ adesayi
nibbānagāmiṃ paramaṃhitāya, —

---

[51] Sn 経典群から, 四向四果の教説の存在を数字を挙げて示唆する経は本経のみで, Sn 227 では puggalā aṭṭha「8 人の人間」, cattārī etāni yugāni「四対」は布施に値する人達であるとする. このことから,「集いにおける宝」とは, ブッダ、ダルマ同様, 集いに礼拝することで得られるものがあるという意味であろう.

修行道の四向四果において煩悩が順次滅せられるとされ, 預流において身見(有身見)・疑・戒禁取の三結が断ぜられ, 欲界の一切煩悩を断じて到達される不還において五下分結が断尽され, 上二界(色界・無色界)のすべての煩悩を断じて到達される阿羅漢の悟りにおいて五上分結が断尽されるとされる(水野 1972 pp. 225 – 226). 水野氏は「煩悩に関する考察は説一切有部などの北方仏教の方が極めて発達して詳細に論ぜられ, 南方のパーリ仏教では煩悩論は深く論ぜられなかった」と説明する(p. 224).

[52] PED p. 538: for nothing, gratis. 村上・及川 1986 p. 271「ただで」.

[53] Be: yatha.

idam pi Buddhe ratanaṃ paṇītaṃ,
etena saccena suvatthi hotu.
初夏の暑さに, 林の茂みの中で, 花を咲かせた[数々の]枝先のように
そのように, nibbāna-へと導く珠玉のダルマ(教え)を説いた.
最高の利益のために.
これもブッダにおける優れた宝[である]. この真実によって幸いなれ.

Sn 235 ‘khīṇaṃ purāṇaṃ, navaṃ[54] n’ atthi sambhavaṃ,’
virattacittā āyatike bhavasmiṃ
te khīṇabījā avirūḷhichandā
nibbanti dhīrā yathāyam[55] padīpo, —
idam pi Saṃghe ratanaṃ paṇītaṃ,
etena saccena suvatthi hotu.
「過去のものは滅し, 新しいものが再生されつつあることはない[56]」
未来の生存に対する愛着から離れた心を持ち, 種が滅し,
成長への欲がない, そういう賢者達は, この灯火のように nibbā する.
これも集いにおける優れた宝[である]. この真実によって幸いなれ.

パラレル

本経パラレル: Khp 6 に同じ経がある. Mvu i 290ff. 本経の漢訳パラレルは村上・及川および矢島には指摘なし.

Sn 228 パラレル: Khp 6, 7; Mv I p. 293「心の思いから解放され, 涅槃を得たことを楽しみつつ」(vimuktacintā nirvṛtiṃ bhuṃjamānā).

Sn 233 パラレル: Khp. 6. 12, Mv. I p. 294: nibbānagāmiṃ に相当する sk.なし(c – e 句は全く別, f 句は Buddhe でなく saṃghe).

Sn 235 パラレル: Khp 6. 14; Mv. I p. 239 d 句: nirvānti dhīrā yatha tailadīpā. Mv.の意味は Sn 235 と変わらず. Sn 235 のみ漢訳あり: 婆須密論 1549. 801c (矢島 1997 p. 35).

---

[54] Be: nava.
[55] Be: yathāyaṃ.
[56] 村上・及川 1986 p. 289, 中村 1984 p. 53, 荒牧・本庄・榎本 2105 p. 76 和訳は, a 句に「業」を補う. Norman (2006 p. 205) は補わず, the old is destroyed, the new is not arising「古いことは滅し, 新しいことが生じていない」と,「何が」については明記していない. Norman (同) は, 註釈について「navaṃ にあわせて natthisambhavan と複合語にしているが, 自分は句読点をつけて n’ atthi saṃbhavaṃ として, saṃbhavaṃ を現在分詞と理解」と記述. Cf: Mv. I p. 293 a 句: kṣīṇaṃ purāṇaṃ navo nāsti saṃcayo. (saṃcaya = m. gathering; sam-√ci).

註釈

Sn Ch. 1: 8. Mettasutta, Ch. 2: 1. Ratanamutta, 4. Mahāmaṅgalasutta の 3 経は Khp にも収められている有名な経である. 後代の南方仏教では護呪(paritta)とされ, 重要視されている(中村 1984 pp. 282, 300, 306). それらの註釈は Pj II には存在せず, Khp の註釈である Pj I にあるため, そちらを参照した.

Pj I p. 164 によると, 世尊がアーナンダに説き, 学んだアーナンダが護呪のためにヴェーサーリーを巡りながら唱えたとする:

> Bhagavato Vesāliṃ anuppattadivase yeva Vesālinagaradvāre tesaṃ upaddavānaṃ paṭighātatthāya vuttam idaṃ Ratanasuttaṃ uggahetvā āyasmā Ānando parittatthāya bhāsamāno Bhagavato pattena udakaṃ ādāya sabbanagaraṃ abbhukkiranto anuvicari.
>
> 世尊はヴェーサーリーに到着したその同じ日に, ヴェーサーリーの町の門のところで, 彼等の災害を撃退するために, この宝経を語った. 学び取ってから, アーナンダ尊者は護呪のために唱えながら, 世尊の鉢で水を携えて, 町中に撒いて巡り歩いた.

Sn 228-c 句註釈 Pj I p. 185: *amatan* ti nibbānaṃ「不死とは涅槃である」とする.

Sn 228-d 句: nibbuti に関して註釈 Pj I p. 185:

> *nibbutin* ti paṭippassaddhakilesadarathaṃ phalasamāpattiṃ.[57]
>
> nibbuti とは, 煩悩という苦悩を鎮めた果報である到達／禅定.

Sn 235 (Khp 6. 14)の註釈 Pj I p. 194 は,

> anupādisesanibbānappattiguṇaṃ nissāya
>
> 無余依涅槃を獲得する徳に依拠して

本偈を説いたとする.

> nibbantī ti vijjhāyanti「消える, とは消[火]されること」
>
> taṃ purāṇaṃ kammaṃ yesaṃ arahattamaggena taṇhāsinehassa sositattā agginā daḍḍhabījam iva āyatiṃ vipākadānāsamatthatāya khīṇaṃ
>
> その古い行為(業)は, 阿羅漢道による渇愛・情愛の枯れた状態ゆえに, 火

[57] samāpatti (f) [saṃ-ā-√pad]は, attainment と a stage of meditation との意味あり(PED p. 686). 村上・及川 1986 p. 272 の和訳では「果定: 阿羅漢果の境地における心統一」と, 生前の涅槃を得た後の禅定と解釈する. 涅槃を得ること自体は, 禅定によるものではないが(MN I p. 175, 26 経), その境地を得た阿羅漢は禅定を楽しむということである. Sn 165-cd 句(Ch. 1 Hemavatasutta)には,「禅定を行っている寡黙の聖者ゴータマに, [君は]来たれ, [我々はゴータマに]見えよう」(muniṃ jhāyantaṃ Gotamaṃ ehi passāma)と, 禅定する世尊のことを記す(Hemavata yakkha と Sātāgira yakkha の会話部分). また Sn 1105 で, ウダヤは世尊のことを, 禅定するお方(jhāyin)と表現する.

に焼かれた種子のように，将来に果を与えることができないため，尽きたのである．

続けて Pj I p. 195: [AN I p. 223 (『南伝』17 p. 365)を引用]:

“kammaṃ khettaṃ viññāṇaṃ bījan”

「行為は田畑であり認識機能は種である」

carimaviññāṇanirodhena, yathāyam[58] padīpo nibbuto, evaṃ nibbanti.

最後の認識機能が滅することにより，この燈火が消えたように，そのように消える．

経典名

Ch. 2　Cūlavagga　4. Mahāmaṅgalasutta「大吉祥経」散文 + (Sn 258 - 269) pp. 36 – 47 [本論 2. 3. 1.参照]

該当用例: nibbānasacchikiriyā Sn 267-c 「涅槃を目の当たりにすること」

発話者は偈文だけでは不明であるが，散文で世尊と記述．

本経の概要

散文と 12 偈からなる Khp にも収められた護呪(paritta)とされる有名な経．冒頭散文部分で，ある神格が偈文(Sn258)でもって世尊に brūhi maṅgalam uttamaṃ「この上なき吉祥について語ってください」と懇願し，それを受けて世尊が etaṃ maṅgalam uttamaṃ「これがこの上なき吉祥である」と結ぶ 11 偈を説く．

該当偈

Sn 267　tapo ca brahmacariyā ca[59] ariyasaccāna dassanaṃ

nibbānasacchikiriyā ca, etaṃ maṅgalam uttamaṃ.

苦行と禁欲の修行と立派な人にとっての真実を見ることと

nibbāna を目の当たりにすること，これがこの上なき吉祥である．

註釈 Sn 267 の註釈 Pj I p. 152:

nibbānasacchikiriyā nāma: idha arahattaphalaṃ nibbānan ti adhippetaṃ, tam pi hi pañcagativānena[60] vānasaññitāya taṇhāya nikkhantattā nibbānan ti vuccati.

涅槃を目の当たりにすることとは，ここでは阿羅漢果が涅槃との意味である．なぜなら，五趣の vāna によって vāna と名付けられた渇愛から進み

[58] Be: yathāyaṃ.
[59] Be; Se: brahmacariyañca.
[60] Be: -vānanena.

出た状態故に涅槃であるといわれるからである. (vāna は前述 Sn 204 註釈 Pj II pp. 252 – 253 の注記参照)

経典名

Ch. 2　Cūlavagga　12. Vaṅgīsasutta　散文＋(Sn 343 - 358)　pp. 59 – 62
[本論 2. 2. 3. 2.参照]

該当用例

散文 p. 59 aciraparinibbuto「parinibbuta した状態になったばかり」, parinibbuto, parinibbuto
p. 60 parinibbuto, parinibbuto
abhinibbutatto Sn 343-d
parinibbutaṃ Sn 346-b
nibbāyi 354-c (3 sg. Aor)
該当用例は散文・偈文とも全て質問者ヴァンギーサの言葉.

本経の概要

本経は冒頭に散文があり, 偈文が続く形式である. 自分の師であったニグローダカッパ長老が亡くなった後, 師が般涅槃したかどうかについて疑問が生じたヴァンギーサ尊者が, 世尊に偈で話りかけてそれを尋ねる. その際, 様々な言葉で世尊を讃嘆し答えを求める. 偈文中, 世尊の言葉は, Sn 355 の一偈のみ.[61] 世尊の答えを聞いて, ヴァンギーサ尊者は大変喜ぶ.

該当散文

散文 p. 59

ekaṃ samayaṃ Bhagavā Āḷaviyaṃ viharati Aggāḷave cetiye. tena kho pana samayena āyasmato Vaṅgīsassa upajjhāyo Nigrodhakappo nāma thero Aggāḷave

---

[61] Sn 355 : “acchecchi tanhaṃ idha nāmarūpe
ti Bhagavā
kaṇhassa sotaṃ dīgharattānusayitaṃ,
atāri jātimaraṇaṃ asesaṃ” —
icc-abravī Bhagavā pañcaseṭṭho
この世において, 名称と姿・形への渇愛を断ち切った, と世尊は[仰せになった],
長い間潜んでいた闇の流れを, 生と死を, 余すところなく渡ったのだ
と, 五人の中で最上の人, 世尊は仰せになった

cetiye aciraparinibbuto hoti. atha kho āyasmato Vaṅgīsassa rahogatassa paṭisallīnassa evaṃ cetaso parivitakko udapādi: ‘parinibbuto nu kho me upajjhāyo udāhu no parinibbuto’ ti.
ある時世尊はアーラーヴィーにおけるアッガーラヴァのほこらに滞在していた. それは, ヴァンギーサ尊者の師であったニグローダ・カッパ長老が, アッガーラヴァのほこらで parinibbuta になったばかりのことである. その後, ひとり瞑想中のヴァンギーサ尊者に, このような心の考えが生じた,「わが師は parinibbuta している／したのか, あるいは parinibbuta していない／しなかったのか」と.

散文 p. 60

ekamantaṃ nisinno kho āyasmā Vaṅgīso Bhagavantaṃ etad avoca: “idha mayhaṃ bhante rahogatassa paṭisallīnassa evaṃ cetaso parivitakko udapādi: ‘parinibbuto nu kho me upajjhāyo udāhu no parinibbuto’” ti.
一方の端に座ったヴァンギーサ尊者は, 世尊にこのように言った.「尊いお方よ, ここで私がひとり瞑想中にこのような心の考えが生じました. 『わが師は parinibbuta している／したのか, あるいは parinibbuta していない／しなかったのか』」と.

該当偈

Sn 343 pucchāma Satthāraṃ[62] anomapaññaṃ,
dhiṭṭhe va dhamme yo vicikicchānaṃ chettā:
Aggāḷave kālam akāsi bhikkhu
ñāto yasassī abhinibbutatto.
他ならぬ現世において, 疑いを切り捨てたお方, 完全な理解力のある師にお尋ねします. アッガーラヴァにおいて, よく知られ, 名声のある, abhinibbutatta であったひとりの托鉢修行者が亡くなりました.[63]

Sn 346 chind’ eva no vicikicchaṃ, brūhi m’ etaṃ,
parinibbutaṃ vedaya bhūripaññā,
majjhe va[64] no bhāsa samantacakkhu
Sakko va devānaṃ[65] sahassanetto.

---

[62] Be: -ram.
[63] 阿羅漢の命終には maraṇa「死」という語は用いられない.
[64] Se: ca.
[65] Be: devāna.

我らの疑いを断って下さい. 我にこのことを説いてください.
［師が］parinibbuta している／したことを [66]
豊富な理解力を持つお方よ, 我らの中で説いて下さい. 全てを見る人よ,
神々の中で千の眼を持つインドラのように.

Sn 354 yadatthiyaṃ[67] brahmacariyaṃ acāri[68]
Kappāyano,[69] kacci 'ssa[70] taṃ amoghaṃ,
nibbāyi so ādu saupādiseso,
yathā vimutto ahu taṃ suṇāma.[71]
目的を持って, カッパーヤナは禁欲の修行を行いました.
それは彼にとってむなしくなかったのでしょうか.
彼は、nibbā したのでしょうか. それとも燃料の残余がある
[つまり nibbā していない]のでしょうか.
どのように解脱したのか, それをお聞きします.

パラレル

経典パラレル: Th 1263 – 1278 (この経の偈文の後半部分と Sn 本経は同一). 漢訳:『雑阿含』1221 経 (巻 40,『大正』2, 333 上中);『別訳雑阿含』255 経(巻 12,『大正』2, 463 上): 偈は始めの 6 行(12 句)を有するのみ. 漢訳序文ではヴァンギーサ尊者は師の臨終に立ち会ったとあるが, パーリ文の序文では師の臨終の際にそばにいなかったと説明する(Pj II p. 346).

Sn 343 用例部分のパラレル:『雑阿含』同 333 上「命終般涅槃」;『別訳雑阿含』「比丘入涅槃」, Sn 346『雑阿含』同 333 上: 該当漢語なし, Sn 354 該当漢訳経典なし. 散文 parinibbuta かどうかヴァンギーサ尊者が疑問に思うところの『雑阿含』同 333 上中は「有余涅槃 無余涅槃」と漢訳.[72]

---

[66] 藤田 1998a p. 284; 1988b p. 5 は, 解脱者の死の例として本偈を挙げる.
[67] Be; Se: -kaṃ. Norman 2006 p. 255 は, yad と atthiya を分離して考え, yad を-cariyaṃ にかかる Acc. Sg.とし, また atthiya を Skt. arthya (proper, fit, useful)と解釈する. PED は atthika とする.
[68] Be: acarī.
[69] Kappāyana とは Kappa の尊敬形.
[70] Se: kiñcissa.
[71] Be; Se: suṇoma.
[72] パーリ聖典で唯一二種涅槃界を説いたとされる It pp. 38 - 39: 44 経に対応する『増壹阿含経』16 - 2 大正蔵 2, p. 159 上によると,「不還が上界において阿羅漢果を得て般涅槃することを有余涅槃とする」(宮下 1989 p. 30).

註釈

註釈 Pj pp. 344 – p. 351 [経名: Nigrodhakappasutta を最初に記載]:

散文の序文部分の註釈 Pj II p. 347: ニグローダカッパ師が arahattaṃ pattattā「阿羅漢性を得ていた」と説明する.

疑問が生じた理由の一つに, 阿羅漢以前の手の悪行などの習慣が, 阿羅漢になってからも見られていたからと説明する:

Pj II p. 346: asammukhattā diṭṭhāsevanattā ca, ayaṃ hi tassa parinibbānakāle na sammukho[73] ahosi diṭṭhapubbañ ca ten'[74] assa hatthakukkuccādipubbāsevanaṃ, tādisañ ca akhīṇāsavānam pi hoti khīṇāsavānam pi pubbaparicayena.

[ニグローダ・カッパの]面前におらず, また[ニグローダ・カッパの]習慣を見ていたことから. なぜなら, この者[ヴァンギーサ]は, 彼の般涅槃時に面前におらず, そして, 彼の手の無作法などの以前の習慣を前に見たから, またそのようなことは, 非漏尽者達にとっても漏尽者達にとっても, 従来からの積み重ねゆえに生じる.

Sn 343 の註釈 Pj II p. 347:

abhinibbutatto ti guttacitto apariḍayhamānacitto vā.

abhinibbutatta とは, 守られた心あるいは, 焼かれていない心を有する者.

本偈パラレル Th-a p. 199: upasantasabhāvo apariḍayhamānacitto「鎮まった自性, 焼かれていない心を有する者」との説明がある.

Sn 344 の註釈 Pj II p. 347:

mutyapekkho ti nibbānasaṃkhātaṃ muttiṃ[75] apekkhamāno, nibbānaṃ patthento ti vuttaṃ hoti.

mutyapekkho〈解脱を求めて〉とは, 涅槃と呼ばれる解脱を求めつつ, [つまり]涅槃を願いつつ, と言われたことになる.

Pj II p. 346: nibbānaṃ arahato gati「涅槃は阿羅漢の行く先」とも説明される.

Sn 354 の註釈 Pj II p. 350:

yathā vimutto ti kiṃ anupādisesāya nibbānadhātuyā yathā asekhā,[76] udāhu saupādisesāya[77] yathā sekhā[78] ti pucchati.

---

[73] Be: sammukhā.
[74] Be: diṭṭhapubbañcānena.
[75] Be: vimuttiṃ.
[76] Be: asekkhā.
[77] Be: upādisesāya.
[78] Be: sekkhā.

yathā vimutto〈どのように解脱しているのか〉とは, 無学のように燃料の残余のない(無余依)涅槃界にいるのか, それとも, 有学のように燃料の残余があるのか, と尋ねている.

註釈家が意図したのは, 有学とある以上,「非阿羅漢のように涅槃していないのか」と尋ねたことになる.

その他の関連する注釈の説明

Sn 356 の註釈 Pj II p. 351: [世尊の答えを聞き喜ぶヴァンギーサ]:

na maṃ vañcesī ti yasmā parinibbuto, tasmā tassa parinibbutabhāvaṃ icchantaṃ maṃ na vañcesi, na visaṃvādesī ti attho.

na maṃ vañcesī〈私を欺きませんでした〉とは, 般涅槃しているが, それ故に, 彼が般涅槃したことを望んでいた私を欺かなかった, 嘘をつかなかった, という意味である.

・Sn 355 [世尊の答えに関する註釈] Pj II p. 351:

anupādiseso parinibbāyī[79] ti dasseti.

燃料の残余なく般涅槃したと示す

経典名

Ch. 2　Cūlavagga　13. Sammāparibbājaniyasutta「正しい遊行経」(Sn 359 - 375)
pp. 63 – 66　[本論 2. 2. 3. 3.参照]

該当用例

parinibbuto 359-b 質問者の言葉
nibbānapadābhipattayāno 365-c 世尊の言葉
parinibbuto 370-c [359 のパラレル] 世尊の言葉

本経の概要

本経は, 托鉢修行者の遊行の正しい在り方についての質問に対し, 世尊(Bhagavā Sn 375)が答えて 15 偈の説法を行い, 最後に質問者が世尊に合意して経を結ぶ.

[79] Be: anupādisesāya nibbānadhātuyā parinibbāyī.

該当偈

Sn 359 pucchāmi muniṃ pahūtapaññaṃ
tiṇṇam pāragataṃ[80] parinibbutaṃ thitattaṃ
nikkhamma gharā panujja kāme
kathaṃ bhikku sammā so loke paribbajeyya.
豊かな理解力を持つ寡黙の聖者に, 向こう側へと渡り終えた,
parinibbuta していて, 自己が確立しているお方に, [私は]尋ねます.
家から出て諸々の欲望の対象を追い払った後, どのように
その托鉢修行者は世間において正しく遊行すべきでしょうか

Sn 365 vacasā manasā ca kammanā[81] ca
aviruddho sammā viditvā dhammaṃ
nibbānapadābhipatthayāno
sammā so loke paribbajeyya.
言葉によって, 思考によって, 行為によって,
妨げられることなく, 正しくダルマ(真理/教え)を知った後,
nibbāna の境地／への足場を望みつつ,
その者は世間において正しく遊行すべきであろう.

Sn 370 āsavakhīno[82] pahīnamāno
sabbaṃ rāgapathaṃ upātivatto
danto parinibbuto ṭhitatto
sammā so loke paribbajeyya.
慢心を打ち捨てた漏尽者であり, あらゆる熱望の道を越えて,
自制し, parinibbuta していて, 自己を確立している者としてその者は,
世間において正しく遊行すべきであろう.

パラレル

経典パラレル: 相当する経は見いだせない. 用例部分のパラレル: Sn 370: Cf. Th 5, 7, 8: J iv 303 (487, 11cd; 12cd; 13cd). 矢島 1997 p 44 参照.

註釈 Pj II pp. 352 – 367:
Sn 359 註釈 Pj II p. 362:

---

[80] Be: pāraṅgataṃ.
[81] Be; Se: kammunā.
[82] Be; Se: -khīṇo.

pāragatan[83] ti nibbānappattaṃ; *parinibbutan* ti saupādisesanibbānavasena.
pāragatan〈向こう側へと行った〉とは涅槃に達した, parinibbutan〈般涅槃していて〉とは燃料の残余のある(有余依)涅槃によって.

また本経について註釈 Pj II p. 362 は arahattanikūṭen' eva khīṇāsavapaṭipadaṃ pakāsento pannarasa gāthāyo abhāsi「阿羅漢の境地の頂上をもって[使って], 漏尽者の実践を明らかにして, 15 偈を述べた」と説明.

Sn 365 註釈 Pj II p. 364:
nibbānapadābhipatthayāno ti anupādisesaṃ khandhanibbānapadaṃ[84] patthayamāno.
nibbānapadābhipatthayāno〈涅槃の境地を望みつつ〉とは, 燃料の残余なく蘊(心身の構成要素)が消える境地を望みつつ.

Sn 370 註釈 Pj II p. 365:
parinibbuto ti kilesaggivūpasamena sītibhūto
parinibbuto〈般涅槃した〉とは, 煩悩の火が鎮まることによって冷たく[清涼に]なった[85]

経典名
Ch. 3 Mahāvagga　3. Subhāsitasutta 散文あり(450 - 454) pp. 78 – 79

該当用例: nibbānapattiyā 454-b　質問者(ヴァンギーサ尊者)の言葉

本経の概要
本経は, 散文での序文の後, 世尊が「最上のよき言葉」について説き(Sn 450), その後ヴァンギーサ尊者が世尊に近づき(散文), この世尊の言葉を受けてその場にふさわしい数偈(Sn 451 – 454)を述べて, 世尊を讃嘆する.

---

[83] Be: pāraṅgatan.
[84] Be: khandhaparinibbānapadaṃ.
[85] 註釈は生前の時点を意図する際には kilesa を使うことが多い. 例として, Pj II p. 32 (Sn 18), p. 399 (Sn 454), p. 407 (Sn 467). p. 425 (Sn 514), p. 469 (Sn 638), p. 495 (Sn 707), p. 521 (Sn 783), p. 592 (Sn 915).

該当偈

Sn 454　yam[86] Buddho bhāsatī[87] vācaṃ khemaṃ nibbānapattiyā
dukkhass' antakiriyāya, sā ve vācānam uttamā ti
nibbāna の獲得のために, 苦しみを終わらせるために,
目覚めたお方が語る安穏の言葉,
それこそ, 諸々の言葉の中で最上であるのだ, と.

パラレル

経典パラレル: SN VIII 5. Subhāsita (vol. I pp. 188 – 189)とほぼ同文.

漢訳『雑阿含』巻 45 (1218) (『大正』2, 332 上)はパーリによく一致する.『別訳雑阿含』巻 13 (253) (『大正』462 中下)も本経に相当する. 後の 4 偈 = Thag 1227 - 1230 ヴァンギーサの偈の一部. Uv Ch. 8 の最後 5 偈と本経偈文が対応. 漢訳『法句経』その他村上・及川 1988 III p. 96 参照. 村上・及川 2009 III p. 102 Udv VIII 15 nirvāṇaprāptaye.

Sn 454-b のパラレル: Sn 186-b, M i 227; Thīg 21-b, 45b; Ap 389, 65; Divy 165 (矢島 1997 p. 50)

『雑阿含』45 (1218)『大正』2, 332 上
「如仏所説法 安穏涅槃道 滅除一切苦 是名善説法」

『別訳雑阿含』13 (253)
「従諸仏口有所説 必得安楽趣涅槃 能断諸苦讃善説」

註釈 Pj II pp. 394 - 400:

Sn 454「涅槃の獲得のために, 苦しみを終わらせるために」の註釈 Pj II p. 399:
kilesanibbānaṃ pāpeti vaṭṭadukkhassa ca antakiriyāya
煩悩が消えることを獲得させ, また輪廻の苦しみを終わらせるために
次に atha vā「あるいは」として
dvinnaṃ nibbānadhātūnam atthāya
二種涅槃界のために
とも説明する.

経典名

Ch. 3 Mahāvagga, 4. Sundarikabhāradvājasutta「スンダリカバーラドヴァージャ経」

---

[86] Be: yaṃ.
[87] Be; Se: -ti.

(散文+ Sn 455 - 486 + 散文) pp. 79 – 86
[本論 2. 2. 3. 2.参照]

該当用例

abhinibbutatto 456-b 世尊の言葉
parinibbuto 467-c 世尊の言葉
abhinibbutatto 469-c 世尊の言葉

本経の概要

本経は, 散文序文において, スンダリカ・バーラドヴァージャという名のバラモンが, スンダリカ河の岸辺で聖火の祀りを行った後, 残った供物を誰が食べるべきだろうかと, あたりを見渡したところ, 衣をまとって座っているブッダ世尊を見つけ, 供物を持って世尊に近づきその素性(jacca)を尋ねる. そして続く偈文では, 世尊がまず, 自分は何者でもなく何も所有していない(Sn 455), 素性を尋ねることは適切ではないと答える(下記 Sn 456). 世尊の言葉を聞き, 世尊を尊敬するようになったスンダリカ・バーラドヴァージャ・バラモンは, 供養について, そして誰に供養するべきなのかを世尊に尋ねる. 世尊は献供に値する者の資質につき示, tathāgato arahati pūraḷāsaṃ「そういう状態に至っている人(如来)は, 供物の祭餅に値する」と説く. そして最後の散文部分で, スンダリカ・バーラドヴァージャがその後, 世尊に帰依して阿羅漢となったと記す.

該当偈

Sn 456 saṃghāṭivāsī agiho[88] carāmi
nivuttakeso abhinibbutatto
alippamāno idha mānavehi[89]
akalla[90] maṃ brāhmaṇa pucchi[91] gottapañhaṃ.
髪の毛を落とし, abhinibbutatta である[私は]法衣を着て, 家無く,
この世で, 人々によって汚されることなく歩む.
バラモンよ, 私に姓を尋ねたことは, 善きことではない.

Sn 467 yo kāme hitvā abhibhuyyacārī,

---

[88] Be; Se: agaho.
[89] Be; Se: māṇavehi.
[90] Be; Se: -aṃ.
[91] Be; Se: pucchasi.

yo vedi jātimaraṇassa[92] antaṃ,
parinibbuto udakarahado va sīto,
tathāgato arahati pūraḷāsaṃ.
諸々の欲望[93]を捨て去り打ち勝ち, 進み, 生と死の終わりを知って,
湖のように冷たく鎮まっていて parinibbuta している.
そういう状態に至っている人(如来)は, 供物の祭餅に値する.

Sn 469 yamhī[94] na māyā vasatī[95] na māno,
yo vītalobho amamo nirāso
panuṇṇakodho[96] abhinibbutatto,
so[97] brāhmaṇo sokamalaṃ ahāsi,
tathāgato[98] arahati pūraḷāsaṃ.
その人の中に, 偽りと慢心は住んでいないで, 貪りを離れ,
「私のもの」という思いなく, 願望なく, 怒りが除かれ,
abhinibbutatta であるような, そういう人は[真の]バラモンとして,
憂いの垢を捨て去った. そういう状態に至っている人(如来)は,
供物の祭餅に値する.[99]

---

[92] Be: jātīmaraṇassa.
[93] kāma には「欲望」と「欲望の対象」という意味がある. 註釈は Pj II p 407 は vatthukāme と vatthu「もの, 対象」と説明する. 「打ち勝ち進み」も kāma のことであるため, 筆者は「欲望」と和訳しておく.
[94] Be; Se: -i.
[95] Be: vasati.
[96] Se: panunna-.
[97] Be; Se: yo.
[98] 467 偈以降 478 偈まで最後の句は, tathāgato arahati pūraḷāsaṃ である. tathāgata の原意に関しては,榎本 1993b 参照のこと.
[99] Sn 469 の註釈は abhinibbutatto について説明なし.
Sn 469 と類似する内容の偈文が Ud p. 29 (III-6)にあり abhinibbutatta が出てくる. 本経は, 賤民の言葉で語りかけるピリンダヴァッチャ比丘のことを, ブッダ世尊が, 内に憎しみを抱かずしていることであり, 500 回バラモンの家系に生まれた者で長い間そうしてきたからなのだと, 他の托鉢修行者達に告げて, 以下のウダーナを唱える.
yamhi na māyā vattati na māno, yo khīṇalobho amamo nirāso
paṇunnakodho abhinibbutatto, so brāhmaṇo so samaṇo sa bhikkhū 'ti.
その人には偽りも慢心も働かず, 貪りを滅し「私のもの」という
思いなく, 願望なく, 怒りが除かれ, abhinibbutatta である
そういう人は[真の]バラモンであり, 沙門であり, 托鉢修行者である, と.
Ud 註釈 p. 195 では abhinibbutatto を次のように説明する.
yo evaṃ māyā-māna [Be 採用; Ee: mayā-mānā を訂正] lobha-kodhānaṃ samugghātena tadekaṭṭhatāya sabbassa saṅkilesa-pakkhassa suppahīnattā [Be 採用; Ee: suppahīnatta を訂正] sabbaso kilesa-parinibbānena abhinibbuta-citto sīti-bhūto.

パラレル

経典パラレル: 散文は SN VII 1.9 (I pp. 167 - 168)に一致し, 5 偈が一致する. 漢訳は該当用例に相当する部分なし. 本経中の 10 偈が『尊婆須密菩薩所集論』9「偈犍度」(『大正』28, 797 上以下)に引用され註釈されている(村上・及川 1988 p. 135).

該当用例パラレル: Sn 467-c 句: J v 84. Sn 469-abc 句: Ud 29 (III 6abc); Peṭaka 10; Mvu iii 418, 13 – 16; Uv 33, 14; UvS 537.

註釈 Pj II pp. 400 - 412:

Sn 456-b: abhinibbutatto 註釈 Pj II p. 403:

> *abhinibbutatto* ti atīva vūpasantapariḷāhacitto guttacitto vā.
> abhinibbutatto〈自らが涅槃した〉とは, 燃焼がとても鎮まっている心を持った, あるいは, 守られた心を持った.[100]

複合語の後分-attan を-citta「心」に言い換える. また, abhinibbutatto を√śam「鎮まる」の派生語である vūpasanta と説明する.[101] 特に pariḷāha「燃焼」が補われ, abhinibbuta が「[火が]消えている」という意味であることが意識されている.

Sn 467 の注釈 Pj II p. 407:

> yo kāme hitvā ti ito pabhuti attānaṃ sandhāya vadati.
> 諸々の欲望の対象を捨て去ってと, ここから[世尊]自身に関して言う.
> *jātimaraṇassa antaṃ* nāma nibbānaṃ vuccati.
> jātimaraṇassa antaṃ〈生と死の終わり〉というのは, 涅槃が言われている.
> udakarahado va sīto *parinibbuta*kilesapariḷāhattā.
> 煩悩の燃焼が parinibbuta〈すっかり消えた状態である〉故に, 湖のように冷たい.

Sn 456: abhinibbutatta の註釈に pariḷāha「燃焼」が vūpasanta「鎮まり」とあり, Sn 467: parinibbuto の註釈では kilesapariḷāha「煩悩の燃焼」が parinibbuto「すっかり消

> このように, 偽り・慢心・貪り・怒りの除去によって, それを伴うことから, 全ての煩悩側のものがよく離れていること故に, あらゆる煩悩がすっかり消えることによって, abhinibbuta である心を持ち, 鎮まった状態である者.

[100] Cf. 本経 Sn 460: santaṃ の註釈 Pj II p. 405 kilesaggivūpasamena *santaṃ*「煩悩の火が鎮まることによって santaṃ〈鎮まった〉」. abhinibbutatta と santa が同格で現れる Sn 783 の註釈 Pj II p. 521 の説明に類似している.

[101] Sn 783 abhinibbutatto の註釈も同様に√śam で説明される(前述参照).

えている」と表現される.

経典名

Ch. 3 Mahāvagga　6. Sabhiyasutta (散文あり 510 - 547) pp. 91 – 102
[本論 2. 2. 2. 1 参照]

該当用例: parinibbānagato　514-b　世尊の言葉

本経の概要

本経は, 遊行者サビヤと世尊の問答で, 散文と偈文から構成されるが, 問答の途中にサビヤのことが散文で記される. 多くの人達が聖者だと崇めている教祖達であるプーラナ・カッサパ, マッカリー・ゴーサーラ, アジタ・ケーサカンバリン, パクダ・カッチャーヤナ, サンジャヤ・ペーラッティプッタ, ニガンダ・ナータプッタは, サビヤの問いに満足な答えを与えることができなかった. サビヤは偈によって, 様々な真の人について世尊に問いかける. 世尊の答え全てに喜んだサビヤは, 出家し入門式を行い比丘となり, その後阿羅漢となる. 該当用例 Sn 514 はサビヤからの具体的な問いに答える世尊の最初の言葉である.

Sn 514　“pajjena katena attanā
Sabhiyā ti Bhagavā
parinibbānagato vitiṇṇakaṃkho
vibhavañ ca bhavañ ca vippahāya
vusitavā khīṇapunabbhavo sa bhikkhu.”
「サビヤよ」と世尊は[答える].「自ら行じた道によって parinibbāna に達した, 疑惑を超越した者であり, 非生存と生存を打ち捨てて,
再生を滅した修行完成者であるその人が, [真の]托鉢修行者[である]」

本経は, バラモンが強く意識され, 六師外道の教祖たちより世尊が優れていることを示す. 最後の散文で「出家させ, 入門式を行い, 比丘と認める」とあり, 教団としての運営が始まっていた頃のサビヤと世尊の問答であることがわかる.

パラレル

本経パラレル: Mvu iii, 394ff. 本行集 39 (矢島 1997 p. 53).

Sn 514 のパラレル: MNd 71; CNd 220 (Stede); cf: Peṭaka 19 (prose); Mvu iii 395, 11 – 14. 漢訳: 本行集 39. 834a; 婆須密論 6, 769b (矢島 1997 p. 53).

大衆部(Mahāsaṃgika)に伝わる Skt.仏伝 Mv. III p. 395 では, pari ではなく abhi (abhinirvāṇagata)である．また c 句 vippahāya「打ち捨てて」が jñātvā loke「世間において[非生存と生存を]理解して」．この 2 ヶ所以外は全てパーリ語に相当するサンスクリットである(padyena kṛtena ātmanā/ abhinirvāṇagato vitīrṇakāṃkṣo/ vibhavaṃ ca bhavaṃ ca jñātvā loke/ uṣitavāṃ kṣīṇapunarbhavo sa bhikṣuḥ//).

『仏本行集経』巻 39 (『大正』3. p. 834 上)では,「向涅槃岸」と pari に相当する「般」はなく，さらに過去分詞 gata「達した」に相当する漢訳は「向」であり,「達した」とは漢訳されず．さらに a 句の attanā は漢訳には現れず,「苦行無礙」と漢訳.「苦行無礙求菩提 渡諸疑向涅槃岸 有有無有悉喜捨 梵行漏尽名比丘」.

註釈 Pj II pp. 419 – 436:

Sn 514 parinibbānagato を註釈 Pj II p. 425 は kilesanibbānapatto[102]「煩悩が消えることを獲得している」と説明する.

Sn 517-d 句 pattaṃ jātikkhayaṃ[103] tam āhu buddhan「誕生の滅を獲得したその人をブッダ(目覚めたお方)と言う」の註釈 Pj II p. 427 で, *pattaṃ jātikkhayan*[104] ti nibbānaṃ pattaṃ「pattaṃ jātikkhayan〈誕生の滅の獲得〉とは，涅槃の獲得」と解説．さらに，註釈(Pj II p. 435)は, vaṭṭadukkhassa antaṃ pārañ ca nibbānaṃ「輪廻の苦しみの終わりと彼岸は涅槃である」と説明.

経典名

Ch. 3 Mahāvagga, 8. Sallasutta「矢尻経」 (574 – 593) pp. 112 – 114
[本論 1. 1. 2.; 1. 2.; 2. 2. 3. 1 参照]

該当用例

parinibbaye 591-b「火が付いた家が，水ですっかり消火するように」燃焼が消える喩え.
nibbuto 593-d 生前の文脈
両偈とも，発話者は，経典では不明; 註釈 Pj II p. 457 では「世尊」.

本経の概要

本経を締めくくる最終偈である．本経は冒頭から人の命ははかなく(Sn 574), 生まれた者は必ず死ぬ(Sn 575, 576, 577, 578, 587, 588, 589), 親族は嘆き悲しむがそれ

[102] Be: kilesaparinibbānaṃ patto.
[103] Be: jātikhayaṃ.
[104] Be: jātikhayan.

は無益なことである(Sn 580, 582, 583, 584, 585, 586)という趣意が繰り返し語られる. 誰が説いているのかは経典では不明であるが, 註釈 Pj II p. 457 は世尊が息子を亡くした信者に対して説いたと由来を説明する.

Sn 591　yathā saraṇam āditta̱m vārinā parinibbaye,[105]
evam pi dhīro sappañño paṇḍito kusalo naro
khippam uppatitaṃ sokaṃ vāto tūlaṃ va dhaṃsaye
火が付いた家が, 水で parinibbā する(すっかり消火する)ように,
このようにまた賢者であり, 理解力を備え, 聡明で, 達人である人は,
風が綿の房を吹き払うように, 生じた悲しみをすぐに[払う].

Sn 593　abbūḷhasallo[106] asito santiṃ pappuyya cetaso,
sabbasokaṃ[107] atikkanto asoko hoti nibbuto ti
矢尻をとり除けば, とらわれなく, 心の鎮まりを得て,
あらゆる悲しみを乗り越え, 悲しみなく nibbuta となる(である).

パラレル

本経パラレル: 一部につきパーリ聖典内では『ダンマパダ』Dhp,『ジャータカ』J. No. 461; Nd I p. 121, DN p. 120, 様々な漢訳,『マハーバーラタ』, Mbh Cr. 12, ジャイナ教文献(Utt)にパラレルが見られる(矢島 1997 pp. 58 – 59; 詳しくは, 村上・及川 1988 III pp. 330 – 336 参照)

註釈 Pj II pp 457 – 461:
Sn 591 parinibbaye, Sn 593 nibbuto についての註釈なし

経典名

Ch. 3 Mahāvagga, 9. Vāseṭṭhasutta 「ヴァーセッタ経」(散文＋594 – 656＋散文) pp. 115 – 123
[本論 2. 2. 3. 1.参照]

---

[105] 本来は parinibbāye であるが, Śloka 第 2 句の 7 音節目で短が必要であるため, parinibbāye となっていると思われる. 3rd sg. opt.は nibbāyeyya の形が大半である(例: MN I p. 487; DN II p. 340, SN II pp. 86 -87, III p. 126, IV p. 213, V p. 319. AN IV pp. 70 – 73).
[106] Be; Se: abbuḷhasallo.
[107] Se: sabbaṃ sokaṃ.

該当用例

nibbutaṃ 630-b　世尊の言葉
nibbuto　638-e　世尊の言葉

本経の概要

本経は，ヴァーセッタとバーラドヴァージャという二人のバラモン青年が「どのような人が[真の]バラモンか」について，ブッダ[108]となり名声を得ていると聞き及ぶ世尊のもとへ行き，問答をする．真のバラモンの姿を様々に示し，その中で行為(kamma)でもってバラモンとなると説く．世尊の答えに喜んだ二人は，世尊(bhavant Gotama)と教え(dhamma)と比丘教団(bhikkusaṃgha)に帰依し，在家信者(upāsaka)となり経が終わる．

該当偈

Sn 630　aviruddhaṃ viruddhesu attadaṇḍesu nibbutaṃ
sādānesu anādānaṃ tam ahaṃ brūmi brāhmaṇaṃ.
妨げあう者達の中にいて，妨げられない人であり，
暴力に訴えようとする人々の中にいて nibbuta である，
取り込みを有する人たちの中で取り込みを持たない人，
その人を私は[真の]バラモンと言う．

Sn 638　yo imaṃ[109] palipathaṃ duggaṃ saṃsāra-m-oham[110] accagā

---

[108] Sn 646 の注で中村 1984 p. 363 は「ジャイナ教でもブッダと呼ばれる修行者を讃えていることに注意(それは釈尊を讃えているのではない)」と，Utt. XXV 34 ジャイナ教教祖のジナがブッダと呼ばれる例をあげる．また Sn 650「行為によってバラモンとなる」についても，中村 1984 p. 364 は，Utt. XXV 33, MBh III 261, 15 をあげ，「こういう表現は当時どの宗教においてでも，自由思想家たちによってなされていたのである」と記す．Sn 655 に関しても中村 1984 p. 364 は，「tapa, brahmacariya, dama はウパニシャッドに述べられている修行であり，制戒 saṃyama は叙事詩に説かれている．何ら仏教特有のものではない」「tapas はジャイナ教でいう苦行」．中村 1984 p. 365 Utt. XXV 22「自己に打ち勝ち，痩せて血肉を減らし，よく誓戒をまもり，ニルヴァーナに達した苦行者」と当時の状況を説明する．しかし，散文部分では，バラモン青年二人が世尊を尋ね，説法を聞き，在家信徒となるという展開から，世尊が説いた教えが，他より優れたものであることを本経は示そうとしていると思われる．Cf: Sn 228「ゴータマの教え」Gotamasāsana と世尊の教えが他の教えより優れていることを示す．榎本 2012 p. 155 は，「仏教が誕生する遥か以前からインドで行われていたヴェーダ祭式」においては，「火が消えることは不吉な現象として忌み嫌われていたのである．ところが，初期仏教(やジャイナ教，後にはヒンドゥー教)では，火が消える涅槃が，修行の目的，究極の幸福と捉えられた．涅槃は古代インドにおける価値観の逆転現象の象徴である」と説明する．

[109] Be: maṃ.

[110] Ee; Be; Se: saṃsāram moham を saṃsāra-m-oham (< ogham)と理解．この理解での和訳は荒

tiṇṇo pāragato[111] jhāyī anejo akathaṃkathī
anupādāya nibbuto tam ahaṃ brūmi brāhmaṇaṃ.
この障害であり困難である輪廻という激流を超え進んで, 渡り終え,
向こう側へ達した. 禅定に励みつつ, 不動にして, ああだこうだと
疑うことなく, 取り込むことなく nibbuto である／した.
その人を私は[真の]バラモンと言う.

パラレル

本経パラレル: MN 98 経(II p. 196)と同一(PTS 版は Sn に同じとの記載のみでテキスト省略). その註釈 Ps III pp. 431 – 443 は, Pj の本経の註釈とは同一でない(下記参照).

Sn 620 – 647 の 28 偈は Dhp 396 – 423 (26. Brāhmaṇa-vagga 14 – 41) と同一, Skt. Udv (XXXIII Brāhmaṇa-vagga), GDhp (I Brammaṇa), BHSDh (III Brāhmaṇa) 等にも対応する偈がある. さらにジャイナの聖典 Utt. 25 の中にも本偈と同じように「その人を我々はバラモンと呼ぶ」で終わる十数偈中, 数偈は本経の偈と内容的に対応している(中村・及川 1988 III p. 370 n.l).

Sn 630 と Dhp 406 はパラレルで同一. Dhp Brāhmaṇavagga「バラモンの章」は最後の 41 偈(Dhp. 383 – 423)であり, 本経 Sn 620 - 656 と共通偈が多い. 但し, Dhp は韻文のみ. Sn 本経は散文を含み, バラモン青年二人が世尊を尋ね, 説法を聞き, 在家信徒となるという説話･物語的要素がある. 両経とも伝統的バラモンに対し, [真の]バラモン, つまり修行完成者とは, という仏教思想を説く内容である. Sn 散文では在家信徒になるという話であるが, 韻文は在家の功徳を説く内容ではない. 両経韻文中に anāgāro paribbaje「家なき者として遊行するがよい」と(Sn 639 = Dhp 415 および Sn 639 = Dhp 416), 内容的には出家を勧めている部分もあり, 韻文と散文の内容に少し相違が見られる.

Sn 630, 638 nibbuto のところ, Udv XXXIII: nirvṛta, 漢訳『法句経』巻下, 梵志品(『大正 4, 572 下, 573 上』)他 nibbuto にあたる訳語なし(村上・及川 1988 pp. 379 – 380, 387 – 388 参照).

牧・本庄・榎本 2015 p. 163. パーリに異読はないが, sk. Udv XXXIII: saṃsāraugham. 註釈 Pj II p. 469 は「この熱望という障害と煩悩という困難と輪廻転生と四諦を洞察しない迷妄を超えて」(yo bhikku *imaṃ* rāga*palipathañ* c' eva kilesa*duggañ* ca *saṃsāra*vaṭṭañ ca catunnaṃ saccānaṃ appaṭivijjhanaka*mohañ* ca atīto)と理解. 註釈と同じ理解の翻訳は, 中村 1984 p. 139, Norman 2006 p. 79. Norman (p. 276)は Udv を注記.

[111] Be: pāraṅgato.

註釈 Pj II pp. 462 – 472:

Sn 630 パラレルの註釈 MN-a (Ps) III p. 438: kilesa-nibbānena nibbutaṃ「煩悩が消えることによって涅槃した状態である」と説明.

Sn 638 Pj II p. 469:

> upādānānaṃ abhāvena *anupādi*yitvā kilesa-nibbānena *nibbuto, taṃ ahaṃ brāhmaṇaṃ* vadāmī ti attho.
> 取り込むことが存在しないことによって, anupādi〈取り込まなく〉なって, 煩悩が消えることによって nibbuto, taṃ ahaṃ brāhmaṇaṃ〈涅槃した状態である, その人を私は[真の]バラモンと〉言う, という意味である.

経典名

Ch. 3 Mahāvagga, 11. Nālakasutta (679 – 723) 偈文 pp. 131 – 139
[本論 2. 2. 3. 1.参照]

該当用例

nibbuto 707-d 世尊の言葉

本経の概要

本経は, 前半 18 偈はアシタ仙の予言を伝える仏伝部分, 後半はナーラカと世尊との問答である. ナーラカがアシタ仙の言った通りとなったと告げて(Sn 699), 托鉢修行を行うにあたり, muni「寡黙の聖者」の在り方について世尊に問う(Sn 700). そして世尊(Sn 701: ti Bhagavā)が答える偈文経典である.

該当偈

Sn 707 ūnūdaro[112] mitāhāro appicch' assa alolupo,
sa ve[113] icchāya nicchāto aniccho[114] hoti nibbuto.
腹を満たさず, 食を制限し, 少欲で, 欲張らない者であれ.
そういう人は, 欲に対して貪欲でなく, 無欲で,
nibbuta となる(である).

---

[112] Se: onodaro.
[113] Be; Se: sadā.
[114] スリランカ版: anicchā.

パラレル

本経パラレル: Mahāvastu (Mv) III 382 – 389 および『仏本行集経』巻 38 (『大正』3, 829 下 – 830 下)は相当する内容を含むが, 序偈に相当するものはいずれにもない(村上・及川 1988 p. 487 n. 1).

Sn 707 nibbuto に対応する語は, Mv III p. 388 nirvṛto;『仏本行集経』巻 38(『大正』3, 380 中)対応漢語「解脱」.

註釈 Pj II pp. 483 - 501:

Sn 707 nibbuto の註釈 Pj II P. 495:

> evaṃ nicchātattā nibbuto' hoti vūpasantakilesaparilāho[115]
> このように貪欲でないため涅槃した状態となり, 煩悩の燃焼が鎮まっている.

本経中注釈が涅槃の用語を使用して説明した箇所:

Pj II p. 483「アシタ仙の甥がナーラカという苦行者」であり(Asitassa isino bhāgineyyo Nālako nāma tāpaso),「世尊が般涅槃された時, 結集を行っていたマハーカッサパ尊者によってアーナンダ尊者は他ならぬその寡黙の聖者の修行について質問され(parinibbute pana Bhagavati saṅgītiṃ karontenāyasmatā Mahākassapena āyasmā Ānando tam eva moneyyapaṭipadaṃ puṭṭho), アーナンダ尊者が本経を説いたと説明.

Sn 683 の註釈 Pj II p. 486:

> so hi buddhattaṃ patvā tathā dhammaṃ desessati, yathā mayañ ca aññe ca devagaṇā sekhāsekhabhūmiṃ[116] pāpuṇissāma, manussā pi 'ssa dhammaṃ sutvā, ye na sakkhissanti parinibbātuṃ, te dānādīni katvā devaloke paripūressantī.
> なぜなら彼は目覚めた境地を獲得して, 我々(神々)と他の神々の群衆が有学あるいは無学の境地に達するであろうように, そのようにダルマ(教え)を示すであろう. 人々もまたそのダルマを聞いて, 般涅槃することができない者達は, 布施などを行って, 神々の諸世界を満たすだろう.

註釈は, 無学を得れば般涅槃に至るが, その域に達しない有学のままであれば, 布施を行うことで天界に生まれる, と説明する.

Sn 693 paramavisuddhadassī「最上の清浄を見るお方」について註釈 Pj II p. 489 は「涅槃を見るお方」(nibbānadassī) と解説.

---

[115] Be: vūpasantasabbakilesaparilāho.
[116] Be: sekkhāsekkha-.

Sn 696「ダルマの道を」(dhammamaggaṃ)について註釈 Pj II pp. 489 – 490 は「〈ダルマの道を〉とは，最上のダルマである涅槃の道を，あるいは〈最高のダルマを〉とは，洞察智を伴う涅槃を」(*dhammamaggan* ti paramadhammassa nibbānassa maggaṃ, *dhammaṃ* vā *aggaṃ* saha paṭisambhidāya[117] nibbānaṃ)と最高のダルマを涅槃と説明する.

本経註釈の最後 Pj II p. 501 に，質問者ナーラカのその後が記されていて，寡黙の聖者となり，行を行い，anupādisesāya nibbānadhātuyā parinibbāyi「燃料の残余のない(無余依)涅槃界に般涅槃した」と記述．これはナーラカの命終を表す．その後世尊は遺体の葬儀(sarīrakicca)を行って，遺骨(dhātu)を拾わせ，塔廟(cetiya)を建てさせて立ち去った，と説明する.

経典名

Ch. 3: Mahāvagga, 12: Dvayatānupassanāsutta「二種の考察経」(Sn 724 – 765)
散文＋偈文　pp. 139 - 150
[本論 2. 2. 3. 3.参照]

該当用例

parinibbuto　735-d = 739-f
parinibbutā　737-d = 758-d
parinibbuto　739-f = 735-d
nibbānaṃ 758-a
parinibbutā　758-d = 737-d
parinibbanti　765-d

本経の概要

本経では，二様の考察によってダルマ(真理・法則性)を正しく理解するよう世尊が参集した托鉢修行者達に語る．ほぼ同じ形式の導入(散文)後，関連する世尊の説法が偈文で続く．苦しみがある状態と苦しみが生じない状態(二様)を主題として，苦しみの原因として，所有物(upadhi)，無明(avijjā)，形成作用(saṃkhāra)，識(viññāṇa)，接触(phassa)，感受(vedanā)，渇愛(taṇhā)，燃料(upādāna)，悪行(ārambha)，糧(āhāra)，動揺(iñjita)等，縁起説や五蘊の要素も一部出てくる．また，繰り返される散文では，「托鉢修行者達よ，このように二種の考察を正しく行い，うつつを抜かすことなく，熱心に，自己を奮い立たせて励んでいる托鉢修行者には，二種の

[117] Be: paṭipadāya.

果報のうちのいずれかの果報が期待される. 現世での理解, あるいは, 燃料の残余があれば不還の状態である(p. 140 他)」(evaṃ sammā-dvayatānupassino kho bhikkhave bhikkhuno appamattassa ātāpino pahitattassa viharato dvinnaṃ phalānaṃ aññataraṃ phalaṃ pāṭikaṃkhaṃ: diṭṭhe va dhamme aññā, sati vā upādisese anāgāmitā)と修行の成果についても 2 種語られる.[118]

このように散文では「現世の悟り, あるいは燃料の残余があれば不還の状態である」と説かれるが, 続く偈文群では, 不還の思想は表されず, [般]涅槃かそうでないかの文脈で語られ, 散文部分と韻文部分が一致してないことが示唆される.[119]

該当偈

Sn 735 etam ādīnavaṃ ñatvā 'dukkhaṃ viññāṇapaccayā'
viññāṇūpasamā[120] bhikkhu nicchāto parinibbuto [ti].
「認識機能に依って苦が[生じる]」という, このことを患いだと理解して,
認識機能の鎮まり故に, 托鉢修行者は, 欲望なく, parinibbuta である.

Sn 737 ye ca phassaṃ pariññāya aññāya[121] upasame[122] ratā,
te ve[123] phassābhisamayā nicchātā parinibbutā [ti].
そして, 接触を完全に認識して, 理解して, 鎮まりを楽しんでいる,
そういう人々は, まさに接触を洞察していて, 欲望なく,
parinibbuta である.

Sn 739 etaṃ 'dukkhan' ti ñatvāna mosadhammaṃ palokinaṃ
phussa phussa vayaṃ passaṃ evaṃ tattha virajjati,[124]
vedanānaṃ khayā [125]bhikkhu nicchāto parinibbuto [ti].

---

[118] 本経では数字をもって整えられる諸教理へと後に展開する教えが説かれている. 散文部分では四向四果, 韻文部分からは縁起説(例:「十二因縁」)である. 荒牧 1988 pp. 91- 92 は本経を「『四つの根本真理(四諦)』の仏教教理を確立しようとする」「最新層の韻文経典群」の一経と位置づける.

[119] 村上・及川 1988 p. 534 n. 1 は「散文部分は本経特有であるらしい. してみると, 本経の偈の方が古い素材なのであろう」, さらに偈文は個別に説かれていた教えを集めたもので, 偈の収集後に散文が追記された可能性を指摘する.
不還(anāgami(n))および不還の境地(anāgamitā)は Sn では本経以外見出せない.

[120] Be; Se: viññāṇūpasamā.

[121] Se: paññāya.

[122] Be: aññāyupasame.

[123] Se: tepi.

[124] Be; Se: vijānati.

[125] Se: yeva natthi dukkhassa sambhavoti.

[Sn 738　感受されるものは何であれ]
壊れることになる虚妄なもので, このものは「苦しみ[である]」と
理解して, 触り触っては, 消滅を見つつ, このようにそこから心離れる.
諸々の感受機能の滅ゆえに, 托鉢修行者は, 欲望なく, parinibbuta である.

Sn 758　amosadhammaṃ nibbānaṃ tad ariyā saccato vidū,
te ve saccābhisamayā nicchātā parinibbutā [ti].
虚妄ではないダルマ(真理・法則性)である nibbāna を,[126]
それを立派な人達は真実と知る. 彼らは, まさに真実を洞察して,
欲望なく, parinibbuta である.

Sn 765　ko nu aññatra-m-ariyehi[127] padaṃ sambuddhum[128] arahati,
yaṃ padaṃ samma-d-aññāya parinibbanti anāsavā [ti].
立派な人達でなければ誰が, [この]境地を
完全に覚ることができるのか.
そういう境地を正しく理解して, 無漏者達は parinibbā する.[129]

熱心に修行していても, 現世で āññā「理解」が得られない場合は, anāgāmin「不還[二度とこの世に戻ることがない]」と散文で繰り返し述べられていることから, 本経散文の成立背景には, 多くの修行者が世尊のもとにいて, その中には, 現世で阿羅漢に至れないものも少なからずいたこと, そして阿羅漢に至れないとしても, 修行は無ではない, と散文で伝える必要があったことが窺える.

パラレル

Sn 724 – 727: SN V p. 433 = It p. 106, 『雑阿含』392; Sn 740 – 741: AN II p. 10 = It p. 9; Sn Sn 759 – 765: SN IV pp. 127 – 128, 『雑阿含』308.　(村上・及川 1998 p. 534)
Sn 735-d = 739-f　SN iii 26; iv 204, Thīg 53b (矢島 1997 p. 69)

---

[126] MN III, p. 245, 140: dhātuvibhaṅgasutta「界分別経」に amosadhammaṃ nibbānaṃ が Sn 758 abc 句と同様の散文文脈で現れるが, 亡くなったブックサーティのことを, 世尊が「化生者[となり]そこで(天界で)般涅槃[となり]その世界から戻らない者[となった]」(opapātiko tattha parinibbāyī anāvattidhammo tasmā loke)と語るため, pari 付き用例は, 天界での「命終」を示す. 本経には, 灯火が消える譬えが出てくる.
[127] Se: aññatra ariyehi.
[128] Se: sambuddham.
[129] 藤田 1988b p. 7 は,「原始経典では般涅槃の語を現世のそれと見るか, 死後のそれと見るか判断がつきかねる場合もある」その例として本偈と註釈 Pj II p. 510 を挙げ, 両義での解釈が可能とする.

Sn 737-d = 758-d　Thī 53b; 132b

Sn 739-f = 735-d　　It 48; 49, Thī 53b; 132b

Sn 758-d = 737-d; Sn 758 abc 句: MN III, p. 245 に同様概念が散文で説かれる.

Sn 765-d　Vin ii 148, A iii 41; 43; 347; iv 98, Dh 126d, Thag 100d; 346f; 672d; 704d; J i 94; Netti 94, 2d (矢島 1997 p. 71)

註釈 Pj II pp. 501 – 510 :

散文部分 p. 140 他: upādisese の註釈 Pj II p. 504:

> *sati vā upādisese anāgāmitā* ti, upādisesan ti punabbhavavasena upādātabbakkhandhasesaṃ vuccati, tasmiṃ vā sati anāgāmibhāvo paṭikaṃkhoti[130] dasseti.
>
> sati vā upādisese anāgāmitā〈あるいは, 燃料の残余があれば不還の状態である〉と, 燃料の残余とは, 再生によって取り込まれるべき蘊(心身の構成要素)の残余が言われる. あるいは, それ(蘊)がある場合, 不還となることが期待されると示す.

Sn 735: parinibbuto の註釈 Pj II p. 506:

> *parinibbuto* ti kilesaparinibbānena parinibbuto hoti
>
> parinibbuto〈般涅槃した状態である〉とは, 煩悩が完全に消えることによって般涅槃した状態になる

Sn 737 の註釈 Pj II p. 506:

> *upasame ratā* ti phalasamāpattivasena nibbāne ratā; *phassābhisamayā* ti phassanirodhā
>
> upasame ratā〈鎮まりを楽しんでいる〉とは, 果定に入ることによって, 涅槃を楽しんでいる; phassābhisamayā〈接触を洞察して〉とは接触を滅していること

Sn 765: parinibbanti の註釈 Pj II p. 510:

> pacchimagāthāya sambandho: evaṃ asusambudhañ[131] ca[132] ko nu aññatra-m-ariyehī ti. tass' attho: ṭhapetvā ariye ko nu añño nibbāna*padaṃ* jānituṃ *arahati*, yam padaṃ catutthena ariyamaggena *sammad aññāya* anantaram eva *anāsavā*

---

[130] Be: paṭikaṅkhoti.

[131] 註釈スリランカ版: asusambuddhañ.

[132] Be: ca 省略.

hutvā kilesaparinibbānena *parinibbanti*, sammad aññāya vā anāsavā hutvā ante anupādisesāya nibbānadhātuyā parinibbantī ti arahattanikūṭena desanaṃ niṭṭhapesi[133].

最後の偈の関係性は[次の通り], そして, このように, 善い完全な覚りでないことを, 立派な人達以外に誰がと. その意味は[次の通り], 立派な人達以外に誰が涅槃の〈境地を〉理解することが〈できるのか〉. その境地を第 4 の立派な人にとっての道(四諦)によって〈正しく理解して〉まさに直ちに漏尽者となり, 煩悩が消えることによって〈般涅槃する〉. あるいは, 正しく理解して漏尽者となり, 最期において燃料の残余のない(無余依)涅槃界へと般涅槃すると, 阿羅漢の頂点によって説示を終わらせた.

涅槃に関連するその他の注釈の説明

≪苦しみが全て残りなく停止するところが涅槃≫

Sn 724 Pj II p. 504:

tattha *yattha cā* ti nibbānaṃ dasseti. nibbāne hi *dukkhaṃ sabbaso uparujjhati* sabbappakāraṃ uparujjhati sahetukaṃ uparujjhati asesañ ca uparujjhati; *tañ ca maggan* ti tañca aṭṭhaṅgikaṃ maggaṃ.

そこで, yattha cā〈そして・・するところ〉とは涅槃を示す. 何故なら, 涅槃において dukkhaṃ sabbaso uparujjhati〈苦しみが全て停止する〉からである. あらゆる種類[の苦しみ]は停止し, 原因を伴う[苦しみ]は停止し, そして残りなく停止する. tañ ca maggan〈そしてその道〉とは, 八支の道である.

≪誕生の滅が涅槃≫

Sn 743 Pj II p. 507:

upādānakkhayā jātikkhayaṃ nibbānam *abhiññāya nāgacchanti*[134] punabbhavan ti

燃料が滅する故に誕生が滅した涅槃を理解して再生へと向かわない

≪五蘊の滅が涅槃≫

Sn 761 sukha「楽」の註釈 Pj II p. 509:

'sukhan' iti ariyehi pañcakkhandhanirodho diṭṭho, nibbānan ti vuttaṃ hoti

五蘊の滅が「安楽である」と, 立派な人達によって見られた. 涅槃である

[133] Be: niṭṭhāpesi.
[134] Be: na gacchanti.

と言われている

Sn 725 cetovimutti, paññāvimutti 註釈 Pj III p. 504 は，心解脱／慧解脱に 3 種の解釈 (1: [生前に涅槃を得て]阿羅漢の精神統一／阿羅漢の理解力; 2: 熱望から離れた阿羅漢果／無明から離れた阿羅漢果; 3: 心解脱で不還→慧解脱で阿羅漢となること) をあてる. 1, 2 説は両語とも阿羅漢の状態と説明するが, 3 つめで異なる説を示す:

> *cetovimuttihīnā te atho paññāvimuttiyā* ti ettha arahattaphalasamādhi rāgavirāgā cetovimutti, arahattaphalapaññā avijjāvirāgā paññāvimuttī ti veditabbā, taṇhācaritena vā appanājhānabalena kilese vikkhambhetvā, adhigataṃ arahattaphalaṃ rāgavirāgā cetovimutti, diṭṭhicaritena upacārajjhānamattaṃ nibbattetvā vipassitvā adhigataṃ arahattaphalaṃ avijjāvirāgā paññāvimutti, anāgāmiphalaṃ vā kāmarāgaṃ sandhāya rāgavirāgā cetovimutti, arahattaphalaṃ sabbappakārato avijjāvirāgā
>
> cetovimuttihīnā te atho paññāvimuttiyā〈彼らは，心解脱なく，慧解脱もない〉と，これは，熱望から離れた心解脱である阿羅漢果の精神統一であり，無明から離れた慧解脱である阿羅漢果の理解力であると知られるべきである．あるいは，渇愛行動者が安止定の力によって，諸煩悩が絶たれて，熱望から離れた心解脱である阿羅漢果へ至った状態であり，見解行動者が近行定のみを行って，観察して，阿羅漢果である無明から離れた慧解脱である阿羅漢果へと至った状態である．あるいは，欲望や熱望に関して熱望から離れた心解脱である不還果であり，あらゆる在り方で無明から離れた慧解脱である阿羅漢果である

付録3　Sn以外の用例リスト

Sn以外		*fire; ✓涅槃, △涅槃か？ ( )間接的			文脈	涅槃の時点								Note: Sutta	Comm.	時点
用例#	sutta	title	用例	spoken by		Life	End	煩悩滅	無所有	取り込まず	島	理解力	生死停止	その他	Life	End
古層		Dhp 134	nibbānaṃ		Life	△								怒りが見られない		
古層		Thī 45	nibbānapattiyā	別ウッタマー	△	✓	✓							涅槃を得るための道 = 悟りの主要部分, 命終の涅槃の可能性有		
古層		Thī 46	nibbānābhiratā	別ウッタマー	Life	✓	✓									
古層		Thī 450	nibbānābhiratā	スメーダー	Life	✓	✓							涅槃前,		
古層		Thī 476	nibbānasukhā	スメーダー	△	✓	✓				✓			～の他には[救護所(tāṇa)は]ない		
古層		Thī 517	nibbānaṃ āsi	スメーダー	Life	✓						(✓)		Thī 516: abhijñā sacchikatā		
古層		Th 905	parinibbuto	アヌルッダ	End		✓							世尊の命終時		✓
古層		Th 907	parinibbute	アヌルッダ	End		✓						(✓)(1)	世尊の命終時, Th 908, (1)の解釈: 次生での老死つまり輪廻を止めること		✓
古層		DN II p. 136G	nibbuto	Bhagavā	Life	✓		✓						rāgadosamohakkhayā		
古層		Thī 101	nibbutā	サクラー	Life	✓		✓		✓				pahāsiṃ āsave sabbe sītibhūta	✓	
古層		Th 725	nibbānapadaṃ	アディムッタ	Life	✓								涅槃の境地	✓	
古層		Th 1263 (= Sn 343)	abhinibbutatto	Inquirer	Life	△								師の生前	✓	
古層		Ud III p. 29偈文	abhinibbutatto	Bhagavā	Life	✓		✓						[真の]バラモン	✓	
古層	277	Ja II p. 383	abhinibbutattā	苦行者	Life	×								鳥のこと		
古層	303	Ja III p. 14	abhinibbutattā	ダッパセーナ王	Life	△								[不明]涅槃か？ 苦楽等しい		
古層		MN I p. 187G	diṭṭhadhammābhinibbutā	Bhagavā	Life	✓				✓			✓(2)	anupādā vimuccanti jātimaraṇasaṃkhaye		
古層		上記パラレル	AN I p. 142G; III p. 311G		Life	✓								te khemapattā sukhino		
説一切有部	30	Ud-v I p. 396	dṛṣṭadharmābhinirvṛtāh		Life	✓		✓						tīrṇā loke viṣaktikām		
古層		SN I p. 1G	parinibbutaṃ	神格	Life	✓		✓						世尊のこと, tiṇṇam loke visattikan		
古層		SN I p. 186G	nibbānagamanaṃ	ヴァンギーサ	△	✓	✓								△	△
古層		SN I p. 187G	parinibbuto	ヴァンギーサ	Life	✓		✓						渇望なく, 時(命終)を待つ	✓	
古層		Th 1218	上記パラレル		Life	✓									✓	
古層		Th 32	nibbutiṃ	スッピヤ	△	✓	✓							人の中の「火が消える」, santi	✓	
古層		Th 418	nibbutiṃ	ミガジャーラ	△	✓	✓	✓						taṇhāmūlavisosano	✓	
古層		Ja III p. 523	nibbutiṃ		△	✓	✓							楽しみつつ (= Sn 228)		
古層		Th 586	nibbutiñ	ウパセーナ	△	✓	✓			✓				漏尽, ～ adhigacchati		
古層		上記パラレル	Ja VI pp. 437; 442		△	✓	✓									
古層	26	MN I p. 171G	nibbuto	Bhagavā	Life	✓						✓		eko 'mhi sammā sambuddho, sītibhūto, 'smi		

付録3　Sn以外の用例リスト

DN16経以外		*fire; ✓涅槃, △涅槃か？ ( )間接的			文脈	涅槃の時点								Note: Sutta	Comm.	時点
	sutta	title	用例	spoken by		Life	End	煩悩滅	無所有	取り込まず	島	理解力	生死停止	その他	Life	End
散文		SN IV pp. 251, 261	nibbānan	Sāriputta	△	✓	✓	✓						rāgakkhayo dosakkhayo mohakkhayo idaṃ vuccati nibbānanti	✓	
散文		同上	nibbānassa	同上	Life	✓	✓							sacchikiriyāya 目の当たりにするため		
散文	26	MN I p. 163	nibbānaṃ	Bhagavā	Life	✓	✓							pariyesati: 求める		
散文	26	MN I p. 167	nibbānaṃ	Bhagavā	Life	✓	✓					✓	✓	ahaṃ 〜 ajjhagamaṃ, 理解力と見が生じた. もはや再生はない	✓	
散文	26	MN I p. 167	nibbānaṃ	Bhagavā	△	✓	✓	✓						涅槃は見難い		
散文	51	MN I p. 340	nibbānassa	Pessa	Life	✓	✓	✓				✓		sacchikiriyāya, nibbutaとの併用から生前の涅槃の可能性大		
散文	51	MN I p. 341他	nibbuto	Bhagavā	Life	✓		✓						nicchāto nibbuto sītībhūto	✓	
散文	24	MN I p. 148他	anupādā parinibāna	Puṇṇa	Life	✓	✓			✓				生前の涅槃の可能性大	✓	
散文	140	MN III p. 245	nibbānaṃ	Bhagavā	△	✓	✓					✓		= amosadhammaṃ: 真実, 理解力を得る		
散文	140	MN III p. 244	parinibbāyati	Bhagavā	Life	✓	✓	✓				✓		執着しない, 動揺しない, 再生はないと理解する.　生前の涅槃の可能性大		
散文	65	MN I p. 446	parinibbāyati	Bhagavā	Life	×								馬		
散文	65	MN I p. 446	parinibbuto hoti	Bhagavā	Life	×								馬		
散文	140	MN III p. 247	parinibbāyī	Bhagavā	来世									化生者[となり], そこで		
散文	17	DN II p. 200他	parinibbāyino	Bhagavā	来世									化生者[となり], そこで		
散文	18	DN II p. 252	parinibbāyino	Bhagavā	来世									同上		
散文	60	MN I pp. 412-3	nibbuto	Bhagavā	Life	✓		✓						MN I p. 341のパラレル		
散文	60	MN I p. 411	parinibbāyissāmi	Bhagavā	Life	✓	✓						✓	diṭṭhe va dhamme, 来世や神格との対比		
散文	5	SN IV p. 102	parinibbāyati	Bhagavā	Life	✓		✓		✓				diṭṭheva dhamme	✓	
散文	25	DN III p.55	parinibbuto	Bhagavā	Life	✓								世尊のこと	✓	
散文	25	DN III p.55	parinibbānāya	Bhagavā	Life	✓	✓							生前の涅槃の可能性大		
散文	1	DN I p. 38他	nibbuti		Life	✓	✓			✓		✓		如来, 〜viditā	✓	
散文	24	DN III p. 28他	nibbuti		Life	✓	✓					✓		三明を理解する	✓	
散文		MN I p. 323	nibbuti		Life	△	△					✓		samatha, 得ると理解することが預流果の条件		

付録4 大般涅槃経用例リスト

用例#	page	line	title	用例	spoken by	sutta		Note	Comm.
				✓該当		Life	End		Note
Mahāparinibbāna-suttanta (DNII pp. 72 - 168) 大般涅槃経									
DN 16									
1-pari1	72	1	sutta title	Mahāparinibbāna	NA		✓		
2-pari2	92	16		parinibbāyinī	Bhagavā		✓	化生者 opapātika となり	
3-pari3		24		parinibbāyī	Bhagavā		✓		
4-pari4		25		parinibbāyī	Bhagavā		✓		
5-pari5				parinibbāyī	Bhagavā		✓		
6-pari6		26		parinibbāyī	Bhagavā		✓		
7-pari7				parinibbāyī	Bhagavā		✓		
8-pari8		27		parinibbāyī	Bhagavā		✓		
9-pari9		28		parinibbāyī	Bhagavā		✓		
10-pari10		30		parinibbāyī	Bhagavā		✓		
11-pari11	93	3		parinibbāyino	Bhagavā		✓		
12-pari12	99	9		parinibbāyeyyaṃ	Bhagavā		✓	ahaṃ	
13-pari13		9		parinibbāyissati	Ānanda		✓		
14-pari14	104	16a		parinibbātu	Māro		✓		
15-pari15		16b		parinibbātu	Māro		✓		
16-pari16		17		parinibbāna-kālo	Māro		✓		
17-pari17		19		parinibbāyissāmi	Māro		✓	ahaṃ 世尊の言葉を魔が	
18-pari18	105	5		parinibbātu	Māro		✓	(以下繰り返し)	
19-pari19		6		parinibbātu	Māro		✓		
20-pari20		6		parinibbāna-kālo	Māro		✓		
21-pari21		9		parinibbāyissāmi	Māro		✓		
22-pari22		24		parinibbātu	Māro		✓		
23-pari23		25		parinibbātu	Māro		✓		
24-pari24		25		parinibbāna-kālo	Māro		✓		
25-pari25		28		parinibbāyissāmi	Māro		✓		
26-pari26	106	4		parinibbātu	Māro		✓		
27-pari27		5		parinibbātu	Māro		✓		
28-pari28		5		parinibbāna-kālo	Māro		✓		
29-pari29		8		parinibbāyissāmi	Māro		✓		
30-pari30		14		parinibbātu	Māro		✓		
31-pari31		14		parinibbātu	Māro		✓		
32-pari32		15		parinibbāna-kālo	Māro		✓		
33-pari33		19		parinibbānaṃ	Bhagavā		✓	如来の般涅槃 bhavissati (以下同)	
34-pari34		20		parinibbāyissatīti	Bhagavā		✓	如来の般涅槃	

付録4 大般涅槃経用例リスト

用例#	page	line	title	用例	spoken by	sutta		Note	Comm.
				✓該当		Life	End		Note
35	109	1	定型句	anupādisesāya nibbāna-dhātuyā					
36-pari35		1		parinibbāyati	Bhagavā		✓		
37-pari36	112	26		parinibbātu	Māro		✓		
38-pari37		26		parinibbātu	Māro		✓		
39-pari38		27		parinibbāna-kālo	Māro		✓		
40-pari39		30		parinibbāyissāmi	Bhagavā		✓		
41-pari40	113	4		parinibbāyissāmi	Bhagavā		✓		
42-pari41		12		parinibbāyissāmi	Bhagavā		✓		
43-pari42		20		parinibbāyissāmi	Bhagavā		✓		
44-pari43		28		parinibbāyissāmi	Bhagavā		✓		
45-pari44		36		parinibbātu	Māro		✓		
46-pari45		36		parinibbātu	Māro		✓		
47-pari46		37		parinibbāna-kālo	Māro		✓		
48-pari47	114	1		parinibbāyissāmi	Māro		✓	魔が世尊の言葉を語る	
49-pari48		15		parinibbātu	Māro		✓		
50-pari49		16		parinibbātu	Māro		✓		
51-pari50		16		parinibbāna-kālo	Māro		✓		
52-pari51		18		parinibbāyissāmi	Māro		✓		
53-pari52		26		parinibbātu	Māro		✓		
54-pari53		26		parinibbātu	Māro		✓		
55-pari54		27		parinibbāna-kālo	Māro		✓		
56-pari55		30		parinibbānaṃ	Bhagavā		✓	如来	
57-pari56		31		parinibbāyissatīti	Bhagavā		✓	如来	
58-pari57	118	34		parinibbānaṃ	Bhagavā		✓	繰り返し	
59-pari58	119	2		parinibbāyissatīti	Bhagavā		✓		
60-pari59	120	15		parinibbānaṃ	Bhagavā		✓		
61-pari60		16		parinibbāyissatīti	Bhagavā		✓		
62-pari61	123	11	verse	parinibbuto	Bhagavā	✓	✓	古層: 涅槃の時点は不明	kilesa
63	134	7	定型句	anupādisesāya nibbāna-dhātuyā					
64-pari62		7		parinibbāyati	Bhagavā		✓	如来	
65-pari63		12		parinibbānaṃ	Bhagavā		✓	如来	
66-pari64	135	22		parinibbuto	Bhagavā		✓	如来, アーナンダ→チュンダ	
67-pari65		26		parinibbuto	Bhagavā		✓	如来	
68	136	5	定型句	anupādisesāya nibbāna-dhātuyā					
69-pari66		5		parinibbāyati	Bhagavā		✓		
70		24	verse	nibbuto	Bhagavā	✓		rāgadosamohakkhayā	kilesa

付録4 大般涅槃経用例リスト

用例#	page	line	title	用例	spoken by	sutta		Note	Comm.
				✓該当		Life	End		Note
71-pari67	139	23		parinibbānaṃ	Bhagavā		✓	如来	
72-pari68	140	2		parinibbāyissati	Bhagavā		✓	devatāの言葉を世尊が語る	
73-pari69		2		parinibbāyissati	Bhagavā		✓		
74-pari70		7		parinibbāyissati	Bhagavā		✓		
75-pari71		7		parinibbāyissati	Bhagavā		✓		
76		28	定型句	anupādisesāya nibbāna-dhātuyā					
77-pari72		29		parinibbuto	Bhagavā		✓	如来	
78	141	7	定型句	anupādisesāya nibbāna-dhātuyā				繰り返し	
79-pari73		8		parinibbuto	Bhagavā		✓		
80-pari74	143	22		parinibbānaṃ	Ānanda		✓	師の(Satthu)般涅槃	
81-pari75		28		parinibbānaṃ	bhikkhū		✓	アーナンダの言葉を語る	
82-pari76	146	13		parinibbāyatu	Ānanda		✓	mā	
83-pari77		16		parinibbāyatu	Ānanda		✓	mā	
84-pari78	147	14		parinibbānaṃ	Bhagavā		✓	如来	
85-pari79		29		parinibbānaṃ	Bhagavā		✓	繰り返し	
86-pari80		17		parinibbānaṃ	Bhagavā		✓	如来, マッラ族の言葉を語る	
87-pari81	148	1		parinibbānaṃ	Ānanda		✓	世尊の言葉ahosi（命終後を想定）	
88-pari82		8		parinibbāyissati	Mallā		✓	世尊の般涅槃	
89-pari83		8		parinibbāyissati	Mallā		✓		
90-pari84		31		parinibbānaṃ	伝聞		✓	発話者記述なし bhavissati（以下同）	
91-pari85	149	6		parinibbānaṃ	Subhadda		✓	沙門ゴーダマ	
92-pari86		18		parinibbānaṃ	Subhadda		✓	繰り返し	
93-pari87	150	1		parinibbānaṃ	Subhadda		✓		
94-pari88	156	17		parinibbuto	Ānanda		✓	世尊	
95-pari89		18		parinibbuto	Anuruddha		✓		
96-pari90		34		parinibbāyi	説明部分		✓	世尊	
97-pari91		35		parinibbute	説明部分		✓		
98-pari92		35		parinibbānā	説明部分		✓		
99-pari93	157	1		parinibbute	説明部分		✓	世尊	
100-pari94		1		parinibbānā	説明部分		✓		
101-pari95		5	verse	parinibbuto	Brahmā		✓	Brahmā Sahampatiの偈頌	
102-pari96		6		parinibbute	説明部分		✓	世尊の般涅槃, Sakka偈頌	
103-pari97		6		parinibbānā	説明部分		✓		
104-pari98		10		parinibbute	説明部分		✓	parinibbute Bhagavati	
105-pari99		10		parinibbānā	説明部分		✓	saha parinibbānā	
106		15	verse	nibbānaṃ	Anuruddha		✓	＊灯火が消える譬え=Th 906	無余涅槃

付録4 大般涅槃経用例リスト

用例#	page	line	title	用例	spoken by	sutta		Note	Comm.
				✓該当		Life	End		Note
107-pari100		16		parinibbute	説明部分		✓	繰り返し	
108-pari101		16		parinibbānā	説明部分		✓	世尊　saha parinibbānā	
109-pari102		19	verse	parinibbute	Ānanda		✓	Sambuddhe parinibbute	
110-pari103		20		parinibbute	説明部分		✓	世尊	
111-pari104	158	1		parinibbuto	bhikkhū		✓	bhikkhū avīta-rāgā	
112-pari105		1		parinibbuto	bhikkhū		✓	世尊	
113-pari106		18		parinibbuto	devatā		✓		
114-pari107		18		parinibbuto	devatā		✓		
115-pari108		23		parinibbuto	devatā		✓		
116-pari109		23		parinibbuto	devatā		✓		
117-pari110		32		parinibbuto	Anuruddha		✓		
118-pari111	159	5		parinibbuto	Ānanda		✓	マッラ族(ヴァーセッタ達）へ	
119-pari112		12		parinibbuto	マッラ族		✓		
120-pari113		12		parinibbuto	マッラ族		✓		
121-pari114	162	17		parinibbuto	ājīvaka		✓	Gotamo, Mahā-Kassapaへ	
122-pari115		21		parinibbuto	bhikkhū		✓	世尊	
123-pari116		22		parinibbuto	bhikkhū		✓	bhikkhū avīta-rāgā	
124	164	21		nibbāpesi	説明部分			＊火を消す	
125		22		nibbāpesuṃ	説明部分			＊火を消す	
126-pari117		25		parinibbuto	説明部分		✓	世尊	
127-pari118		32		parinibbuto	説明部分		✓	繰り返し	
128-pari119	165	4		parinibbuto	説明部分		✓		
129-pari120		10		parinibbuto	説明部分		✓		
130-pari121		16		parinibbuto	説明部分		✓		
131-pari122		22		parinibbuto	説明部分		✓		
132-pari123		28		parinibbuto	説明部分		✓		
133-pari124	166	1		parinibbuto	説明部分		✓	世尊	
134-pari125		22		parinibbuto	説明部分				
135-pari126	168	5		parinibbāna				経典タイトル	

付録 5

DN II pp. 72 – 168 [16 経]: Mahāparinibbānasuttanta「大般涅槃経」

本経は「般涅槃」として世尊の命終が大きくクローズアップして描写され多用される. 世尊が命終を迎えるまでの様子を記した仏伝である.

DN の pari-付きの涅槃の語彙の用例は本経に集中する. DN index pp. 200 - 201 に記載された該当用例数に対し, DN 16「大般涅槃経」涅槃の語彙数は以下の通りである:

parinibbātu	全 18 例
parinibbāna	33 例中 32 例
parinibbāniko	5 例中 0
parinibbāpaya	1 例中 0
parinibbāpenti	1 例中 0
parinibbāyati	7 例中 3 例
parinibbāyatu	3 例中 2 例
parinibbāyi	3 例中 1 例
parinibbāyissati	全 11 例
parinibbāyissāmi	全 11 例
parinibbāyeyyaṃ	全 1 例
parinibbute	17 例中 7 例
parinibbuto	31 例中 30 例
parinibbāyī	15 例中 8 例
parinibbāyinī	全 1 例
parinibbāyino	6 例中 1 例

上記から, DN 全 34 経のうち, 如何に pari-が付された涅槃の語彙の使用が, 本経に集中しているかが見て取れる. DN 中涅槃の語彙全 164 例中 135 例が本経に現れる.

また本経中の涅槃の語彙全 135 例中 pari 付きの用例が 126 例(parinibbāyinī, parinibbāyino, parinibbāyeyyaṃ, parinibbāyissati, parinibbātu, parinibbāna(ṃ)/parinibbānā, parinibbāyissāmi, [定型句]: anupādisesāya nibbāna-dhātuyā parinibbāyati/parinibbuto, parinibbuto, parinibbāyatu, parinibbāyi, parinibbute)と頻出する. 本経のテーマであることもあり, 冒頭での化生者の説明以外, 全て世尊の命終を示す.

本経中 pari-が付されていない用例は, 定型句中の nibbāna (5 例)および世尊の火

葬薪の火が「消える」場面の動詞 nibbāpesi, nibbāpesuṃ, そして偈頌の中の nibbuto, nibbānaṃ である. 以下に個々の用例につき列挙する(本経では涅槃の語彙は和訳した).

1-pari1: p. 72: sutta title

Ch. 2

2-pari2: p. 92: parinibbāyinī　発話者: 世尊　化生者の命終

アーナンダが世尊に亡くなった人達の行き先(gati)・来世(abhisamparāya) について尋ね, 世尊が答える場面:

> Nandā Ānanda bhikkhunī pañcannaṃ orambhāgiyānaṃ saṃyojanānaṃ [1] parikkhayā opapātikā tattha – parinibbāyinī anāvattidhammā tasmā lokā.
> アーナンダよ, ナンダー比丘尼は, 5 つの下位の束縛の滅尽によって, 化生者[となり], そこで般涅槃者[となり], その世界から戻らない者[となった].

3-pari3: p. 92: parinibbāyī 発話者: 世尊, 化生者の命終:

> Kakudho Ānanda upāsako pañcannaṃ orambhāgiyānaṃ saṃyojanānaṃ parikkhayā opapātikā tattha – parinibbāyinī anāvattidhammā tasmā lokā.[2]
> アーナンダよ, カクダ在家信者は, (以下和訳, 上に同じ).

上のカクダの後, 以下のスバッダの間に 6 人「省略」(- pe -) で同内容との記載あり. p. 92: 4-pari4: Kāliṅgo; 5-pari5: Nikaṭo; p. 92 – 26: 6-pari6: Kaṭissabho; 7-pari7: Tuṭṭho; p. 92 – 27: 8-pari8: Santuṭṭho; p. 92 – 28: 9-pari9: Bhaddo.

10-pari10: p. 92: parinibbāyī　発話者: 世尊, 化生者の命終

名前 Subhaddo で上に同じ.

11-pari11: p. 93: parinibbāyino 発話者: 世尊

---

[1] Se: saññojanānaṃ.

[2] 同じ表現は MN III p. 247 (140: Dhātuvibhaṅgasutta)「界分別経」にあり. AN IV pp. 70 – 74 (7.52) では, opapātiko 以下の代わりに antarāparinibbāyī hoti.「中般涅槃者となった」と中有を示唆する内容で行き先が説かれる. この境涯は「不還」(anāgamin)と推測されるが, そうとは明示されていない.

「ナーディカで死を迎えた 50 人以上の在家信者達は」(paro-paññāsa Nādike upāsakā kālakatā)が主語, 複数形で上に同じ.

本用例の前後に阿羅漢・一来・預流の説明があり, ここで般涅槃が使われる行き先とは, いわゆる「不還」(anāgamin)のことであろう.

アーナンダは, 死後の行き先・来世について尋ねているが, 世尊は, 阿羅漢についてのみ, 現世の境地のみで行き先について, また, 阿羅漢が般涅槃するとも語らない(p. 92):

> Sāḷho Ānanda bhikkhu āsavānaṃ khayā anāsavaṃ ceto-vimuttiṃ paññā-vimuttiṃ diṭṭhe 'va dhamme sayaṃ abhiññā sacchikatvā upasampajja vihāsi.
> アーナンダよ, サーラ托鉢修行者は, 漏を滅して, 心解脱・慧解脱を現世において自ら理解し, 目のあたりにし, 獲得して住した.

12-pari12: p. 99: parinibbāyeyyaṃ 発話者: 世尊, 世尊自身の命終(主語 ahaṃ):

> Atha kho Bhagavato etad ahosi: 'na kho me taṃ patirūpaṃ yo 'haṃ anāmantetvā upaṭṭhāke anapaloketvā bhikkhu-saṃghaṃ parinibbāyeyyaṃ'
> そこで世尊にこのことが生じた.「私が従者達に告げることなく, 托鉢の修行者の集団に伝えず, 般涅槃するであろうことは, 私にとって適切であろうか」

13-pari13: p. 99: parinibbāyissati 発話者: アーナンダ, 世尊の命終:

> na tāva Bhagavā parinibbāyissati na yāva Bhagavā bhikkhusaṃghaṃ ārabbha kiñcid eva udāharatīti.
> 世尊は托鉢修行者の集まりに, 他ならぬ何かに関して, 説くことがない限りにおいて, 世尊が般涅槃されることはないだろう.

本用例は, 未来形で, 明らかに現在の境地ではなく, 世尊の命終について示す.

Ch. 3

14-pari14/15-pqri15: p. 104: parinibbātu 2 回 発話者: マーラ [魔] Māro, 世尊の命終について

16-pari16: p. 104: parinibbāna 発話者: マーラ [魔], 世尊の命終:

parinibbātu dāni bhante Bhagavā, parinibbātu Sugato, parinibbāna-kālo dāni bhante Bhagavato.
尊いお方よ，世尊は，今，般涅槃してください，善く行ったお方は，般涅槃してください．尊いお方よ，今が世尊の般涅槃の時[です].

17-pari17: p. 104: parinibbāyissāmi　世尊の言葉をマーラが回想し伝える，世尊自身の命終(主語 ahaṃ)

托鉢修行者達が修行完成に至らない「限りにおいて，私は般涅槃することはない，悪しき者よ」(na tāvāhaṃ pāpima parinibbāyissāmi)

本用例は，今や弟子達は立派に修行を完成させているから，とマーラが世尊に般涅槃を勧める場面である．

以下 p. 105 – p. 106 は繰り返し部分．マーラが般涅槃を促す命令形の用例は同じ．但し，世尊の答えをマーラが回想して伝える「托鉢修行者が」の部分が異なり，比丘尼達(bhikkhuniyo)，男性在家信者達(upāsakā) [用例部分省略 – pe -]，女性在家信者達(upāsikā)と続く．

18-pari18/ 19-pari19: p. 105: parinibbātu 2 回　マーラ [繰り返し]
20-pari20: p. 105: parinibbāna　マーラ
21-pari21: p. 105: parinibbāyissāmi マーラが世尊の言葉を語る．
22-pari22/ 23-pari 23: p. 105: parinibbātu 2 回　マーラ
24-pari24: p. 105: parinibbāna　マーラ
25-pari25: p. 105: parinibbāyissāmi　マーラが世尊の言葉を語る．

以下も用例部分は同じく繰り返しだが，私の梵行が広がらない限り般涅槃しないという内容．

26-pai26/ 27-pari27: p. 106: parinibbātu 2 回　マーラ
28-pari28: p. 106: parinibbāna　マーラ
29-pari29: p. 106: parinibbāyissāmi　マーラが世尊の言葉を語る．

以下もマーラが般涅槃を勧める言葉は同じ．それに対し世尊が答える場面:

30-pari30/ 31-pari31: p. 106: parinibbātu　2 回　マーラ

32-pari32: p. 106: parinibbāna　　マーラ
33-pari33: p. 106: parinibbānaṃ　　発話者: 世尊, 如来の命終
34-pari34: p. 106: parinibbāyissatīti　発話者: 世尊, 如来の命終:

> appossukko tvaṃ pāpima hohi, na ciraṃ Tathāgatassa parinibbānaṃ bhavissati, ito tiṇṇaṃ māsānaṃ accayena Tathāgato parinibbāyissatīti.
> 悪しき者よ, 心配なきよう. まもなく如来の般涅槃が起こるでしょう. これから三ヶ月後に如来は般涅槃するでしょう, と.

ここでは, 世尊自身のことを「如来は般涅槃する」と 3 人称で表現する.

saṃkhāra「形成作用・形成力」

p. 106 世尊は「心を傾け, 正知を持つ者として寿命形成力を捨てた」(sato sampajāno āyu-saṃkhāraṃ ossaji) その後の偈文 b 句で,「寡黙の賢者は生存形成力を捨てた」(bhava-saṃkhāram avassajī munī)とある. 偈文の註釈は,「生存へと至る行為(業)」(bhavagāmi-kamma). ここは命終直前の説明. 寿命を捨てた時に, 地震が起こった. 世尊は寿命形成力を捨てた後に, 燃料の残余のない(無余依)涅槃界において般涅槃する, とこれらが別事象であるとアーナンダに説明する. 正しい覚りも別事象(DN II pp. 108 – 109). 寿命形成力を捨てた後, 世尊は移動し, 説法をする. 従って, 本経によると以下がそれぞれ別事象である:

> 正しい覚り→寿命形成力を捨てる→無余涅槃界に般涅槃する

35/ 36-pari36: pp. 108 – 109: anupādisesāya nibbāna-dhātuyā parinibbāyati　発話者: 世尊:

> puna ca paraṃ Ānanda yadā Tathāgato anupādisesāya nibbāna-dhātuyā parinibbāyati, tadā 'yaṃ paṭhavī kampati saṃkampati sampakampati sampavedhati.
> そしてまたさらに, アーナンダよ, 如来が燃料の残余のない(無余依)涅槃界に般涅槃する時, その時この大地は揺れ, 大きく動き, 震動し, 激震します.

以下は世尊が成道直後にマーラと対話する場面. 前述と同じマーラの言葉. 同じ言葉だが後半は世尊自身が, 弟子達が修行完成者にならない限り般涅槃することはないだろう, と語る. 弟子達の箇所が, 托鉢修行者達, 比丘尼達, 男性在家信者達, 女性在家信者達 と同文が繰り返される.

37-pari36/ 38-pari37: p. 112: parinibbātu 2 回　発話者: マーラ
39-pari38: p. 112: parinibbāna　　発話者: マーラ
40-pari39: p. 112: parinibbāyissāmi　発話者: 世尊
41-pari40/ 42-pari41/ 43-pari42/ 44-pari43: p. 113: parinibbāyissāmi 4 回　発話者: 世尊

以下は, アーナンダに世尊が, 先ほどのマーラとの対話内容を話す(前述と同文):

45-pari44/ 46-pari45: p. 113: parinibbātu 2 回　発話者: マーラ
47-pari46: p. 113: parinibbāna　　発話者: マーラ
48-pari47: p. 114: parinibbāyissāmi　マーラが世尊の言葉を語る.
49-pari48/ 50-pari49: p. 114: parinibbātu 2 回　発話者: マーラ
51-pari50: p. 114: parinibbāna　　発話者: マーラ
52-pari51: p. 114: parinibbāyissāmi　マーラが世尊の言葉を語る.
53-pari52/ 54-pari53: p. 114: parinibbātu 2 回　発話者: マーラ
55-pari54: p. 114: parinibbāna　　発話者: マーラ
56-pari55: p. 114: parinibbānaṃ　　発話者: 世尊, 如来の命終
57-pari56: p. 114: parinibbāyissatīti　発話者: 世尊, 如来の命終

以下はアーナンダの過失を世尊が繰り返し述べてから, 再度 3 ヶ月後に般涅槃することを告げる場面 2 ヶ所(前述 p. 106 に同じ). 多くの人々のために修行しなければならないダルマ(教え)とは, 四念処(cattāro satipaṭṭhānā), 四正勤(cattāro sammappadhānā), 四神足(cattāro iddhipādā), 五根(pañc' indriyāni), 五力(pañca balāni), 七覚支(satta bojjhaṅgā), 八聖道(ariyo aṭṭhaṅgako maggo)を説く(p. 120).

58-pari57: p. 118: parinibbānaṃ　　発話者: 世尊, 如来の命終
59-pari58: p. 119: parinibbāyissatīti　　発話者: 世尊, 如来の命終
60-pari59: p. 120: parinibbānaṃ　　発話者: 世尊, 如来の命終
61-pari50: p. 120: parinibbāyissatīti　　発話者: 世尊, 如来の命終

世尊は, 説法の最後に以下の偈頌を唱える. [Verse pp. 120 - 121]

paripakko vayo mayhaṃ, parittaṃ mama jīvitaṃ,
pahāya vo gamissāmi, katam me saraṇam attano,
appamattā satīmanto susīlā hotha bhikkhavo

susamāhita-saṃkappā sacittam anurakkhatha.
yo imasmiṃ dhamma-vinaye appamatto vihessati
pahāya jāti-saṃsāraṃ dukkhass' antaṃ karissatīti.'
私の年齢はすっかり熟した, 私の生命は残り少ない.
君たちを捨てて, [私は]行くであろう. 私自身の避難所を作った.
托鉢修行者達よ, 漫然とすることのない, 留意を備えた,
よき生活習慣を持つ者となれ,
よく精神統一された構想を持つ者達として, 自己の心を守れ.
このダルマと規範に対して, 漫然とすることなく, 住するであろう者は,
生まれの繰り返しを捨てて, 苦しみの終わりを為すであろう.[3]

世尊が弟子達に修行の成果を伝える場面である.

Ch. 4

教説の締めくくりの偈文. [Kathā Vatthu 115 の引用とテキスト下に注記あり]
62-pari61: p. 123: parinibbuto　　発話者: 世尊, 命終直前の言葉:

sīlaṃ samādhi paññā ca vimutti ca anuttarā, [Verse p. 123]
anubuddhā ime dhammā Gotamena yasassinā.
iti Buddho abhiññāya dhammam akkhāsi[4] bhikkhunaṃ,
dukkhass' anta-karo[5] Satthā cakkhumā parinibbuto [ti]
正しい生活習慣と精神統一と理解力と無上の解脱という
これらのダルマ(教え)は, 名声高きゴータマによって悟られた,
ということを, 苦しみの終わりを為す,[6] 眼を持つ, 般涅槃している師,
目覚めたお方(ブッダ) は理解して, ダルマ(真理・法則性)を
托鉢の修行者達のために説いた.

---

[3] 註釈 Sv は解説なし.
[4] Se: akkhāti.
[5] Se: antaṅkaro.
[6] 参考までに, Sn 中に苦しみの終わり(anta)と同様概念を示す例は 7 用例(Sn 401, 454, 539, 626, 732, 1056, 1057)あり(Pj II 3 index, p. 708 参照), 苦しみの終わりが明確に生前での状態を示す用例は, 最古層の Sn 1056, 1057 の 2 例(以下参照). 古層に属する他用例については判断できない.
Sn 1056-cd 句(Ch. 5)では「生老, 悲しみと嘆きという苦しみを, 他ならぬここで(この世において)智者として捨てることができる」(jātijaraṃ sokapariddavañ ca idh' eva vidvā pajaheyya dukkhaṃ) と世尊がメッタグーに語る. 続く Sn 1057-c 句は「なぜなら確かに世尊は苦しみを捨てたからです」(addhā hi Bhagavā pahāsi dukkhaṃ) と喜んだメッタグーが世尊を称賛する. 両偈とも苦しみを捨てることは現世で達成できることである.

本偈の理解は困難を生む. 世尊が詠んだと散文にあるため, Gotama, Buddha, Satthar が世尊を指すことになるが, 世尊自身が Gotama と自分で語ることはあまりなく,[7] さらに, iti Buddho abhiññāya は直前の ab 句を指すと推測されるが, 内容的に不自然である. Walshe 1987 p. 254 は, 英訳において Buddha と Satthar は訳出せず he として Gotama を受ける形としている. また iti を訳出せず, Dhamma を理解して説いたとする.[8] また, 世尊の入滅後, 後の人が世尊について詠んだ偈と考える解釈も存在する.[9]

本経散文では pari-付きの用例は一貫して命終を示すが, 本偈文では, その時点は, はっきりと判別できない. 涅槃を説く際には生前・命終が意識されていたわけではない可能性が示唆される.

≪註釈: 生前の涅槃≫

DN p. 123G 註釈 Sv p. 565 は「煩悩を完全に消すことによって般涅槃した状態である」(kilesa-parinibbānena parinibbuto) と説明する.[10]

上記偈文の直前に, 現世での解脱が説かれる:

> tayidaṃ bhikkhave ariyaṃ sīlam anubuddhaṃ paṭividdhaṃ, ariyo samādhi anubuddho paṭividdho, ariyā paññā anubuddhā paṭividdhā, ariyā vimutti anubuddhā paṭividdhā, ucchinnā bhava-taṇhā khīṇa bhava-netti, n'atthi dāni punabbhavo [ti].
>
> このことに関して, 托鉢修行者達よ, 聖なる人のためのよき生活習慣は, 理解され, 洞察された. 聖なる人のための精神統一は, 理解され, 洞察された. 聖なる人のための理解力は, 理解され, 洞察された. 聖なる人のための解脱は, 理解され, 洞察された. 生存への渇愛は絶たれ, 生存へ導く

---

[7] 参考までに, Sn 933 では「ゴータマの教え」と世尊が語る. また Sn 228 にも出てくるが, 経典では発言者は明示されていない. 註釈 Pj I p. 164 では, 世尊が語ったことをアーナンダが話したと解説する.

[8] Morality, samādhi, wisdom and final release,/ These glorious things Gotama came to know./ The Dhamma he'd discerned he taught his monks:/ He whose vision ended woe to Nibbāna's gone.

[9] 宇井 1965 pp. 362 - 365 参照. 宇井氏とは対照的に, 中村 1980 pp. 253 - 254 は, 生前に得た涅槃と解釈し, 本偈の Gotama と Satthā は世尊を指すが, Buddha は世尊あるいは世尊のことを語る弟子であろう.

[10] 片山 2004 p. 266 n. 6 は「これは菩提座におけるかの最初の完全消滅をいう. なお, 後にはサーラ双樹の間で無余依涅槃(生存素因涅槃)における寂滅があるということで締めくくり, 説示を終了させたのである」と別経典[経典名は明示せず]の註釈の和訳をここに引用し説明を補足する.

ものは滅していて，もはや再生することはない.

以下は，チュンダの托鉢食を食べ，病気となり，クシナーラーへと移動した世尊の皮膚の色が清浄で純白であることに気付いたアーナンダに対し，世尊が語った言葉:

63/ 64-pari62: p. 134: nibbāna / parinibbāyati　定型句:

anupādisesāya nibbāna-dhātuyā parinibbāyati　発話者: 世尊，如来の命終

65-pari63: p. 134: parinibbānaṃ　　発話者: 世尊，如来の命終:

> evam etaṃ Ānanda. dvīsu kho Ānanda [11] kālesu ativiya Tathāgatassa parisuddho [12] hoti chavi-vaṇṇo pariyodāto. katamesu dvīsu? yañ ca Ānanda rattiṃ Tathāgato anuttaraṃ sammāsambodhiṃ abhisambujjhati, yañ ca rattiṃ anupādisesāya nibbāna-dhātuyā parinibbāyati.
> アーナンダよ，これはその通りです. アーナンダよ, 2 つの時において，如来の肌の色が清まり，極めて清浄になります. どんな 2 つであるか. アーナンダよ， 如来が無上の正しい覚りに目覚めた夜と，燃料の残余のない(無余依)涅槃界に般涅槃する夜にです.

> ajja kho pan' Ānanda rattiyā pacchima-yāme Kusiṇārāyaṃ Upavattane Mallānaṃ sāla-vane antarena yamaka-sālānaṃ Tathāgatassa parinibbānaṃ bhavissati.
> アーナンダよ，まさに今夜の後半に，クシナーラのウパヴァッタナというマッラ族のサーラ林において，サーラ双樹の間で，如来の般涅槃が起こるでしょう.

定型句「燃料の残余のない(無余依)涅槃界に般涅槃する」で，世尊の命終が再度表現されている.

以下は，世尊がアーナンダに，鍛冶工チュンダについて話す場面. チュンダに後悔を起こさせる言葉が発せられても，後悔を取り除く言葉を発するように諭す.

66-pari64/ 67-pari65: p. 135: parinibbuto 2 回　発話者: 世尊(アーナンダにこう言うようにと語る)，如来の命終:

> tassa te āvuso Cunda alābhā, tassa te dulladdhaṃ, yassa te Tathāgato pacchimaṃ

[11] Be: 引用部分最初の Ananda 以降: evametaṃ, ānanda dvīsu.
[12] Be; Se: kāyo parisuddho.

piṇḍapātaṃ bhuñjitvā parinibbuto.
友チュンダよ, 如来は君の托鉢食を最後に食べて般涅槃されたという,
そのことの利益は君にはなく, そのことの獲得は君には難しい.

tassa te āvuso lābhā, tassa te suladdhaṃ, yassa te Tathāgato pacchimaṃ piṇḍapātaṃ bhuñjitvā parinibbuto.
友チュンダよ, 如来は君の托鉢食を最後に食べて般涅槃されたという,
そのことの利益が君にあり, そのことの獲得が君にはたやすい.

pp. 135 – 136:

dve 'me piṇḍapātā samasamaphalā samasama-vipākā ativiya aññehi piṇḍapātehi mahaphalatarā ca mahānisaṃsatarā ca.
これら 2 つの托鉢食は, それぞれ等しい果報があり, それぞれ等しい結果があり, 別の托鉢食より, 極めて大きな果報と大きな功徳[がある].

以下は前述と同表現. チュンダの托鉢食に功徳があると世尊が説明する
68/ 69-pari66: p. 136: nibbāna / parinibbāyati　定型句, 発話者: 世尊:

yañ ca piṇḍapātaṃ bhuñjitvā Tathāgato anupādisesāya nibbāna-dhātuyā parinibbāyati.
そして, 托鉢食を食べて, 如来が燃料の残余のない(無余依)涅槃界に般涅槃する.

チュンダに関する発言の最後に世尊が述べた感嘆の言葉(udāna):
70: p. 136: nibbuto　発話者: 世尊 [verse p. 136] (本偈については本論 2. 2. 3. 1.参照).

dadato puññaṃ pavaḍḍhati, saṃyamato veraṃ na cīyati,[13]
kusalo ca jahāti pāpakaṃ, rāgadosamohakkhayā sa nibbuto [ti]
与えつつある者の功徳は増大する, 自制ゆえに恨みは集積しない,
そして, 達人は悪を捨てる, 熱望・憎しみ・迷妄の滅ゆえに,
その者は nibbuta(涅槃)している.

≪註釈: 生前の涅槃≫

DN 註釈 Sv p. 572:

[13] Se: vīyati.

rāgadosamohakkhayā sa nibbuto ti so evaṃ pāpakaṃ jahitvā rāg' ādīnaṃ khayā kilesa-nibbānena nibbuto ti.

rāgadosamohakkhayā sa nibbuto〈熱望・憎しみ・迷妄の滅ゆえに, その者は涅槃した [状態である] 〉とは, 彼は, このように, 悪を捨てて, 熱望などの滅ゆえに, 煩悩の消滅によって涅槃した, と.

Ch. 5

世尊は, サーラ双樹の間に臥したが, すぐ前に立っていたウパヴァッタナ尊者にその場から退くように告げられた理由をアーナンダに問われ, 如来の般涅槃が今夜起ころうとしているのに, 神格達が如来にまみえることができないと不満を言っていると説明する場面. 用例の表現は前述と同じ(p. 134)

71-pari67: p. 139: parinibbānaṃ 発話者: 神格達 devatā の言葉を世尊が語る, 如来の命終:

ajja ca rattiyā pacchima-yāme Tathāgatassa parinibbānaṃ bhavissati.

まさに今夜の後半に, 如来の般涅槃が起こるでしょう.

神格達が世尊の般涅槃を嘆いていると世尊がアーナンダに語る場面 :

72-pari68/ 73-pari69/ 74-pari70/ 75-pari71: p. 140: 4 ヶ所 parinibbāyissati 神格達の言葉を世尊が語る:

atikhippaṃ Bhagavā parinibbāyissati, atikhippaṃ Sugato parinibbāyissati, atikhippaṃ cakkhuṃ loke antaradhāyissatīti!

あまりにも早く世尊は般涅槃されるであろう, あまりにも早く善く行ったお方は般涅槃されるであろう, あまりにも早く世間における眼は消えてしまうであろう.

世尊が語る 4 つの感動する場所の中の 1 つ:

76/ 77-pari72: p. 140: nibbāna/ parinibbuto 定型句:

anupādisesāya nibbāna-dhātuyā parinibbuto (過去分詞) 発話者: 世尊, 如来の命終:

"idha Tathāgato anupādisesāya nibbāna-dhātuyā parinibbuto" ti Ānanda saddhassa kula-puttassa dassanīyaṃ saṃvejanīyaṃ ṭhānaṃ.

「ここで如来が, 燃料の残余のない(無余依)涅槃界に般涅槃した」と, アーナンダよ, 信ある良家の子息にとっては, 目に美しい感動する場所[である].

78/ 79-pari73: p. 141: 上記の繰り返し，定型句: anupādisesāya nibbāna-dhātuyā parinibbuto (過去分詞) 神格達の言葉を世尊が語る.

アーナンダ達には，遺体供養に関わらないよう，在家らによって仏塔を建て，供養するように，と指導. 本経の背景として釈尊在世の頃から仏塔供養があった. 本経成立時には，在家信者が仏塔を建てて供養するのがならわしになっていたように描かれている. 仏塔を供養して心を清めたら天界に生まれると功徳も説く.

精舎(vihāra)に入って泣きながら嘆くアーナンダの言葉と，そのアーナンダの言葉を，世尊に伝える托鉢の修行者達の言葉(同文):
80-pari74: p. 143: parinibbānaṃ　発話者: アーナンダ，師の命終
81-pari75: p. 143: parinibbānaṃ　アーナンダの言葉を語る托鉢修行者達 bhikkhū:

> 'ahañ ca vat' amhi sekho sakaraṇīya, Satthu ca me parinibbānaṃ bhavissati yo mamaṃ anukampako' ti
> 「けれど私は，まさに有学で，行うべきことがあるが，私を憐れんでくださる私の師の般涅槃が生じるであろう」と.

アーナンダが世尊に，大きな都で般涅槃されますよう，と話す場面:
82-pari76/ 83-pari77: p. 146: parinibbāyatu 2 回　発話者: アーナンダ:

> mā bhante Bhagavā imasmiṃ kuḍḍa-nagarake ujjaṅgala-nagarake sākha-nagarake parinibbāyatu.
> 尊いお方よ，世尊はこの小さい都において，不毛の都において，はずれの都において，般涅槃召されますな.

世尊がマッラ族(Malla)に伝えよ，とアーナンダに語った言葉. p. 134, p. 139 とほぼ同じ.
84-pari78/ 85-pari79: p. 147: parinibbānaṃ　2 回 発話者: 世尊，如来の命終:

> ajja kho Vāseṭṭhā rattiyā pacchima-yāme Tathāgatassa parinibbānaṃ bhavissati.
> ヴァーセッタ達よ，まさに今夜の後半に，如来の般涅槃が起こるでしょう.

86-pari80: p. 147: parinibbānaṃ　発話者: 世尊(マッラ族の言葉を世尊が語る), 如来の命終

もし世尊の般涅槃に立ち会えなかったら, マッラ族がこう言うだろう, という世尊の言葉:

> amhākañ ca no gāmakkhette Tathāgatassa parinibbānaṃ ahosi, na mayaṃ labhimhā pacchime kāle Tathāgataṃ dassanāyāti.
> そしてまさに我々の村の地域において如来の般涅槃が起こった, 我々は最後の時に, 如来にまみえることが得られなかった.

世尊の言葉をアーナンダがマッラ族 Mallā に伝え(前述同文), マッラ族が嘆く場面 (前述の神格達の言葉と同文):
87-pari81: p. 148: parinibbānaṃ (≒ p. 147) 発話者:世尊の言葉をアーナンダが語る.
88-pari82/ 89-pari83: p. 148: parinibbāyissati (≒ p. 140) 発話者: マッラ族

スバッダ (Subhadda) という遊行者が世尊のことを聞いて, スバッダがそう心で思った後, アーナンダにそう複数回告げる場面(ほぼ同文):
90-pari84: p. 148: parinibbānaṃ　伝聞, 発話者明記されず, ゴータマの命終:

> ajja eva kira rattiyā pacchime yāme samaṇassa Gotamassa parinibbānaṃ bhavissati.
> まさに今夜の後半に, 沙門ゴータマの般涅槃が起こるらしい.

91-pari85/ 92-pari86/ 93-pari87: pp. 149; 150: parinibbānaṃ 3 回(繰り返し) 発話者: スバッダ, ゴータマの命終:

> ajja ca rattiyā pacchime yāme samaṇassa Gotamassa parinibbānaṃ bhavissati.
> そして今夜の後半に, 沙門ゴータマの般涅槃が起こるであろう.

六師外道の覚りについて世尊に質問したスバッダは, 世尊の答えを聞いて, 出家する. 異教徒は通常 4 ヶ月の別住期間が定められている, と説明. この内容から, 本経の背景として, 世尊が命終を迎える頃には, 規則がある程度確立した僧団が存在していたことを示す. 少なくとも経典作者は, そのような僧団の様子を伝承で残そうとしていたことがわかる.

「暗闇に灯火を掲げるかのように，世尊は法を説いてくださいました」(p. 152: telappajotaṃ dhāreyya)

Ch. 6.

最後の説法を終えて，世尊は順番に禅定に入られた．八禅から想受滅(saññāvedayita-nirodha)に入った世尊について，アーナンダがアヌルッダに問い，そうではない，とアヌルッダが答える場面:

94-pari88/ 95-pari89: p. 156: parinibbuto 2 回 発話者:アーナンダ，アヌルッダ:

> ‘parinibbuto bhante Anuruddha Bhagavā’ ti. ‘na āvuso Ānanda Bhagavā parinibbuto, saññā-vedayita-nirodha-samāpanno’ ti.
> 「尊いお方よ，アヌルッダよ，世尊は般涅槃されたのでしょうか」
> 「友よ，アーナンダよ，世尊は般涅槃されたのではありません，想受滅に入られている」 と．

≪註釈≫

DN 註釈 Sv p. 594:

> tattha *parinibbuto bhante* ti nirodhaṃ samāpannassa Bhagavato assāsa-passāsānaṃ abhāvaṃ disvā pucchi.
> そこで parinibbuto bhante〈尊いお方よ，般涅槃されたのか〉とは，[想受] 滅に入られた世尊の諸々の出る息，入る息の生じていないことを見て，質問した．

想滅受から出て逆に禅定段階を辿り，再び第一禅から第四禅まで入り，直後に般涅槃したとの説明部分:

96-pari90: p. 156: parinibbāyi　説明部分

97-pari91/ 98-pari92: p. 156: parinibbute / parinibbānā　説明部分，世尊の命終:

> catutthajjhānā vuṭṭhahitvā samanantarā Bhagavā parinibbāyi.
> 第四禅から出て，直後に世尊は般涅槃した．
>
> parinibbute Bhagavati saha parinibbānā mahābhūmicālo ahosi bhiṃsanako lomahaṃso deva-dundubhiyo ca phaliṃsu.
> 世尊が般涅槃した時，般涅槃と同時に，恐ろしくて，身の毛がよだつ，大地震が起こった，そして雷が割れた．

世尊が般涅槃すると同時に，4 名が偈頌を唱える場面:

99-pari93/ 100-pari94: p. 157: parinibbute / parinibbānā 説明部分，世尊の命終:

> parinibbute Bhagavati saha parinibbānā Brahmā Sahampati imaṃ gāthaṃ abhāsi.
> 世尊が般涅槃した時，般涅槃と同時に，梵天サハンパティがこの偈頌を唱えた.

梵天サハンパティの偈頌部分 [verse p. 157 Brahmā]

101-pari95: p. 157: parinibbuto

> sabbe 'va nikkhipissanti bhūtā loke samussayaṃ,
> yathā[14] etādiso Satthā loke appaṭipuggalo
> Tathāgato balappatto sambuddho parinibbuto [ti].
> この世の他ならぬあらゆる生きものは，集積物(身体)を捨てるであろう.
> この世において無比のお方であり，強さを獲得した，正しく覚った，
> このような師，如来が般涅槃したように.[15]

本偈は,「集積物[身体]」を物理的に捨てると理解すれば, parinibbuto は命終時のことを表す. 散文の文脈と一致する. しかし，偈文だけで見ると，禅定段階における集積物[身体]の捨離という解釈の可能性もないとはいえない.

102-pari96/ 103-pari97: p. 157: parinibbute / parinibbānā 説明部分，世尊の命終:

> parinibbute Bhagavati saha parinibbānā Sakko devānam indo imaṃ gāthaṃ abhāsi.
> 世尊が般涅槃した時，般涅槃と同時に，神々の主であるサッカがこの偈頌を唱えた.

[verse p. 157 Sakka] (涅槃の語彙はなし，註釈にあり)

> aniccā vata saṃkhārā uppāda-vaya-dhammino,
> uppajjitvā nirujjhanti, tesaṃ vūpasamo sukho [ti].
> 実に，諸々の形成されたものは無常であり，生起と衰退の性質を持つ.
> 生起しては，停止する. それらの鎮まりが安楽である.

---

[14] Be; Se: yattha.
[15] 註釈 Sv は parinibbuto について説明なし.

≪註釈≫

d 句 vūpasamo の註釈 Sv p. 595 に nibbāna が使われる:

> *tesaṃ vūpasamo* ti tesaṃ saṅkhārānaṃ vūpasamo asaṅkhātaṃ nibbānam eva *sukhan* ti attho.
> tesaṃ vūpasamo〈それらの鎮まり〉とは, それら諸々の形成されたものの鎮まりであり, 呼称・列挙されることのない涅槃が他ならぬ sukhan〈安楽〉という意味.

散文の文脈としては命終であるため, 註釈は saṃskhāra を使って, 命終の涅槃を意図しているのであろうと推測される.

104-pari98/ 105-pari99: p. 157: parinibbute / parinibbānā 説明部分, 世尊の命終
アヌルッダ尊者
106: p. 157: nibbānaṃ (≒ Th 906) 火が消える譬え 発話者: アヌルッダ尊者[verse p. 157] (本偈については, 本論にて考察した. ここでは原文を示すのみとする):

> parinibbute Bhagavati saha parinibbānā āyasmā Anuruddho imā gāthāyo abhāsi.
> 世尊が般涅槃した時, 般涅槃と同時に, アヌルッダ尊者がこの偈頌を唱えた.
>
> nāhu assāsa-passāso ṭhita-cittassa tādino.
> anejo santim ārabbha yaṃ kālam akarī munī[16]
> asallīnena cittena vedanaṃ ajjhavāsayi:
> pajjotass' eva nibbānaṃ vimokho cetaso ahūti.
> 心確立したそのようなお方の, 出る息, 入る息が生じなかった.
> 鎮まりを得て, 命終を迎えた時, 動じることのない寡黙の賢者は,
> 怯まぬ心で, 感受に耐えた. 灯火の消火／消失の如き・如く,
> 心の解放が生じた.

≪註釈: 命終の涅槃≫

註釈 Sv p. 595:

> *santim ārabhā* ti anupādisesa-nibbhanaṃ ārabbha paṭicca sandhāya.
> santim ārabhā〈鎮まりに入って〉とは燃料の残余のない(無余依)涅槃に入って, を縁として, の意味において.

[16] Be: muni.

107-pari100/ 108-pari101: p. 157: parinibbute / parinibbānā 説明部分, 世尊の命終
109-pari102: p. 157: parinibbute　発話者: アーナンダ, 世尊の命終[verse p. 157]
「世尊が般涅槃した時, 般涅槃と同時に, アーナンダ尊者がこの偈頌を唱えた」(parinibbute Bhagavati saha parinibbānā āyasmā Ānandā imaṃ gāthaṃ abhāsi)

tadā 'si yaṃ bhiṃsanakaṃ tadā 'si loma-haṃsanaṃ
sabbākāra[17]-varūpete Sambuddhe parinibbute [ti].
その時, 恐ろしいことがあった, その時, 身の毛がよだつことがあった,
あらゆる面で優れている正しく悟ったお方が般涅槃した時には.

熱望から離れていない托鉢修行者達(bhikkhū avīta-rāgā)の嘆きと言葉を伝える場面 1： Loc Absolute (前述) ; 嘆きの言葉(前述 p. 140 とほぼ同じ)は神格達 devatā によっても 2 度繰り返される.

110-pari103　p. 157: parinibbute 説明部分, 世尊の命終
「世尊が般涅槃した時...」parinibbute Bhagavai ...

111-pari104/ 112-pari105/ 113-pari106/ 114-pari107/ 115-pari108/ 116-pari109: p. 158: parinibbuto 6 回 発話者: 熱望から離れていない托鉢修行者達(bhikkhū avīta-rāgā); 神格達(2 度):

'atikhippaṃ Bhagavā parinibbuto, atikhippaṃ Sugato parinibbuto, atikhippaṃ cakkhuṃ loke antarahitan' ti.
「あまりにも早く世尊は般涅槃されてしまった, あまりにも早く善く行ったお方は般涅槃されてしまった, あまりにも早く世間における眼は消えてしまわれた」と.

アヌルッダ尊者が,マッラ族に世尊の般涅槃を伝えるようにと, アーナンダ尊者に話し, アーナンダが実際に語る(同文)場面:
117-pari110: p. 158: parinibbuto 発話者: アヌルッダ尊者, 世尊の命終
118-pari111: p. 159: parinibbuto 発話者: アーナンダ尊者, 世尊の命終:

[17] Ee: sabbākara-であるが, Be, Se, Ce, 山崎 1998 p. 166 に倣い訂正.

parinibbuto Vāseṭṭhā Bhagavā, yassa dāni kālaṃ maññathāti.
ヴァーセッタ達よ，世尊は般涅槃されました，そのための時を，これから考えてください，と.

マッラ族(ヴァーセッタ達)の嘆き(前述 p. 158 の嘆きと同文)
119-pari112/ 120-pari113: p. 159: parinibbuto2 回 発話者: マッラ族，世尊の涅槃

マハーカッサパ (Mahā-Kassapa) が五百人の修行者と共に通りかかり，アージーヴァカ行者から，世尊の般涅槃を聞き，熱望から離れていない修行者達が嘆く場面(前述 p. 159 と同文):
121-pari114: p. 162: parinibbuto 発話者: アージーヴァカ行者 ājīvaka，沙門ゴータマの般涅槃:

ajja sattāha-parinibbuto samaṇo Gotamo.
沙門ゴータマが般涅槃して今日で 7 日めです.

122-pari115/ 123-pari116: p. 162: parinibbuto 発話者: 熱望から離れていない修行者達，世尊の命終

世尊の火葬後，虚空から水が現れ，薪の堆積(の火)を消した．涅槃とは関係ない内容．この部分に関しては，前述本論 1. 2.にて論じたため，ここでは原語と和訳のみを示す:
124/ 125: p. 164 nibbāpesi / p. 164 nibbāpesuṃ 説明部分:

daḍḍhe kho pana Bhagavato sarīre antalikkhā udakadhārā pātu bhavitvā Bhagavato citakaṃ nibbāpesi, udaka-sālato pi abbhunnamitvā Bhagavato citakaṃ nibbāpesi. kosinārakā pi Mallā sabba-gandhodakena Bhagavato citakaṃ nibbāpesuṃ.
ところで世尊の遺体が焼かれた時，中空から水の流れが現れて，世尊の薪の堆積[の火]を消した，水がサラノキの木からも噴き出し，世尊の薪の堆積[の火]を消した．クシナーラーのマッラ族も，あらゆる香水によって，世尊の薪の堆積を消した.

マーガタ国アジャーサットゥ王(Rājā Māgadho Ajāta-sattu，ヴェーサーリーに住むリッチャヴィ族(Vesālikā Licchavī)，カーピラヴァットゥに住むシャカ族(Kāpilavatthavā Sakyā)，アッラカッパカに住むブラ族(Allakappakā Bulayo)，ラーマ

ガーマカに住むコーリヤ族(Rāmagāmaka Koliyā), ヴェータディーパに住むバラモン(Veṭhadīpako brāhmaṇo), パーヴァーに住むマッラ族(Pāveyyakā Mallā)が世尊の般涅槃を耳にする場面(同文):
126-pari117/ 127-pari118/ 128-pari119/ 129-pari120/ 130-pari121/ 131-pari122/ 132-pari123: pp. 164; 165: parinibbuto 伝聞, 世尊の涅槃:

> 'Bhagavā kira Kusinārāyaṃ parinibbuto' ti.
> 「世尊がクシナーラにおいて般涅槃されたらしい」と.

マッラ族が答える場面:
133-pari124: p. 166: parinibbuto 発話者: マッラ族, 世尊の涅槃:

> Bhagavā amhākaṃ gāma-kkhette parinibbuto.
> 世尊は我々の村の地で般涅槃されました.

世尊の舎利を 8 ヶ所に分配し終えた後に, ピッパリヴァナに住むモーリヤ族が世尊の般涅槃を耳にする場面:
134-pari125: p. 166: parinibbuto 伝聞(前述と同文), 世尊の涅槃

Bibliography

<一次文献>

パーリ語文献の底本は全て Ee (PTS 版)で，略号については CPD の Epilegomena に従う．異読は，Be (ビルマ版), Se (タイ版)を参照し，必要に応じ Ce (スリランカ版)を参照した．他版との比較により必要に応じて底本を訂正し，その旨明記した．漢訳は大正新脩大蔵経を使用し，その都度箇所を明記した．

Abhidharma-kośabhāṣya = P. Pradhan (ed.), *Abhidharma-kośabhāṣya of Vasubandhu*, Patna, 1967.

Be = Burmese edition, Chaṭṭha Saṅgāyana Tipiṭaka version 4.0, Vipassana Research Institute, 2008.

Ce = Singhalese edition, Buddha Jayanti Tripitaka Series, electronic edition, published in 1997 by International Buddhist Research and Information Center, and distributed by Sri Lanka Tipiṭaka Project in association with the Journal of Buddhist Ethics.

Ee = European edition, Pali Text Society.

Se = Siamese edition, CD-ROM version 4, Mahidol University Computing Center, Bangkok, 1994.

<辞書類>

AiG = Jakob Wackernagel [1930 - 1957] Altindische Grammatik, Band I – III, Göttingen.

BHSD = Franklin Edgerton [1953] *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary*, vol. II: Dictionary, New Haven.

Childers = Robert Caeser Childers [1875] *Dictionary of the Pali Language,* London.

Cone = Margaret Cone [2001; 2010] *A Dictionary of Pāli*, Part I; II, Oxford; Bristol.

Concordance = listed by F. L. Woodward, edited by E. M. Hare [1952 – 1954] *Pāli Tipiṭakaṁ Concordance*, vol. I, vols. 3, London.

CPD = V. Trenckner et.al. (eds.) [vol. I: 1924 - 1948; vol. II: 1960 - 1990; vol. III: 1992 -] *A Critical Pāli Dictionary*, Copenhagen.

EWA = Mansfred Mayrhofer (ed.) [Bd. I: 1986 – 1992; Bd. II 1992 – 1996] *Etymologisches Wörterbuch des Altindoarischen*, Heidelberg.

Oberlies = Thomas Oberlies [2001] *Pāli*, A Grammar of the Language of the Theravāda *Tipiṭaka* with a Concordance to Pischel's *Grammatik der Prakrit-Sprachen*, Berlin.

MW = Monier Monier-Williams [1899] *A Sanskrit English Dictionary: Etymologically and Philologically Arranged with Special Reference to Cognate Indo-European Languages*, Oxford.

PED = Rhys Davids & William Stede [1921 – 25] *The Pali Text Society's Pali-English Dictionary*, Oxford.

PW = Otto Böhtlingk & Rudolph Roth [1855 - 1875] *Sanskrit Wörterbuch*, 7 vols., St. Petersburg.

<二次文献>

荒牧・本庄・榎本 2015 = 荒牧典俊・本庄良文・榎本文雄 [2015]『スッタニパータ [釈尊のことば] 全現代語訳』講談社学術文庫.

Aramaki 1993 = N. Aramaki [1993] "Some Precursors of the Subconscious Desire in the Attadaṇḍasutta," *Zinbun: Annals of the Institute for Research in Humanities*, 28, Kyoto University, pp. 49 - 94.

荒牧 1988 = 荒牧典俊 [1988]「ゴーダマブッダの根本思想」『岩波講座東洋思想第八巻 インド仏教 I』岩波書店, pp. 61 – 98.

荒牧 1985 = 荒牧典俊 [1985]「Attadaṇḍasutta (Sn 935 – 954) は「釋尊の言葉」であり得るか」『日本佛教學會年報』第 50 號, pp. 1 – 18.

荒牧 1984 = 荒牧典俊 [1984]「原始仏教経典の成立について—韻文経典から散文経典へ—」『東洋学術研究』第 23 巻, 第 1 号, pp. 53 – 67.

入澤 2001 = 入澤崇 [2001]「ブッダはなぜ火葬されたのか」『龍谷大学論集』457 号 龍谷学会, pp. 15 - 35.

宇井 1965 = 宇井伯寿 [1965] 『印度哲學研究』第三, 岩波書店.

榎本(代表) 2014 = 榎本文雄(代表), 河﨑豊, 名和隆乾, 畑昌利, 古川洋平 [2014] 『ブッダゴーサの著作に至るパーリ文献の五位七十五法対応語—仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集—バウッダコーシャ III 』, 17, 山喜房佛書林.

榎本 2012 = 榎本文雄 [2012]「初期仏典における涅槃—無我説と関連して—」『仏教研究』40, pp. 149 – 160.

榎本 2007 = 榎本文雄 [2007]「輪廻思想と初期仏教」『シルクロード・奈良国際シンポジウム記録集』No. 9, pp. 5 - 13.

榎本 2005 = 榎本文雄 [2005]「nibbuta / nivvuḍa について」『長崎法潤博士古稀記念論集 仏教とジャイナ教』平樂寺書店, pp. 553 – 560.

榎本 2002 = 榎本文雄 [2002]「ヘルンレ写本中の『雑阿含』断片をめぐって—『雑阿含経』,世親,『倶舎論』真諦訳の位置—」『櫻部建博士喜寿記念論集 初期仏教からアビダルマへ』平樂寺書店, pp. 139 – 153.

榎本 1998 = 榎本文雄 [1998]「最古の仏典」『NHK スペシャル ブッダ 大いなる旅路 1 輪廻する大地 仏教誕生』日本放送出版協会, pp. 63 - 68.

榎本 1993a = 榎本文雄 [1993]「涅槃についての若干の考察—ジャイナ古層経典を中心に—」ジャイナ教研究会発表資料, pp. 1 - 3.

榎本 1993b = 榎本文雄 [1993]「『尊婆須蜜菩薩所集論』所引の阿含の偈をめぐって—tathāgata の原意を中心に—」『渡邊文麿博士追悼記念論集 原始仏教と大乗仏教 上』永田文昌堂, pp. 255 - 269.

榎本 1983 = 榎本文雄 [1983]「初期仏典における āsrava (漏)」『南都佛教』50, pp. 17 – 28.

榎本 1982 = 榎本文雄 [1982]「初期仏典における三明の展開」『佛教研究』第 12 号, pp. 63 – 81.

榎本 1981 = 榎本文雄 [1981]「仏教における三明(tisso vijjā)の成立」『印度學佛教學研究』第 29 巻, 第 2 号, pp. 936 – 939.

榎本 1979 = 榎本文雄 [1979]「āsrava (漏)の成立について—主にジャイナ古層経典における—」『仏教史学研究』第 22 巻, 第 1 号, pp. 17 – 42.

大西 2003 = 大西啓一 [2003]「化生の本義について—仏教における自然概念の一側面—」『日本佛教學會年報』第 68 號, pp. 35 -51.

片山 2004 = 片山一良 [2004]『長部(ディーガニカーヤ)大篇 I』パーリ仏典第 2 期 3, 大蔵出版.

片山 2002 = 片山一良 [2002]『中部(マッジマニカーヤ)後分五十経篇 II』パーリ仏典第 1 期 6, 大蔵出版.

片山 2001 = 片山一良 [2001]「パーリ仏教における涅槃」『駒沢大學佛教文學部研究紀要』第 59 號, pp. 462 - 478.

片山 1998 = 片山一良 [1998]『中部(マッジマニカーヤ)根本五十経篇 II』パーリ仏典第 1 期 2, 大蔵出版.

片山 1997 = 片山一良 [1997]『中部(マッジマニカーヤ)根本五十経篇 I』パーリ仏典第 1 期 1, 大蔵出版.

勝本 2005 = 勝本華蓮訳 [2005]「第 140 経 要素の解説―界分別経」『原始仏典』(中村元監修), 第 6 巻, 春秋社, pp. 477 – 492.

上村 1992 = 上村勝彦訳 [1992]『バガヴァッド・ギーター』岩波書店.

阪本 2015 = 阪本(後藤)純子 [2015]「生命エネルギー循環の思想―「輪廻と業」理論の起源と形成―」RINDAS 伝統思想シリーズ 24, 龍谷大学現代インド研究センター.

Sakamoto-Goto 1993 = Junko Sakamoto-Goto [1993] “Zu mittelindischen Verben aus medialen Kausativa”, *Jain Studies in Honor of Jozef Deleu*, ed. R. Smet and K. Watanabe, Tokyo, pp. 261 - 314.

辻 1980 = 辻直四郎訳 [1980]『バガヴァッド・ギーター』講談社.

富田 2016 = 富田真理子 [2016]「初期パーリ聖典における涅槃の諸相―『スッタニパータ』「ウパシーヴァマーナヴァプッチャー経」1074 偈に関して―」『印度學佛教學研究』第 64 巻, 第 2 号, pp. 224 – 227.

富田 2014 = Mariko Tomita [2014] Issues on *Nibbāna* with Special Reference to Verse No. 1074 of the *Upasīvamāṇavapucchā* in the *Suttanipāta*, *Journal of Indian Philosophy*, online edition (print edition: 2016, 44, pp. 377 – 391), Springer.

富田 2012 = 富田真理子 [2012]「涅槃の諸相と初期仏教経典―abhinibbuta 複合語と parinibbuta を含む経典について―」『日本佛教學會年報』第 77 號, pp. 1 – 27.

富田 2008 = 富田真理子 [2008] 「『スッタニパータ』「ヴァンギーサ経」における涅槃について」『待兼山論叢』第 42 号哲学篇, pp. 49 – 66.

中村 2007 = 中村隆海 [2007]「Veda 文献における *pra√jñā* の語義と用法」『松濤誠達先生古稀記念 梵文学研究論集』pp. 111 – 137.

中村 1993 = 中村元 [1993]『中村元選集【決定版】原始仏教の思想 I』第 15 巻, 春秋社.

中村 1984 = 中村元 [1984]『ブッダのことば—スッタニパータ—』 岩波書店.

中村 1982 = 中村元 [1982]『仏弟子の告白—テーラガーター—』岩波書店.

中村 1981 = 中村元 [1981]『佛教語大辞典 縮刷版』東京書籍.

中村 1980 = 中村元 [1980]『ブッダ最後の旅』岩波書店.

中村 1971 = 中村元 [1971] 『原始仏教の思想 下』(中村元選集 14) 春秋社.

並川 2010 =並川孝儀 [2010]『構築された仏教思想 ゴーダマ・ブッダ—縁起という「苦の生滅システム」の源泉—』佼成出版社.

並川 2008 = 並川孝儀 [2008]『スッタニパータ』岩波書店.

並川 2005 = 並川孝儀 [2005]『ゴータマ・ブッタ考』大蔵出版.

名和 2016 = 名和隆乾 [2016]「パーリ聖典における四無量心の予備的研究—四無量心と涅槃の関係について—」『真宗文化』第 25 号, 論文 pp. 1 - 21.

畑 2006a = 畑昌利 [2006]「初期仏教におけるアートマン観の一側面」『日本佛教學會年報』第 71 號, pp. 1 – 15.

畑 2006b = 畑昌利 [2006]『六十二見を中心とする初期仏教における外道思想の研究』2006 年度課程博士請求論文, 大阪大学.

畑 2002 = 畑昌利 [2002]「初期仏典における断滅論の諸相」『待兼山論叢』第 36 号哲学篇, pp. 33 – 49.

服部 2011 = 服部弘瑞 [2011]『原始仏教に於ける涅槃(nibbāna)の研究』山喜房佛書林.

馬場 2008 = 馬場紀寿 [2008]『上座部仏教の思想形成—ブッダからブッダゴーサへ—』春秋社.

藤田 1988a = 藤田宏達 [1988]「涅槃」『岩波講座・東洋思想 インド仏教 2』第 9 巻, 岩波書店, pp. 264 – 286.

藤田 1988b = 藤田宏達 [1988]「原始仏教における涅槃—nibbāna と parinibbāna—」『印度學佛教學研究』第 37 巻, 第 1 号, pp. 1 - 12.

藤田 1988c = 藤田宏達 [1988c] 「原始仏典にみる死」『仏教思想 10 死』第 10 巻, 第 2 章, 平楽寺書店, pp. 55 – 546.

藤田 1987 = 藤田宏達 [1987]「原始仏教・初期仏教・根本仏教」『印度哲学仏教学』第 2 号, pp. 20 - 56.

藤田 1972 = 藤田宏達 [1972]「原始仏教における禅定思想」『佐藤博士古稀記念 仏教思想論叢』山喜房佛書林, pp. 297 – 315.

藤田 1959 = 藤田宏達 [1959]「四沙門果の成立について」『印度學佛教學研究』第 7 巻, 第 2 号, pp. 69 - 78.

松尾 2008 = 松尾宣昭 [2008]「仏教と『輪廻』の概念—並川孝儀の所論をめぐって—」『龍谷哲学論集』第 22 号, pp. 51 - 77.

松本 1989 = 松本史朗 [1989]『縁起と空—如来蔵思想批判—』大蔵出版.

水野 1972 = 水野弘元 [1972]『仏教要語の基礎知識』春秋社.

南 1984 = 南清隆 [1984]「初期経典の一様態—『スッタニパータ』アッタカヴァッガを中心に—」『佛教大學大學院研究紀要』第 12 號, pp. 83 – 104.

宮下 1989 = 宮下晴輝 [1989]「涅槃についての一考察」『大谷學報』第 69 巻, 第 1 号, pp. 17 - 35.

宮元 2005 = 宮元啓一 [2005]『仏教かく始まりき—パーリ仏典『大品』を読む—』春秋社.

宮本 1989 = 宮本正尊 [1989]「原始仏教における涅槃観の問題—有余依涅槃界・無余依涅槃界を中心として—」『藤田宏達博士還暦記念論集 インド哲学と仏教』平楽寺書店, pp 163 - 184.

宮本 1985 = 宮本正尊 [1985]「解脱と涅槃の研究—近代世界学者の研究を評釈して—」『宮本正尊博士仏教学論集 仏教学の根本問題』春秋社, pp. 363 – 420.

宮本 1975 = 宮本正尊 [1975]「縁起説の一考察—upadhi をめぐって—」『印度學佛教學研究』第 23 巻, 第 2 号, pp. 723 - 727.

村上 2010 = 村上真完 [2010]「原始仏教聖典の二面性—現実的か非現実的か—」『印度哲学仏教学』第 25 号, pp. 21 – 42.

村上 1972 = 村上真完 [1972]「古ウパニシャッドのアートマン(我)と原始仏教—光の表象と自州自帰依をめぐって—」『文化』36, 1 - 2, pp. 143 - 184.

村上・及川 2016 = 村上真完・及川真介 [2016]『仏弟子達のことば註(四) —パラマッタ・ディーパニー—』春秋社.

村上・及川 2009 = 村上真完・及川真介 [2009]『パーリ仏教辞典　仏のことば註—パラマッタ・ジョーティカー—付篇 パーリ聖典スッタ・ニパータ註 索引・辞典』春秋社.

村上・及川 1990 = 村上真完・及川真介 [1990] (2009 新装版)『仏のことば註—パラマッタ・ジョーティカー—研究：仏と聖典の伝承』春秋社.

村上・及川 1989 = 村上真完・及川真介 [1989]『仏のことば註(四)—パラマッタ・ジョーティカー—』春秋社.

村上・及川 1988 = 村上真完・及川真介 [1988]『仏のことば註(三)—パラマッタ・ジョーティカー—』春秋社.

村上・及川 1986 = 村上真完・及川真介 [1986]『仏のことば註(二)—パラマッタ・ジョーティカー—』春秋社.

村上・及川 1985 = 村上真完・及川真介 [1985]『仏のことば註(一)—パラマッタ・ジョーティカー—』春秋社.

森 1984 = 森祖道 [1984]『パーリ仏教註釈文献の研究』山喜房佛書林.

森 1979 = 森祖道 [1979]「アッタカターの源泉資料(上) : 研究序説」『城西大学教養関係紀要』3 (l), pp. 1 – 23.

山崎 1988 = 山崎守一 [1988]「PTS 版テキストの限界—『ディーガ・ニカーヤ』を中心に—」『佛教研究』第 27 号, pp. 137 - 185.

矢島 1997 = 矢島道彦編 [1997]「Suttanipāta 対応句索引」『鶴見大学仏教文化研究所紀要』第 2 号, pp. 1 – 97.

渡邊 1961 = 渡邊文麿 [1961]「『無餘涅槃』の始源的意義」『印度學佛教學研究』第 9 巻, 第 2 号, pp. 536 – 537.

Bodhi 2017 = Bhikkhu Bodhi [2017] The Suttanipāta, An Ancient Collection of the Buddha's Discourses together with its Commentaries, Somerville, Wisdom Publications.

Bodhi 2000 = Bhikkhu Bodhi [2000] *The Connected Discourses of the Buddha, A New Translation of the Saṃyutta Nikāya*, vol. II, Oxford, The Pali Text Society (PTS).

Collins 2010 = Steven Collins [2010] *Nirvana: Concept, Imagery Narrative*, Cambridge, Cambridge University Press.

von Hinüber 1996 = Oskar von Hinüber [1996] *A Handbook of Pāli Literature*, Berlin, Walter de Gruyter & Co.

Harvey 1995 = Peter Harvey [1995] *The Selfless Mind, Personality, Consciousness and Nirvāṇa in Early Buddhism,* London, Curzon Press.

Hoffmann 1975 = Karl Hoffmann [1975] *Aufsätze zur Indoiranistik*, Bd. 1, Wiesbaden, Dr. Ludwig Reichert Verlag.

Horner 1990 = I. B. Horner (trans.) [1990] The *Collection of the Middle Length Sayings* (*Majjhima-nikāya*), vol. III, Oxford, PTS.

Hwang 2006 = Soonil Hwang [2006] *Metaphor and Literalism in Buddhism: The doctrinal history of nirvana*, Oxon, Routledge.

de Jong 2000 = J. W. de Jong [2000] "The Buddha and His Teachings," *Wisdom, Compassion, and the Search for Understanding; The Buddhist Studies Legacy of Gadjin M. Nagao*, ed. Jonathan A. Silk, Honolulu, pp. 171 - 181.

Ñāṇamoli 1975 = Bhikkhu Ñāṇamoli [1975] *The Path of Purification Visuddhimagga*, Kandy, Buddhist Publication Society.

Norman 2006 = K. R. Norman [2006] *The Group of Discourses (Sutta-nipāta)*, Second edition, Lancaster, PTS.

Norman 1996 = K. R. Norman [1996] "Mistaken Ideas about Nibbāna" *Collected Papers*, vol. VI, Oxford, pp. 9 - 30.

Norman 1991 = K. R. Norman [1991] "Death and the Tathāgata" *Collected Papers*, vol. IV, Oxford, pp. 251 – 263.

Olalde 2014 = Liudmila Olalde [2014] *Zum Begriff 'nāmarūpa:' Das Individuum im Pāli-Kanon*, Lumbini, Lumbini International Research Institute.

Poussin 1917 = L. de la Vallée Poussin [1917] *The Way to Nirvāṇa*, Cambridge, Cambridge University Press.

Schmithausen 2000 = Lambert Schmithausen [2000] Zur zwölfgliedrigen Formel des Entstehens in Abhängigkeit, *Hōrin*, 7, 41– 76.

Schmithausen 1992 = Lambert Schmithausen [1992] *Saṃsāra*. In Ritter, Joachim and Gründer, Karlfried (Eds), *Historisches Wörterbuch der Philosophie*. Band 8: R-Sc, Basel, Schwabe & Co. Ag., pp. 1164 – 1168.

Schmithausen 1987 = Lambert Schmithausen [1987] Review of Sanskrit-Wörterbuch der buddhistischen Texte aus den Turfan-Funden 2, Lfg., *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*, 137, pp. 151 – 157.

Somaratne 1999 = G. A. Somaratne [1999] "Intermediate Existence and the Higher Fetters in the Pāli Nikāyas" *Journal of the Pali Text Society*, vol. XXV, pp. 121 – 154.

Stcherbatsky 1927 = Th. Stcherbatsky [1927] *The Conception of the Buddhist Nirvāṇa*, Leningrad, The Academy of Science of the USSR.

Thomas 1947 = E. J. Thomas [1947] "Nirvāṇa and parinirvāṇa," *India Antiqua*: *A Volume of Oriental Studies Presented by His Friends and Pupils to J. Ph. Vogel*, Leiden, pp. 294 - 295.

Walshe 1987 = Maurice Walshe [1987] *Thus Have I Heard: The Long Discourses of the Buddha Dīgha Nikāya*, London, Wisdom Publications.

Welbon 1966 = G. Richard Welbon [1966] "On Understanding the Buddhist Nirvana," *History of Religions*, vol. 5, no. 2, pp. 300 - 326.

Wynne 2011 = Alexander Wynne [2011] “Book Reviews: Steven Collins, Nirvana: Concept, Imagery, Narrative,” *The Eastern Buddhist*, vol. 42, no. 1, pp. 175 – 182.

Wynne 2007 = Alexander Wynne [2007] *The Origin of Buddhist Meditation*. Abingdon and New York, Routledge.